富山県文化振興財団
埋蔵文化財発掘調査報告第14集

石名田木舟遺跡発掘調査報告

―― 能越自動車道建設に伴う 埋蔵文化財発掘報告Ⅲ ――

第一分冊
古代以前編

2002年

財団法人 富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所

遺跡遠景（西から）

上　1号古墳（南から）　　下　D地区全景（北東から）

石名田木舟遺跡発掘調査報告

―― 能越自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘報告Ⅲ ――

第一分冊
古代以前編

2002年

財団法人 富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所

序

能登と越中を結ぶ能越自動車道は、東海北陸自動車道が北陸自動車道と交差する小矢部・砺波ＪＣＴから北上して、福岡町、高岡市、氷見市を通り、石川県輪島市に至る高規格幹線道路として計画されました。この能越自動車道及び関連アクセス道の建設に伴い、富山県文化振興財団は平成４年から、その計画路線内の多数の遺跡を発掘調査してまいりました。

本書は平成５年度から７年度の三カ年間調査を実施した、小矢部市から福岡町にかけて所在する石名田木舟遺跡の発掘調査報告書です。

石名田木舟遺跡は、天正13（1585）年の白山大地震で埋没・崩壊したと伝えられる木舟城の北西に位置しています。主な遺構には古墳時代後期の古墳群、古代前期の掘立柱建物群、中世後期の礎石建物や土台建物、掘立柱建物といった各種建物群、町屋を区画する溝、道路などが検出されました。遺物には古代の瓦塔や斎串、中世の木簡や武具など、さまざまな生活の道具類などが出土しました。これらから古代の村落や中世の城下町の姿を思い浮かべることができます。この発掘調査の成果が、文献には表れない民衆生活をひもとく一助となり、今後の研究に活用されれば幸いです。

本書をまとめるにあたり、関係機関や団体また諸氏のご指導をいただき厚く感謝いたします。

平成14年３月

財団法人富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所
所　長　　桃　野　真　晃

例　言

1　本書は富山県小矢部市石名田地内から西砺波郡福岡町木舟地内にわたって所在する石名田木舟遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は建設省北陸地方建設局（現　国土交通省北陸地方整備局）からの委託を受けて，財団法人富山県文化振興財団が行った。

3　本遺跡の発掘調査期間と本書刊行までの整理期間は下記のとおりである。

　調査期間　　平成５（1993）年５月11日～平成７（1995）年７月25日

　整理期間　　平成11（1999）年４月１日～平成14（2002）年３月31日

4　本書の編集・執筆は，池野正男，狩野　睦，酒井重洋，島田美佐子，中川道子，深堀　茜が担当し，執筆分担は文末に記した。

5　遺物の写真撮影は，楠華堂（代表　内田真紀子）に委託した。

6　自然科学的な分析は，以下の諸機関に委託し，その成果について報文を得た。

　自然科学分析　パリノ・サーヴェイ株式会社

　土　壌　分　析　株式会社　古環境研究所

　土器胎土分析　土器胎土研究会（代表　三辻利一）

　木製品樹種同定　財団法人　元興寺文化財研究所

　漆塗膜分析　漆器文化財科学研究所（代表　四柳嘉章）

　金　属　分　析　大澤正巳

7　発掘調査から本書の作成に至るまで，下記の方々から多大な御教示・御協力を得た。記して謝意を表したい。（敬称略，五十音順）

赤羽久忠，伊藤隆三，宇野隆夫，鹿島昌也，佐藤聖子，寒川　旭，塚田一成，利波匡裕，富田正弘，野末浩之，林　浩明，原田義範，藤田富士夫，本郷真紹，前川　要，水野正好，山口辰一，山森伸正，富山県教育委員会，富山県埋蔵文化財センター，小矢部市教育委員会，福岡町教育委員会，北陸古代土器研究会

凡　例

1　本書は３分冊からなる。第一分冊は古代以前編，第二分冊は中世以降編として本文，挿図及び表，第三分冊は自然科学的分析と写真図版を掲載する。

2　時期別に検出した主な遺構・出土遺物の内容については，章末に一覧で掲載している。

3　時代区分は，古墳時代，古代，中世以降に分けた。

4　本書で示す方位は全て真北である。

5　挿図の縮尺は次の率を基本とし，各図の下に縮尺率を示す。なお遺物写真図版の縮尺は統一していない。

遺構　建物：１/40～１/100，溝：１/40，井戸：１/20～１/40，土坑：１/20～１/40

遺物　土器・陶磁器：１/３～１/６，木製品：１/１～１/12，石製品：１/１～１/８，
金属製品：１/１～１/４

6　遺構の略号は以下のとおりである。

ＳＡ：柵，ＳＢ：建物，ＳＤ：溝，ＳＥ：井戸，ＳＦ：道路，ＳＩ：竪穴建物，ＳＫ：土坑，ＳＰ：柱穴，ＳＸ：その他

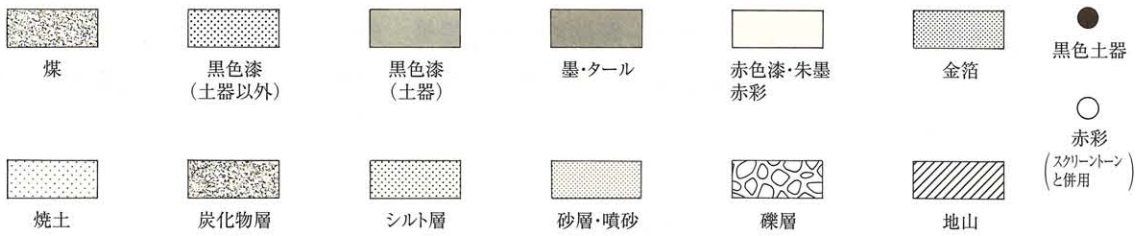
7　遺構番号は，調査時に地区毎に付した番号にある一定の数値を加算して遺構番号とした。番号は遺構の種類に関わらず連番号とするが，建物・柵・道路には新たに番号を付した。各地区の遺構番号に加算した数値は次の通りである。但し複数の地区にわたる遺構は，若い遺構番号で示す。

ＡＥ：加算せず，ＡＷ：100，ＡＮ：500，Ｂ１：600，Ｂ２：1000，Ｃ：2900，Ｄ：4200
Ｅ１：5500，Ｅ２：5900，Ｆ１：6200，Ｆ２：6400，Ｆ３：7000，Ｆ４：9200，Ｇ：9600
Ｈ：9800

8　遺物は連番を付す。遺物番号は遺物観察表及び写真図版中の遺物番号と一致する。

9　施釉陶器等の釉の掛かる範囲は１点破線で示した。２種類以上の釉が掛かる場合や絵付けがされている場合はトレースの濃淡で示した。

10　遺物の煤付着部分及び漆器の赤色漆の部分等，遺構図中の地山及び炭化物層等はスクリーントーンで示す。以下に図示したもの以外については，それぞれの図・文を参照されたい。

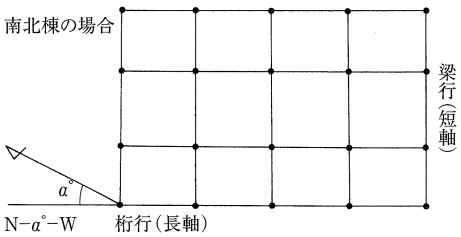


11　遺跡の略号は，Ａ～Ｃ地区が「35ＩＫ－地区名」，Ｄ～Ｈ地区が「09ＩＫ－地区名」で，遺物の注記には略号を用いた。

12　遺構一覧及び本文中で用いる遺構についての用語・数値等は以下のとおりとする。

掘立柱建物：用語は「平城宮発掘調査報告Ⅶ」を参考とし，以下のように定義付ける。

① 柱間や棟方向に関わらず建物の平面図の長軸を「桁行」，建物の短軸を「梁行」とし，桁行（間）×梁行（間）の順に表記する。



② 建物の棟方位は，真北から建物の長軸の方位を測る。その角度から建物を「東西棟」と「南北棟」に分ける。

③ 建物の面積は長軸に短軸をかけた数値である。

④ 「柱穴」とは柱位置に遺存する穴の総称とする。

⑤ 「柱掘形」とは，掘立柱を据え付けるための穴のことで，「掘形埋土」とは柱根を固定するために柱掘形に入れた土のことである。

⑥ 「柱根」とは，遺存している柱自体の下部のことであり，「柱痕跡」とは柱掘形の中の柱根が立ったまま腐り消えて空洞になり，そこに土が流れ込んだもので，ここでは柱根が抜き取られたものも含む。

⑦ 柱穴の規模は，遺構確認面から測った数値である。

井戸：井戸の部分名称及び型式分類については，宇野隆夫氏の「井戸の分類」[注1]を援用している。

① 各部の名称は，地上の施設を「井桁」，地下壁面の施設を「井戸側」，底の施設を「水溜」とする。

② 型式分類は井戸側の部位の構造で分類する。

③ 井戸の断割図面において，地山の変化がわかるものは，スクリーントーンで示した。

遺構一覧・遺物一覧：観察表の凡例は以下のとおりである。

① 遺構の覆土に切り合い関係がある場合は，備考欄に新＞古のように記号で示す。

② 法量はcm単位で示す。

③ 重量はｇ単位で示す。計測は大きさによって台秤と電子秤を使い分けた。

④ 胎土・色調・釉調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所　色票監修「新版標準土色帖」・財団法人日本規格協会「標準色票　光沢版」を使用し，釉調の和名は小学館『色の手帖』より似たものを使用した。なお，陶磁器のうち複数の色が見られる場合は，最も多く使用されている色を記し，その他は特記事項に記す。但し透明釉の場合は記入しない。

⑤ 特記事項：陶磁器については窯名・窯詰め技術・墨書・刻印・ヘラ記号等を，珠洲・瓦器・中世土師器は胎土中の含有物を記す。木製品のうち漆器椀は漆の色を記すが，記載がない場合は黒色漆であることを示す。

注１　宇野隆夫　1982　「井戸考」『史林第65巻第５号』

目　次

第Ⅰ章　調査経緯 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査経過 …… 4

A　調査方法 …… 4

B　調査の経過 …… 4

C　調査体制 …… 7

D　現地説明会 …… 8

E　整理の経過 …… 9

F　整理体制 …… 9

第Ⅱ章　立地と歴史的環境 …… 10

1　立　　地 …… 10

2　歴史的環境 …… 10

第Ⅲ章　調査の概要 …… 15

1　遺跡の概要 …… 15

A　概　　要 …… 15

B　土　　層 …… 16

第Ⅳ章　遺構・遺物 …… 18

1　古墳時代以前 …… 18

2　古　　代 …… 26

A　竪穴建物 …… 26

B　掘立柱建物 …… 36

C　溝 …… 81

D　畠 …… 103

E　土　　坑 …… 122

F　包含層出土遺物 …… 141

巻首図版目次

巻首図版１　遺跡遠景
巻首図版２　１号古墳　Ｄ地区全景
巻首図版３　ＳＩ１　ＳＩ６・ＳＩ７

挿図目次

第１図　調査位置図
第２図　調査区区割図
第３図　周辺遺跡位置図
第４図　基本層序模式図
第５図　遺構実測図　１号古墳（ＳＤ6270）　ＳＫ6299
第６図　遺構実測図　２号古墳（ＳＤ6901）
第７図　遺構実測図　３号古墳（ＳＤ6902）
第８図　遺構・遺物実測図　４号古墳（ＳＤ9024）
第９図　遺構実測図　５号古墳（ＳＤ9032）
第10図　遺構実測図　６号古墳（ＳＤ9009）
第11図　遺物実測図　包含層
第12図　遺物実測図　下層確認トレンチ
第13図　遺構実測図　ＳＩ１
第14図　遺構実測図　ＳＩ２
第15図　遺物実測図　ＳＩ１　ＳＩ２
第16図　遺構実測図　ＳＩ４　ＳＩ５
第17図　遺物実測図　ＳＩ５
第18図　遺構実測図　ＳＩ６　ＳＩ７
第19図　遺物実測図　ＳＩ６
第20図　遺物実測図　ＳＩ７
第21図　遺構実測図　ＳＢ１　ＳＡ１～ＳＡ３
第22図　遺構実測図　ＳＢ２　ＳＢ３
第23図　遺物実測図　ＳＰ1571　ＳＰ1595　ＳＰ2291　ＳＫ1594
第24図　遺構実測図　ＳＢ４　ＳＢ５
第25図　遺構実測図　ＳＢ６～ＳＢ８
第26図　遺構実測図　ＳＢ９～ＳＢ11
第27図　遺構実測図　ＳＩ１　ＳＩ２　ＳＢ12～ＳＢ14
第28図　遺構実測図　ＳＢ12　ＳＢ13
第29図　遺物実測図　ＳＰ3205　ＳＰ3212　ＳＰ3594　ＳＰ3597　ＳＰ3599　ＳＰ3914
第30図　遺構実測図　ＳＢ14

第31図　遺構実測図　ＳＢ15　ＳＢ16
第32図　遺構実測図　ＳＢ17～ＳＢ19
第33図　遺構実測図　ＳＢ20　ＳＢ21
第34図　遺構実測図　ＳＢ22　ＳＢ23
第35図　遺構実測図　ＳＢ25～ＳＢ33
第36図　遺構実測図　ＳＢ24　ＳＢ25
第37図　遺構実測図　ＳＢ26　ＳＢ27
第38図　遺物実測図　ＳＰ4229　ＳＰ4414　ＳＰ4472　ＳＰ4474　ＳＰ4475
第39図　遺構実測図　ＳＢ28～ＳＢ30
第40図　遺構実測図　ＳＢ31～ＳＢ33
第41図　遺構実測図　ＳＢ34～ＳＢ41
第42図　遺構実測図　ＳＢ34～ＳＢ38
第43図　遺構実測図　ＳＢ39～ＳＢ41
第44図　遺構実測図　ＳＢ42～ＳＢ45
第45図　遺構実測図　ＳＢ42～ＳＢ45
第46図　遺物実測図　ＳＰ4422　ＳＰ4423　ＳＰ4448　ＳＰ4751　ＳＰ4778　ＳＰ4796　ＳＰ4824
ＳＰ4889　ＳＰ5049　ＳＰ5069
第47図　遺構実測図　ＳＢ46～ＳＢ51　ＳＢ58
第48図　遺構実測図　ＳＢ46～ＳＢ51
第49図　遺構実測図　ＳＢ52　ＳＢ53　ＳＫ5446
第50図　遺構実測図　ＳＢ57　ＳＢ58
第51図　遺物実測図　ＳＰ4988　ＳＰ5104　ＳＰ5134　ＳＰ5186　ＳＰ5188　ＳＰ5279　ＳＰ5286
第52図　遺構実測図　ＳＢ54～ＳＢ56
第53図　遺構実測図　ＳＢ59～ＳＢ61　ＳＢ63
第54図　遺構実測図　ＳＢ62　ＳＢ64
第55図　遺物実測図　ＳＰ5672　ＳＰ5783　ＳＤ5633　ＳＤ5860
第56図　遺構実測図　ＳＢ66　ＳＢ67
第57図　遺構実測図　ＳＢ68　ＳＡ４
第58図　遺構実測図　ＳＢ65
第59図　遺物実測図　ＳＰ6565　ＳＰ6570　ＳＰ6572　ＳＤ6587　ＳＤ6590　ＳＤ6591　ＳＤ6736
第60図　遺構実測図　ＳＤ3003　谷部
第61図　遺物実測図　谷部
第62図　遺物実測図　ＳＤ3540
第63図　遺構実測図　ＳＤ4355　ＳＤ4359　ＳＤ4362　ＳＤ4363　ＳＤ4577　ＳＤ4581　ＳＤ4643
ＳＤ5044　ＳＤ5159　ＳＤ5378　ＳＫ5045
第64図　遺物実測図　ＳＤ4316　ＳＤ4355
第65図　遺物実測図　ＳＤ4355
第66図　遺物実測図　ＳＤ4355　ＳＤ4362　ＳＤ4383　ＳＤ4581　ＳＤ4773　ＳＤ5044　ＳＤ5159
第67図　遺構実測図　ＳＫ6233　ＳＤ5601　ＳＤ5602　ＳＤ5620　ＳＤ5622　ＳＤ5623　ＳＤ6202
ＳＤ6210～ＳＤ6212　ＳＤ6216　ＳＤ6217　ＳＤ6219　ＳＤ6258　ＳＤ6331
第68図　遺構実測図　ＳＤ5600

第69図　遺構実測図　ＳＤ5600　ＳＤ6201　ＳＤ6203　ＳＤ6259
第70図　遺構実測図　ＳＤ6461　ＳＤ6720　ＳＫ6714
第71図　遺物実測図　ＳＤ5600　ＳＤ5601　ＳＤ5622　ＳＤ5630　ＳＤ5839
第72図　遺物実測図　ＳＤ5928　ＳＤ5947
第73図　遺物実測図　ＳＤ6219　ＳＤ6258　ＳＤ6259　ＳＤ6328
第74図　遺構実測図　ＳＤ6501～ＳＤ6506　ＳＤ6508　ＳＤ6509　ＳＤ6512　ＳＤ6582　ＳＤ6583
ＳＤ6586　ＳＤ6727　ＳＤ6799　ＳＤ6816
第75図　遺構実測図　ＳＤ6903
第76図　遺物実測図　ＳＤ6501　ＳＤ6506　ＳＤ6507　ＳＤ6511　ＳＤ6559　ＳＤ6583　ＳＤ6586
ＳＤ6720　ＳＤ6799　ＳＤ6801　ＳＤ6810　ＳＤ6816　ＳＤ6903
第77図　遺構・遺物実測図　ＳＤ9043　ＳＤ9044　ＳＤ9132　ＳＤ9139　ＳＤ9140　ＳＤ9450
ＳＫ9133
第78図　遺構実測図　ＳＤ3166～ＳＤ3176　ＳＤ3187
第79図　遺構実測図　ＳＤ3463～ＳＤ3475
第80図　遺構実測図　ＳＤ4203～ＳＤ4225　ＳＤ4271～ＳＤ4274　ＳＤ4276～ＳＤ4279
第81図　遺構実測図　ＳＤ4248～ＳＤ4270　ＳＤ4316　ＳＤ4317
第82図　遺構実測図　ＳＤ4556　ＳＤ4566　ＳＤ4567　ＳＤ4569　ＳＤ4573～ＳＤ4580　ＳＤ4604
ＳＤ4614　ＳＤ4615　ＳＤ4667～ＳＤ4671　ＳＤ4673　ＳＤ4674　ＳＤ4677
第83図　遺構実測図　ＳＤ5161～ＳＤ5180
第84図　遺構実測図　ＳＤ4936～ＳＤ4938　ＳＤ4940～ＳＤ4944　ＳＤ4948～ＳＤ4959
ＳＤ4961～ＳＤ4966
第85図　遺物実測図　ＳＤ4377　ＳＤ5125　ＳＤ5160　ＳＤ5396
第86図　遺物実測図　ＳＤ4343　ＳＤ4366　ＳＤ4377　ＳＤ4649　ＳＤ4689　ＳＤ4923　ＳＤ4944
ＳＤ4955　ＳＤ4962　ＳＤ4964　ＳＤ5164　ＳＤ5165　ＳＤ5398
第87図　遺構実測図　ＳＤ5820～ＳＤ5825　ＳＤ5828～ＳＤ5830　ＳＤ5834～ＳＤ5841
第88図　遺構実測図　ＳＤ5910　ＳＤ5912～ＳＤ5918　ＳＤ5920～ＳＤ5932　ＳＤ5934～ＳＤ5939
ＳＤ5943　ＳＤ5944　ＳＤ5947～ＳＤ5949
第89図　遺構実測図　ＳＤ5932　ＳＤ5934　ＳＤ5935　ＳＤ5937～ＳＤ5939　ＳＤ5943　ＳＤ5944
ＳＤ5946～ＳＤ5949　ＳＤ5953　ＳＤ5967　ＳＤ5970　ＳＤ5971
ＳＤ5979～ＳＤ5991　ＳＤ6000　ＳＤ6001　ＳＤ6004　ＳＤ6018　ＳＤ6019
ＳＤ6023～ＳＤ6025　ＳＤ6027～ＳＤ6029　ＳＤ6037　ＳＤ6038　ＳＤ6077
第90図　遺構実測図　ＳＤ5979～ＳＤ6001　ＳＤ6004　ＳＤ6007　ＳＤ6010　ＳＤ6011
ＳＤ6017～ＳＤ6019　ＳＤ6022～ＳＤ6025　ＳＤ6027～ＳＤ6031　ＳＤ6036
ＳＤ6037　ＳＤ6039～ＳＤ6052　ＳＤ6055～ＳＤ6063　ＳＤ6067　ＳＤ6068
ＳＤ6073　ＳＤ6077　ＳＤ6078　ＳＤ6086　ＳＤ6090　ＳＤ6101
第91図　遺構実測図　ＳＤ5912～ＳＤ5918　ＳＤ5920～ＳＤ5926　ＳＤ5928～ＳＤ5932
ＳＤ5934～ＳＤ5939　ＳＤ5946～ＳＤ5949　ＳＤ5967　ＳＤ5970～ＳＤ5972
ＳＤ5979～ＳＤ5981　ＳＤ5984～ＳＤ5987　ＳＫ5945
第92図　遺構実測図　ＳＤ5980～ＳＤ5982　ＳＤ5984～ＳＤ5991　ＳＤ5993～ＳＤ5996
ＳＤ5998～ＳＤ6001　ＳＤ6004　ＳＤ6007　ＳＤ6011　ＳＤ6017　ＳＤ6018
ＳＤ6022　ＳＤ6023　ＳＤ6025　ＳＤ6027～ＳＤ6031　ＳＤ6040～ＳＤ6047

		ＳＤ6049～ＳＤ6051　ＳＤ6055～ＳＤ6059　ＳＤ6073　ＳＤ6077　ＳＤ6081 ＳＫ6100
第93図	遺構実測図	ＳＫ1567　ＳＫ2161　ＳＫ2198　ＳＫ2230　ＳＫ2262　ＳＫ2270
第94図	遺物実測図	ＳＫ2161　ＳＫ2198　ＳＫ2199　ＳＫ2230　ＳＫ2276
第95図	遺構実測図	ＳＫ2916　ＳＫ3530
第96図	遺物実測図	ＳＫ2936　ＳＫ3032　ＳＫ3530　ＳＫ3544
第97図	遺構実測図	ＳＤ5231　ＳＫ4287　ＳＫ4290　ＳＫ4563　ＳＫ4708　ＳＫ5219　ＳＫ5230 ＳＫ5246
第98図	遺物実測図	ＳＫ4287　ＳＫ4290　ＳＫ4291　ＳＫ4327　ＳＫ4344　ＳＫ4416　ＳＫ4455 ＳＫ4497　ＳＸ4384
第99図	遺物実測図	ＳＫ4549　ＳＫ4647　ＳＫ4708　ＳＫ4722　ＳＫ4748　ＳＫ5030　ＳＫ5034 ＳＫ5060　ＳＫ5092　ＳＫ5111　ＳＫ5112　ＳＫ5152　ＳＫ5204　ＳＫ5205 ＳＫ5211　ＳＫ5212　ＳＫ5230　ＳＫ5246　ＳＫ5331　ＳＸ5265
第100図	遺構実測図	ＳＫ5636　ＳＫ5687　ＳＫ5855
第101図	遺物実測図	ＳＫ5687　ＳＫ5808　ＳＫ5855
第102図	遺構実測図	ＳＫ5945
第103図	遺構実測図	ＳＤ5928　ＳＤ5929　ＳＤ6037　ＳＫ5940　ＳＫ6054　ＳＫ6100　ＳＫ6104
第104図	遺物実測図	ＳＫ5940　ＳＫ6104
第105図	遺構実測図	ＳＫ6533　ＳＫ6715　ＳＫ6802
第106図	遺構実測図	ＳＤ6805　ＳＫ6803　ＳＫ6804
第107図	遺物実測図	ＳＫ6533　ＳＫ6564　ＳＫ6715　ＳＫ6762　ＳＫ6800　ＳＫ6802～ＳＫ6804
第108図	遺構・遺物実測図	ＳＫ9002　ＳＫ9004　ＳＫ9006　ＳＫ9007　ＳＫ9021　ＳＫ9030 ＳＫ9073　ＳＫ9074　ＳＫ9101　ＳＫ9105　ＳＫ9107　ＳＫ9129
第109図	遺物実測図	ＳＫ9458　ＳＫ9460　ＳＫ9589　ＳＫ9590
第110図	遺物実測図	包含層
第111図	遺物実測図	包含層
第112図	遺物実測図	包含層
第113図	遺物実測図	包含層
第114図	遺物実測図	包含層
第115図	遺物実測図	包含層
第116図	遺物実測図	包含層
第117図	遺物実測図	包含層
第118図	遺物実測図	包含層
第119図	遺物実測図	包含層
第120図	遺物実測図	包含層
第121図	遺物実測図	包含層
第122図	遺物実測図	包含層
第123図	遺物実測図	包含層
第124図	遺物実測図	包含層
第125図	遺物実測図	包含層
第126図	遺物実測図	包含層

第127図　遺物実測図　包含層
第128図　遺物実測図　包含層
第129図　遺物実測図　包含層
第130図　遺物実測図　包含層
第131図　遺物実測図　包含層
第132図　遺物実測図　包含層
第133図　遺物実測図　包含層
第134図　遺物実測図　包含層
第135図　遺物実測図　包含層
第136図　遺物実測図　包含層
第137図　遺物実測図　包含層
第138図　遺物実測図　包含層
第139図　遺物実測図　包含層
第140図　遺物実測図　包含層
第141図　遺物実測図　包含層
第142図　遺物実測図　包含層
第143図　遺物実測図　包含層
第144図　遺物実測図　包含層
第145図　遺物実測図　包含層
第146図　遺物実測図　包含層
第147図　遺物実測図　包含層
第148図　遺物実測図　包含層
第149図　遺物実測図　包含層
第150図　遺物実測図　包含層

表　目　次

第１表　調査結果一覧 …… 3
第２表　調査一覧 …… 6
第３表　遺跡地名一覧 …… 13
第４表　竪穴建物一覧 …… 32
第５表　掘立柱建物一覧（１）・（２）…… 192
第６表　溝一覧（１）～（10）…… 194
第７表　土坑一覧　（１）・（２）　…… 204
第８表　土器・土製品一覧（１）～（30）…… 206
第９表　木製品一覧　…… 236
第10表　石製品一覧　…… 236
第11表　金属製品一覧　…… 236

第Ⅰ章　調査経過

1　調査に至る経過

A　調査の契機

能越自動車道は，高規格幹線道路網の一環として昭和62年に策定された。路線は小矢部砺波ＪＣＴ（ジャンクション）から高岡市および氷見市を通過し，石川県輪島市に至る。また，既存の北陸自動車道，東海北陸自動車道等と連結することにより，富山県北西部地域や能登地域と東京，名古屋，大阪との交流の活性化と，地域幹線道路の交通緩和及び災害に強い道路網の形成を目的にしている。

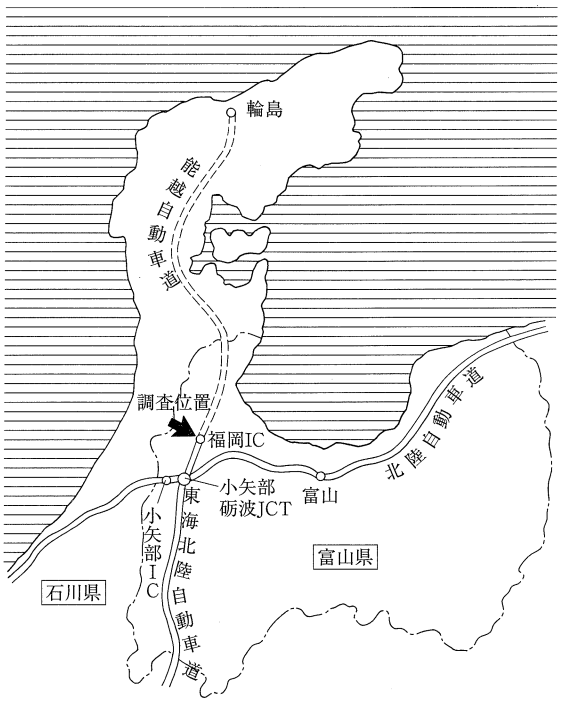
道路の総延長は約100㎞で，富山県内は約45㎞計画されており，小矢部東・福岡・高岡・高岡北・氷見・灘浦の各ＩＣ（インターチェンジ）が設置される。

道路の建設計画は平成２年４月に建設省から富山県教育委員会に示され，埋蔵文化財の取り扱いについて建設省北陸建設局・富山県教育委員会・小矢部市教育委員会の三者により早々に協議が行われた。その結果，埋蔵文化財の分布状況を把握するため，小矢部市の用地買収完了地域で早急に分布調査を実施することとなった。以後平成３年12月に一部未買収で残っていた小矢部市域と福岡町域を，次いで平成５年３月に新たに高岡市域の分布調査を富山県教育委員会（富山県埋蔵文化財センター）が主体となり，当該市町教育委員会の協力を得て実施した。

B　分布調査

平成２年度の分布調査は，小矢部市域で本線敷地内（小矢部砺波ＪＣＴ～福岡ＩＣ間）とアクセス道路敷地内（国道８号線芹川交差点～福岡ＩＣ間）を４月17・18日の２日間で実施され，両地内で新たに６箇所の埋蔵文化財包蔵地の存在が確認された。これらは便宜上，本線敷地内をＮＥＪ-01・02・03・04，アクセス道路敷地内をＮＥＪ-Ａ-01・02と仮称された。調査結果は５月24日に建設省・富山県道路課・同企画用地課・富山県道路公社・富山県教育委員会文化課・富山県埋蔵文化財センター・小矢部市教育委員会の協議で報告された。

平成３年度の分布調査は，福岡町域を主体とし12月３日に実施された。本線敷地内（福岡ＩＣ～福岡サービスエリア間），アクセス道路敷地内の福岡町域及び用地買収が完了した小矢部市芹川地内を対象とし，両地内で４箇所の埋蔵文化財包蔵地の存在が確認された。本線敷地内はＮＥＪ-05・06・07，アクセス道敷地内で前年度周知したＮＥＪ-Ａ-01が福岡町域で範囲を拡大したため拡大域をＮＥＪ-Ａ-03，小矢部市芹川地内をＮＥＪ-Ａ-04と仮称された。調査結果は平成４年１月10日に建設省・富山県教育委員会文化課・富山県埋蔵文化財センター・富山県文化振興財団の協議で報告された。



第１図　調査位置図

平成４年度の分布調査は，本線敷地内の高岡市笹

川地内（福岡サービスエリア～ＪＲ北陸本線間）で３月22日に実施し，平成３年度に実施した試掘調査で明らかになった下老子遺跡（ＮＥＪ-07）の高岡市域への広がりとみてＮＥＪ-08と仮称された。調査の結果は建設省・富山県埋蔵文化財センターの協議で報告された。

平成５年度の分布調査は，本線敷内の高岡市笹島・上渡地内（ＪＲ北陸本線～県道小野上渡線間）で３月30日に実施し，位置的状況から近世北陸街道との交錯推定地を確認した。調査の結果は建設省・富山県埋蔵文化財センター・富山県文化振興財団の協議で報告された。

C　試掘調査

分布調査の結果報告で遺跡推定地の今後の取り扱いについて検討された。その結果，遺跡のより明確な範囲と内容について把握するため，試掘調査を実施することとなった。なお，試掘調査は平成２年度は建設省から小矢部市教育委員会が，平成３・５年度は富山県文化振興財団が委託を受け実施した。

平成２年度の試掘調査は11月１日から12月22日まで実施した。その結果，ＮＥＪ-04・ＮＥＪ-Ａ-01・ＮＥＪ-Ａ-02の３箇所で遺跡を確認し，五社遺跡，石名田遺跡，地崎遺跡と命名された。また，本調査の必要な面積は合計約54,000㎡と確定した。試掘調査の結果は，平成３年２月26日に建設省・富山県道路公社・富山県教育委員会文化課・富山県埋蔵文化財センター・小矢部市教育委員会の協議で報告された。

平成３年度の試掘調査は６月１日から７月７日まで実施した。その結果，ＮＥＪ-05・ＮＥＪ-06・ＮＥＪ-07・ＮＥＪ-Ａ-03の４箇所で遺跡を確認した。ＮＥＪ-05は開蓚大滝遺跡，ＮＥＪ-06は２地点に分かれて蓑島遺跡・江尻遺跡，ＮＥＪ-07は下老子遺跡，ＮＥＪ-Ａ-03は木舟地区で範囲が拡大したため石名田木舟遺跡と命名した。また，本調査の必要な面積は合計約130,900㎡と確定した。試掘調査の結果は，９月17日に建設省・富山県教育委員会文化課・富山県埋蔵文化財センター・富山県文化振興財団の協議で報告された。

平成６年度の試掘調査は６月６日から７月４日まで実施した。その結果，ＮＥＪ-08は笹川地区で範囲が拡大したため下老子笹川遺跡と命名し，本調査の必要な面積は67,050㎡と確定した。試掘調査の結果は，９月17日に建設省・富山県埋蔵文化財センター・富山県文化振興財団の協議で報告された。

D　本調査

本調査については平成３年４月に，建設省・富山県教育委員会（富山県埋蔵文化財センター）・富山県文化振興財団の協議で，遺跡の範囲が確定している五社遺跡，石名田遺跡，地崎遺跡の本調査の要望がなされた。その結果，富山県教育委員会及び富山県文化振興財団は東海北陸自動車道関連の調査が終了する平成４年度から，同財団埋蔵文化財調査事務所が能越自動車道関連の本調査を受託することで合意し，調査体制の整備及び調査方法の検討を進めた。

初年の平成４年度は最も南側に所在する五社遺跡を対象に，７月20日から12月27日まで調査を実施した。調査は一部用地買収の遅れと，新たに下層遺構の検出により平成６年度まで実施した。

平成５年度は平成７年度末の福岡ＩＣ供用開始を受け，調査体制をさらに整備し開蓚大滝遺跡，石名田木舟遺跡を主体に五社遺跡，地崎遺跡の本調査を４月19日から12月21日まで実施した。

平成６年度は石名田木舟遺跡を中心に，用地買収の遅れていた五社遺跡の本調査を５月18日から平成７年１月19日まで実施した。

平成７年度は福岡ＩＣ周辺で能越自動車道に係り，消滅する町道の代替え道路用地で石名田木舟遺跡の調査を５月17日から７月25日まで実施した。また福岡ＩＣ～福岡サービスエリア間で蓑島遺跡，江尻遺跡，下老子笹川遺跡の調査を新たに開始した。　（狩野　睦）

遺跡名	所在地	面積(㎡)	調査期間	遺構	遺物	時代	面積(㎡)
NEJ－01	小矢部市水島	分布調査　5,600	H2.4.17～4.18				
		試掘調査　271	H2.11.1～11.2	なし	珠洲・陶器	中世・近世	
NEJ－02	小矢部市水島	分布調査　8,000	H2.4.17～4.18				
		試掘調査　237	H.2.11.1～11.2	なし	陶磁器	近世	
NEJ－03	小矢部市道明	分布調査　16,800	H2.4.17～4.18				
		試掘調査　1,184	H2.11.1～11.2	なし	陶磁器	近世	
NEJ－04 (五社遺跡)	小矢部市五社	分布調査　67,000	H2.4.17～4.18				
		試掘調査　2,977	H2.11.6～12.5	掘立柱建物・土坑・溝	須恵器・土師器・製塩土器・中世土師器・珠洲・輸入陶磁器	◎平安時代後半 ◎中世 近世	32,000
		本調査(延べ)38,100	H4.7.20～12.27	掘立柱建物・井戸・土坑・溝・畠・集石	須恵器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器・製塩土器・中世土師器・珠洲・輸入陶磁器・木製品・金属製品	◎平安時代後半 ◎中世 近世	
		本調査(延べ)6,209	H5.4.19～12.8	竪穴住居・掘立柱建物・溝・畠・集石	須恵器・土師器・木製品	◎古墳時代中期 ◎平安時代前半	
		本調査(延べ)6,990	H6.5.18～10.25	掘立柱建物・土坑・溝・柵	須恵器・土師器・製塩土器・中世土師器・珠洲・瀬戸美濃・輸入陶磁器・木製品	◎平安時代後半 ◎中世	
NEJ－05 (開薛大滝遺跡)	福岡町開薛・大滝	分布調査　78,400	H3.12.3				
		試掘調査　4,660	H4.6.19～7.7	掘立柱建物・井戸・土坑・溝	中世土師器・珠洲・陶磁器・木製品	◎中世 近世	25,300
		本調査(延べ)28,063	H5.5.19～12.21	掘立柱建物・井戸・土坑・溝・畠・柵・石列・道路	中世土師器・珠洲・越前・瀬戸美濃・輸入陶磁器・陶磁器・木製品・石製品・金属製品	◎中世 近世	
NEJ－06－b (蓑島遺跡)	福岡町蓑島	分布調査　72,500	H3.12.3				
		試掘調査　2,900	H4.6.17～6.29	土坑・溝	縄文土器・陶磁器	◎縄文時代晩期 近世	3,400
NEJ－06－a (江尻遺跡)	福岡町江尻		H3.12.3				
			H4.6.17～6.29	掘立柱建物・土坑・溝	弥生土器・中世土師器	弥生時代後期 中世 ◎近世	12,100
NEJ－07 (下老子遺跡)	福岡町下老子	分布調査　74,800	H3.12.3				
		試掘調査　4,900	H4.6.1～6.17	竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝	弥生土器・石器・須恵器・土師器・中世土師器・珠洲・輸入陶磁器・陶磁器・木製品	◎弥生時代後期～末 古代 中世 ◎近世	68,500
NEJ－A－01 (石名田遺跡)	小矢部市 石名田	分布調査　25,200	H2.4.17～4.18				
		試掘調査　1,462	H3.11.30～12.13	掘立柱建物・土坑・溝	須恵器・土師器・中世土師器・珠洲・輸入陶磁器・木製品	◎奈良・平安時代 ◎中世 近世	21,000
NEJ－A－02 (地崎遺跡)	小矢部市地崎	分布調査　19,800	H2.4.17～4.18				
		試掘調査　1,049	H3.11.30～12.21	掘立柱建物・穴	陶磁器・木製品	◎近世	1,000
		本調査　1,636	H5.5.11～7.27	掘立柱建物・井戸・土坑・溝	珠洲・八尾・瀬戸美濃・輸入陶磁器・陶磁器・木製品・石製品・金属製品	◎近世	
NEJ－A－03 (石名田木舟遺跡)	福岡町木舟	分布調査　32,600	H3.12.3				
		試掘調査　2,100	H4.6.16～7.1	竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝・杭列・礎石建物・根太敷建物・埋甕状土坑	須恵器・土師器・中世土師器・珠洲・越前・瀬戸美濃・輸入陶磁器・陶磁器・木製品・金属製品	◎古代 ◎中世 近世	21,600
NEJ－A－04	小矢部市芹川	分布調査　19,400	H3.12.3				
		試掘調査　900	H4.6.15～6.16	なし	陶磁器		
NEJ－08 (下老子笹川遺跡)	高岡市笹川	分布調査　76,800	H5.3.22				
		試掘調査　3,800	H6.6.6～7.4	土坑・溝	縄文土器・石器・弥生土器・須恵器・土師器・中世土師器・珠洲	◎縄文時代晩期 弥生時代後期 奈良・平安時代 中世	67,050
近世北陸道	高岡市笹川	分布調査　67,200	H6.3.30				

第1表　調査結果一覧

※ ◎は主体をしめる時代

2　調査経過

A　調査方法

発掘調査の基準となるグリッドの設定に際しては国家座標を用い，＋76.000，－23.100をＸ０Ｙ０とし，南北方向をＸ軸，東西方向をＹ軸とした。グリッドは２ｍ方眼とし，各グリッド名は右上のＸ軸とＹ軸の座標とした。石名田木舟遺跡の発掘範囲はＸ36～Ｘ267，Ｙ41～Ｙ499までであり，調査区は農道や用水，畦畔などでＡＮ，ＡＥ，ＡＷ，Ｂ１，Ｂ２，Ｂ３，Ｃ１，Ｃ２，Ｄ，Ｅ１，Ｅ２，Ｆ１，Ｆ２，Ｆ３，Ｆ４，Ｇ，Ｈに分けている。

調査は表土・耕作土・無遺物層の除去，包含層の発掘，遺構確認面の精査・遺構の検出，遺構の発掘，遺構の記録，写真撮影，空中写真測量，補足作業の順で行った。

表土・耕作土・無遺物層の除去は，人力掘削による調査の事前準備として，調査員立ち会いのもと，試掘調査の結果をふまえ，基本層序を確認しながら，事業者側がバックホウにより行った。場所によっては無遺物層の除去も行った。

包含層の発掘はスコップ等を用い，人力で掘削した。排土はベルトコンベヤーを使用し，路線敷内の調査区隣接地に集積し，ダンプによる調査区外への搬出は事業者側が行った。

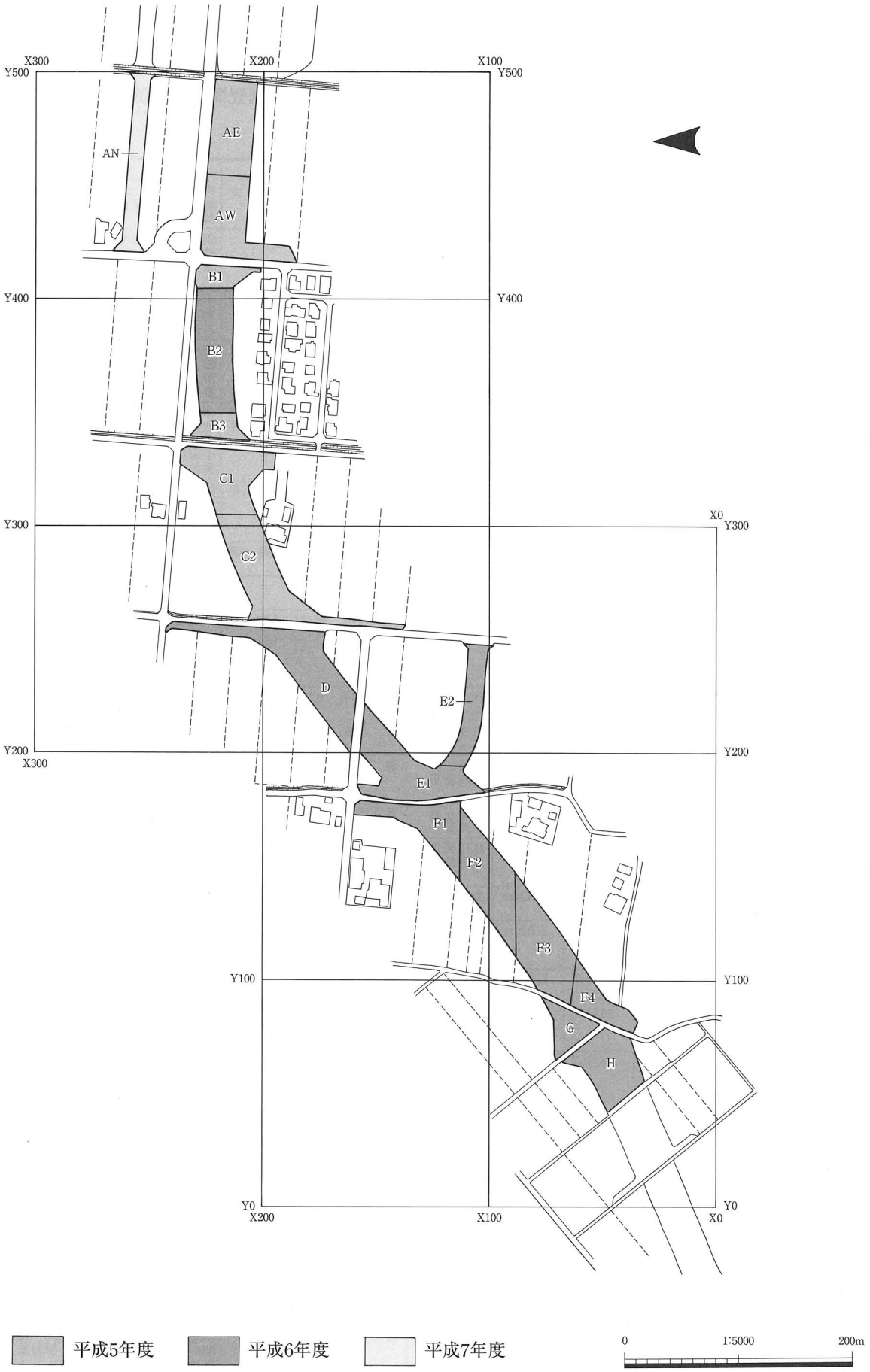
遺構確認面の精査・遺構の検出は，遺構確認面に達するとジョレンやねじり鎌で精査し，検出した遺構はスプレーペンキ等でマーキングを行い，遺構概略図を作成した。検出した遺構には遺構番号を付すが，各地区毎に遺構の種類に関わらず通し番号とした。また概略図には遺構上面の覆土色を記入し，検討の材料とした。

遺構の発掘は柱穴・井戸・小さい土坑は長軸に沿って半截，大きい土坑は十字，またはそれ以上に，溝は適宜に間隔をあけてセクションベルトを残し，移植ごてで発掘した。井戸の人力による完掘は最小限にとどめ，重機により完掘した。

遺構の記録は断面図を20分の１で実測し，遺構によっては10分の１の遺物出土状況図を作成した。各遺構の断面は35㎜カメラで，出土状況図や個別の完掘写真・ブロック写真はブローニー判もあわせて撮影した。調査区の全景写真は４×５インチ判カメラで２方向以上から撮影している。フィルムは，35㎜はカラーと白黒，ブローニー判・４×５インチ判はカラースライドと白黒を使用した。遺構の平面図作成には空中写真測量を利用し，面積によってリフトセンサーとラジコンヘリとヘリコプターを使用した。人力で完掘できなかった井戸はバックホウで断ち割り，下層の層位，最終レベルの確認，遺物の採集を行った。また，空中写真測量のために残した畦などをはずし，遺構の完掘を確認した。

B　調査の経過

調査は平成５年度から平成７年度にかけて行った。平成５年度の調査は本線敷内の五社遺跡・開蓙大滝遺跡，アクセス道路敷内の地崎遺跡・石名田木舟遺跡を対象に，調査員２名１班の体制で行った。石名田木舟遺跡の調査は建設省との協議のうえ，用水・道路を跨ぐボックス工事に係る箇所から行った。遺構検出面はＡ・Ｂ地区では中世面のみ，Ｃ地区は一部が近世面と古代面の二面に分かれており，近世面の調査終了後，下層の調査に入った。なお，Ｂ３地区においては，以前の圃場整備および道路改修の際の土砂採集掘削により遺構は全て削平され，撹乱穴からの遺物採集となった。調査総面積は14,493㎡，調査期間は５月11日～12月15日である。平成６年度は五社遺跡，石名田木舟遺跡の調査を行った。石名田木舟遺跡の調査はＥ２地区が古代面のみ，Ｇ・Ｈ地区が中世面のみである以外は複数の遺構検出面があったため，調査総面積は40,338㎡で，調査期間は５月18日～平成７年１月19日まで


X300
Y500
X200
X100
Y500
AE
AN
AW
B1
Y400
Y400
B2
B3
C1
Y300
X0
Y300
C2
D
E2
Y200
X300
Y200
E1
F1
F2
F3
Y100
Y100
F4
G
H
Y0
X200
X100
Y0
X0
平成5年度
平成6年度
平成7年度
0
1:5000
200m

第２図　調査区区割図

を要した。平成７年度は石名田木舟遺跡，本線敷内の蓑島遺跡・江尻遺跡・下老子笹川遺跡の調査を行った。石名田木舟遺跡の調査は，平成５年度に調査したＡ地区の北60ｍに位置する，本線建設に係り消滅する町道の代替道路用地で，遺構検出面は中世面のみである。調査面積は2,050㎡，調査期間は５月17日～７月25日である。

地区		調査期間	延べ日数	調査面積	調査担当者	検出遺構	出土遺物
AN		平成７年５月17日～７月25日	32日間	2,050㎡	岡本淳一郎 柴口真澄	掘立柱建物，溝，井戸，土坑	中世土師器，珠洲，瀬戸美濃，青磁，越中瀬戸，瓦質土器，石製品，金属製品
AE		平成５年７月21日～９月22日		3,322㎡	佐賀和美 越前慎子	柱穴，溝，井戸，土坑	須恵器，中世土師器，珠洲，越前，輸入陶磁器，越中瀬戸，伊万里，唐津，肥前，木製品，石製品，金属製品
AW		平成５年８月31日～11月９日	42日間	2,096㎡	池野正男 谷杉廷子	掘立柱建物，柵，溝，井戸，土坑	中世土師器，瀬戸美濃，青磁，白磁，青花，越中瀬戸，伊万里，木製品，石製品，金属製品
B１		平成５年９月21日～11月16日		677㎡	佐賀和美 越前慎子	掘立柱建物，溝，井戸，土坑	須恵器，土師器，中世土師器，越前，輸入陶磁器，瓦質土器，越中瀬戸，伊万里，唐津，肥前，木製品，金属製品
B２	中世上層	平成６年５月18日～９月７日	90日間	2,995㎡	酒井重洋 柴口真澄	礎石建物，土台建物，掘立柱建物，柵，道路，溝，井戸，土坑	須恵器，土師器，中世土師器，珠洲，越前，瀬戸美濃，青磁，白磁，青白磁，青花，交趾三彩，瓦質土器，越中瀬戸，伊万里，唐津，土製品，木製品，石製品，金属製品，布，縄
	中世中層	平成６年９月８日～10月25日	30日間	2,500㎡	酒井重洋 柴口真澄	掘立柱建物，道路，溝，井戸，土坑	須恵器，土師器，中世土師器，珠洲，越前，瀬戸美濃，青磁，白磁，青花，瓦質土器，木製品，石製品，金属製品
	中世下層	平成６年10月26日～12月27日	47日間	2,000㎡	酒井重洋 柴口真澄	掘立柱建物，柵，道路，溝，土坑	須恵器，土師器，中世土師器，越前，瀬戸美濃，瓦塔，木製品
B３		平成５年10月18日～11月５日	13日間	523㎡	池野正男 谷杉廷子		須恵器，交趾三彩
C１		平成５年９月10日～12月15日		2,818㎡	神保孝造 森本英津子	竪穴建物，掘立柱建物，溝，井戸，土坑	須恵器，土師器，製塩土器，中世土師器，八尾，珠洲，越前，瀬戸美濃，輸入陶磁器，瓦質土器，越中瀬戸，伊万里，唐津，肥前，土製品，木製品，石製品，金属製品
C２	近世面	平成５年５月11日～６月22日		1,640㎡	神保孝造 森本英津子	溝，井戸，土坑	伊万里
	古代面	平成５年６月24日～９月20日		3,417㎡	神保孝造 森本英津子	溝，土坑，畠	須恵器，土師器
D	中世面	平成６年７月22日～７月29日	６日間	500㎡	池野正男 三島道子	溝	中世土師器，珠洲，越前，瀬戸美濃，青磁，白磁，青花，越中瀬戸，唐津，金属製品
	古代面	平成６年７月22日～11月24日	81日間	4,565㎡	池野正男 三島道子	掘立柱建物，柵，溝，土坑，畠	弥生土器，須恵器，土師器，製塩土器，土製品，木製品，石製品
E１	中世面	平成６年５月18日～６月22日	25日間	900㎡	島田美佐子 武田健次郎	溝，土坑	須恵器，中世土師器，珠洲，越前，瀬戸美濃，白磁，青白磁，越中瀬戸，伊万里，唐津，近世陶磁器，石製品
	古代面	平成６年６月６日～８月12日	44日間	3,324㎡	島田美佐子 武田健次郎	掘立柱建物，溝，土坑，畠	須恵器，土師器，土製品
E２	古代面	平成６年５月18日～８月５日	45日間	1,529㎡	中川道子 山元祐人	柱穴，畠，溝，土坑	須恵器，土師器，中世土師器，珠洲，瀬戸美濃，青磁，青白磁，青花，越中瀬戸，唐津
F１	中世面	平成６年５月19日～６月28日	27日間	1,000㎡	池野正男 三島道子	溝，土坑	中世土師器，珠洲，越前，青磁，越中瀬戸，木製品，石製品，金属製品
	古代面	平成６年６月29日～８月５日	21日間	2,416㎡	池野正男 三島道子	古墳，柱穴，溝，土坑，畠	須恵器，土師器
F２	中世面	平成６年９月14日～11月29日	38日間	3,346㎡	島田美佐子 武田健次郎	溝，土坑	縄文土器，須恵器，土師器，中世土師器，珠洲，越前，瀬戸美濃，青磁，白磁，青花，肥前，瓦質土器，木製品，石製品，金属製品
	古代面	平成６年11月29日～７年１月19日	33日間	3,346㎡	島田美佐子 武田健次郎	古墳，竪穴建物，掘立柱建物，柵，溝，土坑，畠	須恵器，土師器，土製品
F３	中世面	平成６年７月６日～12月27日	112日間	3,147㎡	中川道子 山元祐人	土台建物，掘立柱建物，溝，井戸，土坑	須恵器，土師器，中世土師器，珠洲，越前，瀬戸美濃，青磁，白磁，青花，肥前，瓦質土器，土製品，木製品，石製品，金属製品
	古代面	平成６年12月12日～７年１月19日	24日間	2,000㎡	中川道子 山元祐人	古墳，柱穴，溝，土坑	須恵器，土師器，木製品
F４	中世面	平成６年７月27日～11月１日	57日間	1,227㎡	島田美佐子 武田健次郎	掘立柱建物，溝，井戸，土坑	中世土師器，珠洲，越前，瀬戸美濃，青磁，白磁，青花，瓦質土器，土製品，木製品，石製品，金属製品
	古代面	平成６年10月４日～11月18日	30日間	1,227㎡	島田美佐子 武田健次郎	竪穴建物，溝，土坑，畠	須恵器，土師器，土製品
G	中世面	平成６年11月28日～12月26日	23日間	1,024㎡	池野正男 三島道子	柱穴，溝，井戸，土坑	須恵器，中世土師器，珠洲，越前，瀬戸美濃，青磁，白磁，伊万里，瓦質土器，木製品，石製品
H	中世面	平成６年10月24日～12月26日	49日間	2,692㎡	岡本淳一郎 森本英津子	柱穴，溝，井戸，土坑	須恵器，中世土師器，珠洲，越前，瀬戸美濃，青磁，伊万里，瓦質土器，木製品，石製品，貝

第２表　調査一覧

C　調査体制

平成５年度（1993年度）

総　　括	桃野真晃	埋蔵文化財調査事務所所長
	関　　清	埋蔵文化財調査事務所所長代理
庶　　務	大房友明	埋蔵文化財調査事務所主事
	中川靖夫	埋蔵文化財調査事務所主事
調査総括	池野正男	埋蔵文化財調査事務所調査第一係長
調査員	神保孝造	埋蔵文化財調査事務所主任
	河西健二	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	佐賀和美	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	越前慎子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	谷杉廷子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	三島道子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	山元祐人	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	森本英津子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	柴口真澄	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

平成６年度（1994年度）

総　　括	桃野真晃	埋蔵文化財調査事務所所長
	関　　清	埋蔵文化財調査事務所所長代理
庶　　務	大房友明	埋蔵文化財調査事務所主任
	岩崎証意	埋蔵文化財調査事務所主事
調査総括	池野正男	埋蔵文化財調査事務所調査第一係長
調査員	酒井重洋	埋蔵文化財調査事務所主任
	岡本淳一郎	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	島田美佐子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	中川道子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	三島道子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	山元祐人	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	武田健次郎	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	森本英津子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	柴口真澄	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

平成７年度（1995年度）

総　　括	岸本雅敏	埋蔵文化財調査事務所所長心得
	加藤善吾	埋蔵文化財調査事務所副所長
庶　　務	大房友明	埋蔵文化財調査事務所主任
	岩崎証意	埋蔵文化財調査事務所主事
調査総括	狩野　睦	埋蔵文化財調査事務所調査第二課長
調査員	森　　隆	埋蔵文化財調査事務所主任
	岡本淳一郎	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

島田美佐子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
三島道子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
山元祐人　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
武田健次郎　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
大野淳也　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
河西英津子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
柴口真澄　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

D　現地説明会

発掘調査の結果を広く一般に公開するために，年に１回，調査工程を検討しながら対象地区を選定して現地説明会を実施した。

平成５（1993）年

９月27日　新聞記者発表・開催案内

９月30日　各紙に掲載

10月３日　石名田木舟遺跡Ｃ２地区を会場に，古代の竈付き竪穴建物や古代から中世の掘立柱建物群等を公開した。現地には約280名の見学者が訪れ，配付資料に基づく全体説明の後，自由に見学した。掘立柱建物は時期ごとに色分けした柱を用い復元した他，主要な遺構には調査員と解説パネルを配置し，質問等に対応した。また，会場内には出土遺物や写真パネルを展示したり，遺跡紹介のビデオを上映するコーナーを設け，他遺跡の調査状況も公開した。

平成６（1994）年

10月26日　新聞記者発表・開催案内

10月28日　各紙に掲載

10月30日　石名田木舟遺跡Ｂ２地区を会場に，木舟城の城下町とみられる町割りと様々な構造をもつ建物群，古代の掘立柱建物群等を公開した。約250名の見学者から遺構について多くの質問があり，調査員が対応，解説した。

また，隣接して出土遺物・写真パネル等の展示・解説コーナーを設置し，調査中の他遺跡の状況も紹介した。地元の歴史がより身近なものと感じられ，埋蔵文化財への理解が一層深まるように考慮した。

礎石建物の解説

出土遺物の展示解説

遺構群（古代）の解説

E　整理の経過

出土遺物は各年度内に可能な限り洗浄・注記・分類を行った。木製品・石製品・金属製品はメモ写真を撮影し，整理台帳を作成した。木製品は収納・管理の便宜を図るためオートシーラーと専用フィルムを用いてパックし，仮保管している。調査概要については『埋蔵文化財年報』（5）・（6），『埋蔵文化財調査概要－平成７年度－』として発刊している。

報告書刊行に向けての本格的な整理は，平成11年４月に開始した。11年度は遺物実測・遺構の挿図作成，12年度は遺物の挿図と図版作成・写真撮影・原稿執筆・編集，13年度は印刷を行った。

遺物の実測は土器・陶磁器・木製品の一部を調査員及び整理作業員が行った。その他の木製品・石製品・金属製品については，業者委託による写真実測で行った。実測図は種類別の遺物カードに直接書き込むか貼り込んで整理した。遺構の実測図・写真・航空測量図は各台帳を作成して整理し，遺構カードとともにパーソナルコンピュータを使用してデータ入力した。挿図にある遺構・遺物のデータは，観察表として掲載した。データ入力は人材派遣会社に委託し，整理作業員が補足した。

遺物の写真撮影は業者委託し，４×５インチ判を基本に，白黒とカラースライドフィルムを使用した。写真図版には密着焼付または引き伸ばしたものを使用した。遺構写真・遺物写真のうち重要なものはプロフォトＣＤ化して保存した。

自然科学的分析は平成９年度から平成12年度にかけて専門機関に委託し，結果報告を掲載した。

木製品・金属製品のうち重要なものは，平成９年度から平成12年度にかけて元興寺文化財研究所に委託して保存処理を行った。

F　整理体制

平成11（1999）年度

総　　括	桃野真晃	埋蔵文化財調査事務所所長
	谷井保男	埋蔵文化財調査事務所副所長
	上野　章	埋蔵文化財調査事務所副所長
庶　　務	宮成真幸	埋蔵文化財調査事務所主任
	江本裕一	埋蔵文化財調査事務所主事
整理総括	狩野　睦	埋蔵文化財調査事務所調査第二課長
担　　当	島田美佐子	埋蔵文化財調査事務所主任
	中川道子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	深堀　茜	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

平成12（2000）年度

総　　括	桃野真晃	埋蔵文化財調査事務所所長
	肥田啓章	埋蔵文化財調査事務所副所長
	上野　章	埋蔵文化財調査事務所副所長
庶　　務	竹中慎一	埋蔵文化財調査事務所総務課課長補佐
	江本裕一	埋蔵文化財調査事務所主事
整理総括	狩野　睦	埋蔵文化財調査事務所調査第二課長
担　　当	島田美佐子	埋蔵文化財調査事務所主任
	中川道子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	深堀　茜	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

（中川道子）

第Ⅱ章　立地と歴史的環境

1　立　　地

富山県は本州のほぼ中央に位置しており，東を北アルプスに，西を両白山地及び西部丘陵に，南を飛騨高地に囲まれ，北は富山湾に面している。飛騨高原山地から北側に接して連なる音川山地，呉羽丘陵は県中央部に突出し，東部の複合扇状地平野（狭義の富山平野）と，西部の砺波平野に二分している。砺波平野北半の大部分は庄川新扇状地を形成し，面積約146㎢で日本の沖積扇状地の中でも最大級の面積を有している。扇状地上には庄川の変遷を示す河道跡が放射状に残っている。これに対して小矢部川流域の平野は，庄川新扇状地の発達に押されて狭い低地となっており，小矢部川は丘陵裾を蛇行して北流する。

小矢部市と福岡町は富山県西部に位置している。小矢部市は三方を丘陵性山地に囲まれ，北と東は福岡町と接している。小矢部市北部の丘陵は稲葉山（347m）を最高点とし，北東に進むにつれ高さを減じて福岡町西部の宝達丘陵に連なり，高岡市へと通じている。西部は石動断層線と天田峠を通る国道８号線とに限られた地域で，極めて侵食されやすい砂山砂岩で構成されており，浸食谷が発達している。南部は医王山の北側を占める蟹谷丘陵地域である。これらの丘陵は石川県との県境となっており，浸食谷の源流部に形成された倶利伽羅峠や砂子坂峠などは，古来より越中と加賀の交通の要所とされてきた。東部には「散居村」地域としても著名な砺波平野が広がっている。

石名田木舟遺跡は小矢部市石名田，福岡町木舟地内にまたがって所在し，小矢部川と岸渡川に挟まれた河岸段丘上に立地している。標高は22～25mを測り，庄川新扇状地の先端部に位置する。遺跡が所在する一帯は，古くから沖積活動によって幾度となく流路を変えた庄川・小矢部川の氾濫による被害を受けてきたことが知られている。標高20～30mの扇端部一帯は湧水地帯としても知られ，また，標高10～15mの末端部では網目状流路をとる大小河川の浸食によって複雑な微地形が発達している。

2　歴史的環境

石名田木舟遺跡の周辺では縄文時代から近世まで各時代の遺跡が認められるが，ここでは時代を追って主な遺跡について紹介していく。

縄文時代には小矢部川右岸では蓑島遺跡（５），下老子笹川遺跡（７），高田新茅道遺跡（17），駒方遺跡（18）などがある。４遺跡とも，標高10～20mの庄川扇状地端部に位置する縄文晩期の遺跡である。下老子笹川遺跡は1995年から４年間にわたって調査が行われ，縄文時代晩期では竪穴住居11棟などが検出されている。小矢部川左岸では上野Ａ遺跡（41），桜町遺跡（52）がある。桜町遺跡は小矢部川と子撫川の合流地点から丘陵地帯の河岸段丘に広がる約60万㎡の大規模な遺跡で，縄文時代から現代に至るまで連綿と営まれた複合遺跡である。縄文時代については，草創期から晩期まで縄文時代全期間の遺物が出土しており，中期末葉では木組みの水場施設が検出され，継手仕口のある建築部材が転用されていた。また晩期では環状木柱列が検出されている。

弥生時代では小矢部川右岸に下老子笹川遺跡，石塚遺跡がある。下老子笹川遺跡では弥生時代後期から終末期にかけての周溝を持つ建物26棟が検出された。当該期の土器のほか，水準器である「水盛り」や農耕具などの木製品，製作工程の復元可能な管玉未製品などが出土している。石塚遺跡は弥生

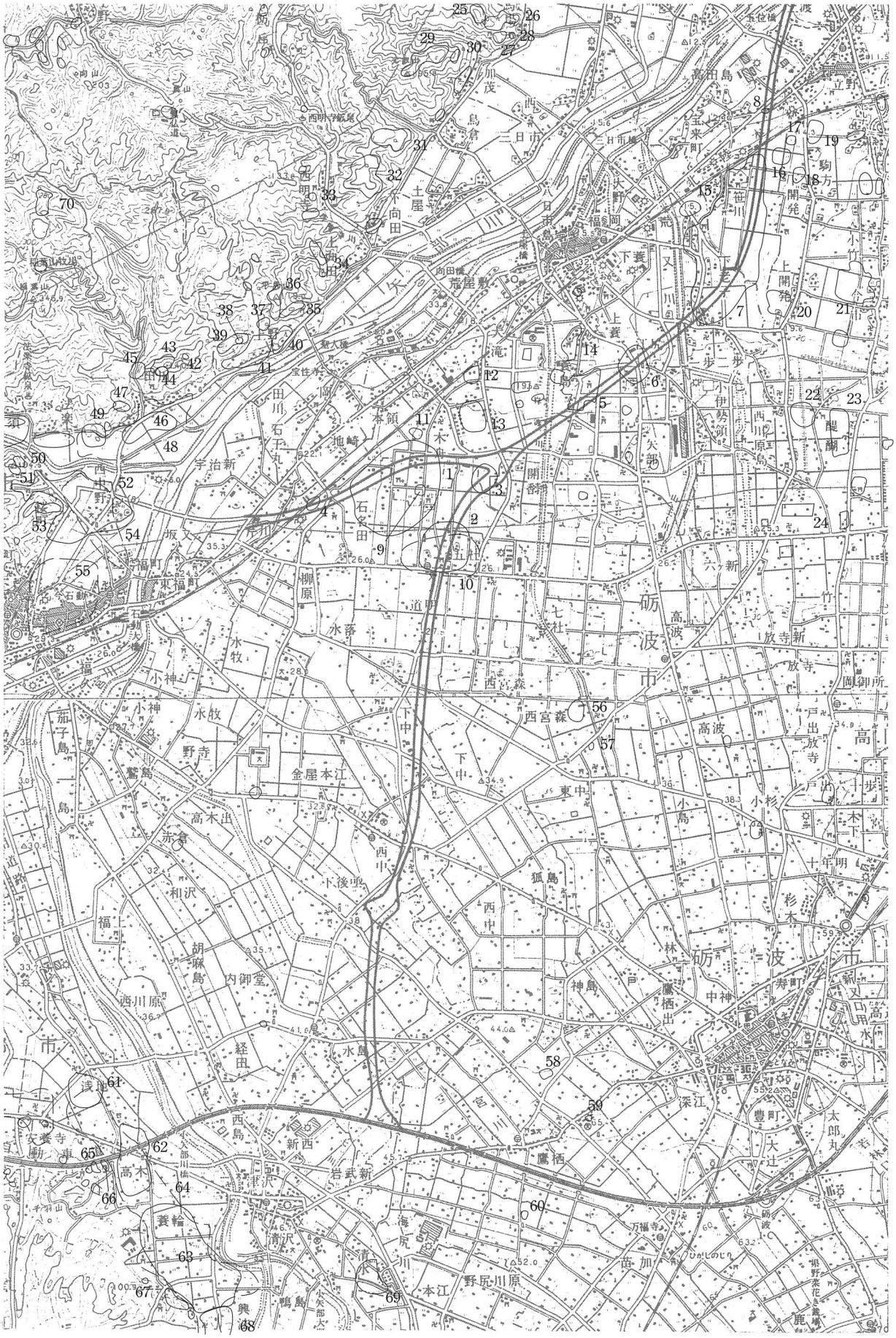
時代中期の拠点的集落として著名である。

古墳時代は小矢部川左岸の丘陵裾沿いの山腹斜面に，馬場古墳群（26），加茂神社古墳群（27），下向田古墳群（32），上野古墳群（37），加茂横穴墓群（30），桜町横穴墓群（50）などの古墳群や横穴墓群がある。集落遺跡には古墳時代中期から近世までの複合遺跡である五社遺跡（４）があり，５世紀中頃のカマドを有する竪穴建物が確認されている。

古代では，桜町遺跡で６世紀末～８世紀前半の40棟を越える建物と，古代北陸道と考えられる遺構が検出され，律令期の中心が桜町周辺にあるものと推定されている。また小矢部市域には五社条里遺跡（10），田川条里遺跡（48），桜町条里遺跡（54），石動条里遺跡（55），蓑輪条里遺跡（64）などの条里型地割が多く残っており，小矢部川左岸にまとまって分布している。五社遺跡では条里地割を示す溝が検出され，地割方向が時期によって変化することが確認された。古代から中世にかけての砺波平野では，荘園が増大していき，小矢部市域では埴生庄・松永庄・糸岡庄など多くの荘園が成立していった。五社遺跡では12世紀後半から15世紀にかけて，７群に区分できる掘立柱建物群が確認され，後白河天皇の皇女室町院の御領「糸岡庄」の所在の中心地と考えられている。

中世では倶利伽羅峠が合戦の舞台となるなど，交通・軍事の重要な拠点となった。平野を望む丘陵部には鴨城（29）や田川城（43），今石動城，蓮沼城などの城館が築かれている。一方，平野部では開辟大滝遺跡（３）の南西約870mに木舟城跡（９）がある。木舟城は寿永三（1184）年に石黒氏が築城したものといわれ，砺波地方の北部地域を支配する中心的な勢力となった。戦国時代末期には上杉氏，佐々氏，前田氏の居城となり，天正十三（1585）年の白山大地震によって崩壊したと伝えられている。木舟城の城下である開辟大滝遺跡では16世紀後半の町屋群が確認され，２本の道路跡と短冊型地割に整然と並ぶ建物や炉関連遺構などが検出されている。また，鍛冶・鋳物関連の遺物が出土しており，鋳物師や鍛冶師などの職人集団が住む城下集落と考えられている。『貴船城古今誌』に掲載されている位置図と比較すると，鉄砲町・鍛冶屋町付近に相当する。木舟城の崩壊後は城主前田氏が今石動城に遷ったため，城下の町人も石動や高岡などに移住し，農村地帯となっていった。

近世以降には砺波平野一帯は加賀藩の支配下に入り，灌漑用水の充実などの開拓政策によって開発が進み，米の生産量は加賀百万石を支える要因ともなった。小矢部川左岸の石動には町奉行が置かれ，北陸道の宿場町としても，年貢米の集散地としても重要な町となっていった。これに対し，小矢部川右岸の平野部では地崎遺跡（４）や江尻遺跡（６）などで屋敷跡が確認されているが，農村の域を出ることはなかった。現在では豊かな水田地帯となっている。　（深堀　茜）


高田島
三日市
土屋
下向田
荒屋敷
上蓑
下蓑
小伊勢領
西川原
矢部
開発
上開発
宇治新
石名田
柳原
道明
水落
七社
砺波市
高波
放寺新
放寺
西宮森
下中
東中
小神
水牧
野寺
金屋本江
高木出
赤倉
和沢
下後亟
狐島
西中
胡麻島
内御堂
西川原
経田
水島
神島
鷹栖出
中神
寿町
杉木
十年明
戸出
小杉
高
岩武新
新西
鷹栖
深江
豊町
大辻
太郎丸
清沢
海尻川
本江
野尻川原
鴨島
興
万福寺
苗加
鹿

第 3 図　周辺遺跡位置図

番号	遺跡名	所在地	種類	時代	文献
1	石名田木舟遺跡	小矢部市石名田・五社 福岡町木舟	散布地	弥生・奈良・古代・中世	13,15,16,17,19,25,30,37
2	五社遺跡	小矢部市五社字村中	集落・荘園	古墳・古代・中世・近世	14,16,17,22,37
3	開薛大滝遺跡	福岡町開薛 小矢部市五社	集落	中世・近世	15,16,24,37
4	地崎遺跡	小矢部市地崎	集落・荘園	江戸	15,16,24,37
5	蓑島遺跡	福岡町蓑島	集落・散布地	縄文・弥生・古墳・中世・近世	15,19
6	江尻遺跡	福岡町江尻	集落	縄文・弥生・古墳・中世・近世	15,19
7	下老子笹川遺跡	福岡町下老子 高岡市笹川	集落	縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世	15,18,19,20,21,23
8	近世北陸道遺跡	高岡市笹川	道(街道)	近世	23
9	木舟城跡	福岡町木舟字西堀	城館	中世・近世	31
10	五社条里遺跡	小矢部市五社	条里	古代・中世	
11	木舟北遺跡	福岡町木舟	散布地	古代・中世	27
12	大滝遺跡	福岡町大滝・蓑島	散布地	古墳・古代・中世・近世	
13	大滝芋田遺跡	福岡町大滝	散布地	古代・中世・近世	
14	上蓑中田遺跡	福岡町上蓑・蓑島	散布地	古代・中世・近世	
15	下老子北遺跡	福岡町下老子	集落	中世・近世	
16	高田新西後遺跡	高岡市高田新字西後	散布地	縄文(晩)・古代・中世	29
17	高田新茅道遺跡	高岡市高田新字茅道	散布地	縄文(晩)	29
18	駒方遺跡	高岡市駒方	散布地	縄文(晩)・古代・中世	29
19	立野地頭田遺跡	高岡市立野字地頭田	散布地	縄文(晩)・古代	
20	上開発遺跡	高岡市上開発	散布地	古代・中世	
21	今市遺跡	高岡市今市	散布地	弥生・古墳・古代・中世・近世	
22	油屋寺田遺跡	高岡市戸出字油屋	散布地	古墳・古代	
23	戸出後生寺遺跡	高岡市醍醐	散布地	古代・中世・近世	33
24	戸出横越北遺跡	高岡市横越	散布地	古代・中世・近世	33
25	馬場城跡	福岡町馬場	城館(山城)	中世	
26	馬場古墳群	福岡町馬場	古墳	古墳	31
27	加茂神社古墳群	福岡町馬場	古墳	古墳	
28	馬場東城跡	福岡町馬場	城館(山城)	中世	
29	鴨城跡	福岡町加茂・島倉	城館(山城)	中世	31
30	加茂横穴墓群	福岡町加茂字大松平	古墳(横穴)	古墳	31
31	土屋古墳群	福岡町土屋	古墳	古墳	
32	下向田古墳群	福岡町下向田	古墳	古墳	32
33	西明寺遺跡	福岡町里口	社寺(寺院？)	中世	31
34	上向田古墳群	福岡町上向田	古墳	古墳	
35	上五位神社古墳群	福岡町上向田・上野	古墳	古墳	
36	平尻山古墳群	福岡町上向田・上野	古墳	古墳	
37	上野古墳群	福岡町上向田・上野	古墳	古墳	11,31
38	上向田経塚	福岡町上向田	経塚	中世	31
39	上向田上野古墳群	福岡町上向田	古墳	古墳	
40	上野B遺跡	福岡町上野	散布地	縄文(前・中)	
41	上野A遺跡	福岡町上野字岡山	集落	縄文(前・中)・古墳	12
42	オオノントウ古墳	小矢部市田川	古墳	古墳	
43	田川城跡	小矢部市田川	城館(山城)	中世	
44	田川城ヶ峰横穴墓群	小矢部市田川	古墳(横穴)	古墳	
45	田川白土山横穴墓群	小矢部市田川	古墳(横穴)	古墳	
46	田川遺跡	小矢部市田川	散布地	古代・中世	
47	田川三角山横穴墓群	小矢部市田川字三角山	古墳(横穴)	古墳	
48	田川条里遺跡	小矢部市田川	条里	古代・中世	
49	田川三角山西遺跡	小矢部市田川字三角山	散布地	縄文・古代	
50	桜町横穴墓群	小矢部市桜町字深沢	古墳(横穴)	古墳	11
51	桜町西古墳	小矢部市桜町	古墳	古墳	
52	桜町遺跡	小矢部市桜町字狐谷・産田・中出・舟岡, 西中野字小三昧前・坂東	集落・荘園	旧石器・縄文・弥生・古墳・古代・中世	1,2,3,4,5,6,8,10,26,28,34,35,36
53	天狗山古墳群	小矢部市桜町字地山	古墳	古墳	7
54	桜町条里遺跡	小矢部市桜町・西福町	条里	古代・中世	
55	石動条里遺跡	小矢部市小矢部町・畠中町	条里	古代・中世	
56	御館山館跡	砺波市東宮森・西宮森・東中	城館	中世	
57	東中遺跡	砺波市東中	城館？	中世	
58	小倉の土居跡	砺波市鷹栖	城館？	中世	
59	鷹栖四谷遺跡	砺波市鷹栖	墓	中世(室町)	
60	小倉殿館跡	砺波市鷹栖	城館	中世	
61	浅地遺跡	小矢部市浅地	散布地	古代・中世	9
62	高木遺跡	小矢部市高木字野田島	散布地	縄文・古代・中世	9
63	蓑輪遺跡	小矢部市蓑輪	散布地	縄文・古墳・古代・中世・近世	9
64	蓑輪条里遺跡	小矢部市安養寺・高木・蓑輪・興法寺	条里	古代・中世	
65	ズンデ山遺跡	小矢部市浅地字ズンデ山	古墳	古墳	9
66	浅地神明社遺跡	小矢部市安養寺	散布地	弥生(終末)・古墳	9
67	興法寺古墓	小矢部市興法寺	墓？	古代(白鳳？)	9,11
68	興法寺遺跡	小矢部市興法寺字山辺島・内之島	散布地	縄文(後・晩)・古代・中世	
69	清水遺跡	小矢部市清水	散布地	古墳・古代・近世	
70	稲葉山砦跡	小矢部市田川	城館(山城)	中世	

第3表　遺跡地名一覧

文　献

1　安念幹倫・高木場万里　1985　『富山県小矢部市　桜町遺跡　産田地区発掘調査概報』小矢部市教育委員会
2　伊藤隆三　1980　『富山県小矢部市　桜町遺跡発掘調査概報』小矢部市教育委員会
3　伊藤隆三・安念幹倫　1982　『富山県小矢部市　桜町遺跡（古苗代・鷲場地区）』小矢部市教育委員会
4　伊藤隆三・高木場万里　1984　『富山県小矢部市　桜町遺跡　城山都市下水路新設工事に伴う産田地区の調査』小矢部市教育委員会
5　伊藤隆三　1994　『平成５年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報』小矢部市教育委員会
6　小矢部市埋蔵文化財分布調査団　1980　『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報』小矢部市教育委員会
7　小矢部市埋蔵文化財分布調査団　1981　『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報Ⅱ』小矢部市教育委員会
8　小矢部市埋蔵文化財分布調査団　1982　『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報Ⅲ』小矢部市教育委員会
9　小矢部市埋蔵文化財分布調査団　1983　『小矢部市埋蔵文化財分布調査概報Ⅳ』小矢部市教育委員会
10　小矢部市教育委員会　1983　『富山県小矢部市　桜町遺跡（坂東地区）』
11　小矢部市　1971　『小矢部市史』（上巻）
12　久々忠義　1992　『富山県福岡町　上野A遺跡発掘調査概要』福岡町教育委員会
13　栗山雅夫・越前慶祐　1997　『富山県福岡町石名田木舟遺跡発掘調査報告書－県指定史跡　木舟城跡隣接地における発掘調査－』福岡町教育委員会
14　財団法人富山県文化振興財団　1993　『埋蔵文化財年報』（4）
15　財団法人富山県文化振興財団　1993　『能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告－小矢部市～福岡町間－』
16　財団法人富山県文化振興財団　1994　『埋蔵文化財年報』（5）
17　財団法人富山県文化振興財団　1995　『埋蔵文化財年報』（6）
18　財団法人富山県文化振興財団　1995　『能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告－NEJ-08遺跡－』
19　財団法人富山県文化振興財団　1996　『埋蔵文化財調査概要－平成７年度－』
20　財団法人富山県文化振興財団　1997　『埋蔵文化財調査概要－平成８年度－』
21　財団法人富山県文化振興財団　1998　『埋蔵文化財調査概要－平成９年度－』
22　財団法人富山県文化振興財団　1998　『五社遺跡発掘調査報告　富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第９集』
23　財団法人富山県文化振興財団　1999　『埋蔵文化財調査概要－平成10年度－』
24　財団法人富山県文化振興財団　2000　『開薛大滝遺跡・地崎遺跡発掘調査報告　富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第11集』
25　斉藤隆・橋本正春　1995　『富山県福岡町石名田木舟遺跡発掘調査報告書』福岡町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター
26　桜町遺跡発掘調査団編　2001　『桜町遺跡　調査概報』
27　神保孝造　1997　『民間分譲住宅地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査概要　木舟北遺跡』福岡町教育委員会
28　高木場万里　1987　『富山県小矢部市　桜町遺跡（個人住宅の建築に伴う中出地区の調査）』小矢部市教育委員会
29　富山県立高岡工芸高校地理歴史クラブ・OB会　『富山県高岡市高田新・駒方遺跡調査報告書』
30　橋本正春　1996　『富山県福岡町石名田木舟遺跡第３次発掘調査報告書』福岡町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター
31　福岡町　1969　『福岡町史』
32　宮田進一　1985　『富山県福岡町下向田古墳群試掘調査概報』福岡町教育委員会
33　山口辰一　1997　『高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅷ　－平成８年度　戸出地区西部の遺跡分布調査－』高岡市教育委員会
34　山森伸正・林浩明　1987　『富山県小矢部市　桜町遺跡（県道改良工事に伴う雀谷地区の調査）』小矢部市教育委員会
35　山森伸正・岡本淳一郎　1989　『富山県小矢部市　桜町遺跡（県道改良工事に伴う深沢地区の調査）』小矢部市教育委員会
36　山森伸正・島田修一　1990　『富山県小矢部市　桜町遺跡（船岡地区の重要遺跡確認緊急調査）』小矢部市教育委員会
37　山森伸正・塚田一成　1991　『富山県小矢部市能越自動車道関係遺跡群試掘調査報告』小矢部市教育委員会

第Ⅲ章　調査の概要

1　遺跡の概要

A　概　　要

石名田木舟遺跡では３カ年の発掘調査において，古墳時代後期から近世の遺構を検出している。この間，発掘調査範囲内では連綿として集落が営まれていたわけではなく，主に古墳時代後期後半，古代（７世紀後半～９世紀），中世（主に16世紀代），近世（17世紀）において集落が営まれた痕跡が認められている。また，これらの各時代の遺構の形成は範囲内全面に見られるわけではなく，時期によってその中心は移り変わっていっている。以下，石名田木舟遺跡の各時代の様相と変遷を概観したい。

古墳時代　遺跡の中央よりやや西寄り（Ｆ１・Ｆ２・Ｆ３地区）で古墳の周溝と推定される弧を描く溝を６条検出した。平面形から古墳の周溝と予想されたが，墳丘の痕跡，主体部等の施設は何ら検出されず，溝の覆土からも遺物は検出できなかった。自然流路に沿うように東西に一列に並ぶ立地から，この流路の存続時期と同時期に形成されたと推定している。自然流路の下層から出土した遺物の時期から推定して６世紀の古墳の周溝と考えている。

古代　古代の遺構は遺跡の中央から西側（Ｂ２地区以西）で検出することができた。検出した遺構は竪穴建物７棟・掘立柱建物68棟・柵４条・溝・畠・土坑である。竪穴建物は７世紀後半の４棟と８世紀の３棟に分かれ，７世紀後半の竪穴建物は遺跡中央部と西端で検出している。中央部で検出した２棟は他に比べカマドの遺存状況も良く，周辺から製塩土器の破片が出土している。８世紀の竪穴建物はＥ１地区で検出したものだが，一部カマドと推定される痕跡が認められたのみで，平面形のみの検出に止まっている。掘立柱建物の大多数は遺跡中央部のＣ・Ｄ地区において検出されており，８・９世紀においてこれらの地区一帯が集落の中心だったことが窺われる。特にＤ地区では建物の切り合いが多く，数時期の遺構の変遷が認められている。これらの建物はほとんどが側柱建物であるが，倉庫と推定される２間×２間の総柱建物が３棟見つかっており，大量に出土した土錘との関連も予測される。Ｃ・Ｄ地区周辺の地区では建物の検出は散発的となり切り合い関係もほとんど見られないが，Ｆ２地区では溝に囲まれた楕円形の大型楕円柱穴の建物が見つかっている。

中世　中世の遺構は建物形態から中世前半と推定する建物と中世後半の遺構を検出している。中世前半の遺構はＣ地区において総柱建物が３棟とそれにともなう土坑が検出されたのみで，検出された中世の遺構の時期のほとんどが中世後半である。中世後半の遺構は15世紀末から16世紀代を主体としており，15世紀末から16世紀前半と16世紀後半に大きく分かれ，遺構の分布域も異にしている。15世紀末から16世紀前半は遺跡西側のＦ３地区がその中心となり，その範囲はＦ２地区南端から遺跡西端のＨ地区までである。Ｆ３地区を中心に敷地を大規模な区画溝によって区切り，内部に土台建物・掘立柱建物などが構築される。区画溝は何度かの改変の手が加えられており，その中の溝の一つからは「長享二年」（1488年）銘の木簡が出土している。また，同じ印花文をもつ風炉や火鉢など遺構の性格を示唆する遺物も出土している。区画溝の外側にあたるＧ・Ｈ地区では多数の石組井戸を検出しており，石組の遺存状況によって時期差が窺える。16世紀後半になると中世後半を特色とする遺物の出土が少ないことから，一帯は集落としては衰退していったことが窺える。

16世紀後半になると遺跡の中心は東側のＢ２地区に移る。この一帯は木舟城の城下町と考えられ，道路や溝によって区切られた町屋的な様相を示している。建物の種類には礎石建物・土台建物・掘立柱建物があり，区画溝からは当時の食生活を推測させる種子や炭化米などが出土している。また遺物の種類や量においてもＦ３地区に比べ，輸入陶磁器の中国製白磁や青花，ベトナム陶器の出土量が増加し，物資の流通が盛んな町であったことが窺われる。炭化物層の存在から２度の火災にあったと推定されるが，町は再建され，３面の文化層が検出されている。Ｂ２地区の周辺のＡＷ・Ｂ１・Ｃ地区からも16世紀代の遺構を検出しているが，Ｂ２地区の町屋的な様相とはやや異なり，大きな「Ｌ」字形の区画溝によって敷地が区切られ，その中に建物が築かれている。Ｃ地区では区画溝から「大永二年」（1522年）・「天正十一年」（1583年）の銘をもつ鰐口が出土しており，周囲に神社または御堂のような宗教的施設の存在が窺われる。しかし，繁栄を誇っていた城下町も地震による木舟城の埋没によって16世紀末には衰退していったようである。

近世　遺跡東側に散発的に検出される。Ｃ地区において，17世紀前半の建物３棟・井戸・土坑がややまとまって検出されたにとどまっている。

Ｂ　土　　層

基本層序　基本層序と言っても総延長約１㎞に及ぶ石名田木舟遺跡は東西に細長く延びており，東端のＡＮ地区から西端のＨ地区までを一括りにして述べるのは不可能である。基本的には大きく分けて近世・中世・古代の３つの遺構面を検出したわけではあるが，ここでは東側のＡＮ地区から順に西に向かって土層の変化を辿ることにする。

路線から北に離れているＡＮ地区と東端のＡＥ・ＡＷ・Ｂ１地区はⅠ層：耕作土，Ⅱ層：盛土（ほ場整備整地土），Ⅲ層：暗灰黄色シルトまたは黄褐色砂礫層となっており，遺物包含層の遺存は認められない。ＡＷ地区ではⅠ層の耕作土直下が砂礫層となっており，ほ場整備の削平が著しかった様子が窺える。Ｂ１地区もⅠ層下に砂礫の混じる黒褐色シルトが堆積していたが，須恵器や土師器が混じる中にビール瓶までが混じることから，木舟公民館造成時または耕地整理時の盛土に起因する土と推定されている。このように遺跡の東側の地区は遺物包含層がほとんど残っておらず，無遺物層の砂礫層まで削平されている様子から，遺構が形成された当時の生活面も大きく改変されている可能性が高い。逆にＢ２地区から西においては中世以前の遺物包含層が比較的よく残っており，削平の影響は少ないと見受けられた。

Ｂ２地区では，Ⅰ層：耕作土，Ⅱ層：盛土，Ⅲａ層：遺物包含層，Ⅲｂ層：炭化物層，Ⅲｃ層：整地盛土，Ⅲｄ層：炭化物層，Ⅲｅ層：整地盛土，Ⅲｆ層：暗褐色粘質シルト，Ⅲｇ層：古代遺構検出面，Ⅳ層：地山砂礫層と分けられる。Ⅲ層のうち，Ⅲｃ層，Ⅲｅ層，Ⅲｆ層の３面の上面で遺構面を検出した。炭化物層が大きな目安となり，火災か何らかの原因で当時の木舟城に伴う町屋が２度の焼失に遭いその都度整地盛土され，町屋が再建されたと推定される。15世紀末から16世紀後半までの約100年間の間のことである。しかしながら，このように中世面が３時期に分けて検出できたのはこのＢ２地区だけである。隣接するＢ３地区は後世の土砂掘削により遺構はすべて削平されており，Ｃ地区への連続性はない。

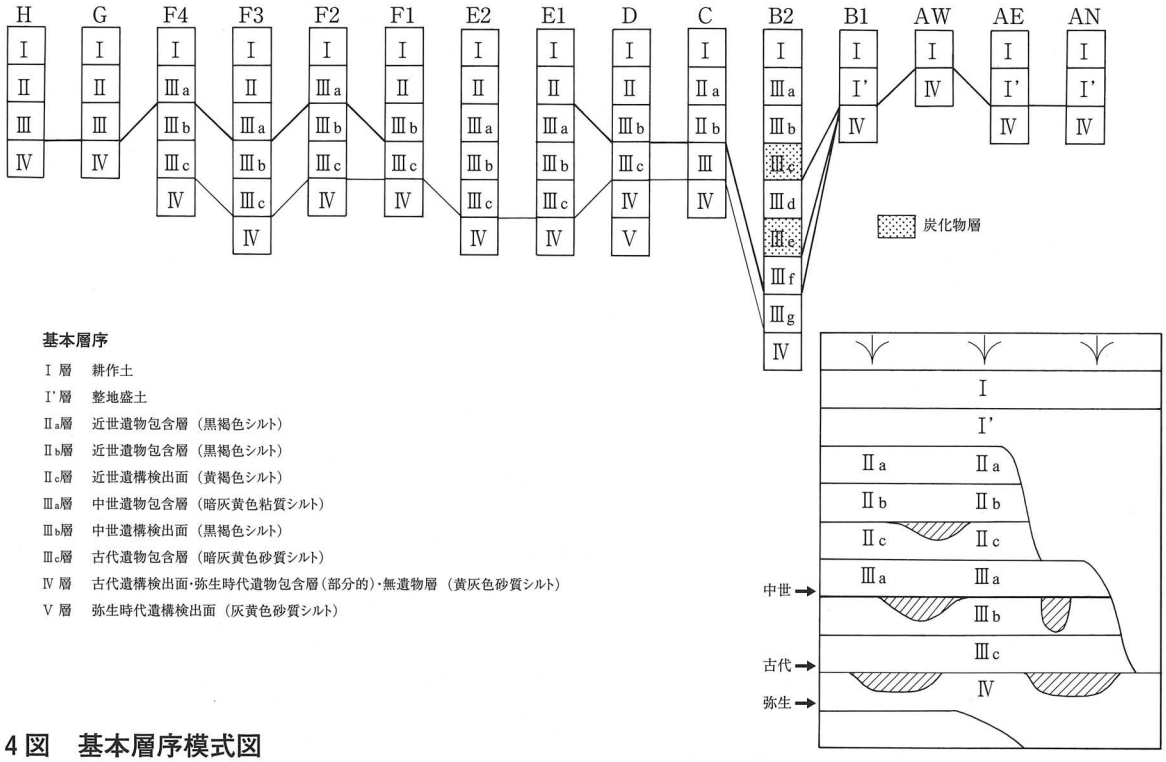
Ｃ地区は中央やや西よりに幅約20ｍの谷が南北に確認され，この谷の東西で土層に違いが見られる。この谷は下層で古墳時代の土師器が出土しているが，上層では珠洲が出土しており，長い年月をかけてゆっくり埋まっていたものと推察される。基本層序はⅠ層：耕作土，Ⅱａ層：黒褐色シルト，Ⅱｂ層：黒褐色シルト，Ⅲ層：黒褐色シルト，Ⅳ層：暗灰黄色砂質シルト，Ⅴ層：オリーブ褐色砂礫であ

るが，谷の東側はⅡｂ層が削平されてしまい残ってはいない。谷の西側ではⅢ層上面で近世の遺構を，Ⅳ層上面で古代の遺構を検出している。しかし，谷の東側では古代から近世までの遺構を同一面（Ⅳ層上面）で検出している。

平成６年度に調査したＤ地区からＦ４地区までは層序をほぼ統一することができた。Ⅰ層：耕作土，Ⅱａ層：黒褐色シルト，Ⅱｂ層：黒褐色シルト，Ⅱｃ層：黄褐色シルト（近世遺構検出面），Ⅲａ層：黒褐色シルト，Ⅲｂ層：黒褐色シルト（中世遺構検出面），Ⅲｃ層：暗灰黄色砂質シルト，Ⅳ層：黄灰色砂質シルト（古代・古墳時代遺構検出面），Ⅴ層：黄褐色砂質シルト（弥生時代包含層）である。このうち近世面で遺構を検出したのはＥ１地区の一部だけで，性格がよくわからない穴や溝を検出しており，これらは近代に遡る可能性もある。中世の遺構はＤ・Ｆ１～Ｆ４地区において検出しているが，遺構検出面のⅢｂ層の土色が黒色土であったために検出が難しく，Ⅲｃ層上面まで下げて検出している地区が多い。古墳時代にはＥ１・Ｅ２・Ｆ１～Ｆ３地区にまたがって自然流路が流れていたが，その流路が埋まった後に古代の遺構が形成されている。弥生時代の包含層であるⅤ層は，Ｄ地区南西部の部分的に見られる層位で，遺物が散発的に出土したにすぎないが，周囲に弥生時代の遺構の存在を予測させるものである。

遺跡西端のＧ・Ｈ地区は，Ⅰ層の耕作土直下のⅡ層がほ場整備の整地土と推定される礫混じりの黒褐色砂質シルトで，この下の遺構検出面はオリーブ褐色砂礫層となっている。両地区の西側は谷となって１段下がっており，谷の上層には近世の水田に関連すると考えられる鉄分を多く含んだ土が堆積し，その下で新しい谷と砂礫層上面で検出したＦ３・Ｆ４地区と同時期の遺構を検出している。古い方の谷からは須恵器などが出土しており，古代から谷地形であったことが推定される。概して，遺跡の西側の中世の遺構検出面が砂礫層となっている範囲では，旧地形が現在より高く，上面が削平を受けているものと考えられ，その範囲はＦ３・Ｆ４地区の西側，Ｇ・Ｈ地区の東側で帯状にのびている。また，この範囲では古代の遺構は検出されず，その東側のⅣ層上面では検出されている。

（島田美佐子）



第４図　基本層序模式図

第Ⅳ章　遺構・遺物

1　古墳時代以前

古代の遺構検出面と同じ面で古墳の周溝と推測される環状の溝がＦ１地区で１基，Ｆ２地区で２基，Ｆ３地区で３基見つかっている。墳丘盛土は土層観察においては確認できず，削平によって消失したものと考えられる。主体部と思われる施設もＦ１地区の１基に見られただけで，他の遺構では確認できなかった。なお，当財団の平成６年度の『埋蔵文化財年報（６）』ではＦ２地区で古墳の周溝を３基検出したと報告しているが，そのうちのＳＤ6903については出土した遺物を検討した結果，９世紀の土師器椀が出土していたことが判明し，溝も部分検出であったことから，当報告書ではこの溝を古代の溝として扱っている。これらの他にＥ１・Ｅ２・Ｆ１・Ｆ２・Ｆ３地区にまたがる当期に流れていたとみなされる自然流路を１条検出したが，この自然流路に沿うように古墳群が形成されてることから，この流路の下層の時期と古墳の時期とはほぼ同じくらいと推定される。また，この流路が埋まった後の平坦面にはＦ２・Ｆ３地区において古代の遺構が形成されている。

遺物は古墳の周溝からは細片しか出土しておらず，詳細な時期が特定できるものは出土していない。自然流路からは下層から６世紀の遺物が出土しているが，埋没の最終段階で古代の遺物が出土していることから，内容は古代の章で記述している。また，古代の包含層には６世紀の古墳時代の遺物が混入しており，本来はこの時代の項ですべて記述すべきであるが，古代の項目の包含層出土の遺物でまとめて記述しているものもあり，時代毎のまとめについては考察において記述する。この他にも古墳時代以前の遺物として包含層から打製石斧が，Ｄ地区の古代面の下層から弥生時代後期後半の土器が１点出土している。なお，古墳の略号については，周溝のみであるためＳＤを使用している。

Ａ　古　　墳

１号古墳（ＳＤ6270，第５図，図版３）

Ｆ１地区の自然流路の左岸で幅約1.5mの環状に巡る古墳の周溝と推測される溝を検出した。溝の断面形は「Ｖ」字形で周溝の直径は約11m，平面形は北東南西方向にやや長い不整円形である。南西側は７世紀前半の遺物が出土したＳＤ6258に切られる。溝は主に，灰色砂質シルト・炭化物が混じるオリーブ黒色砂質シルト・黄灰色砂質シルト・黒褐色砂質シルトの順に埋まっていった模様で，その中からは時期が特定できない内外面ハケメの破片が２点出土している。周溝内側のほぼ中央では長径2.1m，短径0.5mの隅円長方形の浅い土坑（ＳＫ6299）を検出した。この土坑の主軸はＮ－60°－Ｗを指し，埋土は暗灰黄色砂質シルトで，深さは約10cmと浅い。遺物は出土していないが，位置的に主体部の痕跡ではないかと推定される。古墳の時期は，時期を決定づける遺物の出土が無いためＳＤ6258との切り合い関係から７世紀前半以前と推定される。

２号古墳（ＳＤ6901，第６図）

１号古墳の南約20m，Ｆ２地区でも古墳の周溝と推定される環状の溝を検出した。溝の幅は60cm～140cm，深さは10cm～20cmと浅い。周溝の直径は約11.5m，平面形は北西南東方向にやや長い不整円形である。埋土は暗灰黄色粘質シルトを主体にする層で，わずかに炭化物が混じる。その他の古墳に伴う施設を確認するために古墳中央を横切るようにサブトレンチを入れて下層の確認を行ったが，中央より西側は上層より撹乱を受けており断面観察においても主体部の存在は確認できなかった。遺物の

出土は無いが，同様の規格の溝が群をなしていることから，古墳の周溝としてほぼ同時期の群の一画を担っていたものと考える。

3号古墳（ＳＤ6902，第７図）

２号古墳の南西約0.5mに近接して検出した古墳の周溝と推定される溝である。溝の幅約1.3m，断面形は「Ｖ」字形で，深さは10cm～40cmで，特に北側が浅くなっている。埋土は炭化物が混じる暗灰黄色粘質シルトが主体で，中から時期が特定できない内外面ハケメの土師器の破片が出土している。周溝の直径は約14.5mと１号古墳・２号古墳に比べ大きめで，平面形は南北方向にやや長い不整円形である。周溝内部は精査を試みたが何ら施設は検出できなかった。この古墳も遺物からはその時期を特定できないが，その他の古墳と同様の時期で，自然流路が流れていた６世紀頃と推測している。

（島田美佐子）

４号古墳（ＳＤ9024，第８図，図版39）

周溝の一部を確認したもの。円形に巡るとみられ，群集墳の中では最大となる可能性が高いが，ＳＤ7030等の中世の溝により全容は不明である。周溝の幅は最大3.4m，深さ26cmを測り，底部は水平である。埋土は上層が炭化物が混じる暗黄灰色砂質シルトで，下層は礫が多く混じる黄灰色砂質シルト等が堆積する。出土遺物には土師器，須恵器（１）があるが，遺物は極上層からの出土であり，古墳とは時期を異にする可能性が高い。１は須恵器杯Ｇ。口径10.1cm，器高３cmを測る。７世紀第４四半期のもの。

５号古墳（ＳＤ9032，第９図，図版４）

４号古墳から南2.5mで,円形に巡る周溝を確認した。墳丘は削平されているうえ，中世の遺構により撹乱を受けているため，主体部は確認できなかった。直径は周溝内側で約９m，周溝最大幅1.4mを測る円墳である。周溝の深さは北側が最も深く18cmで，溝は逆台形を呈している。東側が最も幅広くなり，南側ではまだ逆台形を保っているが，西側に向かって浅くなり消滅する。埋土は暗灰黄色砂質シルトで，南側は礫が混じる黄褐色砂質土である。遺物は出土していない。周溝内部にあるＳＤ9043・ＳＤ9044は深さは６cm～８cmと浅いもので，繋がって方形に巡る可能性があるが，古墳に付属したものではないと考える。

６号古墳（ＳＤ9009，第10図，図版４）

５号古墳の西約４mに位置し，円形に巡る周溝のみを確認した。墳丘は削平され，西半部分がＳＤ7003に削られているが，直径は周溝内側で約９m，周溝の最大幅1.8mを測る円墳である。周溝の深さは20cmで，底部はほぼ水平であり，埋土は暗黄灰色砂質シルトが主体である。遺物の出土はなく，主体部も確認できなかった。当遺跡で確認した群集墳の中では最南端に位置する。

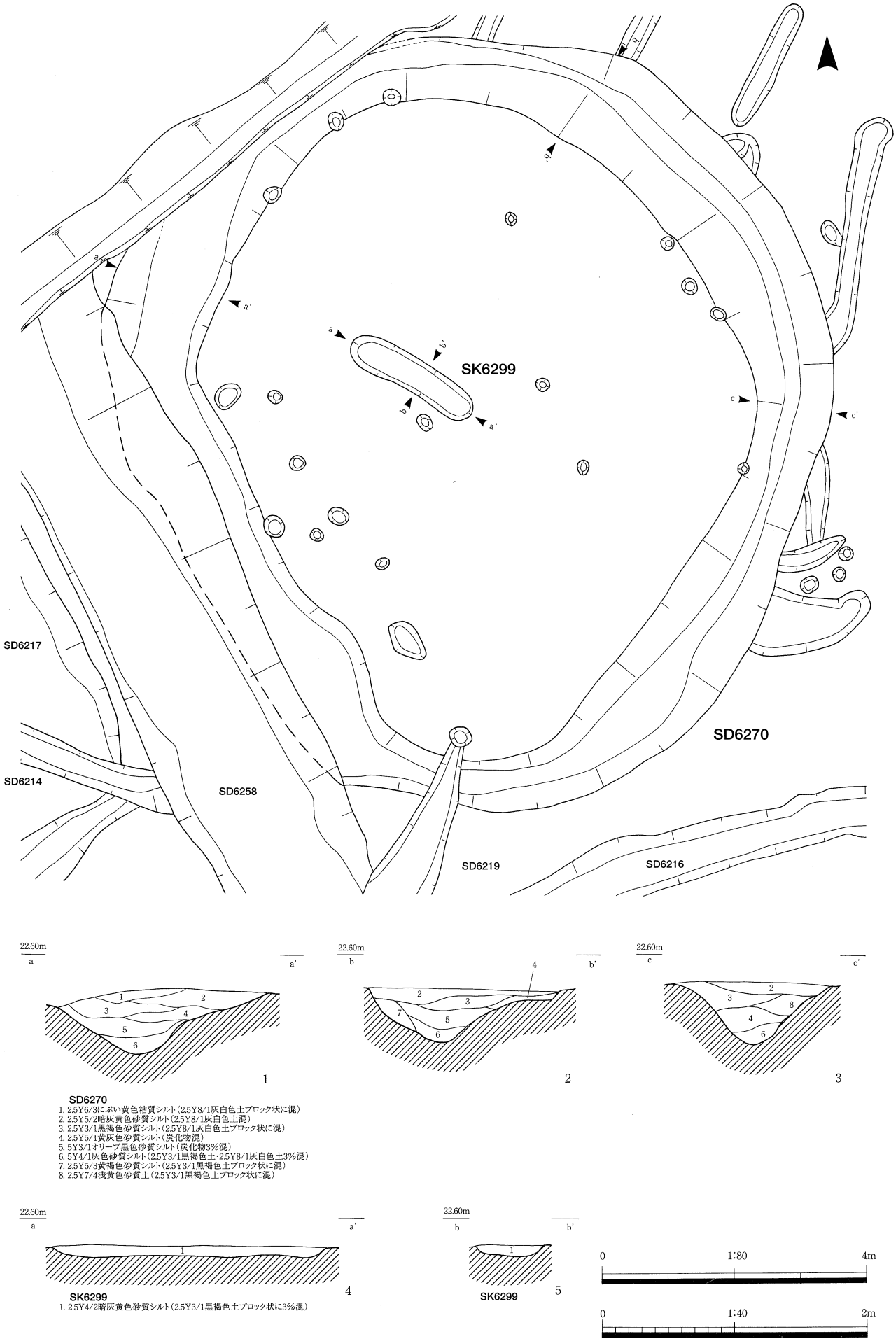
Ｂ　包含層出土遺物（第11図，図版39）

古墳時代の遺物にはＦ３地区の包含層出土の須恵器（２・３）がある。

２は須恵器杯Ｈ蓋。口径11.9cmを測り，口縁内端部は内傾して稜をもつ。外面は頂部と口縁部の境にわずかな稜をもつ。３は須恵器甕。口径約18cm，器高約22cmを測る大型なもので，口頸部に波長が短い櫛描波状文を巡らす。体部は上下２条の沈線が巡り，下の沈線より下部は手持ち削りしている。６世紀代のもの。

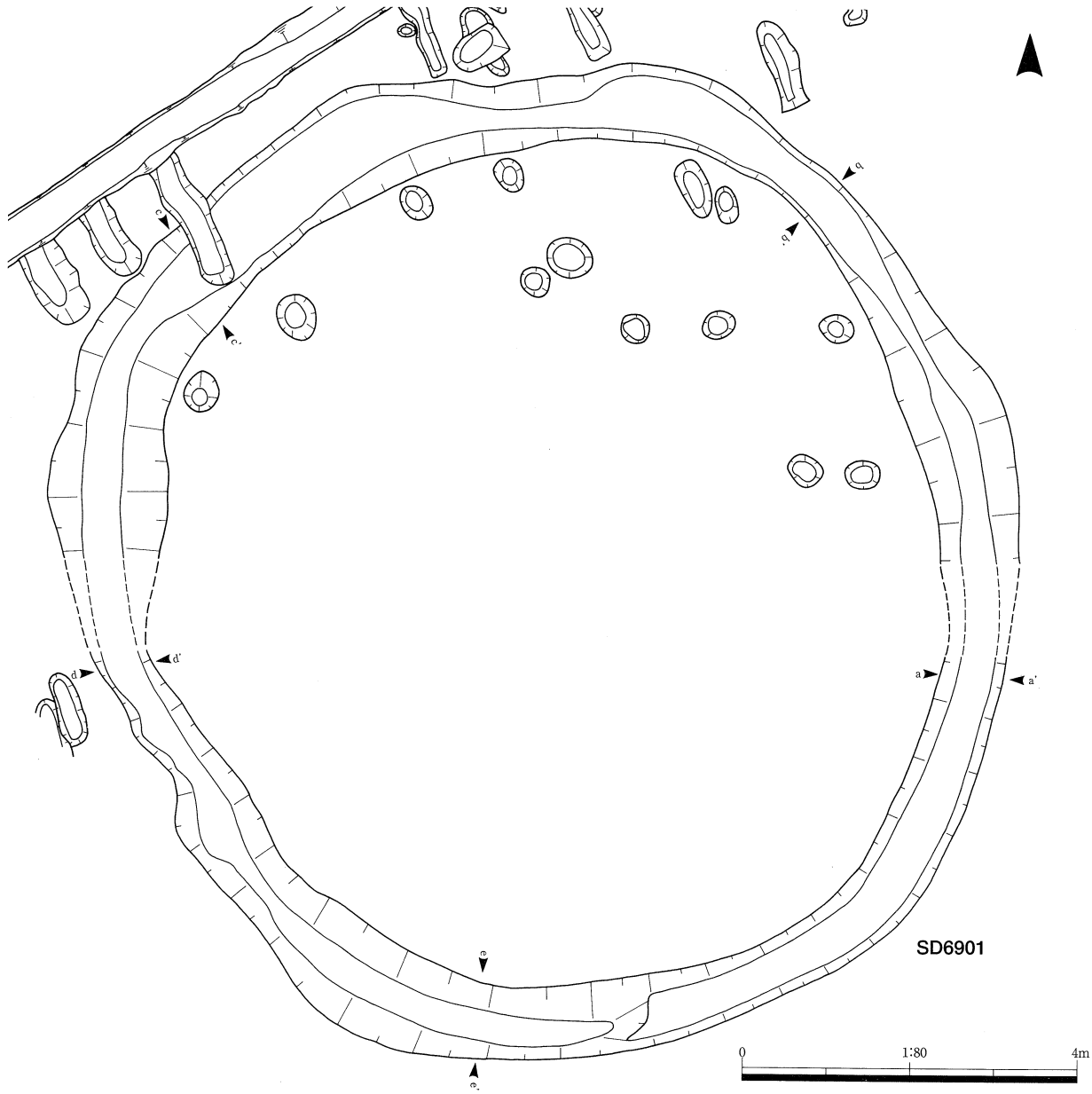
下層確認トレンチ（第12図，図版39）

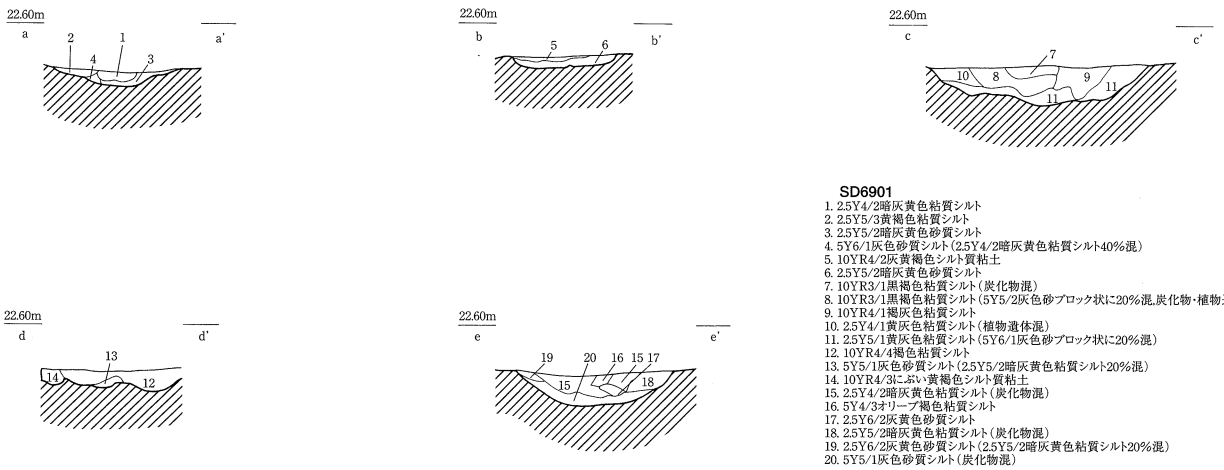
古代面の調査中に，より下層から遺物が出土したため，下層確認の試掘調査を行った。試掘トレンチはＸ170～175以南に５箇所設定した。遺構は確認されず，遺物が出土したのは１箇所のみで，層位



第5図　遺構実測図

1.2.3　1号古墳（SD6270）　4.5　SK6299

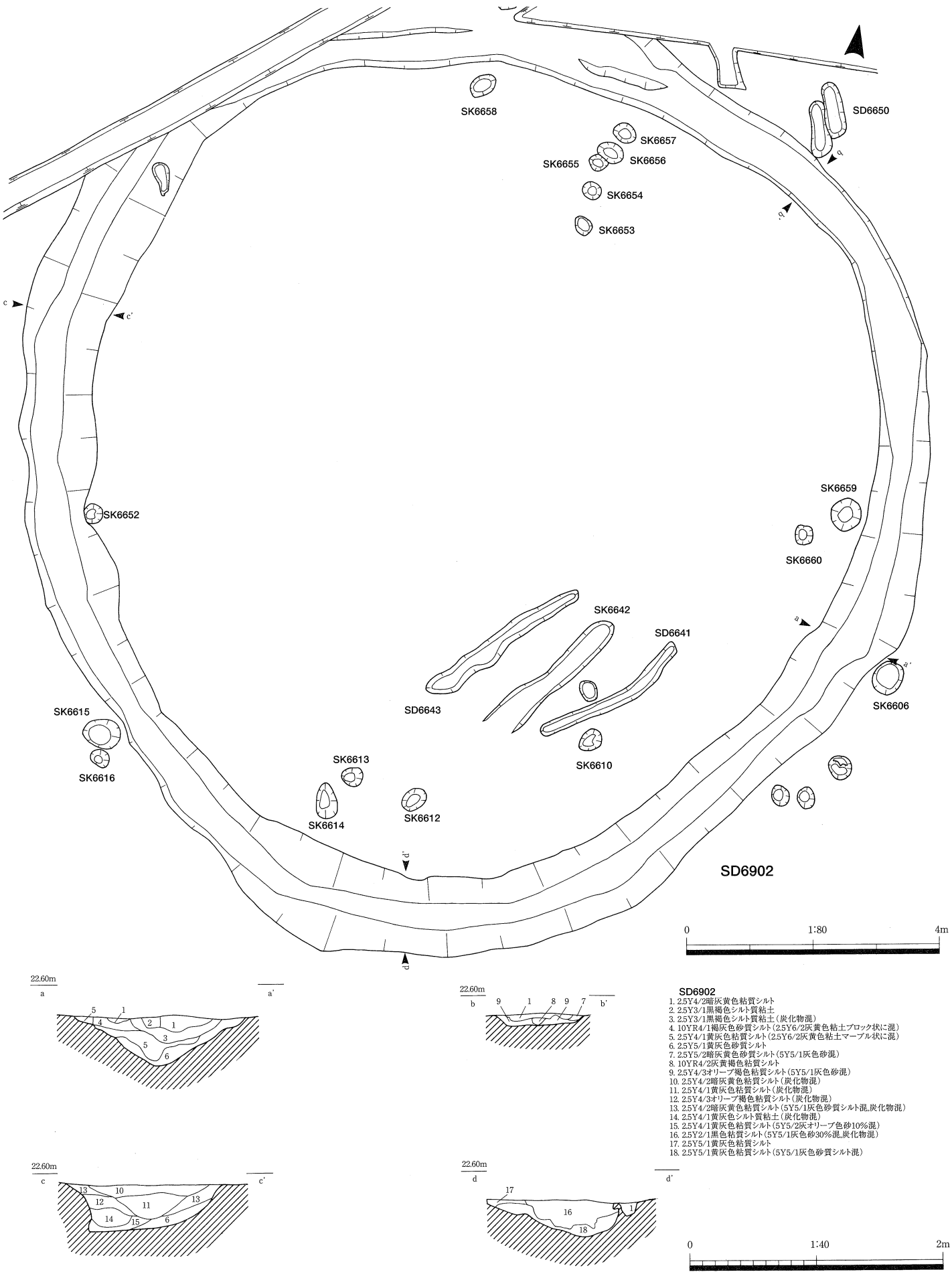




SD6901
1. 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト
2. 2.5Y5/3黄褐色粘質シルト
3. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
4. 5Y6/1灰色砂質シルト（2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト40%混）
5. 10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土
6. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
7. 10YR3/1黒褐色粘質シルト（炭化物混）
8. 10YR3/1黒褐色粘質シルト（5Y5/2灰色砂ブロック状に20%混,炭化物・植物遺体混）
9. 10YR4/1褐灰色粘質シルト
10. 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト（植物遺体混）
11. 2.5Y5/1黄灰色粘質シルト（5Y6/1灰色砂ブロック状に20%混）
12. 10YR4/4褐色粘質シルト
13. 5Y5/1灰色砂質シルト（2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルト20%混）
14. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト質粘土
15. 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト（炭化物混）
16. 5Y4/3オリーブ褐色粘質シルト
17. 2.5Y6/2灰黄色砂質シルト
18. 2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルト（炭化物混）
19. 2.5Y6/2灰黄色砂質シルト（2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルト20%混）
20. 5Y5/1灰色砂質シルト（炭化物混）

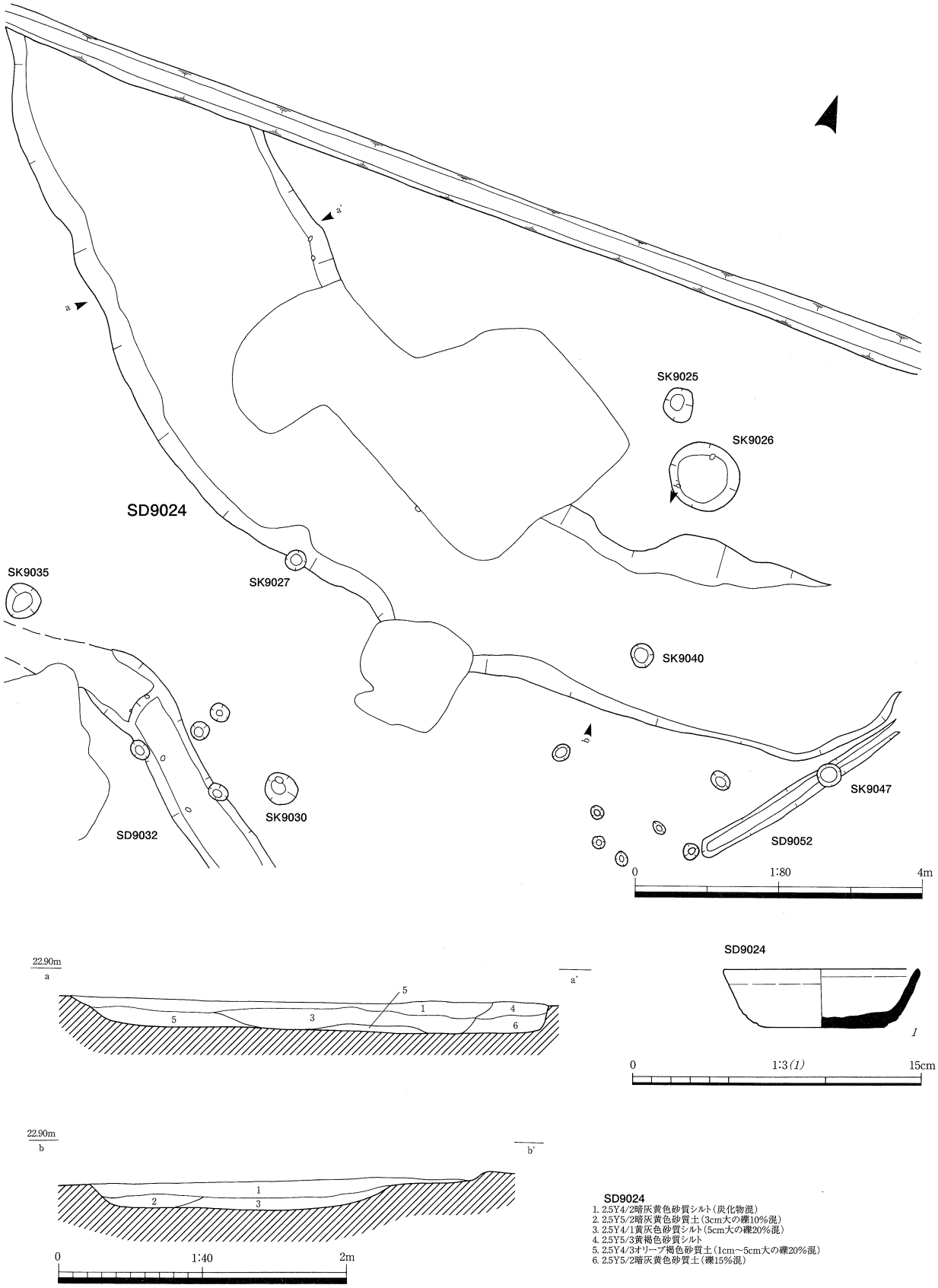
0　1:40　2m

第６図　遺構実測図
２号古墳（SD6901）



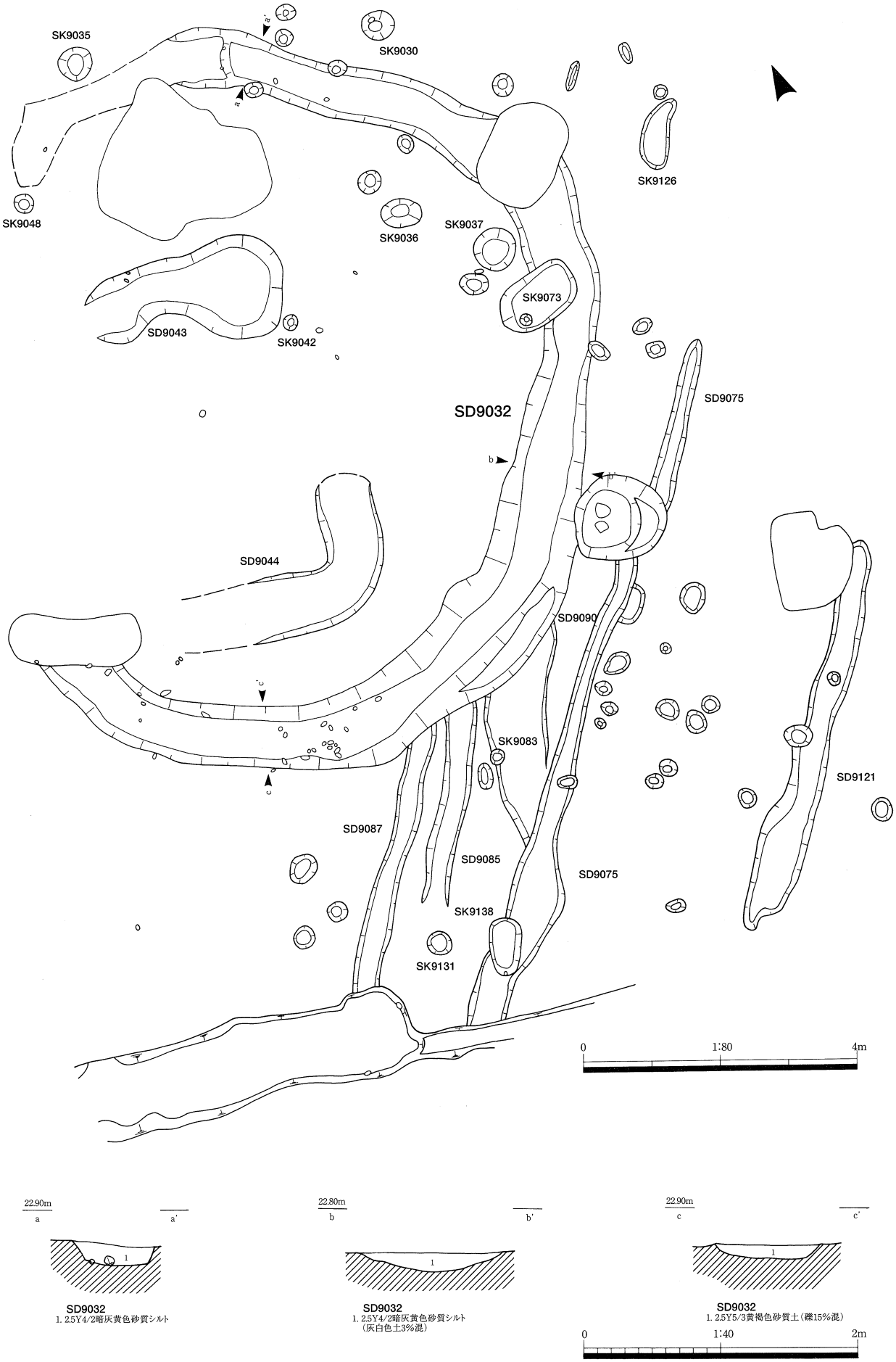
第７図　遺構実測図

３号古墳（SD6902）



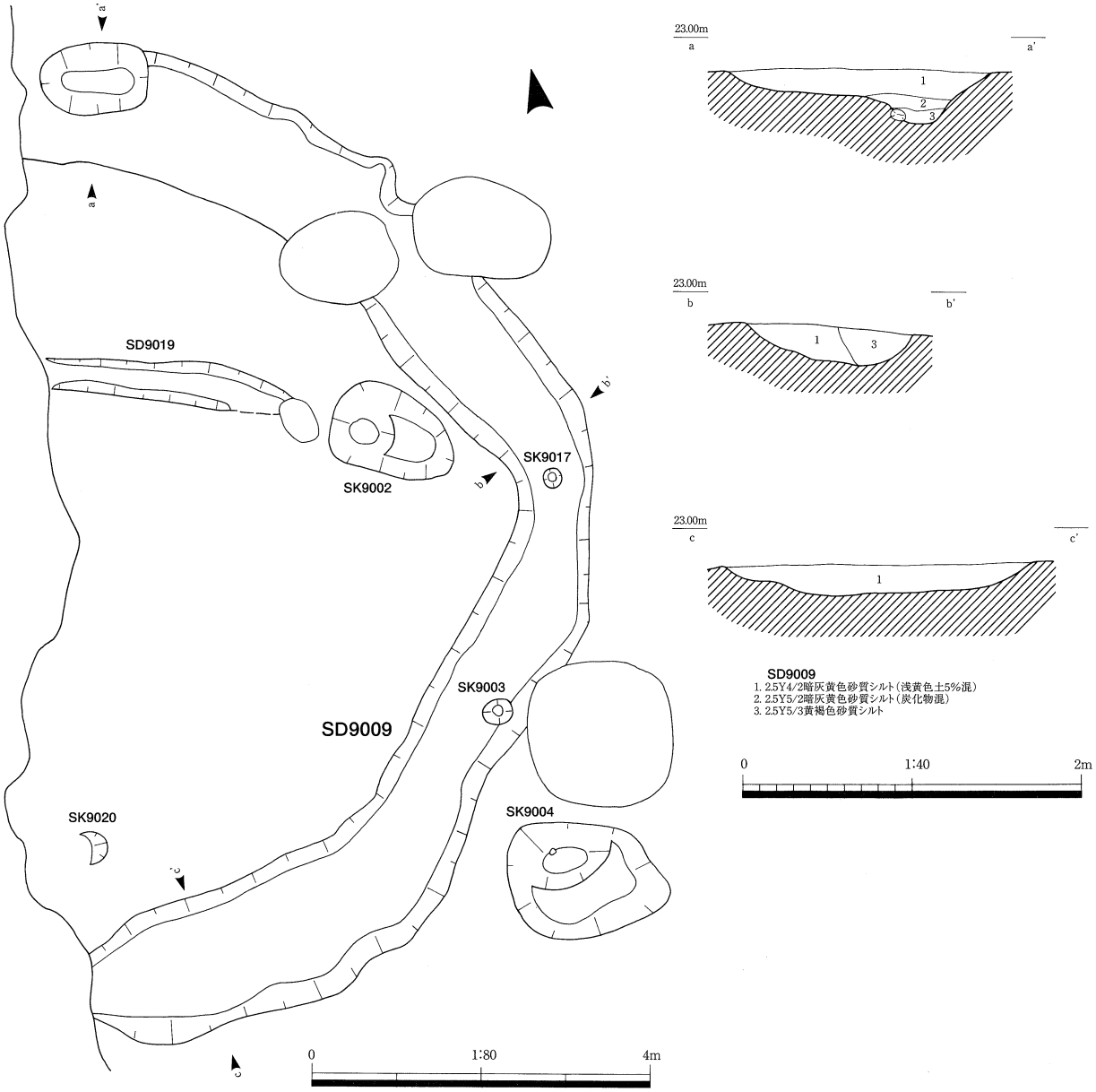
第８図　遺構・遺物実測図

４号古墳（SD9024）
SD9024（*1*）

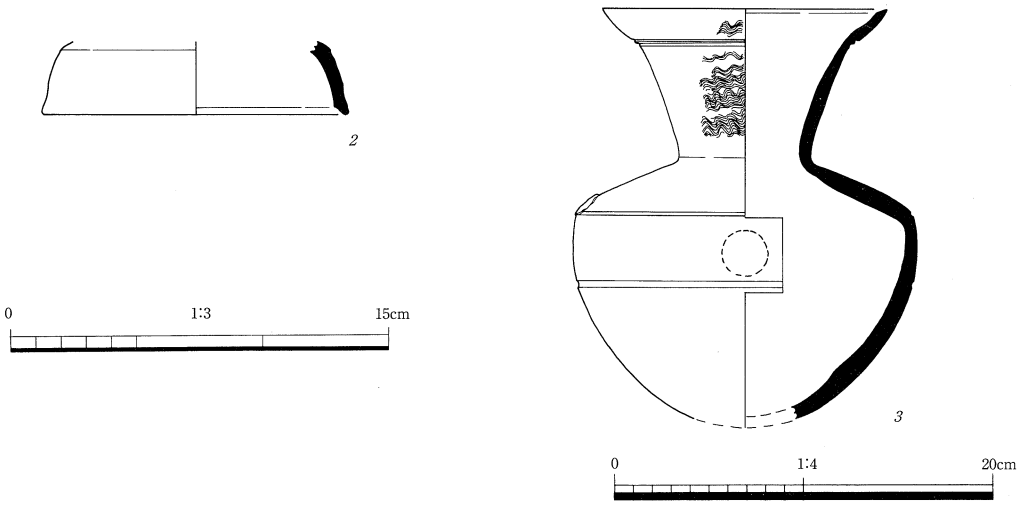


第9図　遺構実測図

5号古墳（SD9032）



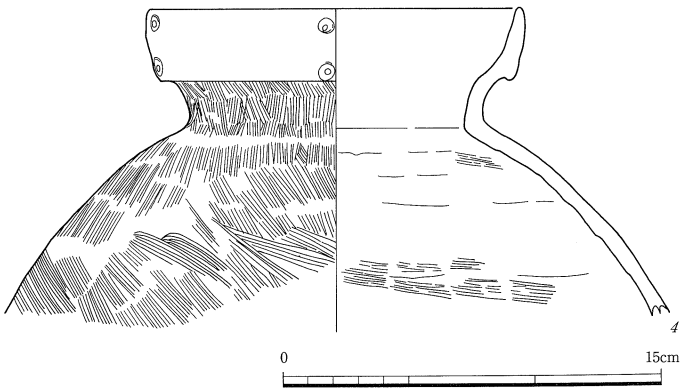
第10図　遺構実測図
6号古墳（SD9009）



第11図　遺物実測図　（*2*　1/3，*3*　1/4）
包含層

はＶ層（灰黄褐色砂質シルト）からである。Ｖ層はＸ170以北Ｙ223以西の範囲でのみ確認されており，ほぼ水平に堆積している。

遺物は帯状の窪みの周囲から炭化物の固まりと共に出土しており，弥生土器（４）は一個体がつぶれた状態で出土している他，内外面ハケメ調整の甕もある。試掘調査では遺物のみの確認にとどまったが，周囲には弥生時代の遺構が存在する可能性がある。



第12図　遺物実測図　(1/3)
下層確認トレンチ

４は複合口縁をもつ壺。口縁部に縦２つの竹管状のスタンプ文が等間隔で５箇所施され，外面は縦方向のハケメ，内面は横方向のハケメ調整である。法仏式から月影式のもの。　（中川道子）

2　古　　代

古代の遺構は遺跡の中央部，Ｂ２地区・Ｃ地区・Ｄ地区・Ｅ１・Ｅ２地区，Ｆ１地区～Ｆ４地区の約東西700mの範囲で検出できた。ほとんどの地区では上層面と分離した古代面として捉えることができたが，Ｃ地区の中央西寄りを南北に流れる谷部東側では，上層の削平によって中・近世の遺構と古代の遺構を同一面で検出しており，中・近世と古代の遺構の判断は，覆土の違いで判断できる遺構もあるが，検出のために掘削を続けた範囲ではそれも難しく，最終的には遺構の切り合い関係・出土遺物で判断している。従って，遺物が出土しなかった遺構については時期の判断ができない遺構が多く，中・近世の遺構と古代の遺構を明確に分類することはできなかった。

検出した遺構の種類は，竪穴建物７棟・掘立柱建物68棟・柵４条・溝・畠・土坑である。土坑は製鉄関連の遺構も検出しているが，概してその数は少ない。遺物には須恵器・土師器・製塩土器・管状土錘，木製品などがある。特にＤ地区は他の地区に比べて遺物の出土量が非常に多く，建物群の性格を考える上でも特徴となるであろう。

A　竪穴建物

１号竪穴建物（ＳＩ１，第13・15・27図，図版５・６・39・40）

Ｃ地区Ｘ217Ｙ300で検出した。規模は南北5.7m，東西約5.5m，深さは12㎝，西辺は削平されていて，立ち上がりは推定ラインである。真上に中世の総柱建物ＳＢ147とそれに伴う土坑ＳＫ2917が重複しているが，４本の主柱穴と東壁に造りつけのカマドを検出することができた。柱穴の南北の柱間が2.8m，東西3.1m，主軸はＮ－55°－Ｗである。柱穴の埋土は住居内の埋土と同じ酸化鉄を含む黒褐色土で，北東の柱穴はカマドの位置の影響で西に振れている。床面積は約31.35m²である。東壁際には一部周壁溝とも推定される浅い溝状の窪みの痕跡が見られるが，断定はできなかった。カマドは東壁の中央から北寄りに造られており，カマドの焚き口部から手前の床面上には焼土混じりの掻き出した灰が大きく広がっている。カマドの構造は北側の袖部に荒割された石，南側の袖部に土師器の甕を埋め込んでいる。焼成部には支脚の代わりに拳大の円礫と土器片を立て据えている。燃焼部内部には焼土混じりの黒褐色土が充填されており，その上層には天井落下土と推定される，粘性が強くて僅かに

焼土が混じる黒褐色シルトが堆積していた。

遺物は須恵器・土師器・製塩土器が出土している。須恵器は７世紀第３四半期の杯Ｇ蓋，土師器は内外面ハケメ調整の甕がカマド周辺から出土している。９は，内面にヨコ方向の浅いヘラ削りを施すやや胴の張った甕である。11は，カマドの袖石に利用されて埋められていたやや平底風の甕である。14は，支脚に使用されていた甕の胴部片である。外面はタテ方向のハケメで下半に煤が付着している。内面はヨコ方向のハケメで粘土接合痕が明瞭にわかる。15は，尖底の製塩土器の体部の破片である。表面はハケ状のもので縦方向にナデている。胎土には海綿骨針を含む。

２号竪穴建物（ＳＩ２，第14・15・27図，図版５・６・40）

Ｃ地区Ｘ216Ｙ306，ＳＩ１の５ｍ東で検出した。規模は南北5.55m，東西5.55mのほぼ正方形で，深さは約10cmである。上面は同じく古代の掘立建柱建物ＳＢ13，中世の総柱建物ＳＢ145に切られてはいるが，４本の主柱穴，東壁に造りつけのカマドの痕跡を見つけることができた。柱穴の南北の柱間が３ｍ，東西の柱間が2.7mで，北東の柱穴はカマドの位置の影響でこれもまた，やや西に振れている。柱穴埋土は礫混じりの暗灰黄色シルトである。主軸はＮ－54°－Ｗである。カマドはＳＩ１と同じく東壁の北寄りに造られていた模様で，両袖部にあたる位置に土師器の甕が伏せた状態で置かれていた。燃焼部にあたる２個の甕の間には焼土が混じる黒褐色シルトが堆積していたが，煙道部口のあたりがＳＢ145の柱穴に切られており，煙道についてはＳＩ１を参考に推定ラインを示したものである。

遺物は須恵器・土師器・製塩土器が出土している。16は７世紀第３四半期の杯Ｇ蓋である。18は袖石に利用されていた土師器甕である。19は尖底の製塩土器で，ＳＩ１出土のものより径が大きく，口縁部に近い体部片で，外面はタテ方向，内面はヨコ方向にハケ状のものでナデている。

ＳＩ１とＳＩ２は建物の方向，カマドの位置が等しく，出土した遺物の時期もともに７世紀第３四半期のものがほとんどであることからほぼ同時期の遺構ということがわかる。

３号竪穴建物（ＳＩ３）

Ｆ２地区の竪穴建物（ＳＩ３～ＳＩ５）はいずれも古墳時代の自然流路の埋土の上面に造られており，砂質土のため検出が難しく，炭化物の混入具合を目安に平面形を検討した。検出のための削平を加えた結果，遺構の深さは非常に浅いものとなっている。

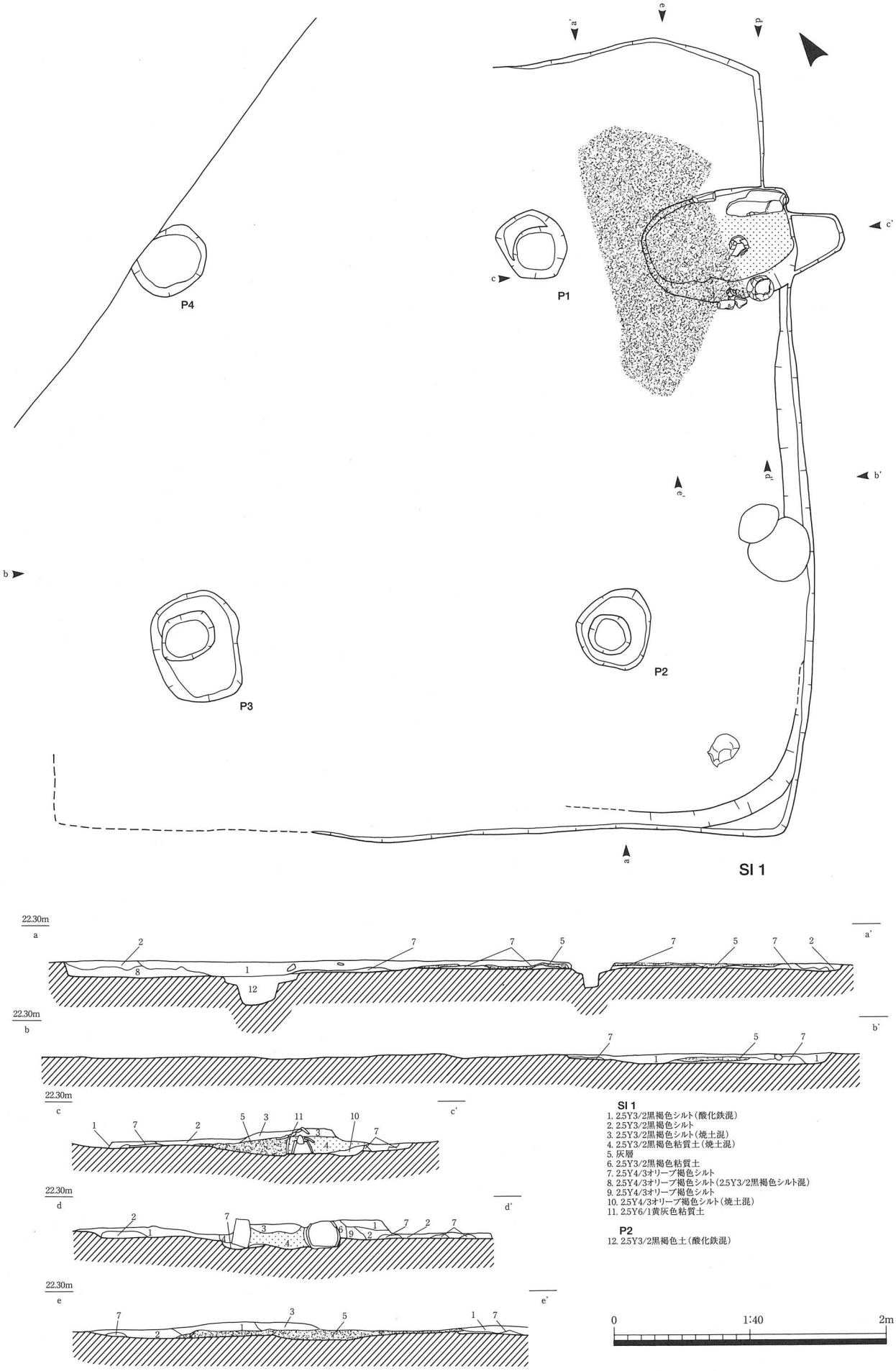
ＳＩ３は炭化物の混じる埋土から竪穴建物と推定した遺構である。方形のプランを呈していたと考えたが，北半分を下層の古墳時代の流路の確認トレンチに切られていて断定は難しい。柱穴・カマド等は検出できなかった。遺物は土師器が出土している。

４号竪穴建物（ＳＩ４，第16図，図版６）

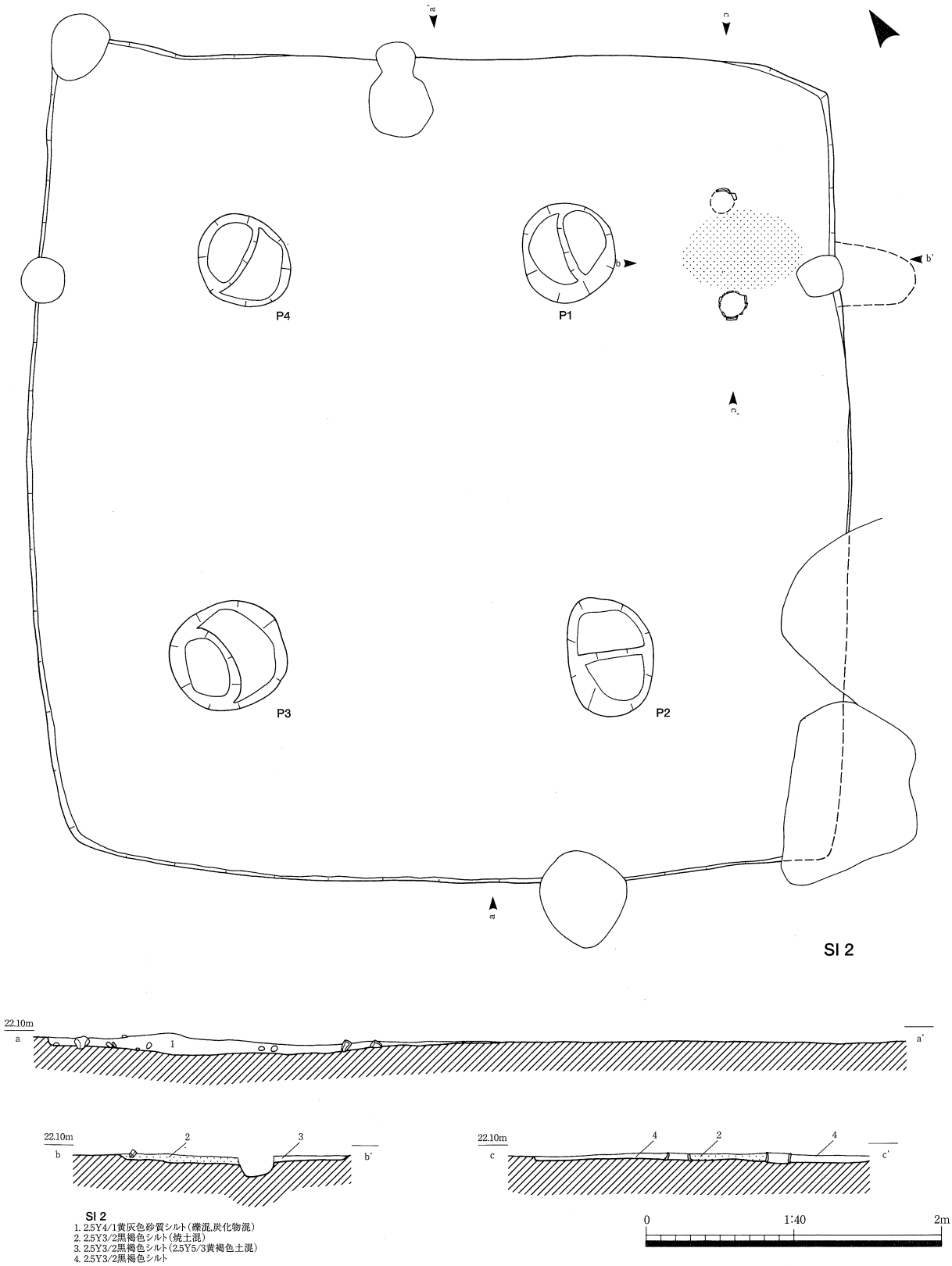
ＳＩ３の2.5m北に位置する。規模は東西３ｍ，南北2.6mで，東壁南寄りにカマドを造りつける。住居内部には柱穴等の施設は検出できなかったが，床面の南西隅とカマドの焚口周辺には土師器の破片が散乱していた。カマドは袖石などの施設は全く残っておらず，炭化物と焼土の広がりでそのプランを推定するしかない。遺物には土師器がある。

５号竪穴建物（ＳＩ５，第16・17図，図版７・42）

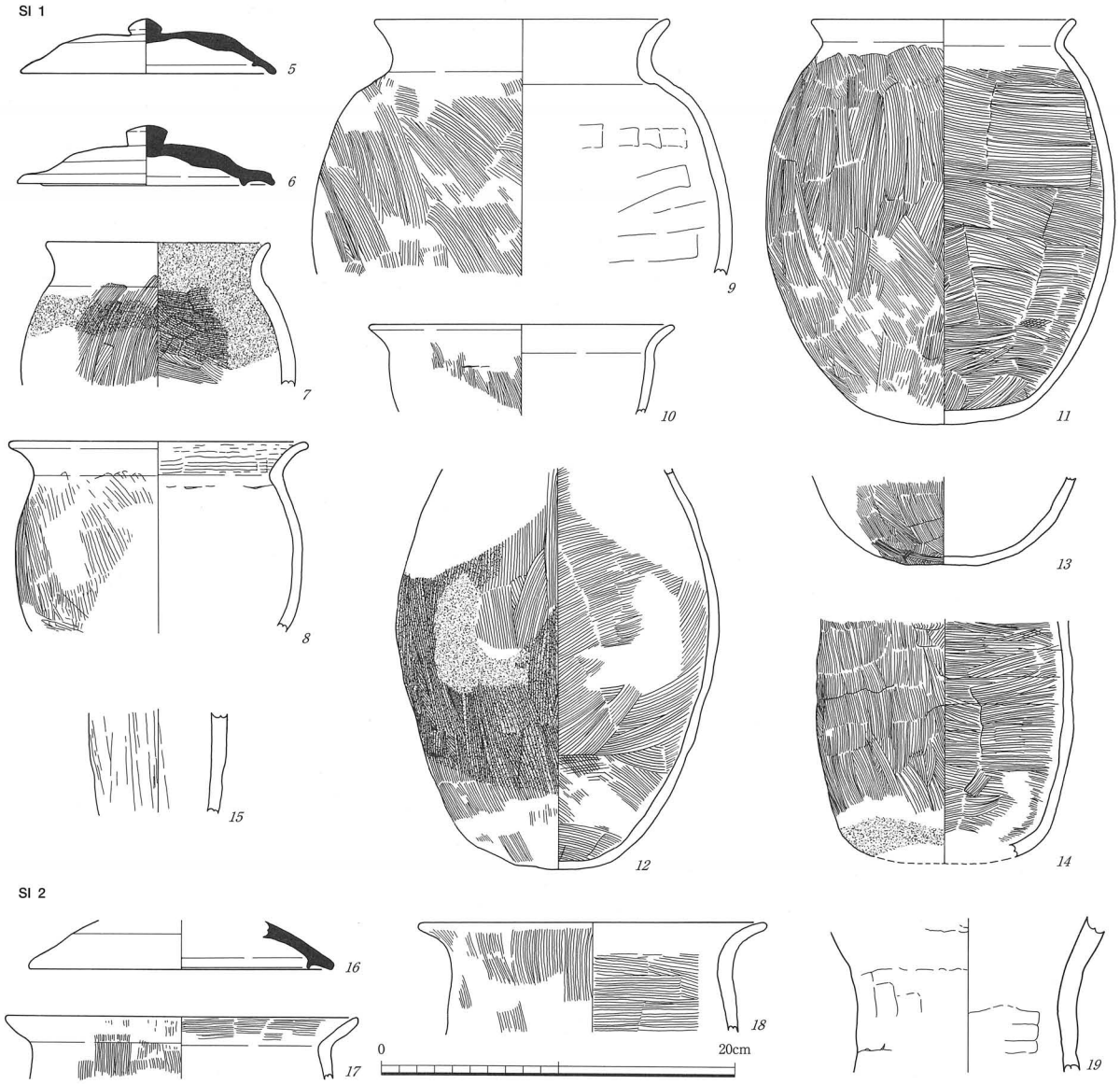
ＳＩ４の10m北に位置し，ＳＢ65が東に隣接する。規模は東西3.2m，南北2.9mの方形で，内部には柱穴は検出できなかった。北東と北西隅には径約６ｍの円形の炭化物と焼土の広がりが検出されたが，その下層には何ら施設は検出できなかった。また，東辺中央には長軸1.2m，短軸0.5mの炭化物の広がりがあり，その中央には高杯の脚部が据えられていた。この脚部はその出土位置からカマドの支脚と考えられ，施設の痕跡は残ってはいないが，炭化物の広がりからもこの位置にカマドがあった



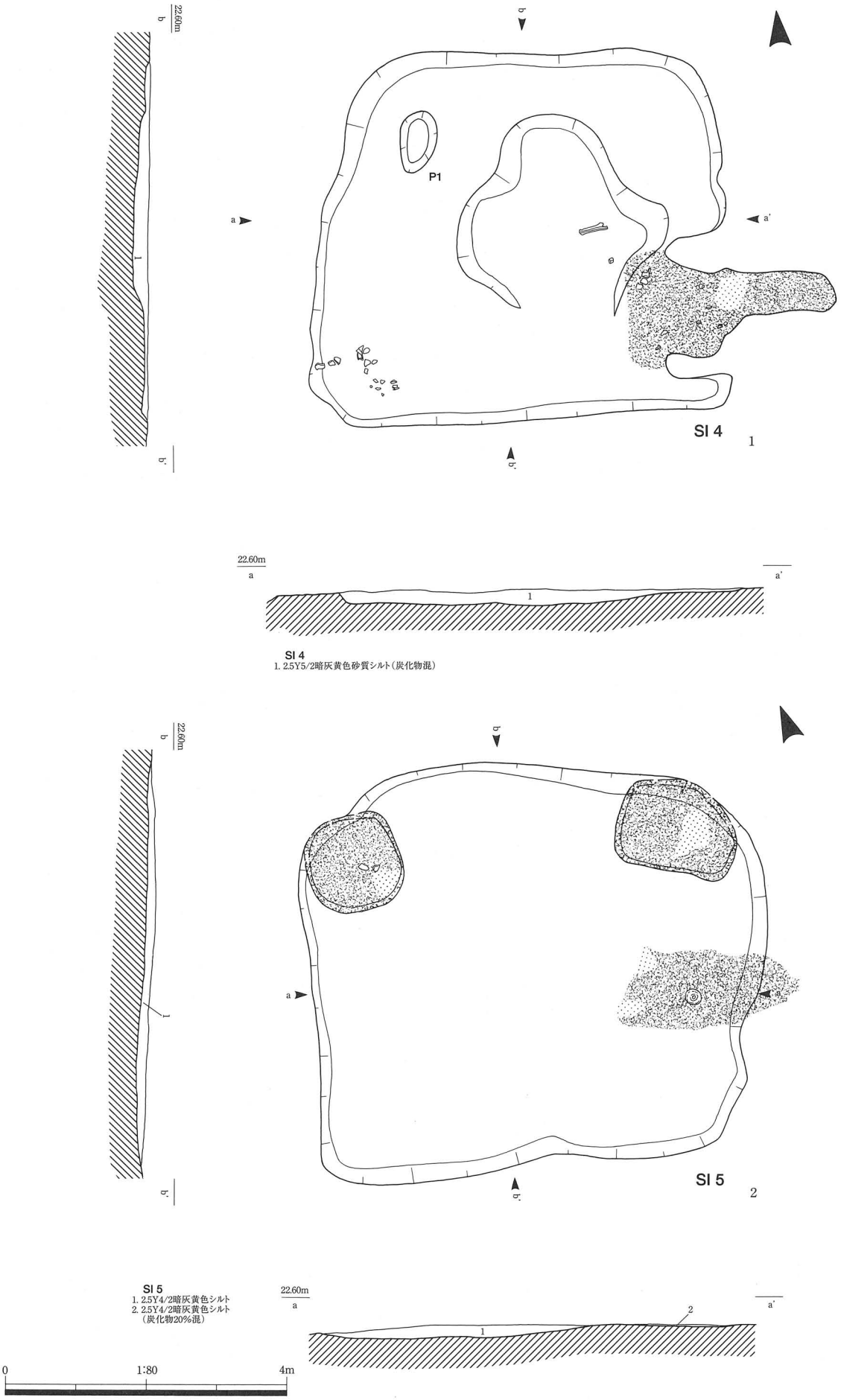
第13図　遺構実測図
ＳＩ１



第14図　遺構実測図
ＳＩ２



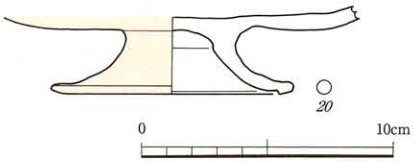
第15図　遺物実測図　(1/4)
ＳＩ１(*5～15*)　ＳＩ２(*16～19*)



第16図　遺構実測図

1. ＳＩ４　2. ＳＩ５

と推定される。遺物は須恵器と土師器の高杯（20）が出土している。高杯は短く太い脚部をもつタイプで，ロクロ成形で内外面に赤彩を施す。この個体の破片は古墳の周溝と推定されるＳＤ6903からも出土している。



第17図　遺物実測図　(1/3)
ＳＩ５

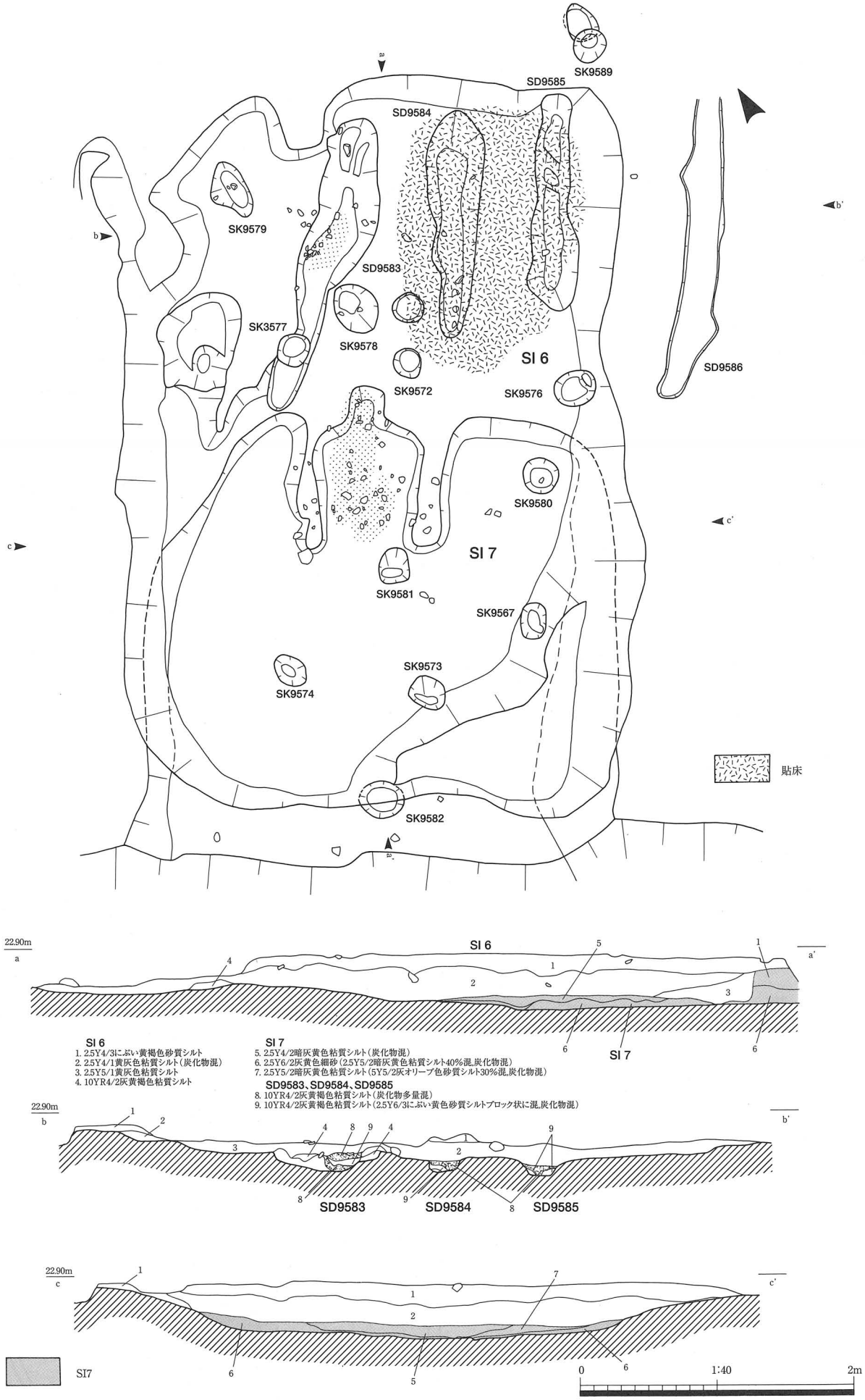
６号竪穴建物（ＳＩ６，第18・19図，図版７・８・40～42）

Ｆ４地区の北側で重複して２棟の竪穴建物を検出した。北側を上層の中世のＳＤ9202に南側をＳＤ9203に挟まれた狭い範囲での検出で，新旧関係で古いＳＩ７は南側をＳＤ9203に切られる。

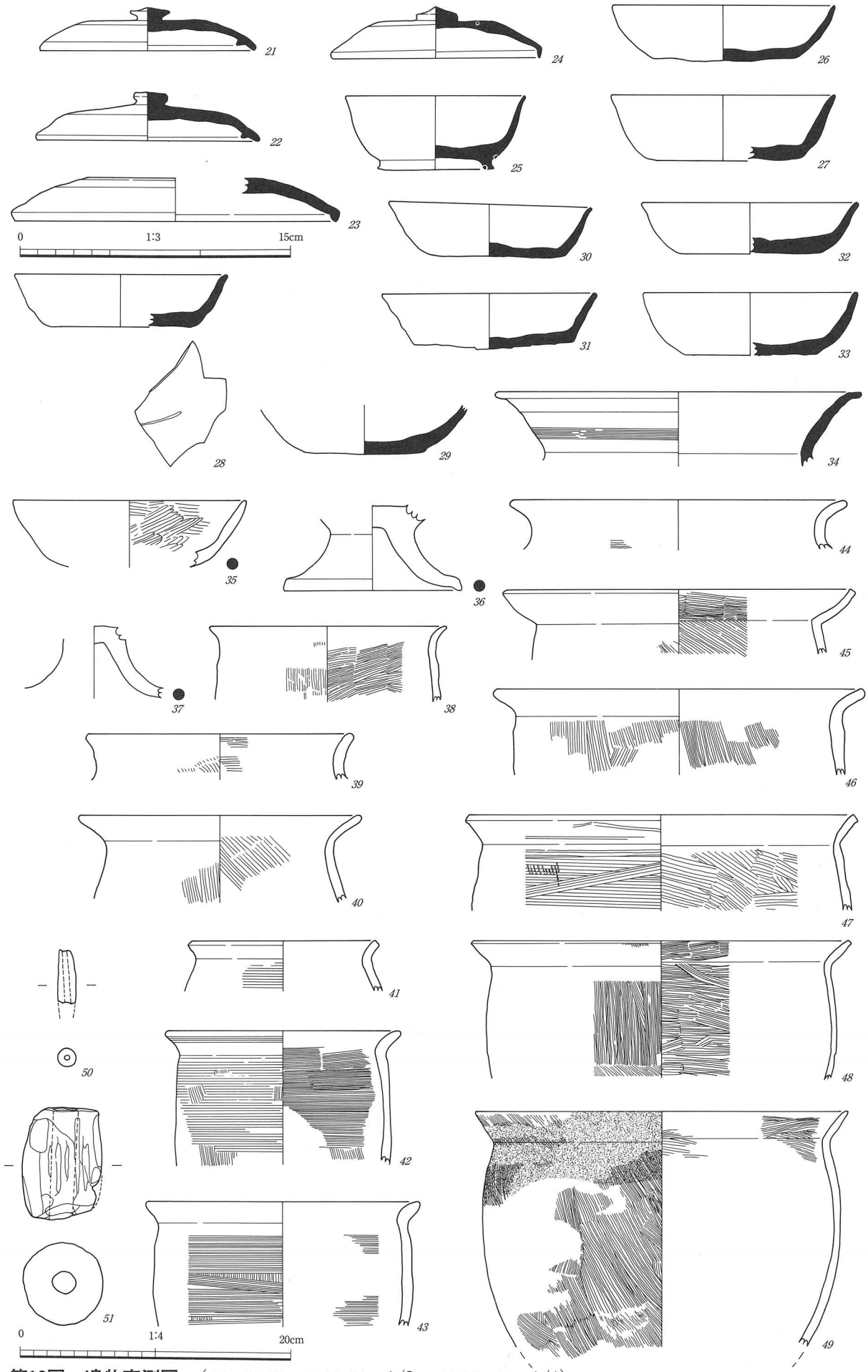
新しいＳＩ６は南北5.3m，東西3.7mの隅円長方形で，主軸はＮ－30°－Ｅである。埋土は炭化物が混じる褐灰色粘質シルトで，北側は中世のＳＤ9202に削平されており，立ち上がりが南に比べ緩い。また，床面の下層からはＳＤ9584～ＳＤ9585などの南北に平行する幅約30cmの溝が見つかっており，建物東側のＳＤ9586と合わせて柵状遺構を形成していたものと考えられる。竪穴建物はこの柵状遺構を埋めて後に造られた模様で，整地後北東の床面には貼り床の痕跡が認められた。ＳＤ9583周辺には焼土，焼けた石などが散乱しており，カマドの痕跡とも受け取れるが，上層の溝の削平で壊されており，その構造は不明である。また，床面では柱穴は検出することができなかった。

建物番号	地区	規模(m)	面積(㎡)	柱間南北(m)	柱間東西(m)	柱形式	方位	時期	挿図番号	図版番号	備考	出土遺物
ＳＩ１	C	5.7×5.5	31.35	3.1	2.8	４本	N－55°－W	7C	13・27	５・６・39・40	カマド	須恵器・土師器・製塩土器
ＳＩ２	C	5.5×5.5	30.8	3.0	2.7	４本	N－54°－W	7C	14・27	５・６・40	カマド	須恵器・土師器・製塩土器
ＳＩ３	F2							8C				土師器
ＳＩ４	F2	3.0×2.6	7.8					8C	16	6	カマド	土師器
ＳＩ５	F2	3.2×2.9	9.28					8C	16	７・42		須恵器・土師器
ＳＩ６	F4	5.3×3.7	19.61				N－30°－E	7C	18	７・８・40～42		須恵器・土師器・管状土錘
ＳＩ７	F4	(5.3)×3.5	18.55				N－30°－E	7C	18	７・８・40～42	カマド	土師器・黒色土器

第４表　竪穴建物一覧

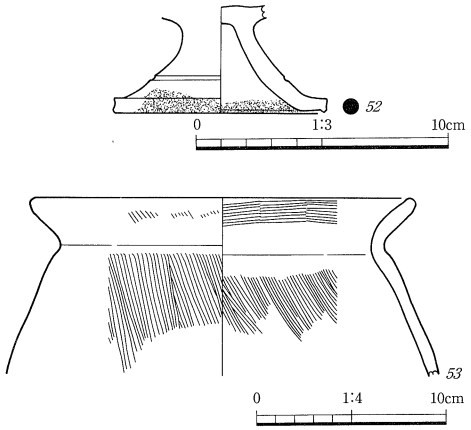


第18図　遺構実測図
ＳＩ６・ＳＩ７



第19図　遺物実測図　（*21～33·35～37·50·51*　1/3，*34·38～49*　1/4）
ＳＩ６

遺物は須恵器・土師器・土錘が出土している。ＳＩ７の北半を切っているので，出土遺物はＳＩ７のものと混在して出土していると考える。須恵器には杯蓋・杯・甕がある。杯蓋は口径12cm前後の内面にかえりをもつ杯Ｇ蓋と，同じく口径11.6cmの杯Ｂ蓋に分かれる。23は建物上面から出土しており，やや時期が下る。杯には杯Ｂと杯Ｇがある。杯Ｇは杯Ｇ蓋とセットとなるもので，口径は11.7cm～12.4cm，体部は直線的に外反するものと緩く内湾するものに分かれ，底部外面にヘラ記号のあるものもある。甕は小型の甕で，頸部に一束のカキメが施される。土師器には黒色土器（高杯）・甕・鍋がある。高杯はロクロ成形で，杯部の内面は黒色処理され，ヘラミガキが施される。甕には内外面ハケメ調整するものと，内外面の調整にカキメを施すものがある。器形は体部の張りが弱いものが多い。45は口縁部が内湾状を呈するもので，外傾する端面をもち内端部は小さく肥厚するタイプで外来系の特徴をもつ。口縁部内面は横方向のハケメ，体部内外面は縦方向のハケメ調整である。48・49は鍋で，直線上に外反する口縁部をもち，内外面にはハケメ調整を施す。体部の張りは鍋としては弱く，器壁も薄い。これらの土器は７世紀第４四半期のものである。土錘は管状土錘が２点出土している。51は下端部が欠損するが，ほぼ全形を知り得る。上端部はハケ状のもので撫でて調整しており，外面には一部圧痕状の凹線が５本残っている。



第20図　遺物実測図（*52*　1/3，*53*　1/4）
ＳＩ７

７号竪穴建物（ＳＩ７，第18・20図，図版７・８・40～42）

ＳＩ６の下層南側で検出した。ＳＩ６と半分以上が重複するが，北辺中央にはカマドが遺存していた。規模は東西3.5mで，南端は中世の溝ＳＤ9203に切られる。上面はＳＩ６に削平されているが当初の規模はＳＩ６とほぼ同じだったと考えられ，主軸もＳＩ６と同じである。北辺の中央で検出されたカマドの燃焼部には支脚として利用された高杯の脚部が据えられていた。

遺物は，ＳＩ６単独出土のものは少ない。カマドの支脚に利用された高杯（52）は黒色土器で，杯部口縁部は欠損する。脚部には１条の沈線が巡り，脚端部内外面には煤が付着する。53は内外面ハケメ調整の甕で共に時期は７世紀第４四半期である。ＳＩ６とＳＩ７から出土した遺物を比べてみると，ほとんど時期差はなく，７世紀第４四半期の中におさまる。このことから考えてもこの２棟の竪穴建物の時期差はあまり無く，建物規模やその規格性をみてもほぼ同じで，ＳＩ６はＳＩ７の建て替えた建物と予想される。

（島田美佐子）

B　掘立柱建物

古代の石名田木舟遺跡では遺跡の中央部のＢ２・Ｃ・Ｄ・Ｅ１・Ｆ２地区で68棟の掘立柱建物を検出した。特にＣ・Ｄ地区だけで合わせて55棟の掘立柱建物を検出しており，集落の中心をなしていたことが窺える。

Ｂ２地区では調査区西側で古代の遺構を検出している。ここではほぼ北に主軸をもつ３棟の掘立柱建物を検出している。このうち１棟は総柱建物である。主軸が北からやや東に振れるＳＢ１・２と西に振れるＳＢ３に分かれる。

Ｃ地区は地区中央を古墳時代から南北に流れる谷を境に大きく東西に分かれる。特に東側は後世の削平が著しく，中世の遺構と古代の遺構を同一面で検出しているため，掘立柱建物の時期を決定づけることは難しかった。時期の決定に際しては，遺構の切り合い関係を最重視し，これに出土遺物の検討を加えて行った。埋土の違いも若干見られたが，遺構検出のために検出面を下げた場所ではその違いも時期決定の裏付けとはならなかった。

Ｄ地区の古代建物の配置は，調査区の北・東・西の３ブロックがある。北ブロックは側柱建物１棟のみの検出であるが，周辺域に広がりが想定される。東ブロックはＣ地区や南側の調査区外に広がるが，Ｄ地区調査区からは22棟が検出されている。内訳は側柱建物17棟，総柱建物が５棟である。西ブロックは建物は12棟検出したが，部分的な検出例が多く，かなりの数の建物が調査区外に広がると予想される。柵は全地区の中で４条検出している。Ｂ２地区で３条，Ｆ２地区で１条検出しているが，建物に伴う柵はない。

１号掘立柱建物（ＳＢ１，第21・23図，図版９・10・43）

Ｂ２地区の古代遺構検出地区の南東寄りで検出した３間×２間の南北棟側柱建物である。中央部分は撹乱や中世の溝によって切られている。桁行6.3m，梁行4.8mで，平面積は30.24㎡である。主軸はＮ－５°－Ｅである。柱掘形は平均直径90㎝前後の円形が多く，深さは平均40㎝前後で，掘形埋土は黄灰色シルトの単層である。柱痕跡はいずれの柱穴にも確認出来なかった。遺物はＳＰ1595とＳＰ2291から出土している。ＳＰ1595からは外面赤彩の黒色土器の椀Ａ（57）が出土している。ＳＰ2291からは須恵器の杯Ｇ・杯Ａ（54・55）・甕（56）が出土しており，遺物の時期は７世紀第４四半期から８世紀後半におさまる。

２号掘立柱建物（ＳＢ２，第22・23図，図版９）

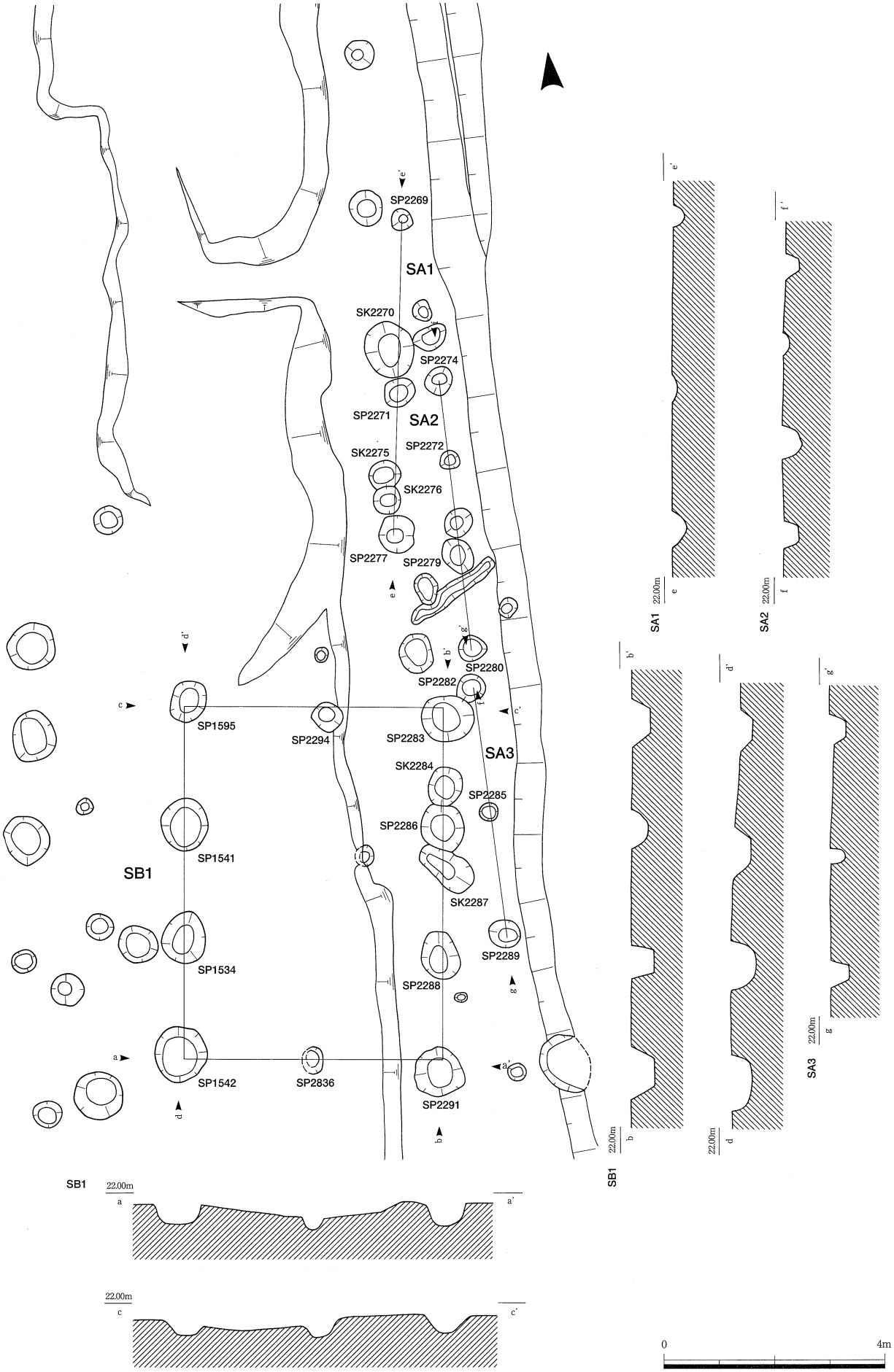
ＳＢ１の北西に位置する２間×２間の東西棟総柱建物である。北西隅の柱穴は検出できなかったが，桁行4.2m，梁行3.5mで，平面積は14.7㎡である。主軸はＮ－３°－Ｅである。柱掘形は直径60㎝～90㎝の円形で，深さは30㎝～45㎝で，掘形埋土は黄灰色シルトで，柱痕跡は残っていない。遺物はＳＰ1517・ＳＰ1571・ＳＰ1580から土師器や須恵器が出土している。58はＳＰ1571から出土したもので，端部が内傾する小型の手捏ねの壺で，頸部には指押さえの跡が残る。

３号掘立柱建物（ＳＢ３，第22図，図版９）

ＳＢ２の南側で検出した部分検出の掘立柱建物である。梁行が２間で調査区南に延びる南北棟の側柱建物になると推定される。梁行は5.8m，主軸はＮ－２°－Ｗである。柱掘形は直径約90㎝，深さ25㎝～40㎝の円形である。柱痕跡は残っていなかった。遺物はＳＰ1515から須恵器・土師器の小片が出土している。

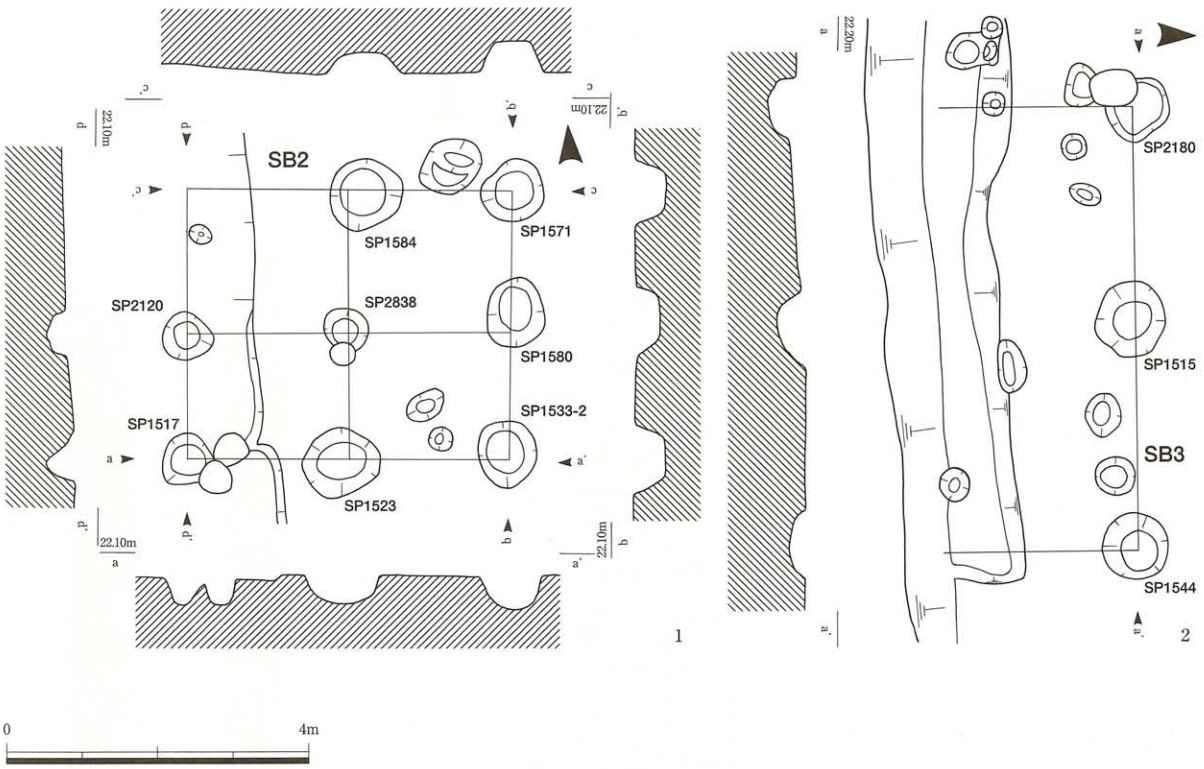
１号柵（ＳＡ１，第21図，図版10）

ＳＢ１の北東に位置し，主軸方向はＳＢ１とほぼ同じである。長さは5.7m，３基の柱穴の直径は40



第21図　遺構実測図

SB１・SA１・SA２・SA３



第22図　遺構実測図
1. SB2　2. SB3

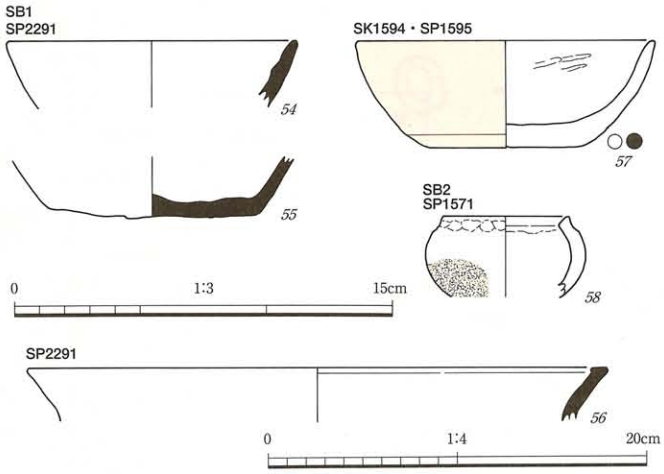
cm～60cmの円形で，遺物の出土は無い。

2号柵（ＳＡ２，第21図，図版10）

ＳＡ１の南東に位置する４基の柱穴からなる柵。長さは5.0m，柱穴の直径は50cm～60cmの円形である。柱痕跡は残っておらず，遺物の出土は無い。

3号柵（ＳＡ３，第21図，図版10）

ＳＡ２の南に位置する柵。３基の柱穴からなり，長さは4.5m，柱穴の直径は30cm～50cmの円形である。柱間の長さは2.3m，埋土は黄灰色シルトの単層である。遺物はＳＰ2289から土師器が出土している。これらのＳＡ１～ＳＡ３は建物に付属しているというよりは，東側の谷地形を意識して造られているようである。



第23図　遺物実測図　（*54・55・57・58*　1/3，*56*　1/4）
SB１　SK1594・SP1595（*57*）　SP2291（*54～56*）
SB２　SP1571（*58*）

4号掘立柱建物（ＳＢ４，第24図，図版10・11）

Ｃ地区東北端で検出した２間×２間の南北棟側柱建物で，南側に１間の庇が付く。桁行5.5m，梁行3.8mで，平面積は20.9m²である。主軸は真北を向く。柱掘形は直径50cm～70cmの円形で，深さは15cm～40cmである。掘形埋土は黄褐色シルトの単層で，柱痕跡はどの柱穴からも検出出来なかった。遺物の出土は無い。

５号掘立柱建物（ＳＢ５，第24・29図，図版11）

Ｃ地区東南端で検出した２間×２間の総柱建物で，桁行と梁行はほぼ同じで，3.7mである。平面積は13.69㎡，主軸はＮ－28°－Ｅである。柱掘形は一辺約70㎝前後の方形で，深さは約16㎝～44㎝である。ＳＰ3919とＳＰ3922以外は段掘りとなっていて，柱根の位置がわかるが，断面には柱痕跡は残っておらず，埋土は単層である。柱穴からは，須恵器・土師器・加工木が出土している。64はＳＰ3914から出土した鞴の羽口である。外面は灰色に還元し，上端には黒色の鉱滓が付着する。

６号掘立柱建物（ＳＢ６，第25図，図版12）

ＳＢ５の北西方向に位置する，ほぼ主軸を同じくする３棟の建物群のうちの１棟。２間×３間の南北棟側柱建物で，桁行5.8m，梁行４m，平面積は23.2㎡である。主軸はＮ－37°－Ｅである。柱掘形は直径40㎝～60㎝の円形で，深さは15㎝～23㎝で，掘形埋土は暗灰黄色シルトの単層である。柱痕跡は検出出来なかった。遺物はＳＰ3626・ＳＰ3628から土師器が出土している。

７号掘立柱建物（ＳＢ７，第25図，図版12）

ＳＢ６の南東に位置する２間×３間の南北棟側柱建物である。北西隅の柱穴は中世の溝ＳＤ3535に切られて検出出来なかった。桁行は5.3m，梁行3.6m，平面積は19.08㎡で，主軸はＮ－37°－Ｅである。柱掘形は直径50㎝～70㎝の円形で，深さは10㎝～30㎝，掘形埋土は暗灰黄色シルトの単層である。遺物の出土は無い。

８号掘立柱建物（ＳＢ８，第25図，図版12）

ＳＢ７の東に隣接する２間×２間の総柱建物である。桁行・梁行ともに4.2mで，平面積は17.64㎡である。主軸はＮ－34°－Ｅ。柱掘形は直径50㎝～60㎝の円形で，深さは10㎝～25㎝である。掘形埋土は暗灰黄色シルトの単層である。遺物の出土は無い。

９号掘立柱建物（ＳＢ９，第26図）

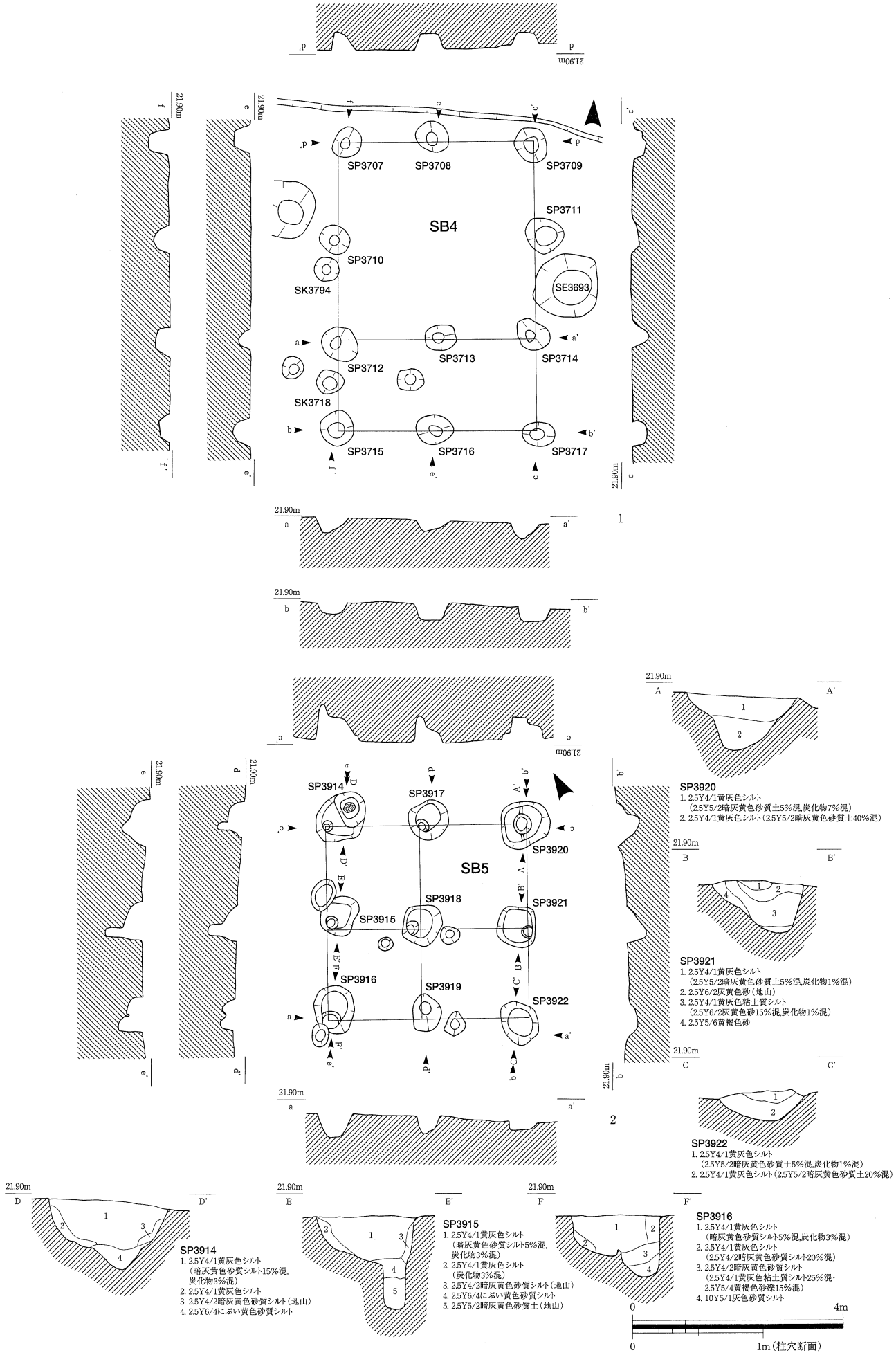
ＳＢ８の10m北に位置する２間×２間の東西棟側柱建物である。桁行3.2m，梁行2.9mで，平面積は9.28㎡である。主軸はＮ－77°－Ｅである。柱掘形は直径60㎝の円形で，深さは20㎝～37㎝，掘形埋土は暗灰黄色シルトの単層である。遺物はＳＰ3786・ＳＰ3787から土師器が出土する。

10号掘立柱建物（ＳＢ10，第26図，図版13）

Ｘ210Ｙ308で検出した２間×２間の東西棟総柱建物である。古代の土坑ＳＫ3530の北に位置している。上面がかなり後世の削平によって荒れており，柱穴からは中世の遺物が出土しているが，建物の規模から古代の建物と判断している。桁行は4.7m，梁行は3.7m，主軸はＮ－７°－Ｅである。柱掘形は直径60㎝～80㎝の円形がほとんどで，楕円形や不整形のものも混じる。掘形埋土は暗灰黄色シルトの単層である。遺物はＳＰ3488から土師器が出土している。

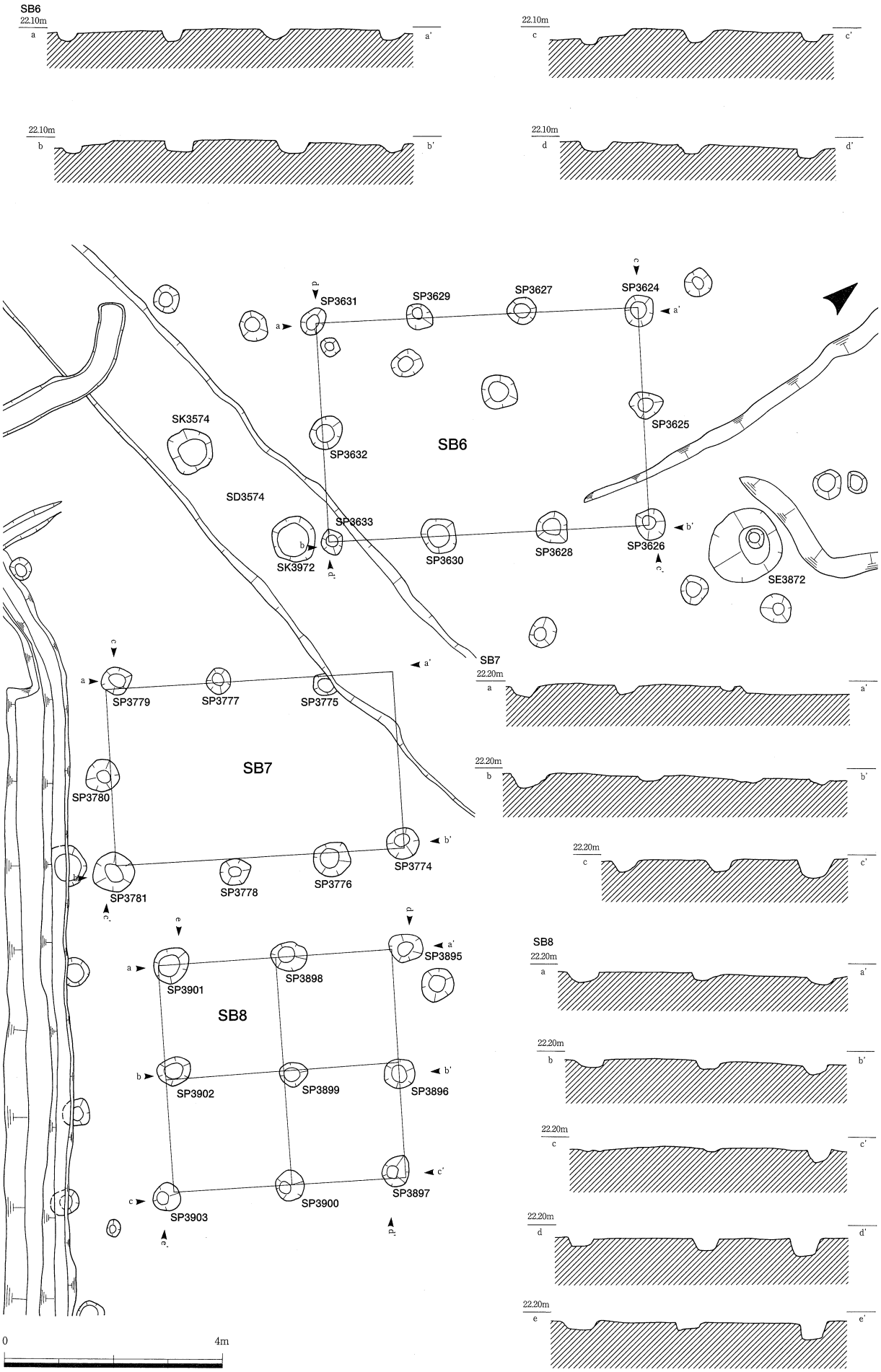
11号掘立柱建物（ＳＢ11，第26・29図，図版13・14）

Ｘ220Ｙ307で検出した２間×３間の南北棟側柱建物で東側に庇が付く。桁行5.3m，梁行4.6mで平面積は24.38㎡である。主軸はＮ－19°－Ｅである。西側の桁行の柱列の内２基は検出出来ず，また，梁行の柱間が不規則であり，やや不規則な平面形となっている。柱掘形は直径40㎝～70㎝の円形で，庇側と西側の柱穴がやや小さい。深さは20㎝～40㎝である。掘形埋土は黄灰色シルトの単層である。遺物は柱穴から土師器・須恵器・土錘が出土している。59は外反する口縁をもつ内外面ハケメ調整の土師器の甕。60は体部外面ハケメ，下半手持ち削り調整の胴の張る壺の体部で，外面には赤彩が施される。時期はともに７世紀後半である。61は直径１㎝の細形の管状土錘。孔径は２㎜で下端を欠損する。



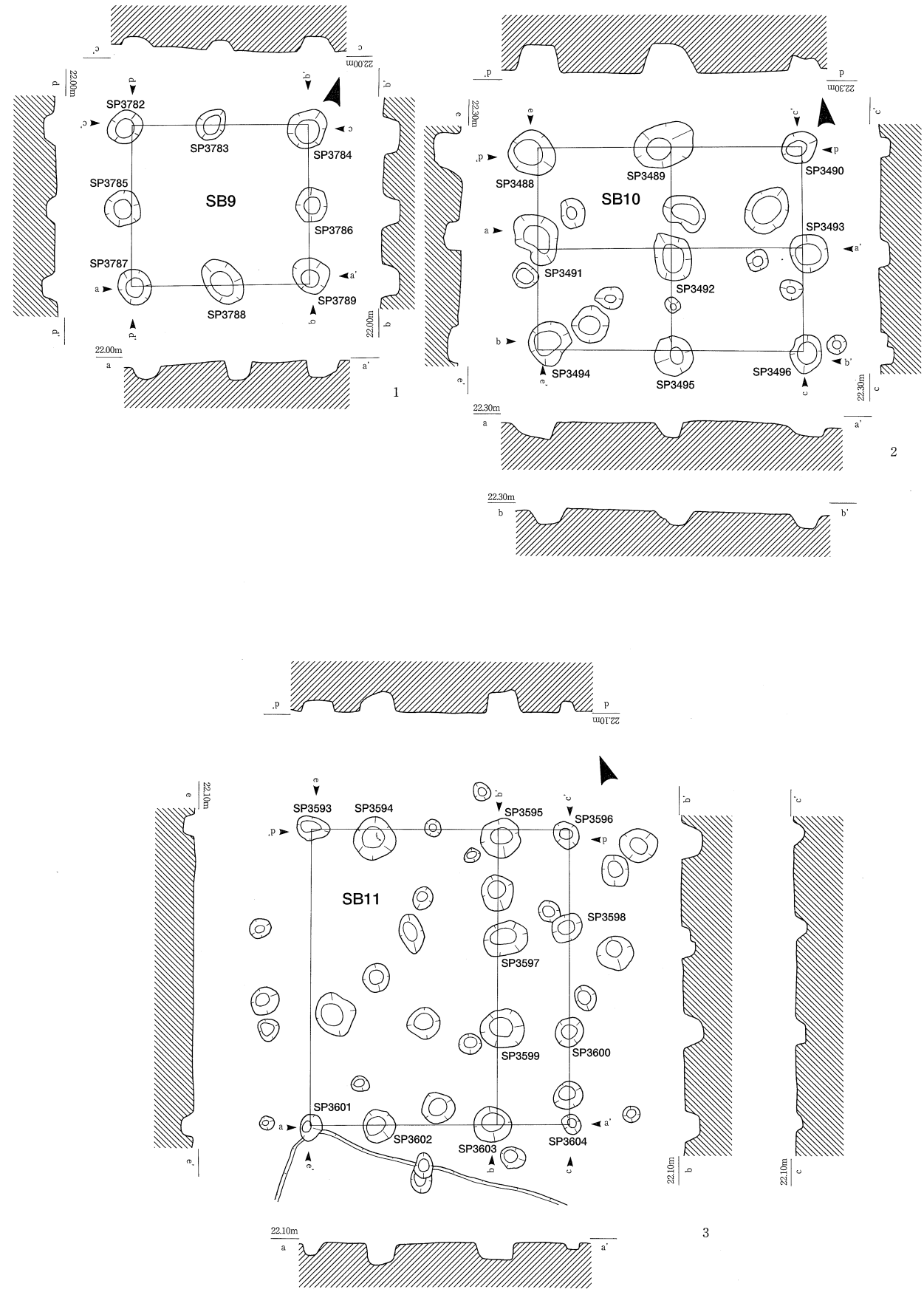
第24図　遺構実測図

1. SB4　2. SB5



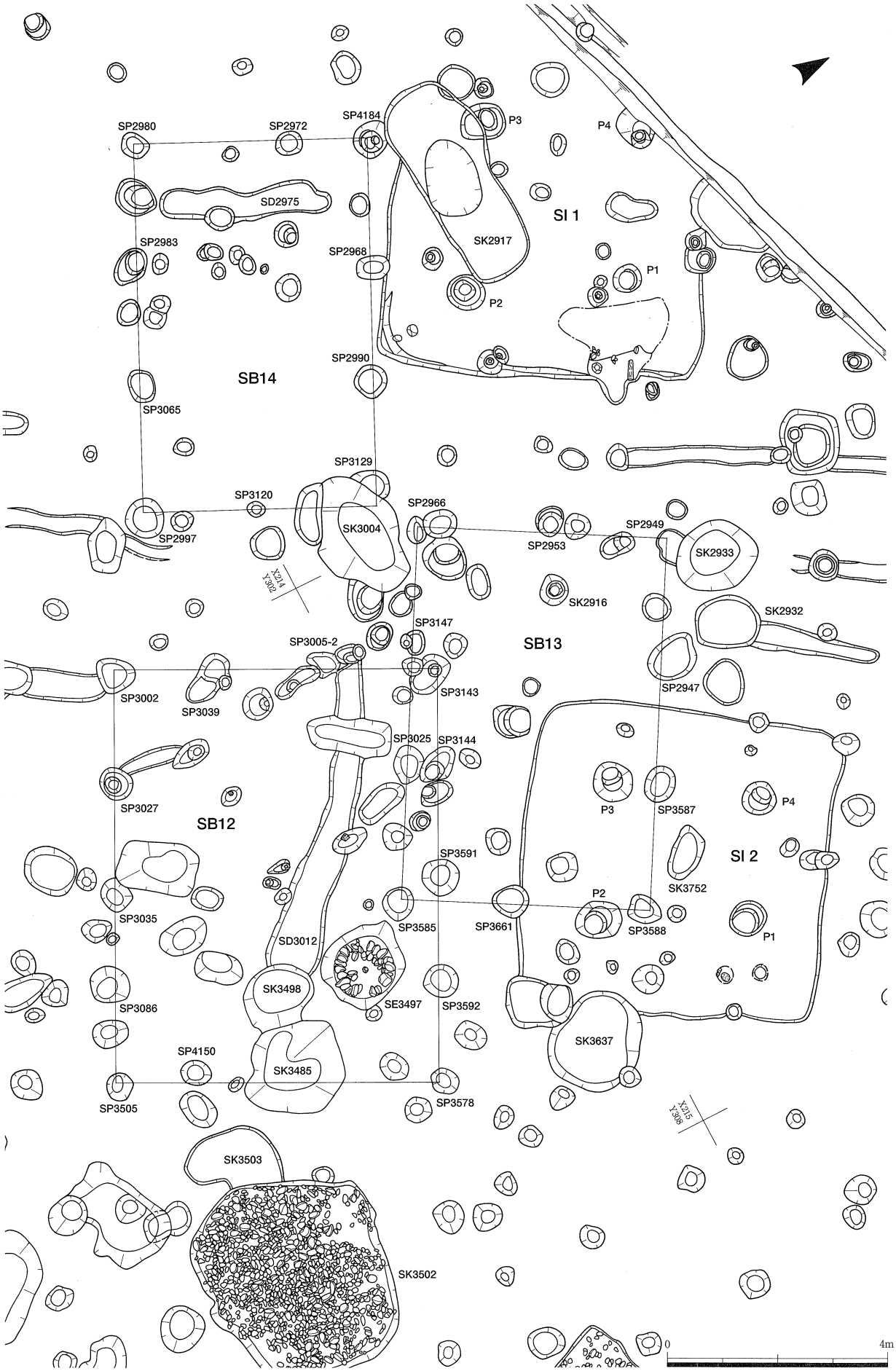
第25図　遺構実測図

SB 6 ・SB 7 ・SB 8



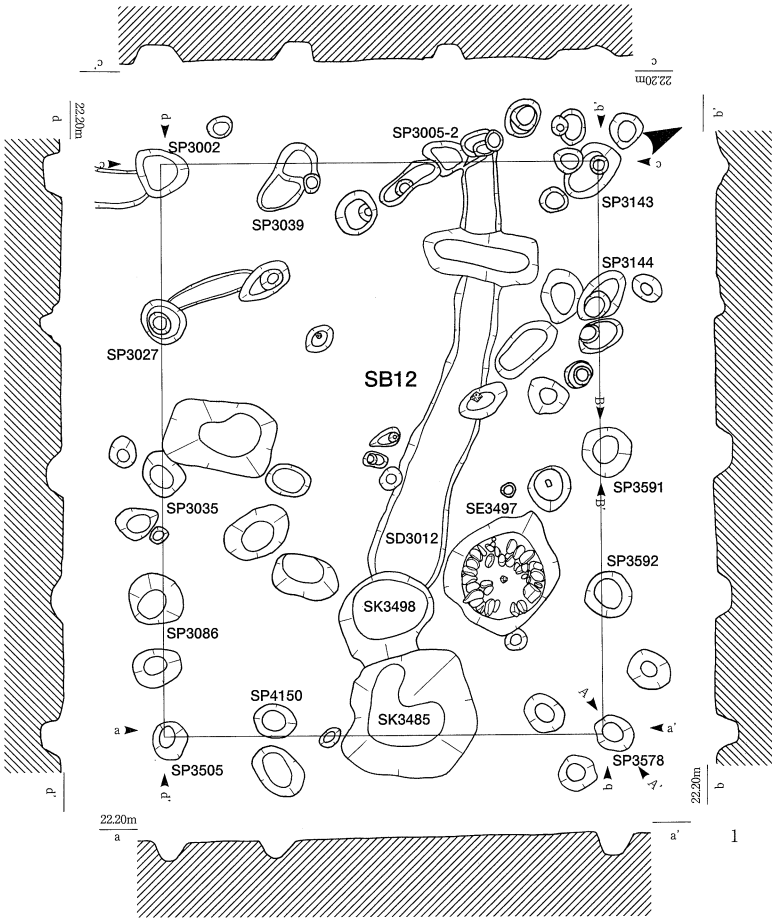
第26図　遺構実測図

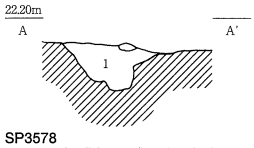
1. SB 9　2. SB10　3. SB11



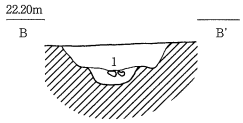
第27図　遺構実測図

SI1・SI2・SB12・SB13・SB14

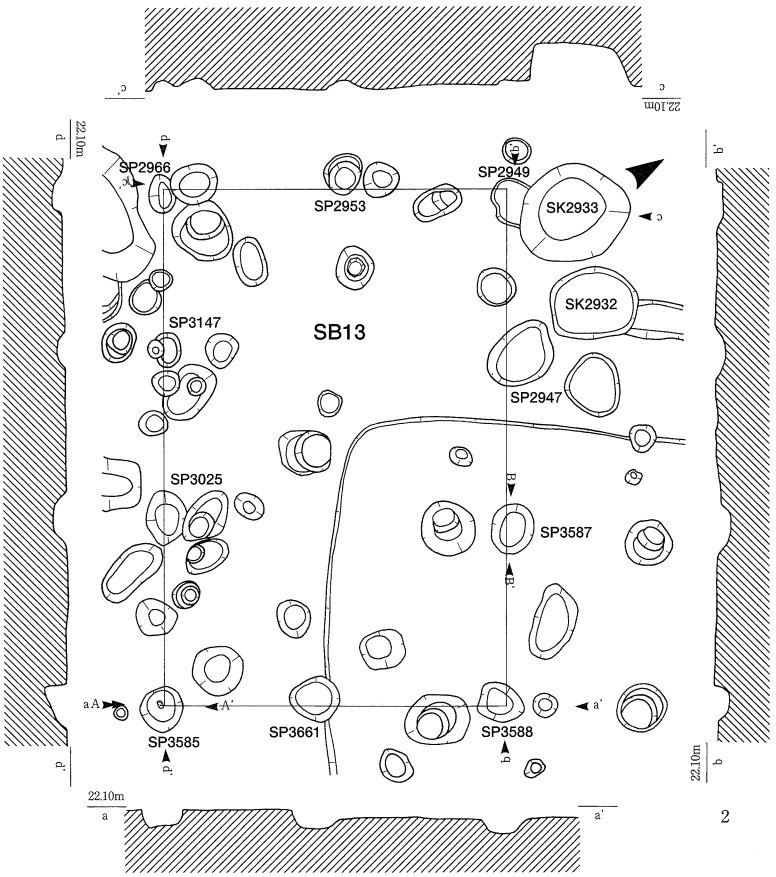


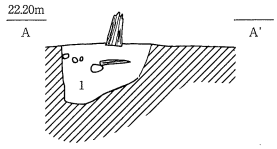


SP3578
1. 2.5Y4/2暗灰黄色シルト（3cm大の礫混）

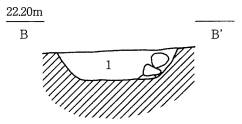


SP3591
1. 2.5Y4/1黄灰色砂質シルト（5cm大の礫混）

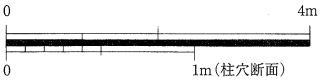




SP3585
1. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト（5cm大の礫混）



SP3587
1. 2.5Y4/2暗灰黄色シルト（礫混）

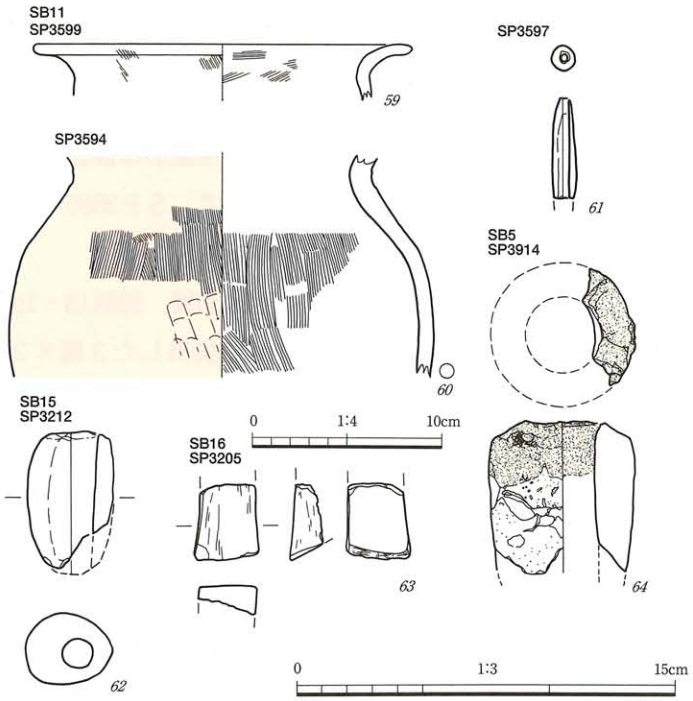


第28図　遺構実測図

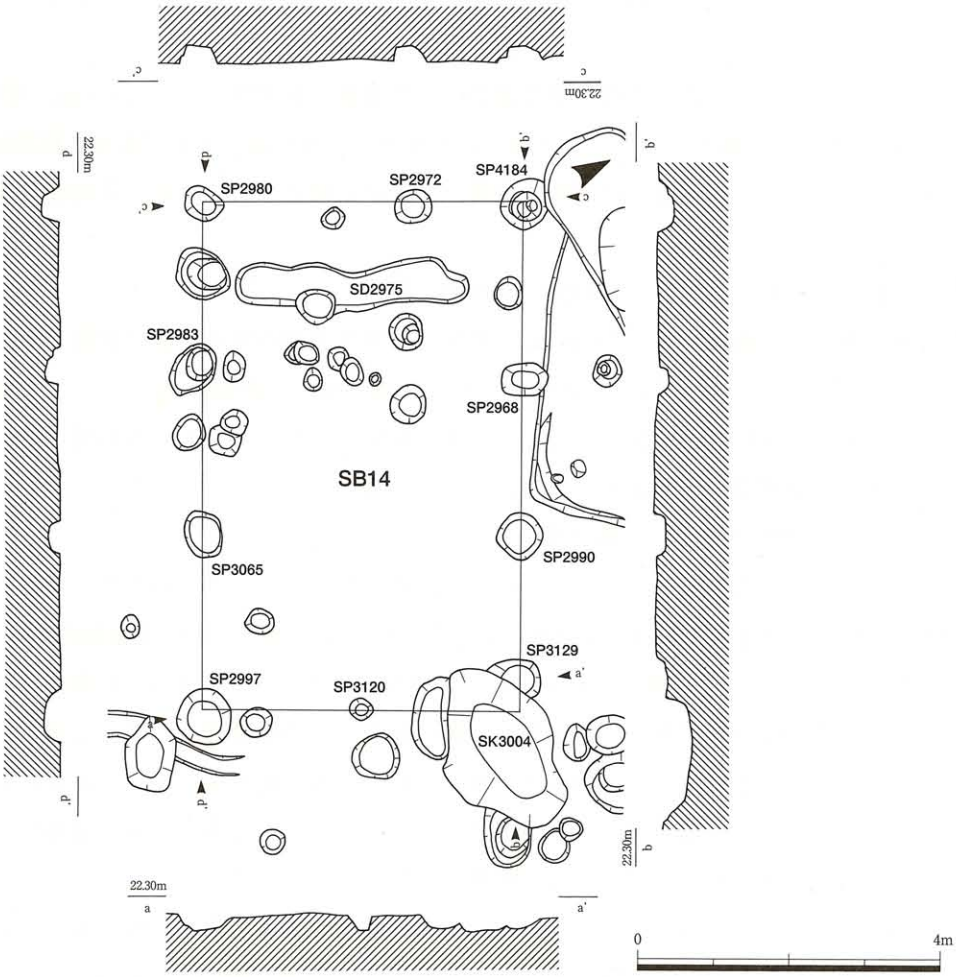
1. SB12　2. SB13

12号掘立柱建物（ＳＢ12，第27・28図，図版13・14）

Ｘ213Ｙ303に位置する４間×３間の東西棟側柱建物である。ＳＢ13と重複するが，柱穴の切り合い関係からＳＢ13よりは新しい。西側の柱穴１基は近世建物の柱穴のＳＰ585に切られて検出できなかった。桁行7.5m，梁行5.8m，平面積43.5m²である。主軸はＮ－62°－Ｗである。柱掘形は直径50cm～70cmの円形で，深さは15cm～25cm，ＳＰ3027のように段掘り状となる柱穴もある。掘形埋土は暗灰黄色シルトまたは黄灰色砂質シルトである。遺物は柱穴から土師器が出土している。



第29図　遺物実測図　（*59・60*　1/4，*61～64*　1/3）
SB５　SP3914（*64*）
SB11　SP3594（*60*）　SP3597（*61*）　SP3599（*59*）
SB15　SP3212（*62*）　SB16　SP3205（*63*）



第30図　遺構実測図
SB14

13号掘立柱建物（ＳＢ13，第27・28図，図版13・15）

ＳＢ12の北側で重複する３間×２間の東西棟側柱建物である。南東側でＳＩ２と重複しているが，切り合いではこれより新しい。桁行6.8m，梁行4.5m，平面積は30.6㎡である。主軸方向はＳＢ12とほぼ同じで，Ｎ－60°－Ｗである。柱掘形は直径30㎝～70㎝の円形で，深さは15㎝～32㎝である。掘形埋土は暗灰黄色砂質シルトの単層で，ＳＰ3585の上面には直径約10㎝の柱根が遺存していた。遺物は柱穴から土師器が出土している。

14号掘立柱建物（ＳＢ14，第27・30図，図版13・15）

ＳＢ12の北東30m，Ｘ215Ｙ300で検出した３間×２間の東西棟側柱建物である。わずかに北側でＳＩ１と重複し，これより新しい。桁行6.7m，梁行4.2m，平面積は28.14㎡である。主軸はＮ－63°－Ｗで，ＳＢ12とほぼ同じである。ＳＢ12～ＳＢ14はその主軸方向からほぼ同時期と考えられる。柱掘形は直径40㎝～70㎝の円形で，深さは11㎝～25㎝である。遺物は柱穴から須恵器と土師器が出土している。

15号掘立柱建物（ＳＢ15，第29・31図，図版13・16・17）

この建物からは谷の西側で検出した建物群となる。ＳＢ15はＸ200Ｙ270で検出した４間×２間の東西棟側柱建物である。ＳＢ16とは南東部分で重複し，柱穴の切り合い関係ではＳＢ16より古い。また，南北に伸びるＳＤ3461より新しい。桁行は11m，梁行は５m，平面積は55㎡である。主軸方向はＮ－50°－Ｗである。柱掘形は直径40㎝～70㎝の円形で，深さは15㎝～35㎝で，ＳＰ3209・ＳＰ3208などには柱痕跡が残る。柱痕跡には黒褐色砂質シルトが堆積し，掘形埋土には暗灰黄色砂質土が堆積している。遺物は柱穴から土師器・土錘が出土している。62はＳＰ3212から出土した。

16号掘立柱建物（ＳＢ16，第29・31図，図版13・16・17）

ＳＢ15に重複する２間×２間の側柱建物で，北東側に庇が付く。桁行4.8m，梁行3.7m，平面積は17.76㎡である。主軸方向はＳＢ15とほとんど変わらずＮ－52°－Ｅである。柱掘形はやや小さく直径30㎝～50㎝である。掘形埋土は黒褐色砂質シルトが主体をなしている。遺物は須恵器・土師器・砥石（63）が出土している。

17号掘立柱建物（ＳＢ17，第32図，図版16・17）

Ｃ地区調査区の西端，Ｘ197Ｙ262に位置する４間×３間の南北棟側柱建物である。南西隅は撹乱によって削平されてしまっている。桁行8.3m，梁行4.9m，平面積は40.67㎡で，主軸はＮ－31°－Ｅである。柱掘形は直径40㎝～50㎝の円形で，深さは10㎝～30㎝である。掘形埋土は主に黒褐色シルトである。遺物は須恵器・土師器の小片が出土している。

18号掘立柱建物（ＳＢ18，第32図，図版17）

Ｘ194Ｙ172に位置する３間×２間の南北棟側柱建物である。建物の東側の検出面が砂礫層であったためか東側柱列の柱穴４基は検出出来なかった。桁行は５mで，梁行は調査区壁面で検出したＳＰ3423から推定して4.8m，平面積は24㎡である。主軸はＮ－２°－Ｅである。柱掘形は直径50㎝～70㎝の円形で，深さは20㎝前後である。掘形埋土は黄灰色シルトの単層であるが，ＳＰ2911は上層遺構検出段階から検出していた柱穴で，この柱穴の埋土だけが黒褐色粘土質シルトであること，他の柱穴の深さが比較的浅いことから他の柱穴は上層が削平されていることを窺わせる。遺物の出土はない。

19号掘立柱建物（ＳＢ19，第32図，図版17）

Ｘ190Ｙ262に位置する３間×２間の南北棟側柱建物である。南北に伸びるＳＤ3431には切り合いで負けている。桁行は6.7m，梁行は4.8m，平面積は32.16㎡である。主軸はＮ－２°－Ｅでほぼ真北を

向く。柱掘形は直径60㎝～70㎝の円形であるが，桁行の中央の柱穴は南北共に直径30㎝と小さく，浅い。掘形埋土は東側の桁行の柱列は黄灰色シルト，西側はオリーブ黒色砂質シルトの単層が堆積しており，段掘りにはなっているが，柱痕跡は残っていない。遺物は須恵器・土師器が出土している。

20号掘立柱建物（ＳＢ20，第33図，図版17）

ＳＢ13の３ｍ北東に位置する３間×２間の南北棟側柱建物で，南側に１間の庇が付く。南東部分でＳＢ21と重複するが切り合い関係はない。北側の畠を構成するＳＤ3475よりは新しく，この畠の向きと主軸方向が等しいＳＢ15・16はこの建物より古いと言えよう。桁行9.5m，梁行4.8m，平面積は45.6㎡である。主軸方向はＮ－21°－Ｅである。柱掘形は直径50㎝～80㎝で，深さは10㎝～40㎝である。庇の柱掘形はこれより小さく直径は30㎝～50㎝である。掘形埋土は黒褐色シルトで，柱痕跡が判るものはない。遺物は土師器が出土している。

21号掘立柱建物（ＳＢ21，第33図，図版17・18）

ＳＢ20の南東に位置する３間×２間の南北棟側柱建物である。桁行は６ｍ，梁行は4.5m，平面積は27㎡である。主軸はＮ－１°－Ｅで，ほぼ北を向き，西に位置するＳＢ19と主軸を同じくし，同時期の建物と考えられる。柱掘形は直径50㎝～70㎝の円形で，深さは10㎝～30㎝である。掘形埋土には黒褐色シルトが堆積し，柱根跡にはオリーブ褐色砂質シルトが堆積している。遺物は土師器が出土している。

22号掘立柱建物（ＳＢ22，第34図，図版18）

Ｃ地区調査区西南端，Ｘ180Ｙ263で検出した３間以上×３間の側柱建物である。調査区外東側に延びている可能性があり，正確な規模，棟方向は不明であるが，３間×３間の建物であったとすれば，南北棟の側柱建物となり，桁行5.5m，梁行4.2m，平面積23.1㎡，主軸方向がＮ－28°－Ｅとなる。柱間は梁行のほうがやや狭い。ＳＢ23と重複し，ＳＰ3327とＳＰ3328との切り合い関係ではＳＢ22のほうが新しい。柱掘形は直径50㎝～60㎝で，深さは15㎝～25㎝，掘形埋土は黒褐色シルトである。遺物の出土はない。

23号掘立柱建物（ＳＢ23，第34図，図版18）

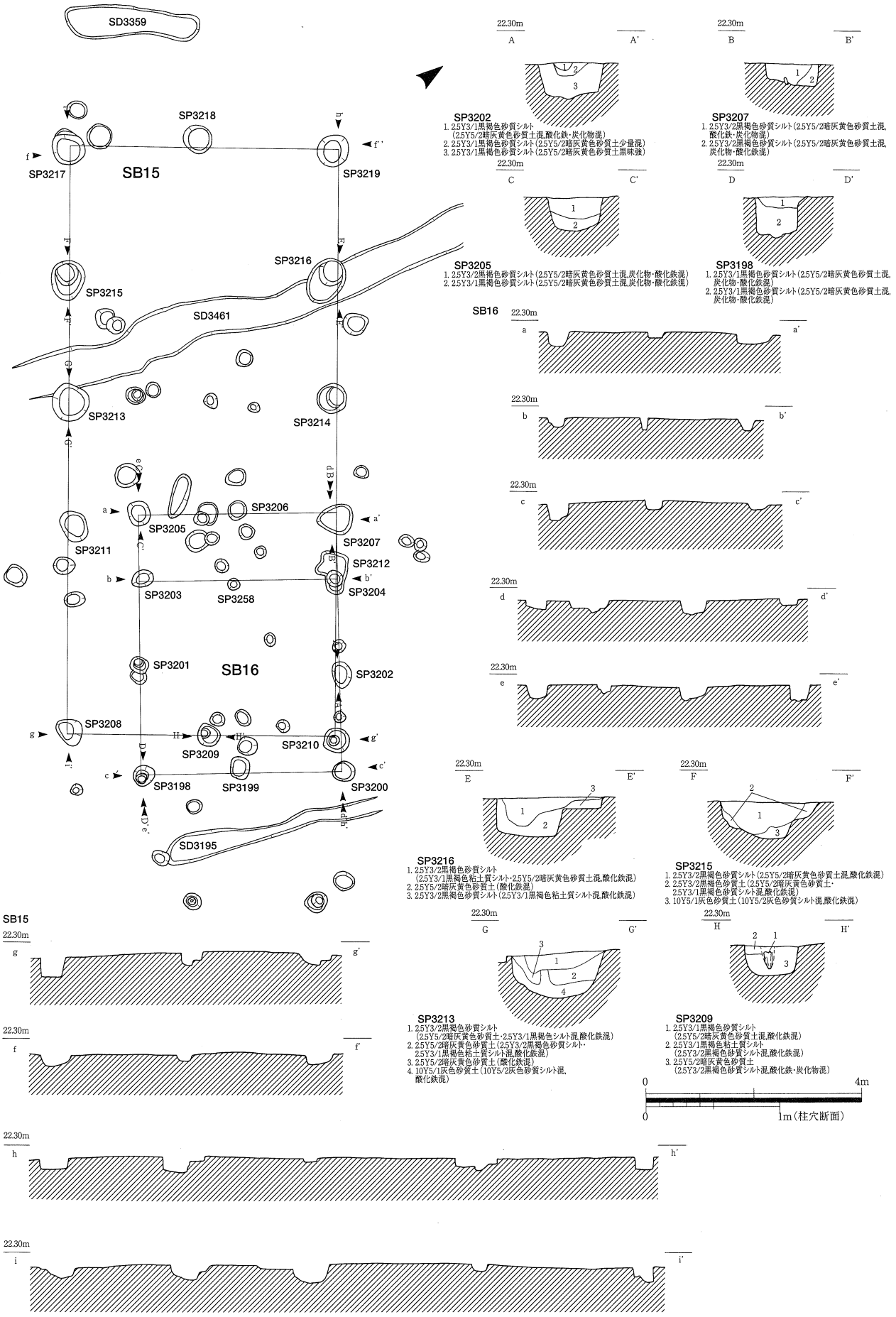
ＳＢ22と西側で重複する４間×２間の南北棟側柱建物である。桁行７ｍ，梁行4.1m，平面積28.7㎡である。主軸はほぼ北を向く，Ｎ－１°－Ｅである。柱掘形は直径60㎝～80㎝の円形で，深さは15㎝～40㎝である。掘形埋土は黒褐色シルトが，柱痕跡には灰色シルトが堆積しているようである。遺物には土師器がある。（島田美佐子）

24号掘立柱建物（ＳＢ24，第36・38図，図版20・43）

Ｄ地区北ブロックに位置する３間×２間の南北棟の側柱建物である。建物面積は39㎡を測る主屋級の建物で，方位を東に40°振るⅣ期の建物である。柱穴は円形，楕円形を呈し，長径0.4m～0.9m，深さ0.35m前後の規模を持つ。柱穴ＳＰ4229から土師器甕破片（65）が出土している。甕はロクロ成形され，口縁端部を上方に僅かにつまみあげる。

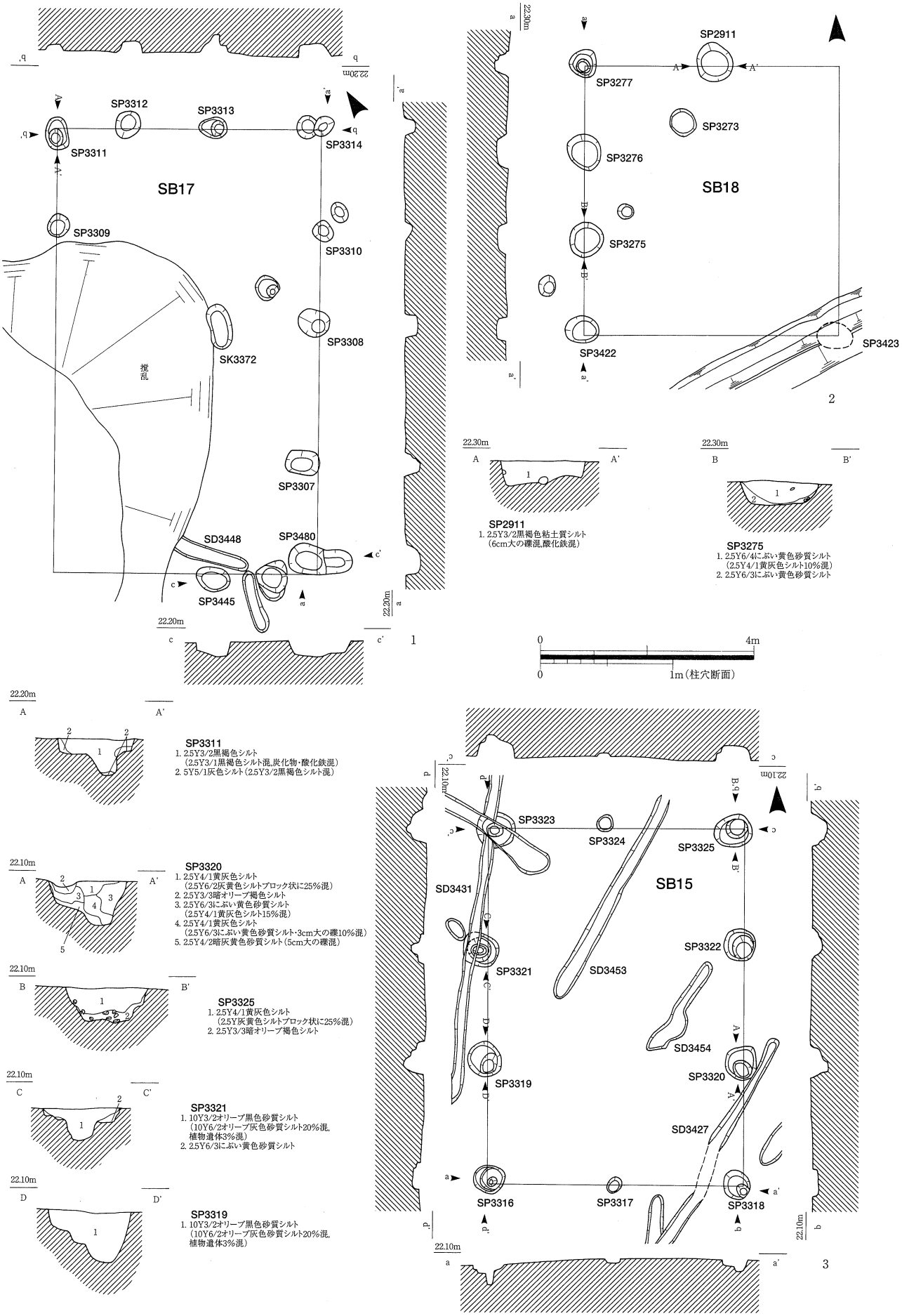
25号掘立柱建物（ＳＢ25，第35・36図，図版20）

Ｄ地区東ブロック北群に位置する２間×２間の総柱建物で，建物面積は12㎡を測る。直列配置された３棟の総柱建物群の北側建物に当たり，方位を６°東に振るⅧ期の建物である。３棟の総柱建物群は東側柱列を一直線上に揃える。柱穴の形状は円形，楕円形を呈し，長径は0.6m～0.9m，深さは0.25m前後を測る。南東角の柱穴は27号掘立柱建物の北西角の柱穴と重複し，これを切る。柱穴からの出土遺物はない。



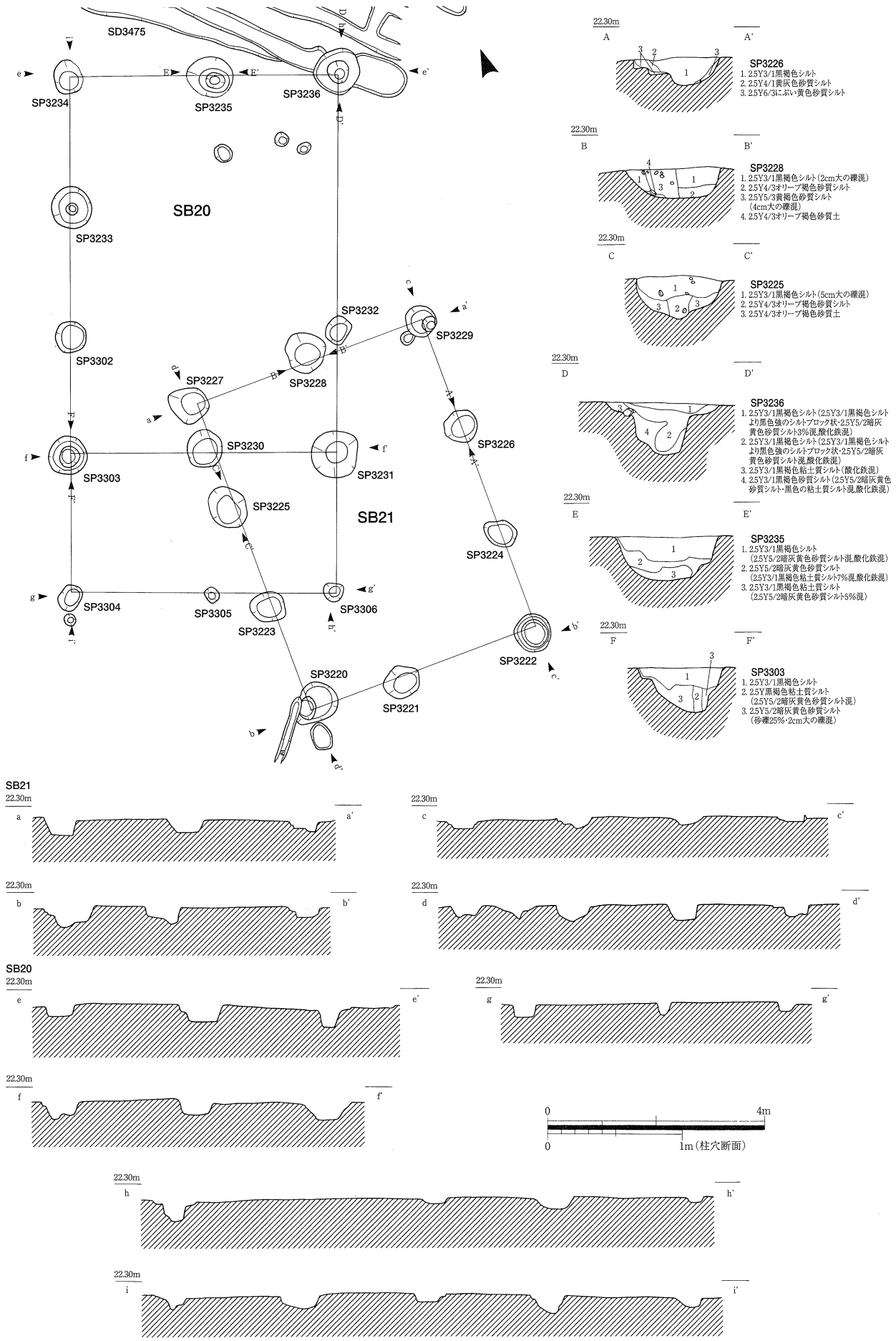
第31図　遺構実測図

SB15・SB16



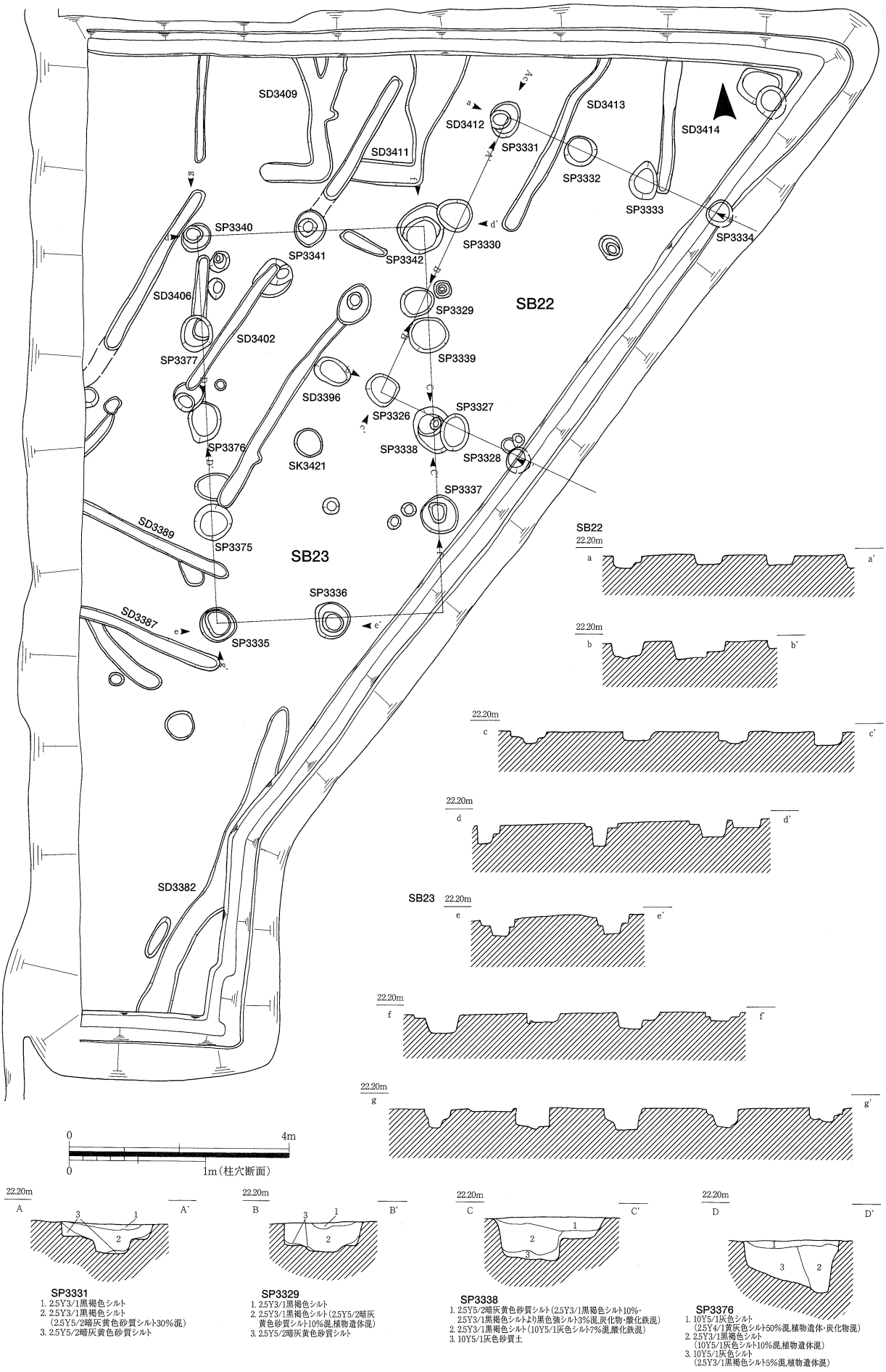
第32図　遺構実測図

1. SB17　2. SB18　3. SB19



第33図　遺構実測図

SB20・SB21



第34図　遺構実測図

SB22・SB23

26号掘立柱建物（ＳＢ26，第35・37図，図版20・21）

直列配置された総柱建物群の中央建物で，北側の25号総柱建物とは5.7mの間隔を持つ。２間×２間の建物で，方位を東に５°振るⅧ期の建物である。ほぼ正方形の建物で，面積は15m²を測る。柱穴は円形，楕円形を呈し，長径0.6m～１m，深さ0.3m前後を測る。柱穴からの出土遺物はない。

27号掘立柱建物（ＳＢ27，第35・37・38図，図版21・22・43）

東ブロック北群に位置する３間×２間の東西棟の側柱建物で，方位を62°西に振るＶ期の建物である。桁行の柱間の間隔が狭く，梁行との比率は1.1と低い。建物面積は24m²を測る。建物配置は28号掘立柱建物と重複関係にあるが柱穴は直接切り合い関係になく，前後関係は不明である。また，25号掘立柱建物とも重複し，切られる。柱穴は円形，楕円形を呈し，長径は0.34m～0.8mで比較的小規模なものが多く，深さは0.3m～0.55mを測る。柱穴には25号掘立柱建物に切られた柱穴以外の全てに柱根が残る。

ＳＰ4472の柱根（69）は長さ約35cmが遺存し，多角に面取りされた心持ち材で，長径は約16cmを測る。小口面は多方向から斜め方向の切り込みが入り，中央部は尖り気味である。ＳＰ4474の柱根（70）の長さは43cm遺存するが，上部は腐食によりやせ細る。多角形に面取りされ，長径は約15cmである。小口面は多方向からの切り込み痕を残す。ＳＰ4475の柱根（71）は長さ約60cmが遺存し，上部は腐食によってやせ細る。面取りされ，小口面は多方向からの斜め方向の切り込みが入り，中央部が尖る。長径は15.5cmを測る。

ＳＰ4414からは須恵器杯Ａ（66）・土師器甕（67・68）が出土した。ＳＰ4414は他の柱穴に比べて規模が大きく，重複の可能性を残す。杯Ａは口径12cmを測る８世紀第３四半期の遺物である。小甕は口径14.4cm，器高は11.6cmを測り，底部は大きな平底である。口縁端部は長めに上方に引き上げ，体部内外面はカキメ調整を加える。大型甕の口縁端部は面取りされ，内端部を僅かにつまみ上げる。体部内外面はカキメ調整を加える。土師器甕の時期は９世紀前半代が想定される。

28号掘立柱建物（ＳＢ28，第35・39・46図，図版21・43）

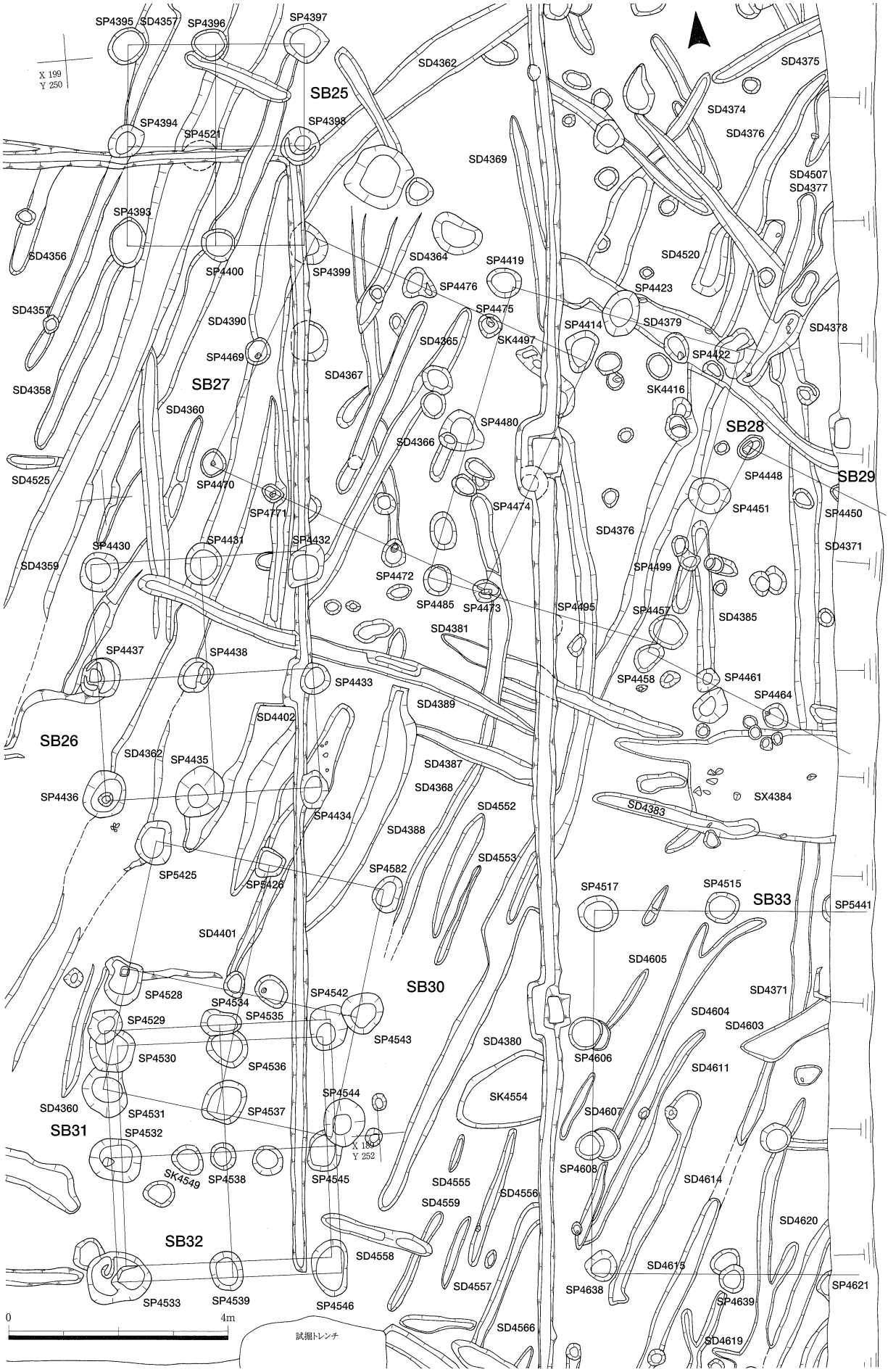
27号掘立柱建物の東側に位置し，一部重複する。また，29号掘立柱建物とも重複関係にあるが，いずれも前後関係は不明である。建物は２間×２間の南北棟の側柱建物で，建物面積は24m²を測る。方位を東に20°振るⅦ期の建物である。柱穴の形状は円形，楕円形を呈し，長径は0.55m～0.9m，深さは0.3m前後である。北東角の柱穴ＳＰ4422から須恵器杯Ａ（72）が出土した。口径12.2cm，器高3.7cmを測る８世紀第４四半期の遺物で，梅檀野窯跡群の製品である。また，ＳＰ4423からは土師器甕(73)が出土している。口径21.6cmを測り，口縁端部は面取り気味に納める。

29号掘立柱建物（ＳＢ29，第35・39・46図，図版21・22）

27号掘立柱建物の東側約３mの位置に並列配置された建物で，北側の桁柱列を揃える。建物は調査区外に延びるが，27号掘立柱建物と同様に，桁行の短い３間×２間の東西棟の側柱建物が想定される。方位を62°西に振るＶ期の建物である。柱穴は円形，楕円形を呈し，長径は0.3m～0.6mで比較的小規模で，深さは0.25m前後である。

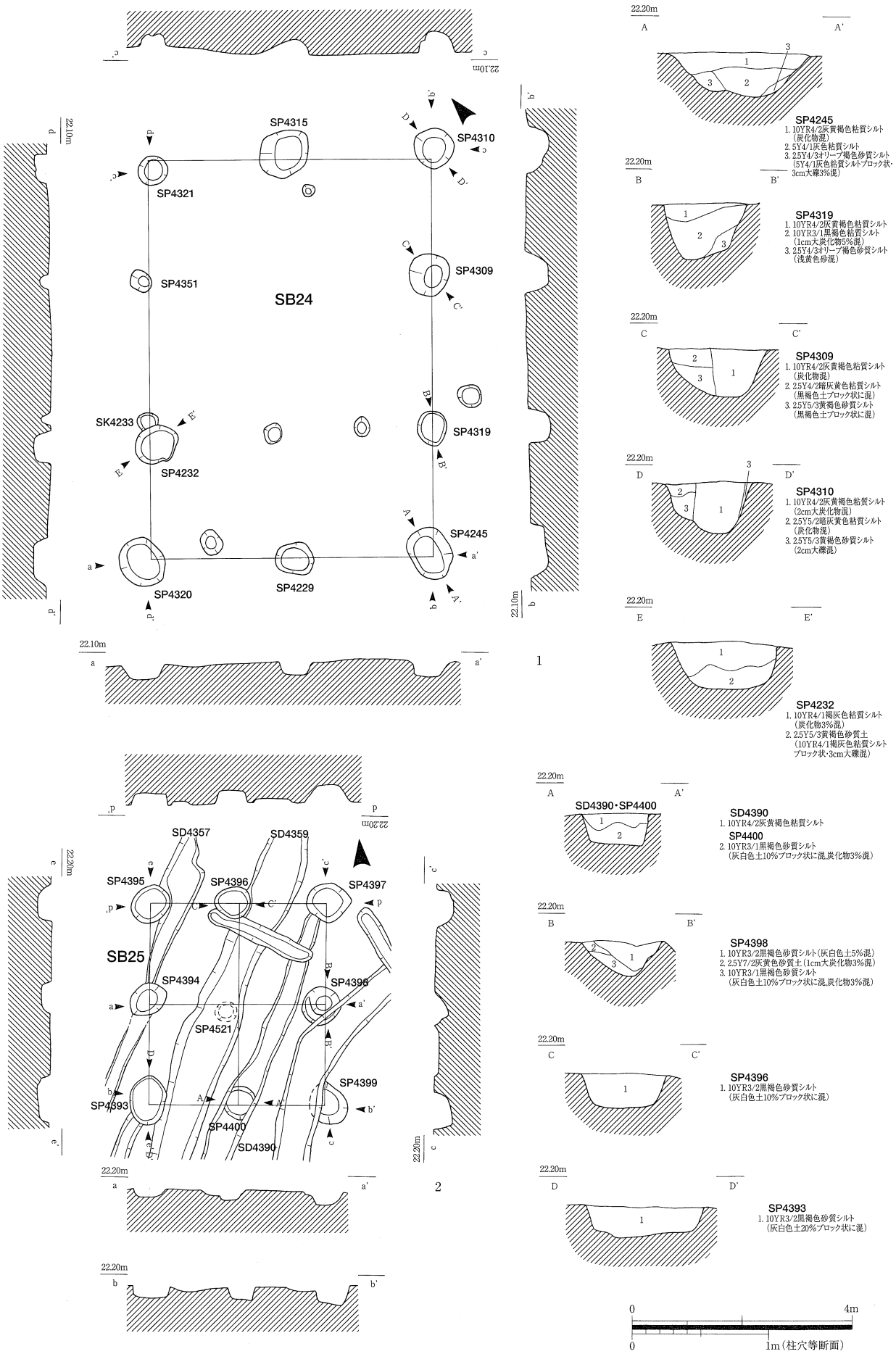
30号掘立柱建物（ＳＢ30，第35・39図，図版21）

東ブロック北群に位置する２間×２間の総柱建物で，直列配置された３棟の総柱建物群の南側建物と重複するが，新旧関係は明確でない。方位を東に22°振るⅦ期の建物で，面積は16m²を測る。柱穴は円形，楕円形を呈し，長径は0.5m～0.8m，深さは0.2m～0.3mを測る。柱穴からは須恵器，土師器の破片が出土したが時期は特定できない。



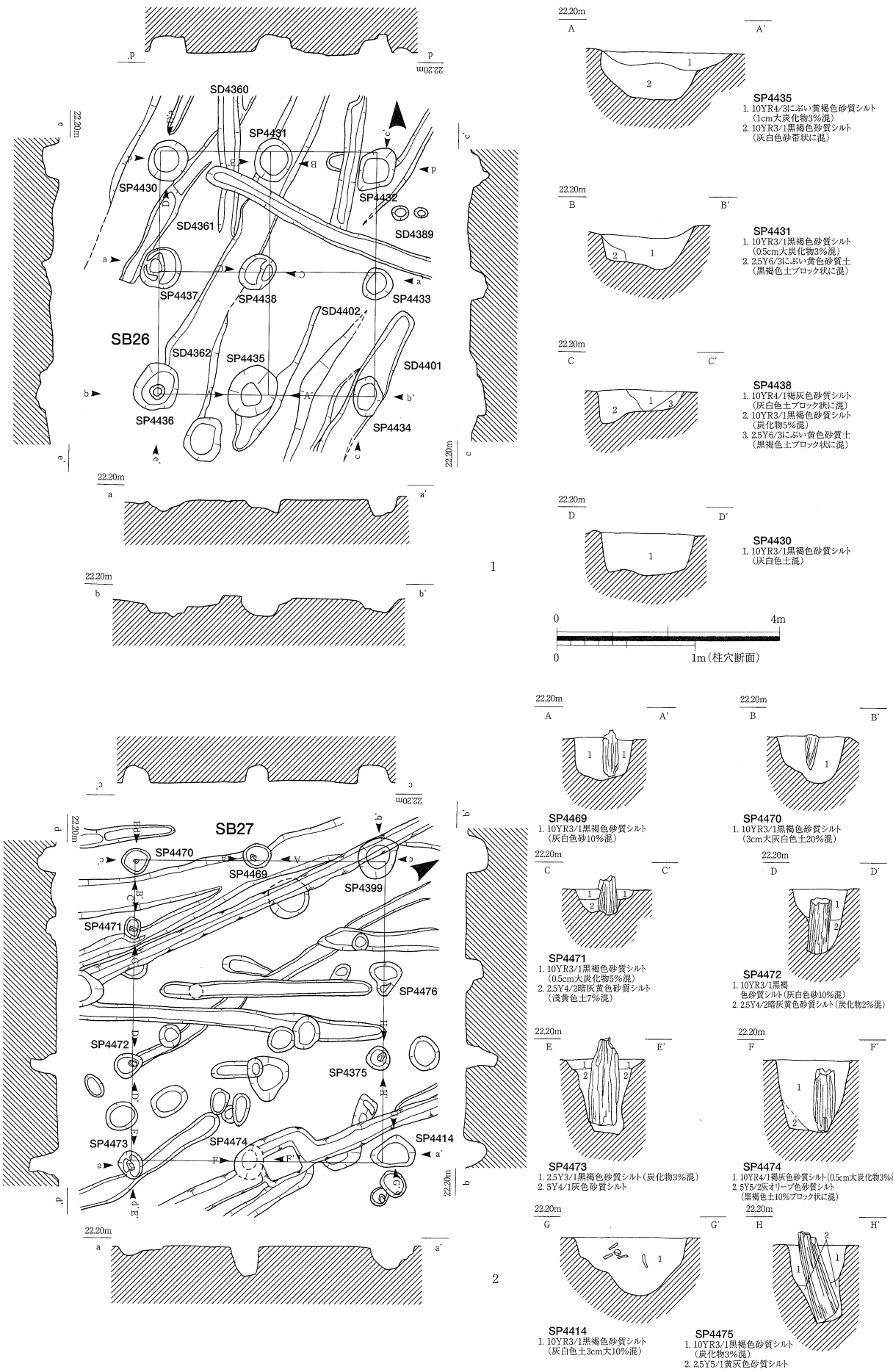
第35図　遺構実測図

SB25～SB33



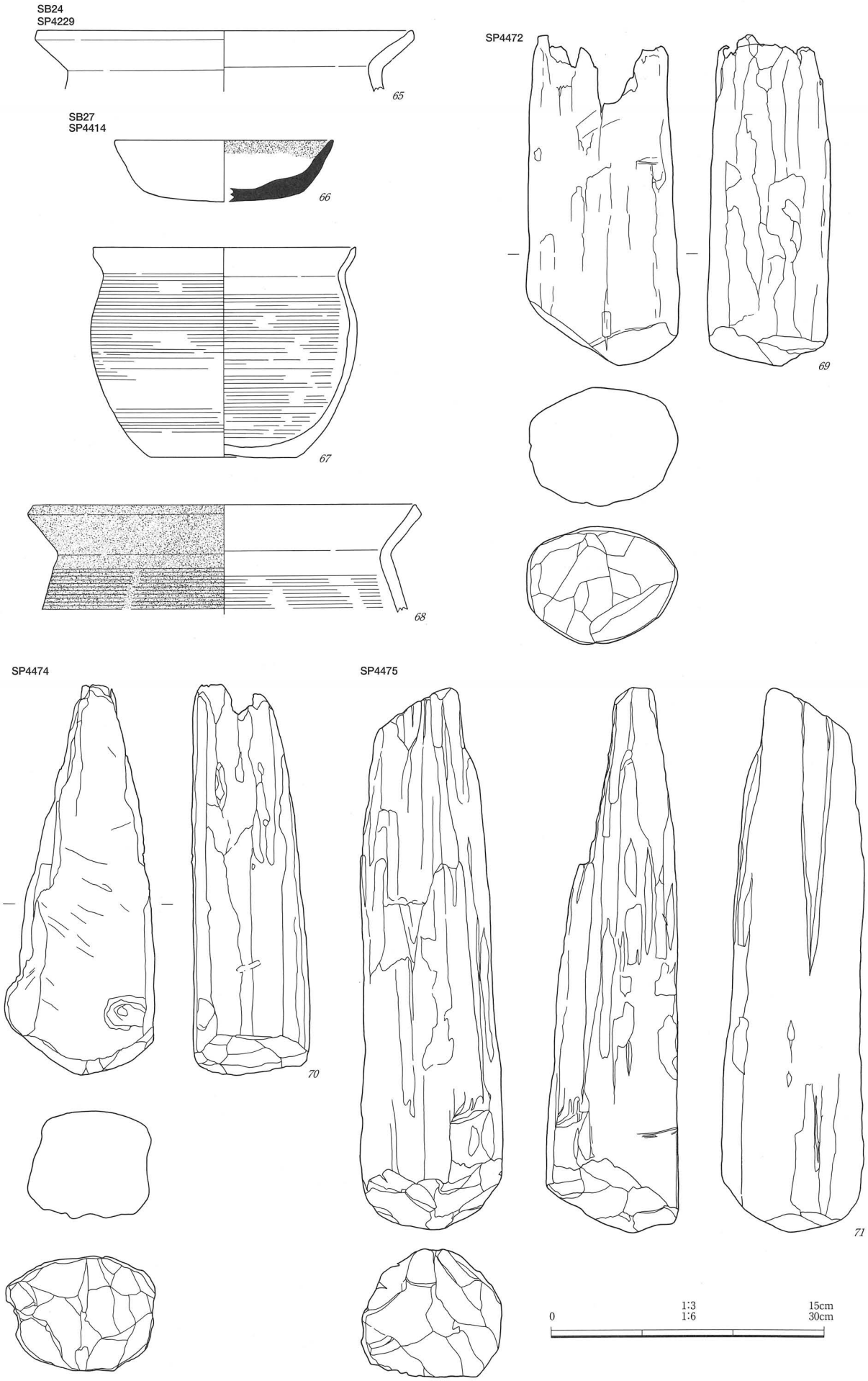
第36図　遺構実測図

1. SB24　2. SB25



第37図　遺構実測図

1. SB26　2. SB27



第38図　遺物実測図　（*65*～*68*　1/3，*69*～*71*　1/6）

SB24　SP4229（*65*）
SB27　SP4414（*66*～*68*）・SP4472（*69*）・SP4474（*70*）・SP4475（*71*）

31・32号掘立柱建物（ＳＢ31・32，第35・40図，図版21・23）

３棟の総柱建物が直列配置された建物群の南側建物に当たり，建て替えがみられる。方位を東に５°ないしは６°振るⅧ期の建物で，２間×２間の規模をもち，面積は18㎡である。柱穴は円形，楕円形を呈し，深さは0.2m～0.4mを測る。柱穴からは柱根の一部や土師器の破片が出土したが時期は特定できない。

33号掘立柱建物（ＳＢ33，第35・40図，図版23）

東ブロック北群に位置する南北棟の３間×２間の側柱建物で，31・32号総柱建物とは南側の梁柱列を揃え，約4.3mの東側に並列配置される。方位を東に６°振るⅧ期の建物で，面積は27㎡を測る。柱穴は円形を呈し，長径は0.5m～0.7m，深さは0.2m～0.3mを測る。柱穴からは土師器，須恵器の破片が出土したが時期は特定できない。

34号掘立柱建物（ＳＢ34，第41・42図，図版24）

Ｄ地区東ブロック南群に位置する南北棟の側柱建物で，配置からは35・36・37・38号掘立柱建物群と一部が重複関係にあるが柱穴は直接切り合い関係にない。方位を東に25°振るⅥ期の建物である。３間×２間の規模を持ち，面積は27㎡を測る。柱列は一部不揃いもあるが，柱穴は円形を呈し，長径は0.3m～0.6mを測るが，比較的小規模なものが多い。深さは0.13m～0.2mと全体的に浅い。柱穴からは製塩土器が出土したが時期は特定できない。

35号掘立柱建物（ＳＢ35，第41・42・46図，図版24図）

ほぼ同一方位を持つ４棟が重複する建物群内に位置する。４棟の建物は短期間の建て替えが想定される。35号掘立柱建物は３間×２間の東西棟の側柱建物で，柱穴の配置は不揃いである。方位を65°西に振るⅥ期の建物で，面積は21㎡を測る脇屋級の建物である。柱穴の形状は円形，楕円形を呈し，長径は0.4m～0.55m，深さは0.2m前後で全体に浅い。柱穴のＳＰ4751からは須恵器杯（74）が出土しているが時期は明確でない。

36号掘立柱建物（ＳＢ36，第41・42図，図版24）

４棟が重複する建物群に位置する東西棟の側柱建物で，調査区外に延びる。規模は３間×２間が想定され，面積は23㎡程度であろう。建物の方位は西に67°振る。柱穴は楕円形を呈し，長径は0.48m～0.58m，深さは0.2m前後で浅い。柱穴からの出土遺物はない。

37号掘立柱建物（ＳＢ37，第41・42図，図版24）

４棟が重複する建物群に位置する。建物は調査区外に延び全容は明確でないが，３間×２間の側柱建物が予想される。建物の方位は65°西に振る。柱穴は円形，楕円形を呈し，長径は0.4m～0.5m，深さは0.2m～0.3mで浅い。柱穴からの出土遺物はない。

38号掘立柱建物（ＳＢ38，第41・42・46図，図版24・43）

４棟が重複する建物群に位置し，大部分は調査区外に延びる。建物規模は３間×２間程度の東西棟の側柱建物が想定される。方位は63°西に振るⅤ期の建物である。柱穴は楕円形を呈し，長径は0.4m～0.48mと全体に小規模で，深さも0.2m～0.3mと浅い。柱穴のＳＰ4778から土師器甕（75）が出土した。口径11㎝，器高7.3㎝の小甕で，口縁端部は丸く納める。体部内外面はロクロナデ調整を施す。

39号掘立柱建物（ＳＢ39，第41・43図，図版24・25）

東ブロック南群に位置し，３棟の建物が重複する。39号掘立柱建物は３間×２間の南北棟の側柱建物で，面積は37㎡を測る主屋級の規模をもつ建物である。方位は20°東に振るⅦ期の建物である。柱穴の形状は楕円形を呈し，長径は0.5m～0.9mで相対的に大きく，深さは0.3m前後である。

北東角の柱穴ＳＰ4788に直径12㎝の柱根が残る。土器類は須恵器，土師器の破片が出土しているが時期は特定できない。

40号掘立柱建物（ＳＢ40，第41・43・46図，図版24・25）

３棟が重複する建物の１棟で，39号掘立柱建物と同一場所での建て替えが想定される。３間×２間の南北棟の側柱建物で，面積は25㎡を測る。方位は東に22°振るⅦ期の建物である。柱穴は楕円形を呈し，長径は0.44ｍ～0.64ｍ，深さは0.3ｍ前後である。柱穴のＳＰ4796から加工板（77）が出土した。板材は腐食が進むが，厚さ1.4㎝，幅12㎝前後の材である。

41号掘立柱建物（ＳＢ41，第41・43・46図，図版24・25・43）

３棟が重複する建物の１棟で，３間×２間の東西棟の側柱建物である。建物の方位は61°西に振るⅤ期の建物で，面積は31㎡を測る。柱穴は円形，楕円形，方形を呈し，長径は0.5ｍ～0.7ｍ，深さは0.3ｍ前後が多いが，ＳＰ4808は深く0.54㎝を測る。

北桁列の西側２柱穴に柱根が残る。その中のＳＰ4808の柱根の直径は18㎝前後である。また，北東角の柱穴ＳＰ4824から土師器鍋（78）が出土した。口径は32.2㎝を測り，口縁端部を僅かにつまみ上げる。体部内外面はカキメ調整を加える。時期は９世紀前半が推定され，混入品であろうか。

42号掘立柱建物（ＳＢ42，第44・45図，図版24）

45号掘立柱建物と直列配置された南側建物で，３間×２間の南北棟の側柱建物である。２棟の建物と部分的に重複するが，新旧関係は明確でない。建物の一部は調査区外に延びる。方位は25°東に振れるⅥ期の建物である。建物面積は34㎡を測り主屋級である。柱穴は円形，楕円形を呈し，長径は0.6ｍ～0.9ｍで角の柱穴が比較的大きい。深さは0.2ｍ～0.4ｍであるが，ＳＰ4884は0.6ｍと深く，底部近くに柱の断片が残る。土器類の出土はない。

43号掘立柱建物（ＳＢ43，第44・45図，図版24）

建物の大部分が調査区外に延びるが，３間×２間程度の側柱建物と推定される。方位は21°東に振れるⅦ期の建物であろう。柱穴は円形，楕円形を呈し，長径は0.43ｍ～0.5ｍで相対的に小さい。深さは0.2ｍ～0.4ｍを測る。柱穴からは須恵器が出土したが時期は特定できない。

44号掘立柱建物（ＳＢ44，第44・45・46図，図版24・25・76）

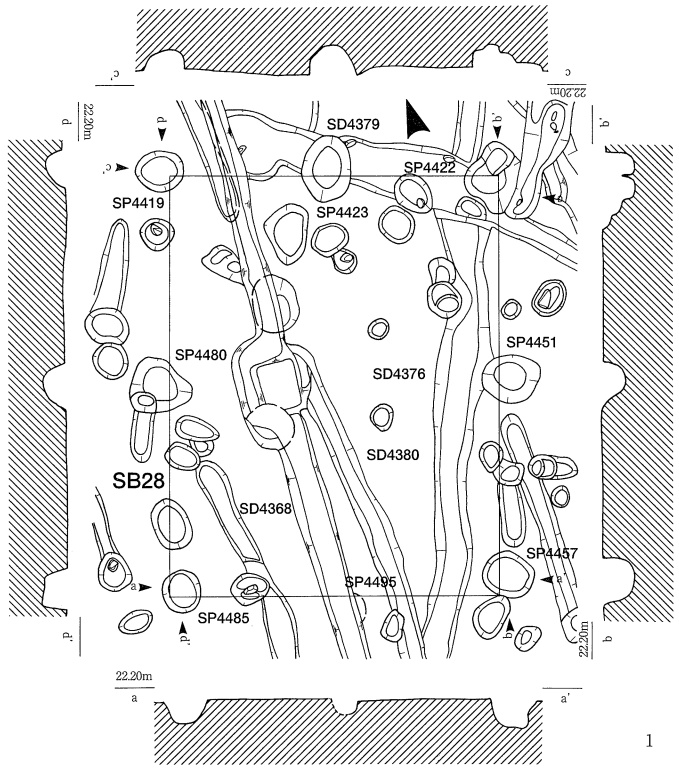
建物の半分が調査区外に延びるが，４間×２間程度の側柱建物が想定される。方位を東に29°振るⅤ期の建物である。柱穴は円形，楕円形を呈し，長径は0.6ｍ～0.7ｍを測り，深さは0.2ｍ～0.3ｍである。北西角の柱穴ＳＰ4889には礎盤（79）が敷かれる。礎盤は部材を切り割りしたものである。

45号掘立柱建物（ＳＢ45，第44・45図，図版24・25）

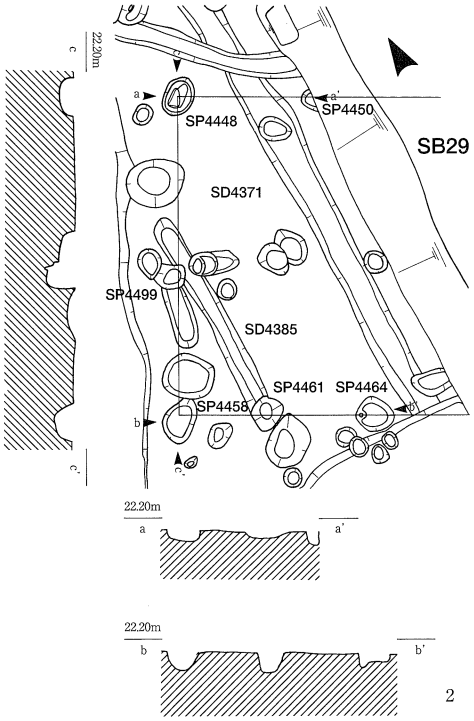
42号掘立柱建物柱と直列配置された北側の建物である。３間×２間の南北棟の側柱建物で，方位を東に23°振るⅥ期の建物である。面積は36㎡を測り，主屋級の規模をもつ。柱穴は楕円形，円形を呈し，長径は0.5ｍ～0.9ｍを測り，比較的規模が大きい。深さは0.4ｍ程度である。柱穴からは須恵器・土師器が出土したが時期は特定できない。

46号掘立柱建物（ＳＢ46，第46・47・48図，図版26）

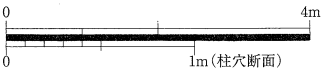
Ｄ地区西ブロックの建物で，３棟の掘立柱建物が重複する。２間×１間分が検出されたが，大部分が調査区外に延び棟方向等は不明である。方位は東に７°（東西棟であれば西に83°）振れるⅧ期の建物である。柱穴は楕円形，円形を呈し，長径は0.45ｍ～0.75ｍ，深さは0.2ｍ～0.7ｍと不揃いで，最も深いＳＰ5050には柱根が残る。柱根の直径は16㎝前後である。また，南東角の柱穴ＳＰ5049からは加工板(80）が出土した。幅約６㎝，厚さ約1.5㎝の板材で抉りが入り，漆が付着する。その他の柱

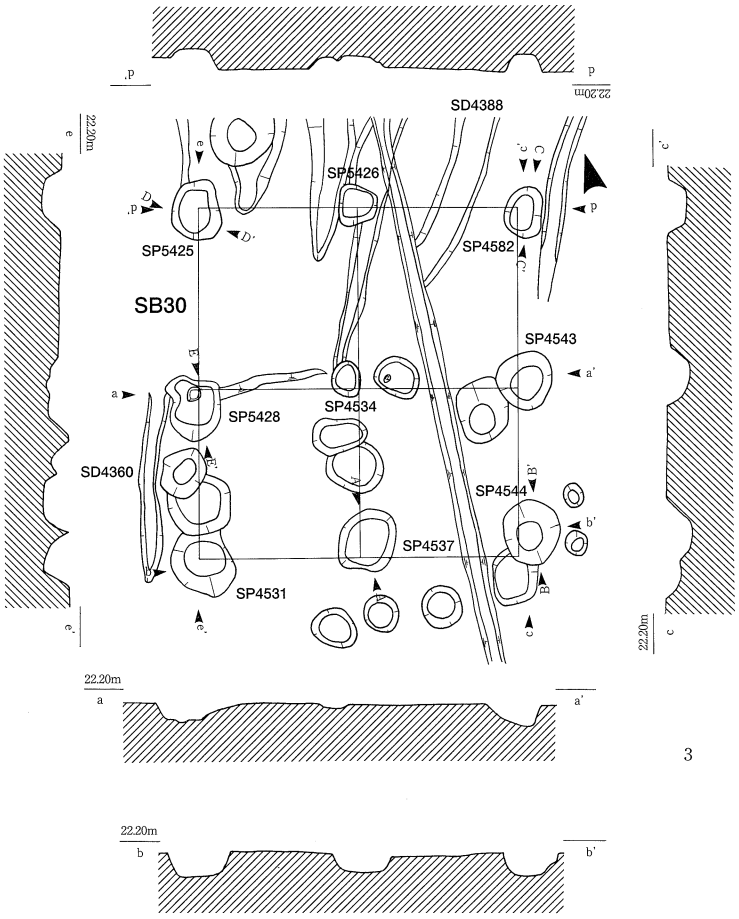


1

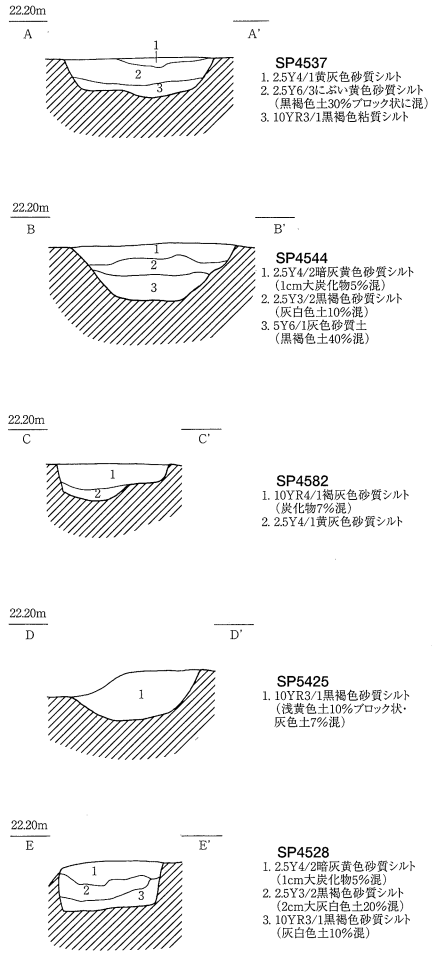


2



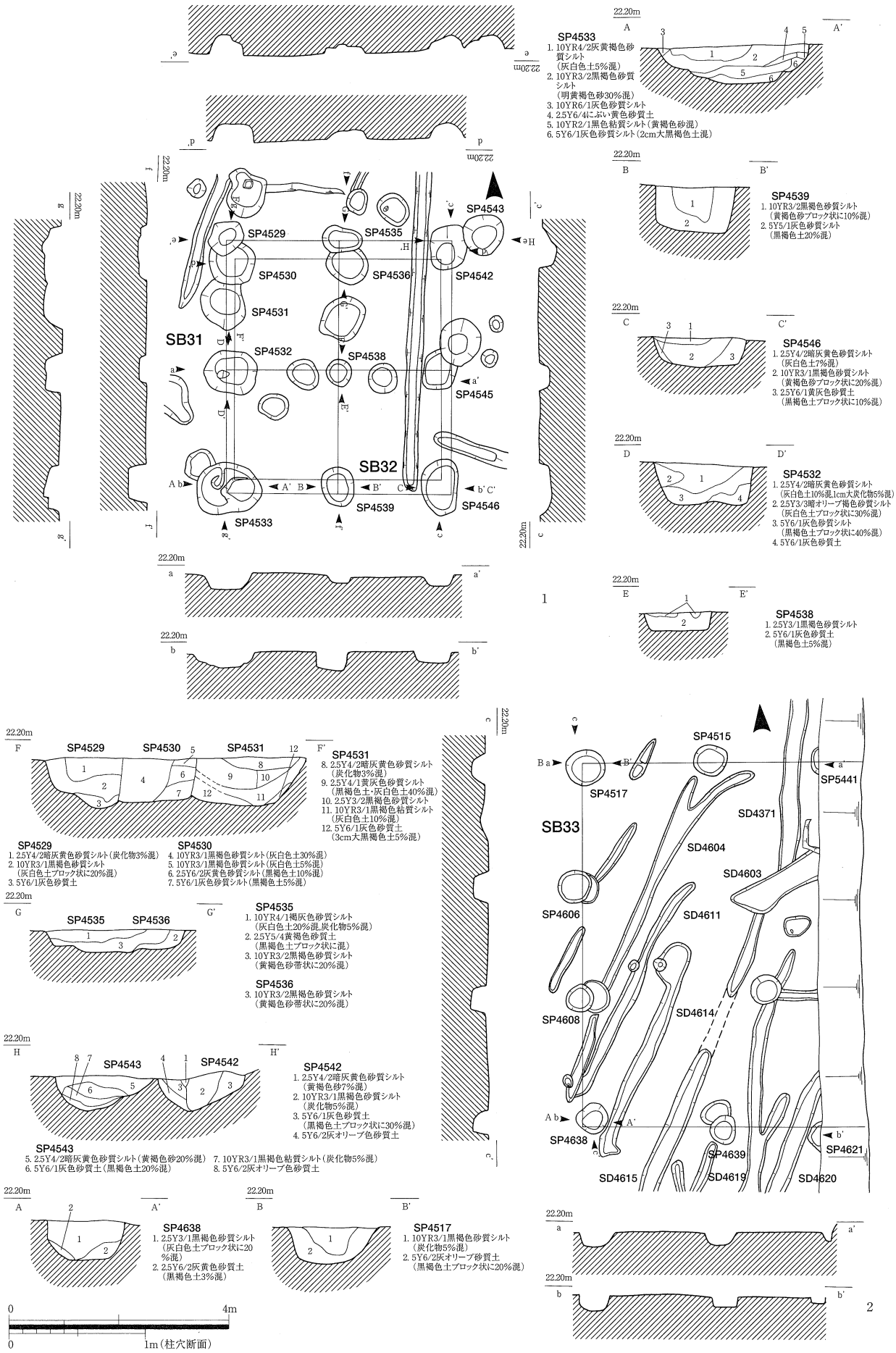


3



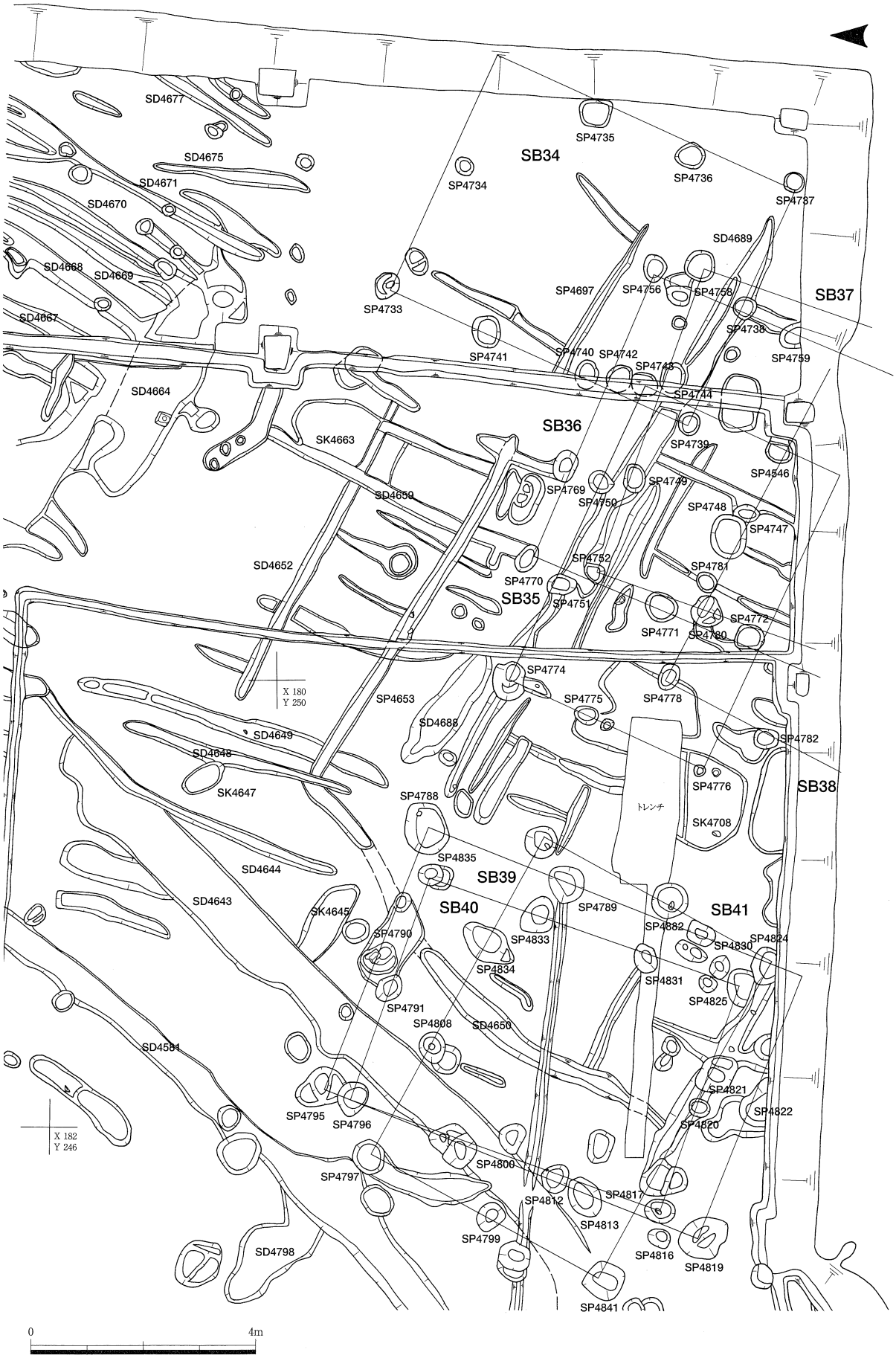
第39図　遺構実測図

1. SB28　2. SB29　3. SB30



第40図　遺構実測図

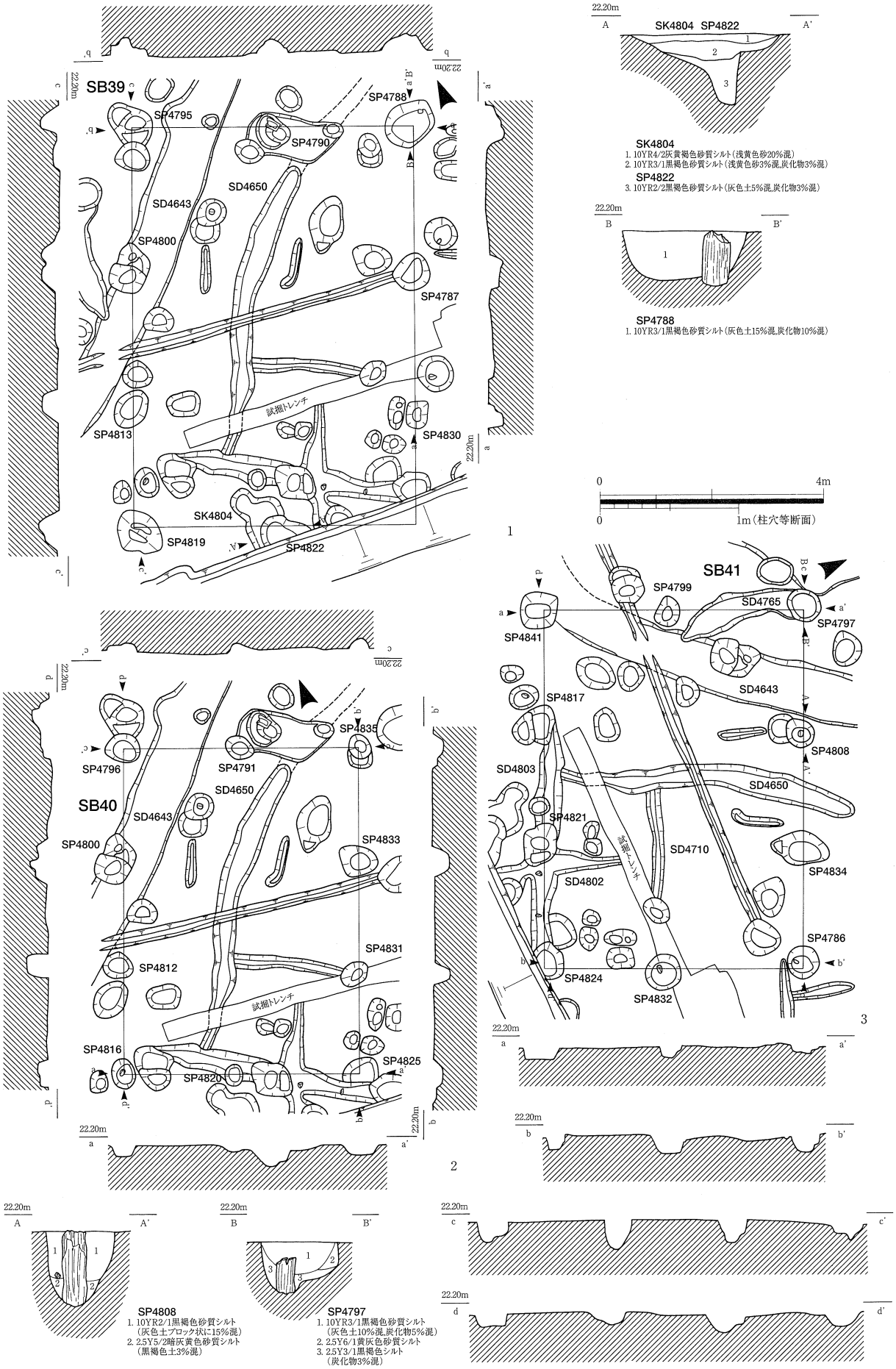
1．SB31・SB32　2．SB33



第41図　遺構実測図
SB34～SB41

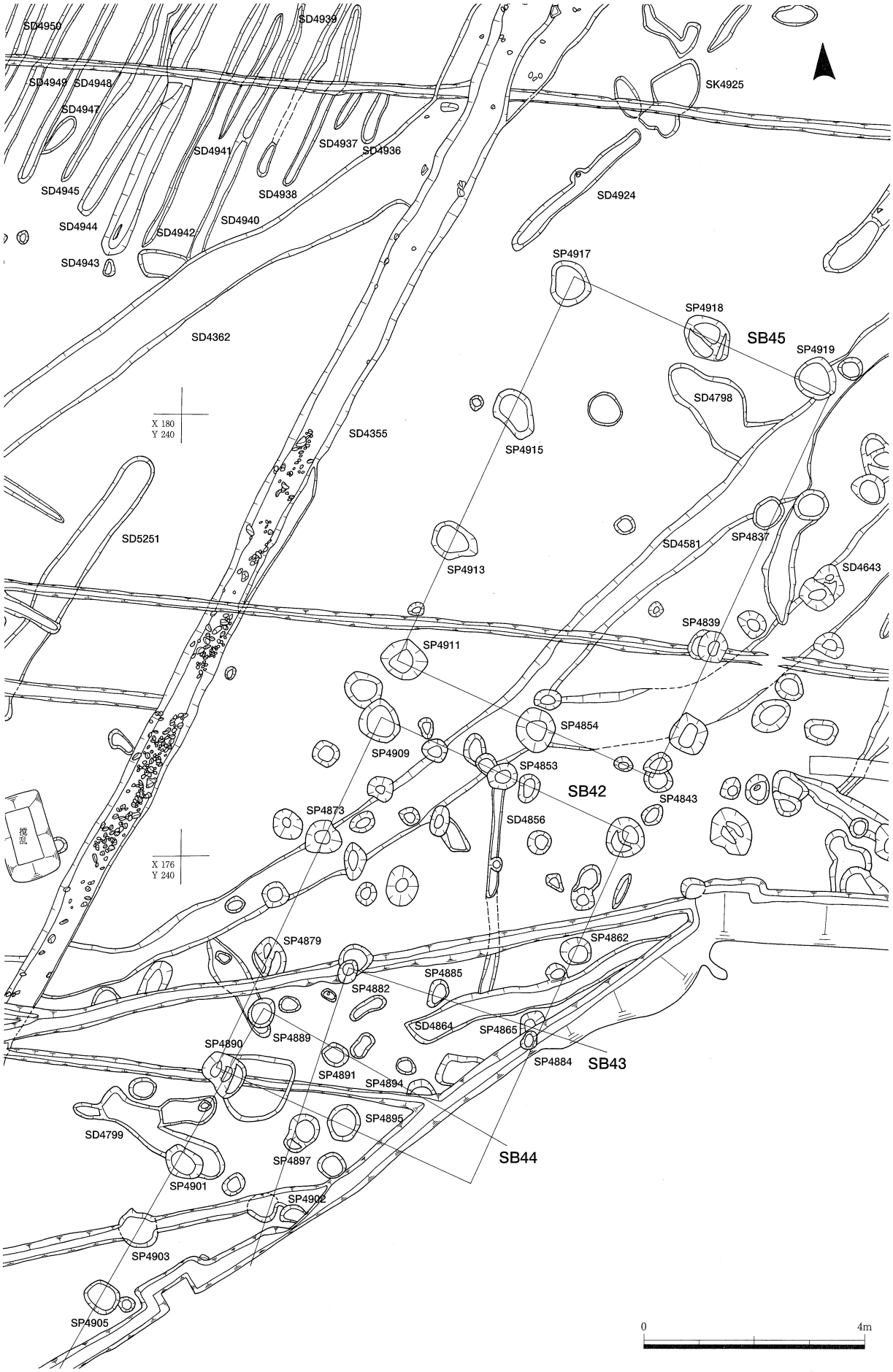
第42図　遺構実測図

1. SB34　2. SB35　3. SB36　4. SB37　5. SB38



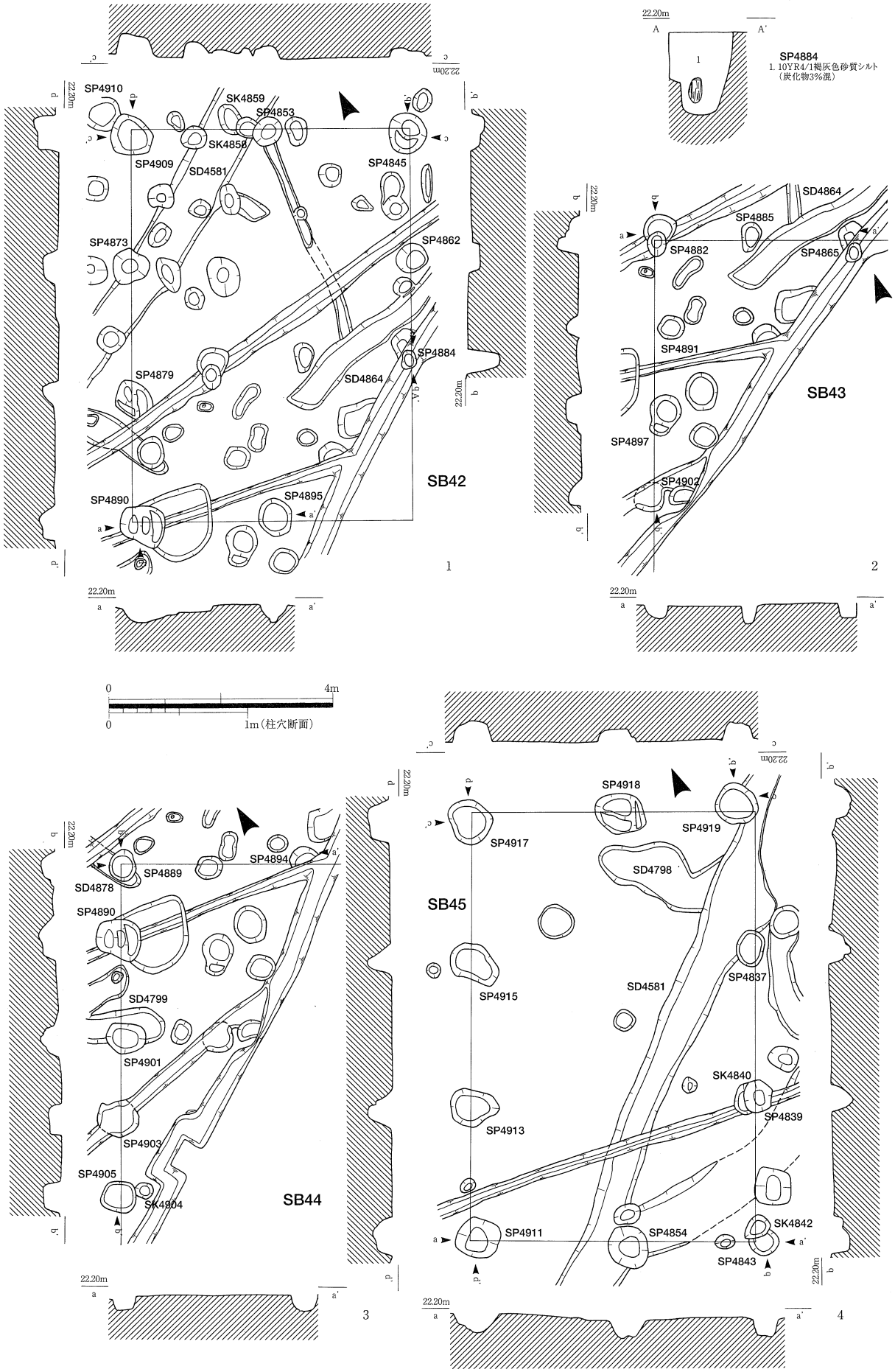
第43図　遺構実測図

1. SB39　2. SB40　3. SB41



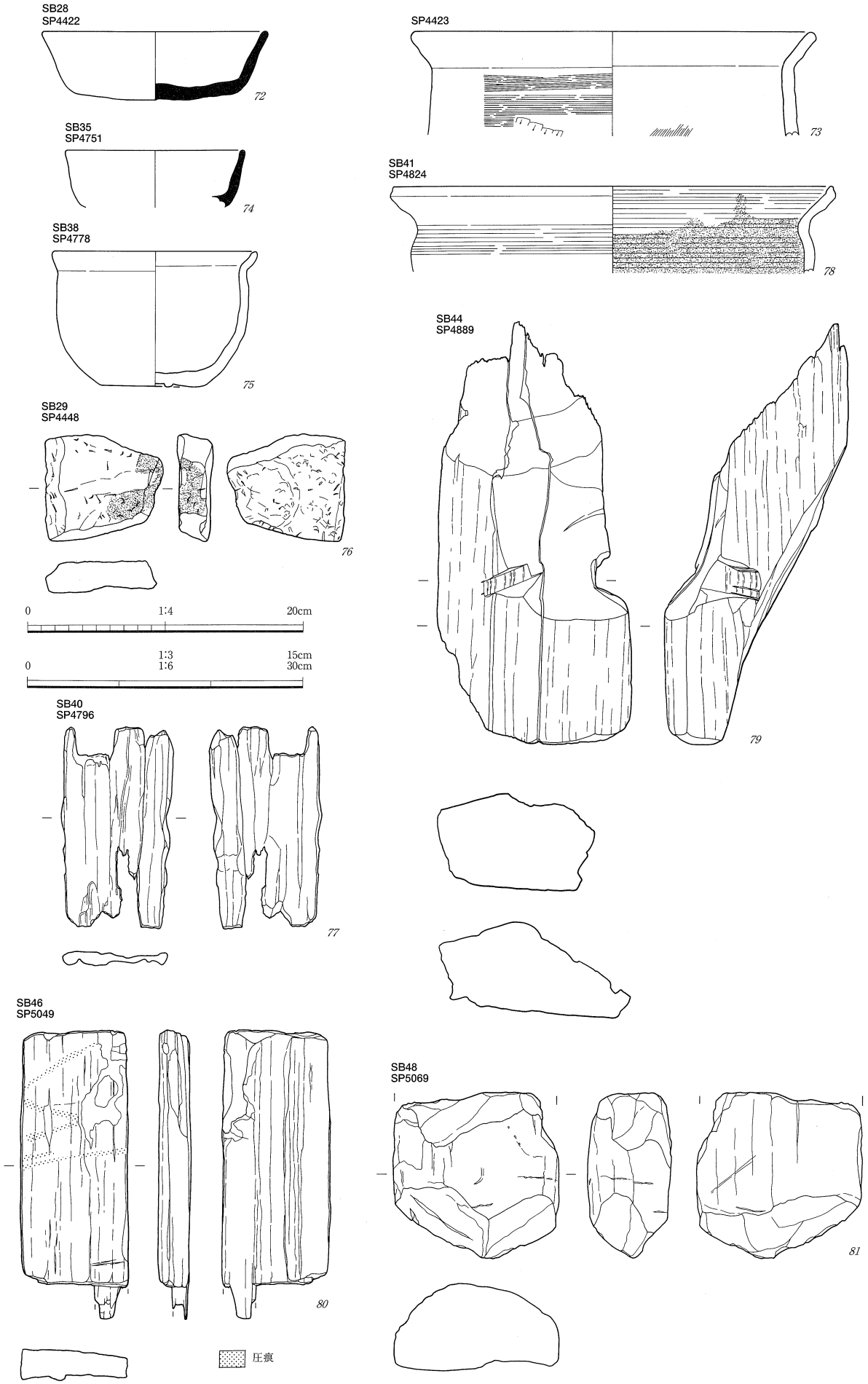
第44図　遺構実測図

SB42～SB45



第45図　遺構実測図

1. SB42　2. SB43　3. SB44　4. SB45



第46図　遺物実測図　（*72*～*75*　1/3，*78*　1/4，*76*・*77*・*79*～*81*　1/6）

SB28　SP4422（*72*）・SP4423（*73*）　SB29　SP4448（*76*）　SB35　SP4751（*74*）　SB38　SP4778（*75*）
SB40　SP4796（*77*）　SB41　SP4824（*78*）　SB44　SP4889（*79*）　SB46　SP5049（*80*）　SB48　SP5069（*81*）

穴からは須恵器・土師器が出土したが時期は特定できない。

47号掘立柱建物（ＳＢ47，第47・48図，図版26）

46・48号掘立柱建物と重複する側柱建物で，大部分は調査区外延びる。２間×１間分を検出したが棟方向は不明である。方位は東に２°（東西棟であれば西に88°）振れ，Ⅸ期の建物と推定される。柱穴の形状は楕円形で，長径は0.3m～0.5m，深さは0.25m前後である。柱穴からは土師器・須恵器・加工棒などが出土したが時期は特定できない。

48号掘立柱建物（ＳＢ48，第46・47・48図，図版26・48）

47号掘立柱建物と同一場所で重複する総柱建物で，調査区外に延びる。１間×１間分が検出され，方位を東に15°振るⅦ期の建物である。柱穴は楕円形で，長径は0.55m～0.68mと比較的大きい。深さは0.3m前後である。柱穴ＳＰ5069に柱根（81）が遺存した。直径18cmの丸太を半裁した柱で，小口面は尖る。

49号掘立柱建物（ＳＢ49，第47・48・51図，図版26・76）

西ブロックに位置する建物で，２間×２間分を検出した。南北棟の側柱建物と推定され，方位を８°東に振るⅧ期の建物であろう。柱穴は楕円形を呈し，長径は0.5m～0.7m，深さは0.2m～0.5mを測り，最も深い南東角の柱穴ＳＰ5134には柱根（82）が残る。長さ約92cmが遺存し，直径は約22cmである。柱穴からは須恵器・土師器・斎串（83）が出土したが時期は特定できない。

50号掘立柱建物（ＳＢ50，第47・48図，図版26）

49・51号掘立柱建物と重複する建物で，大部分は調査区外に延びる。２間×１間分が検出され，方位を東に26°振るⅥ期の側柱建物と推定される。柱穴は楕円形を呈し，長径は0.4m前後，深さは0.13mと浅い。柱穴からは土師器が出土したが時期は特定できない。

51号掘立柱建物（ＳＢ51，第47・48・51図，図版26）

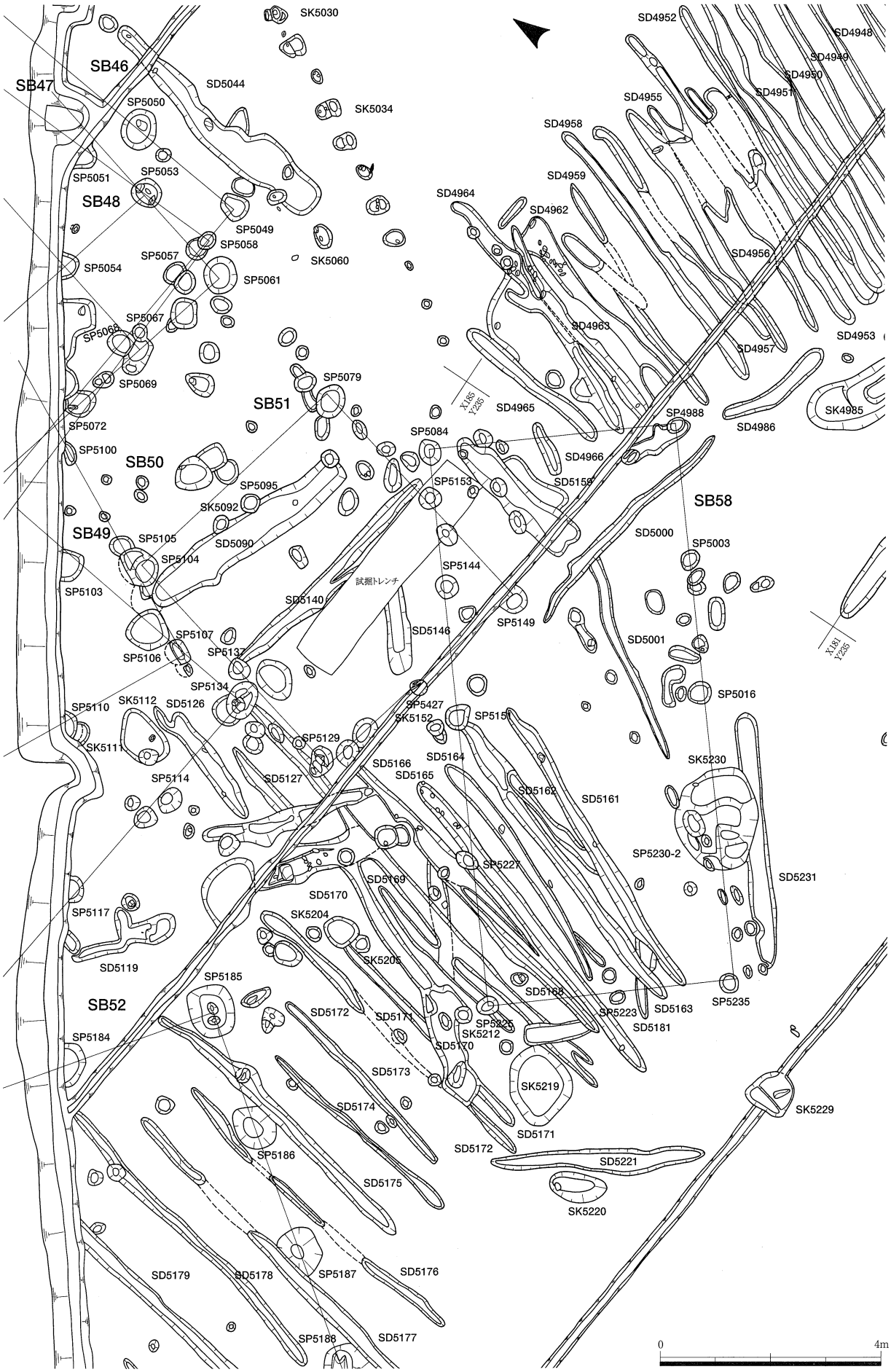
49号掘立柱建物と重複する２間×２間の南北棟の側柱建物である。建物面積は23m²で，桁行が短い。方位を12°に振るⅦ期の建物である。柱穴は円形，楕円形を呈し，長径は0.38m～0.6m，深さは0.2m～0.4mと不揃いである。４角の柱穴が比較的大きく，深い傾向にある。柱穴からは土師器・須恵器・羽口・礎盤（84）などが出土したが時期は特定できない。

52号掘立柱建物（ＳＢ52，第49・51図，図版27・28・43・77）

西ブロックに位置する４間×２間の側柱建物で，３分の１が調査区外に延びる。建物面積は52m²の主屋級でも大型の規模を持ち，方位は37°東に振るⅣ期の建物である。柱穴は楕円形を呈し，長径は0.68m～0.94mを測り大きい。深さは0.24m～0.44mを測る。北東角の柱穴近くの建物内に鍛冶滓が多く混じる炭化物層が検出された。炭化物層は20cm程度の円形に広がり，浅い堀り込みの下部構造をもつ。上部施設は遺存していないが，鍛冶関連施設と推定される。柱穴からは須恵器杯Ａ（85）・土師器・礎盤（86）が出土した。杯Ａは口径14cmを測る８世紀第１四半期の遺物である。

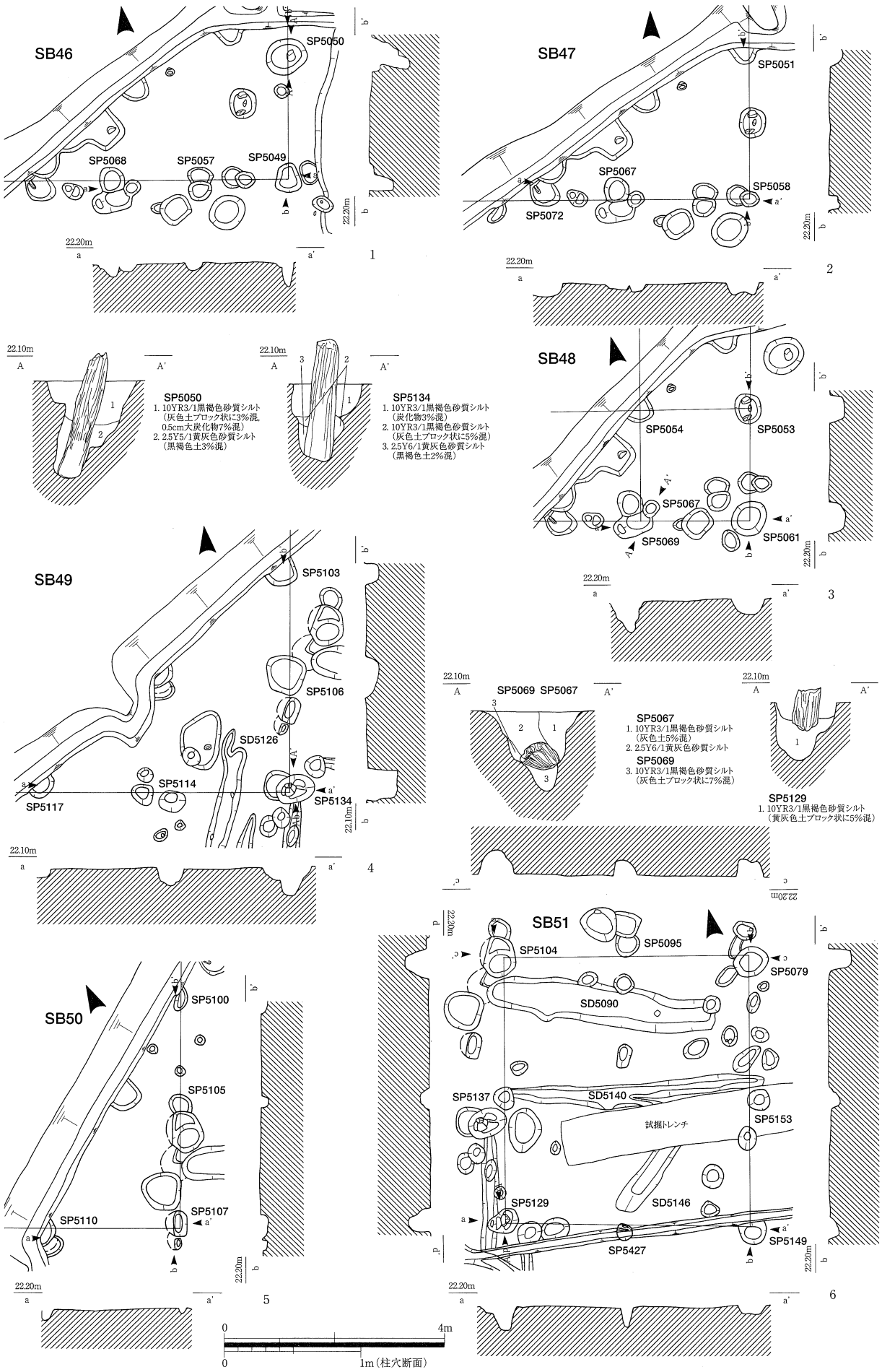
53号掘立柱建物（ＳＢ53，第49・51図，図版27・43・48）

西ブロック東端に位置する３間×２間の側柱建物で，区画溝が伴う。区画溝は幅0.2m～0.4mの浅い溝で，東西の桁側と北側の東側半分に認められ，柱穴列からは1.5mの距離を持つ。建物の方位は東に７°振るⅧ期の建物で，建物面積は23m²を測る。柱穴は楕円形を呈し，長径は0.24m～0.54m，深さは0.15m～0.26mを測り，小規模柱穴である。柱穴，区画溝からは土師器小甕（87）・土錘（88）が出土した。小甕の口縁端部は，内側に巻き込む９世紀後半代の遺物である。



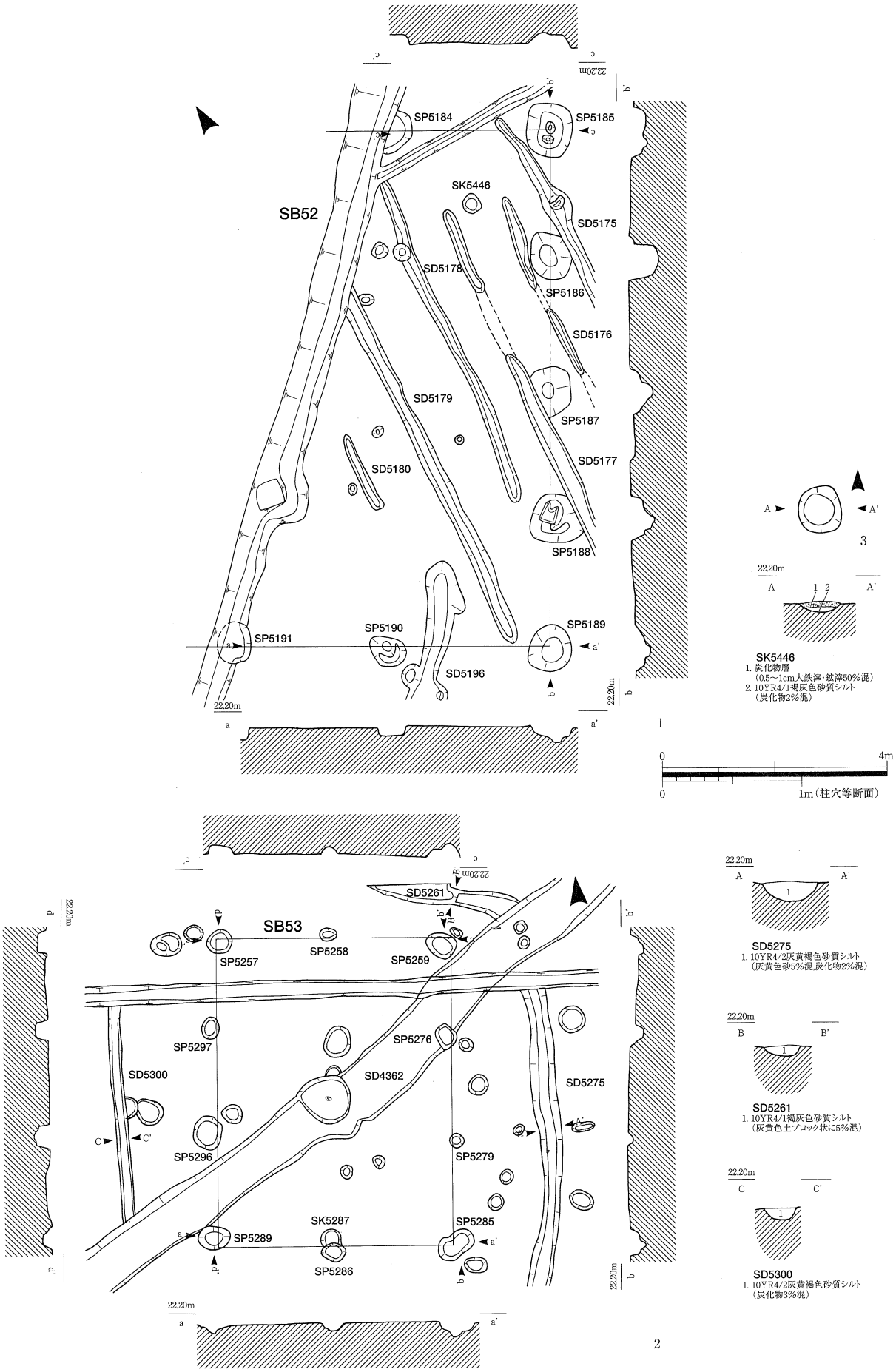
第47図　遺構実測図

SB46～SB51・SB58



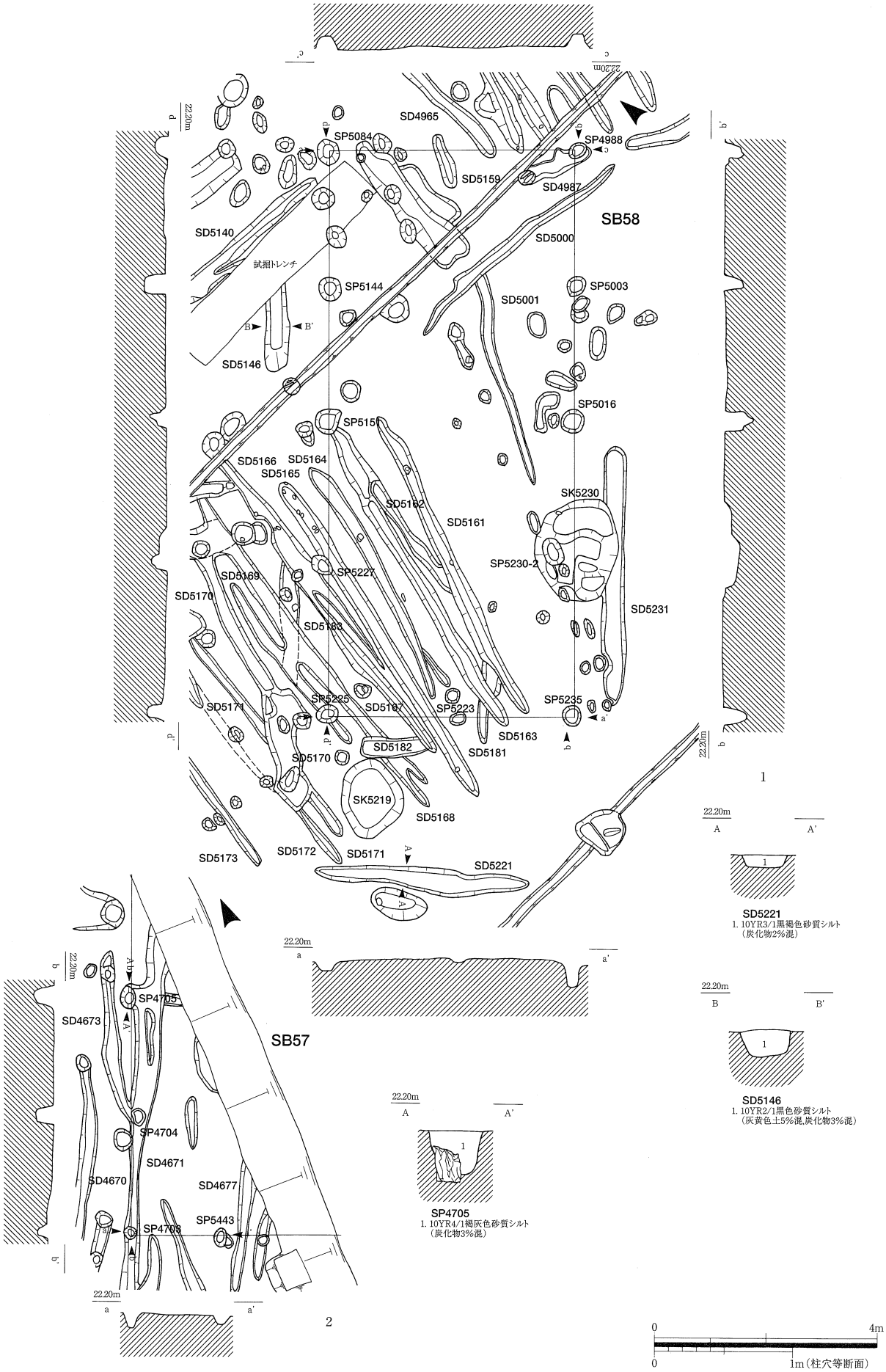
第48図　遺構実測図

1. SB46　2. SB47　3. SB48　4. SB49　5. SB50　6. SB51



第49図　遺構実測図

1. SB52　2. SB53　3. SK5446



第50図　遺構実測図

1. SB58　2. SB57

54号掘立柱建物（ＳＢ54，第52図，図版28）

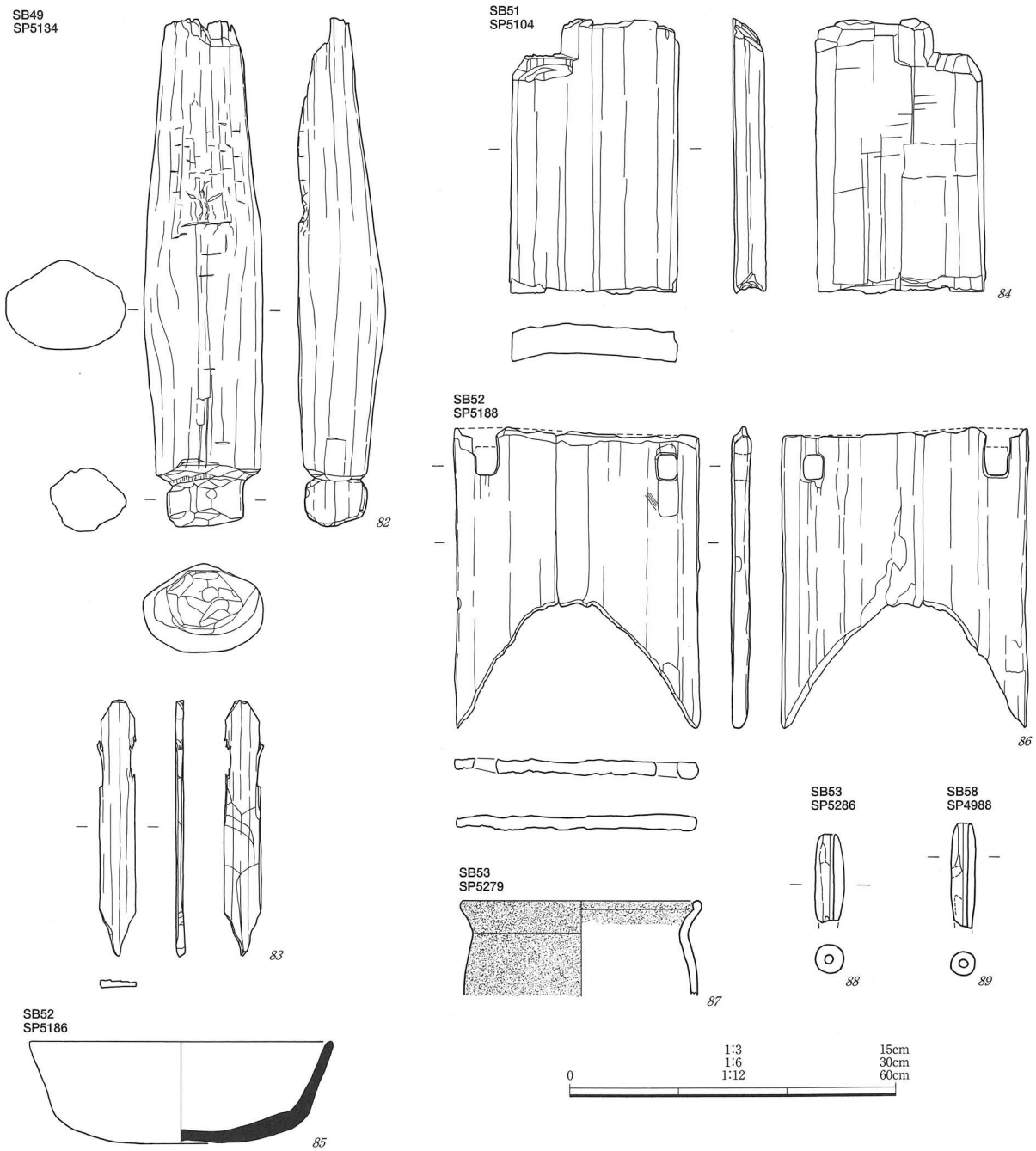
西ブロック南端に位置する３間×２間の側柱建物で，方位は７°東に振るⅧ期の建物である。建物の面積は24㎡を測る。柱穴の形状は円形，楕円形，方形を呈し，長径は0.52m～0.86m，深さは0.16m～0.4mを測り，深い柱穴が多い。柱穴からは土師器・須恵器・加工板などが出土したが時期は特定できない。

55号掘立柱建物（ＳＢ55，第52図，図版28）

西ブロック南端に位置する１間×１間の建物である。建物の方位は東に52°振れる。面積は10㎡を測る。柱穴は円形を呈し，長径は0.38m～0.5m，深さは0.3m前後である。東側柱穴には柱根が遺存する。

56号掘立柱建物（ＳＢ56，第52図）

調査区南端に位置する。北側梁列のみの検出である。建物の方位は，７°東に振るⅧ期の建物であ



第51図　遺物実測図　（*83・85・87～89*　1/3，*84・86*　1/6，*82*　1/12）

SB49　SP5134（*82・83*）　SB51　SP5104（*84*）　SB52　SP5186（*85*）・SP5188（*86*）

SB53　SP5279（*87*）・SP5286（*88*）　SB58　SP4988（*89*）

ろう。柱穴は円形，楕円形を呈し，長径は0.55m，深さは0.25m前後である。柱穴からの出土遺物はない。

57号掘立柱建物（ＳＢ57，第50図）

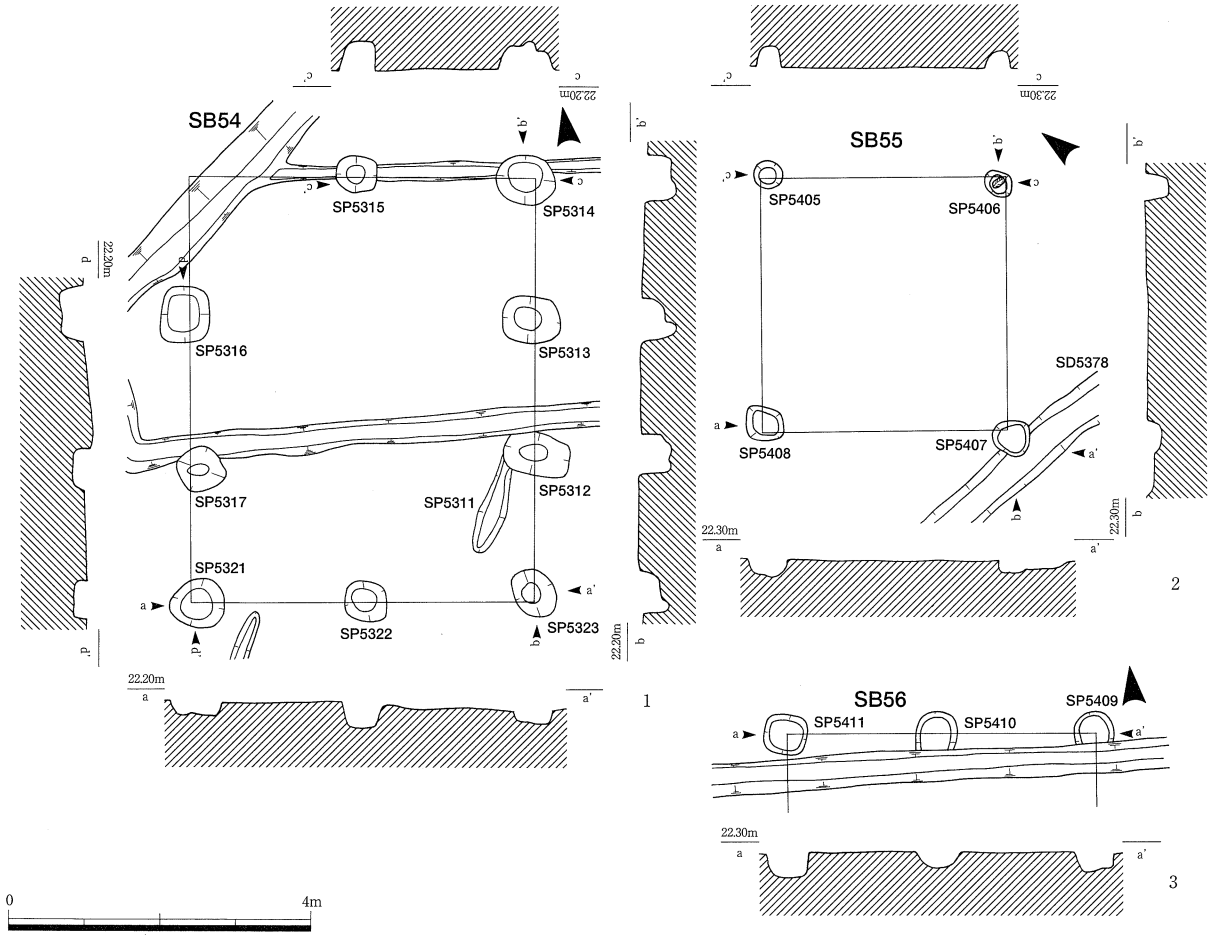
東ブロック中央に位置する側柱建物で，大部分は調査区外に延びる。２間×１間分を検出した。方位を28°東に振るⅥ期の建物である。柱穴は円形，楕円形を呈し，長径は0.22m～0.4mと小規模である。深さは0.14m～0.3mである。桁柱のＳＰ4705には柱根が遺存する。

58号掘立柱建物（ＳＢ58，第47・50・51図，図版48）

西ブロックに位置する４間×２間の側柱建物で，部分的に区画溝が巡る。区画溝は東西の桁側に部分的に認められ，柱列とは0.5mの間隔を持つ。梁側は南側のみに認められ，柱列とは2.7mの間隔をもつ。建物の方位は52°東に振れ，Ⅳ期の建物であろう。面積は44m²を測る主屋級建物である。柱穴は円形，楕円形を呈し，長径は0.35m～0.5mを測り，小規模である。深さは0.3m～0.4mで比較的深い。柱穴からは須恵器・土師器・土錘（89）が出土したが，時期を特定できるものはない。また，建物内や周辺域の埋土からは鍛冶滓，鍛造剥片などの鍛冶関連遺物が集中的に出土した。（池野正男）

59号掘立柱建物（ＳＢ59，第53・55図）

Ｅ１地区の調査区北側で検出した建物で，２間×１間の南北棟側柱建物である。桁行4.1m，梁行2.4m，平面積は9.84m²である。主軸方向はＮ－17°－Ｅである。さく状遺構との切り合いはこれより新しい。柱掘形は直径30cm～40cmの円形で，深さは20cm～40cmである。遺物は土師器とＳＰ5783から底板（90）の一部が出土している。



第52図　遺構実測図

1. SB54　2. SB55　3. SB56

60号掘立柱建物（ＳＢ60，第53図）

ＳＢ59の５ｍ西で検出した２間×（１）間の東西棟側柱建物である。建物中央部が後世の撹乱で削平されており，梁行が２間となる可能性が高い。桁行3.8ｍ，梁行3.3ｍ，平面積は12.54㎡である。主軸方向はＮ－73°－Ｅで，ＳＢ59の棟方向と直交することから，同時期の建物と考えられる。また，建物東側には梁行に平行する溝ＳＤ5816があり，建物に伴う溝ではないかと推定される。柱掘形は直径30㎝～40㎝の円形で，深さは10㎝～30㎝である。掘形埋土は柱痕跡が残るＳＰ5805の断面を見ると灰黄褐色砂質シルトで，柱痕跡には炭化物が混じる黄褐色砂質シルトが堆積している。遺物は柱穴からの出土はなく，ＳＤ5816から土師器が出土している。

61号掘立柱建物（ＳＢ61，第53図，図版29）

調査区北辺中央で検出した２間以上×（２）間の南北棟側柱建物と推定される建物である。柱穴が４基しか確認できず，調査区外へ延びているため規模は不明である。南北棟と推定すれば，主軸はＮ－５°－Ｗである。柱掘形は直径40㎝～50㎝の方形で，深さは11㎝～25㎝で，黒褐色砂質シルトや，暗オリーブ褐色砂質シルトが堆積する。ＳＰ5730・ＳＰ5731には柱痕跡が残り，ＳＰ5732には柱根の残骸が残っていた。遺物は土師器が出土している。

62号掘立柱建物（ＳＢ62，第54・55図，図版29）

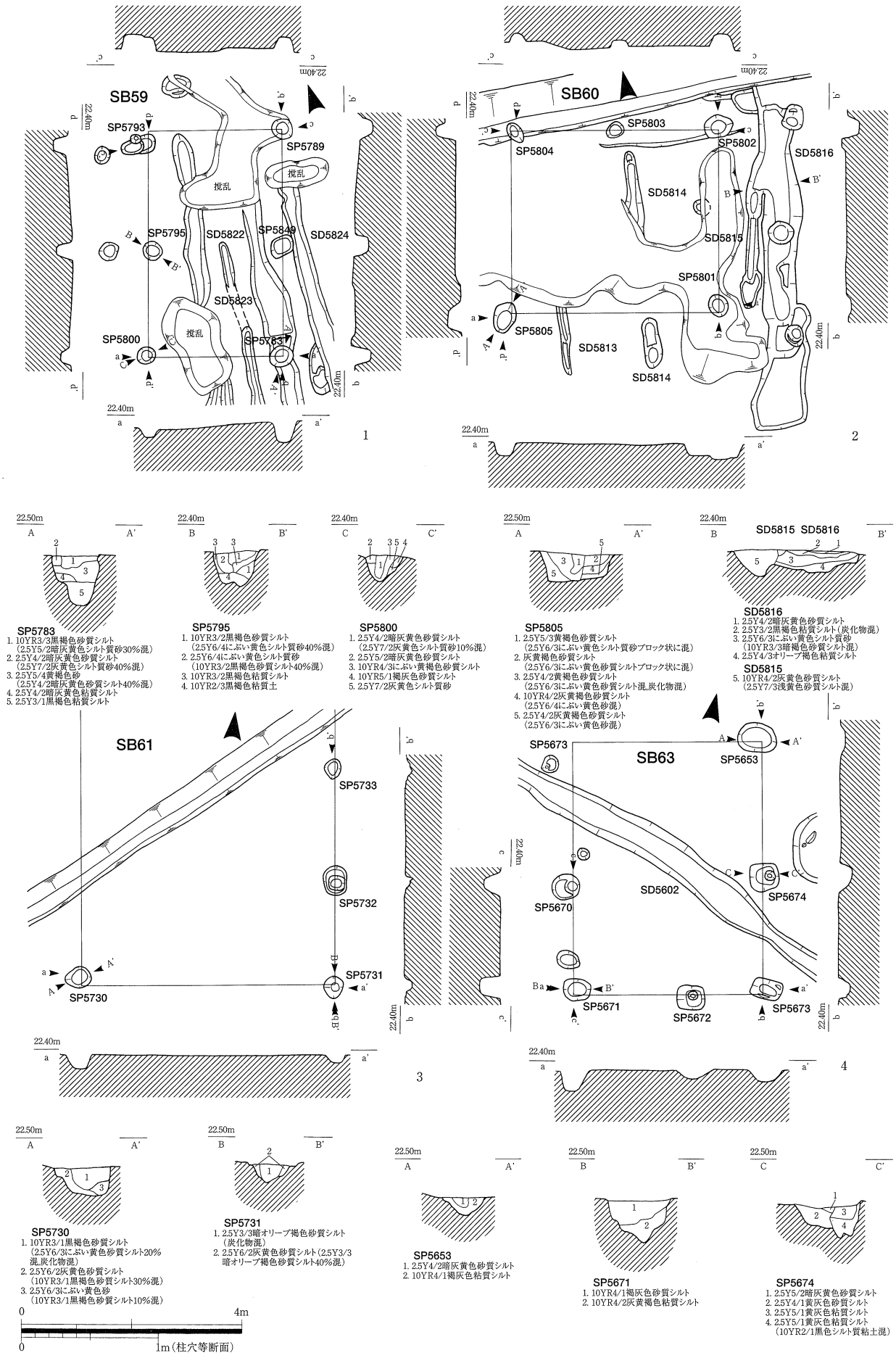
ＳＢ61の５ｍ南西で検出した２間×２間の南北棟側柱建物である。この建物には建物に伴うと推定する北・東・西の三方に溝が巡る（ＳＤ5603・ＳＤ5860・ＳＤ5633）。西側のＳＤ5603が建物の梁行より西に延びていることから建物の規模は２間ぐらい西に広がる可能性もある。桁行は4.5ｍ，梁行は3.5ｍ，平面積は15.75㎡，主軸はＮ－43°－Ｅである。柱掘形は直径40㎝～60㎝の不整形で，深さは15㎝～35㎝である。掘形埋土は灰黄褐色砂質シルトが主体に堆積し，周囲の溝には炭化物が混じる暗褐色砂質シルトなどが堆積する。遺物はＳＰ5866の上面から土師器のタタキ調整の甕の体部破片が出土している。また，溝からは須恵器・土師器・土錘が出土している。91はＳＤ5860から出土した杯Ｂ蓋で，口径11.4㎝で，口縁部は内端部に稜をもつタイプで，頂部にはつまみを付ける前に一方向に浅くナデた跡が残る。また，内面には朱墨痕が残っており，転用硯として使用されたようである。時期は９世紀第１四半期である。92はＳＤ5633出土の長頸瓶の底部。肩部下には１条の沈線が巡り，体部下半にはロクロ削りを施す。高台端部は内傾し，内端部に稜をもつ。時期は８世紀。

63号掘立柱建物（ＳＢ63，第53・55図，図版29）

調査区中央西寄りで検出した２間×２間の南北棟側柱建物である。北東隅の柱穴は西に振れており，歪んだ形の平面形となっている。桁行4.6ｍ，梁行3.4ｍ，平面積15.64㎡で，ＳＢ62とほぼ同じ規模である。主軸はＮ－14°－Ｗである。中央を横切るＳＤ5602は建物より古いと推定している。柱掘形は直径約50㎝の円形または１辺50㎝の方形で，深さは10㎝～35㎝である。掘形埋土には褐灰色粘質シルトが堆積し，ＳＰ5674には柱痕跡が残る。遺物はＳＰ5672からロクロ成形の土師器の甕（93）の底部が出土している。遺物の時期は８世紀である。

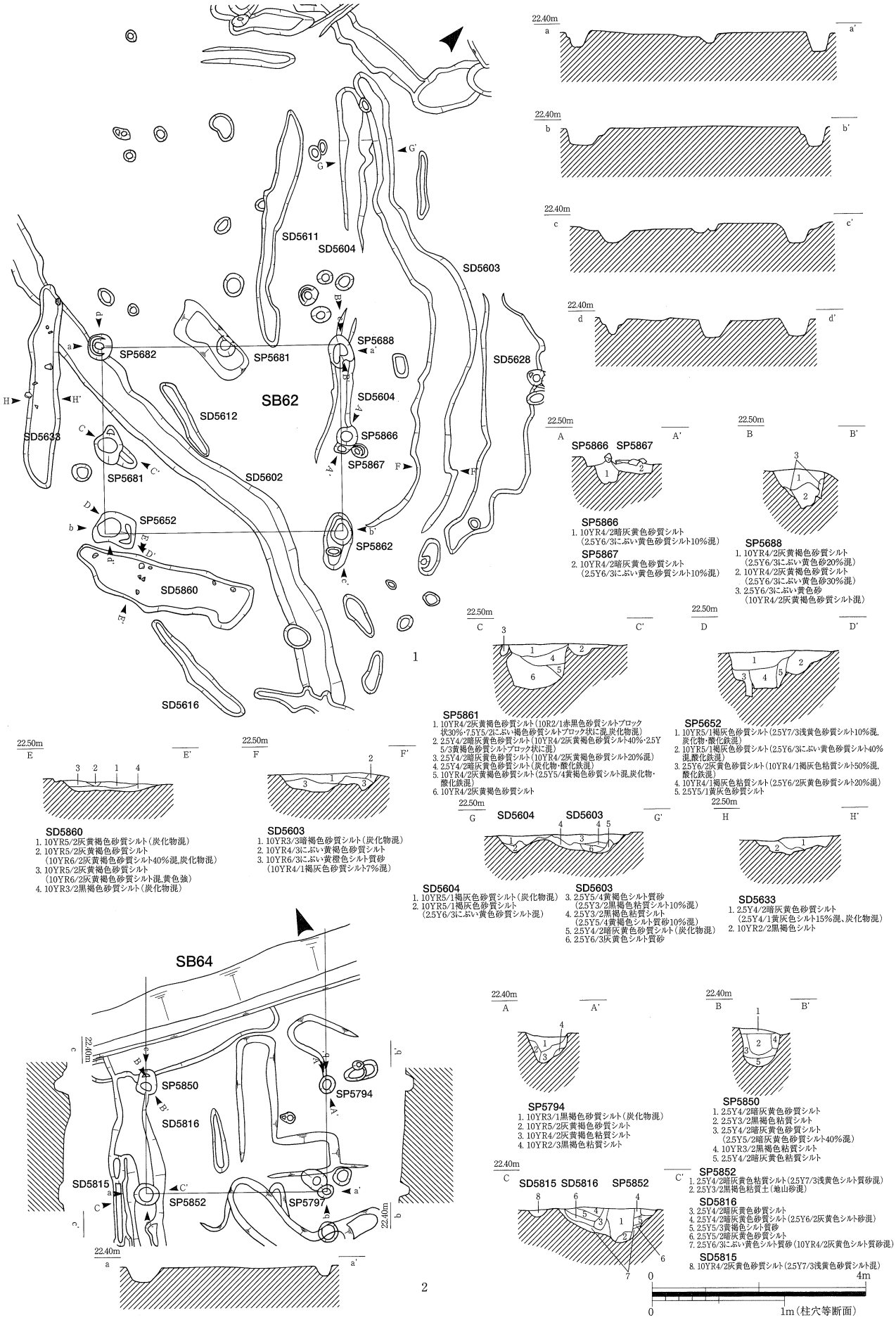
64号掘立柱建物（ＳＢ64，第54図）

ＳＢ59とＳＢ60の間で検出した梁行２間の南北棟側柱建物である。調査区外に延びるため桁行，平面積は不明である。主軸はＮ－22°－Ｅである。ＳＰ5852がＳＢ60に伴うＳＤ5816との切り合い関係で新しいため，ＳＢ60と同時期のＳＢ59より時期が新しいことがわかる。柱掘形は直径25㎝～40㎝の円形で，深さは10㎝～30㎝である。掘形埋土には暗灰黄色砂質シルトが柱痕跡には黒褐色砂質シルトが堆積する。遺物の出土はない。



第53図　遺構実測図

1. SB59　2. SB60　3. SB61　4. SB63

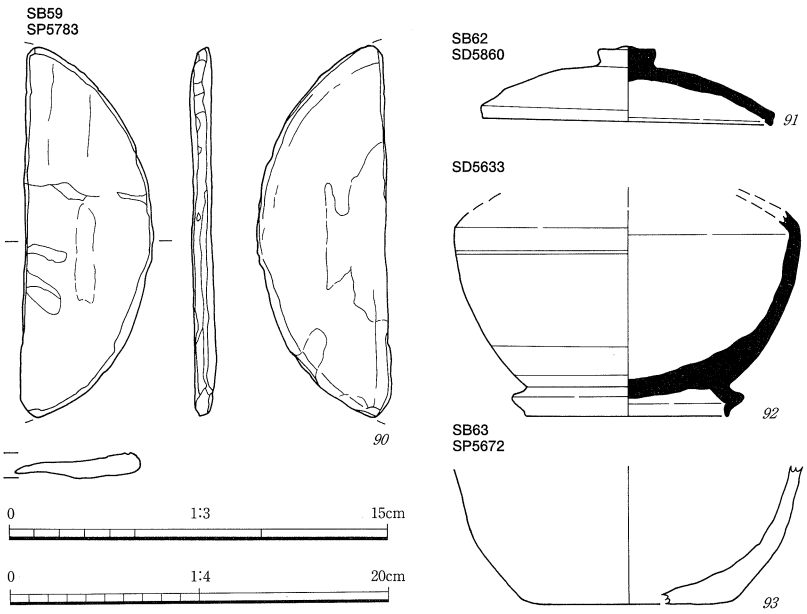


第54図　遺構実測図

1. SB62　2. SB64

65号掘立柱建物（ＳＢ65，第58図，図版30）

Ｆ２地区の掘立柱建物のうち，一番北に位置し，他の建物に比べ柱穴の規模が小さい。３間×２間の南北棟側柱建物である。桁行6.2m，梁行4.7m，平面積は29.14m²である。主軸はＮ－30°－Ｅである。北側の重複するＳＤ6503よりは新しく，ＳＩ５の２m東に位置する。柱掘形は直径約60cmの円形またはそれ以上の楕円形である。深さは25cm～45cmで，掘形埋土は灰黄色シルトで，柱痕跡にはＳＰ6515・ＳＰ6526・ＳＰ6785のように下層に植物遺体が多量に混じる黒褐色粘質シルトや，暗赤褐色シルトが堆積している柱穴がある。遺物は柱穴から須恵器・土師器・木製品が出土している。



第55図　遺物実測図（*90・91・93*　1/3，*92*　1/4）
SB59　SP5783（*90*）　SB62　SD5633（*92*）・SD5860（*91*）
SB63　SP5672（*93*）

66号掘立柱建物（ＳＢ66，第56・59図，図版30）

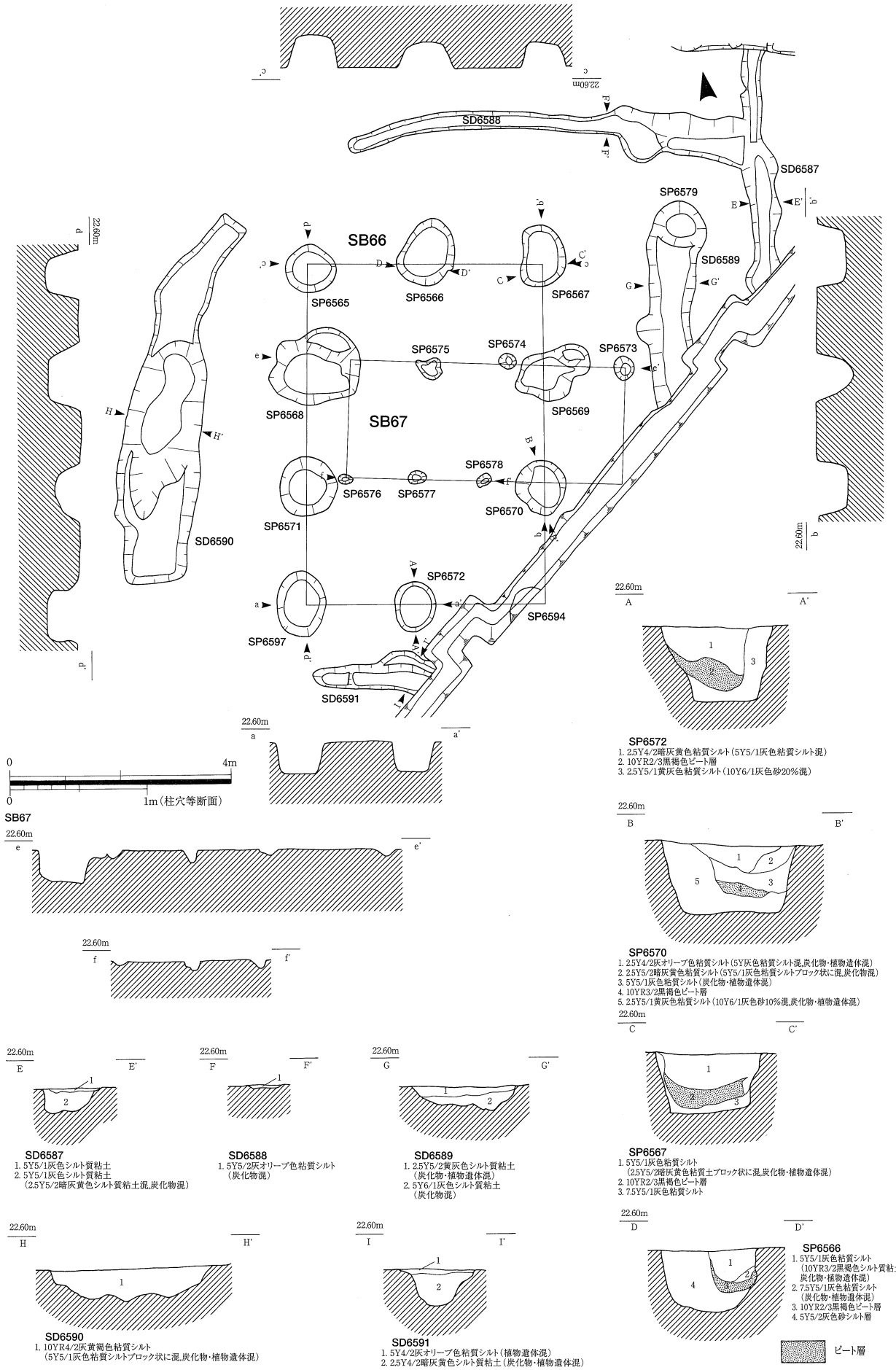
調査区南東隅で検出した３間×２間の南北棟側柱建物である。建物の周囲には南北には幅30cm～50cmの東西には幅80cm～130cmの溝が配される。重複するＳＢ67とは柱穴間の切り合いからこれより新しいと判断した。桁行は6.2m，梁行4.3m，平面積26.66m²である。主軸はＮ－13°－Ｅである。柱掘形はやや不整形であるが，約120cm×約80cmを基本とする円形であったと考えられる。深さは40cm～60cmで，掘形埋土には黄灰色粘質シルトに灰色砂が混じる土で，柱痕跡には下層に黒褐色ピート層，上層には暗灰黄色シルトと灰色粘質シルトが混じる層が堆積している。柱痕跡は長径は約60cm～70cm，短径は約40cmのものが残っている。周囲の溝の埋土は灰オリーブ色，または灰黄褐色粘質シルトで，植物遺体・炭化物が混じる。遺物は柱穴と溝から須恵器・土師器・木製品が出土している。94はＳＰ6570・ＳＰ6572から出土した須恵器の杯蓋で，端部は三角形状で，頂部には自然釉がかかる。また，ＳＤ6587・ＳＤ6590・ＳＤ6591からは８世紀第２四半期の杯蓋・杯Ｂ（95～97）が出土している。97は口径9.9cmで，７世紀まで遡る可能性もある。

67号掘立柱建物（ＳＢ67，第56図，図版30）

ＳＢ66と重複する３間×１間の東西棟側柱建物である。桁行は５m，梁行は2.1m，平面積は10.05m²である。主軸はＮ－76°－Ｗである。柱掘形は直径25cm～40cmの円形で，深さは10cm～20cmである。掘形埋土は灰色粘質シルトの単層で，炭化物が混じる。柱掘形の規模から見ても簡素な建物だったことが窺える。遺物はＳＰ6574から土師器が出土している。

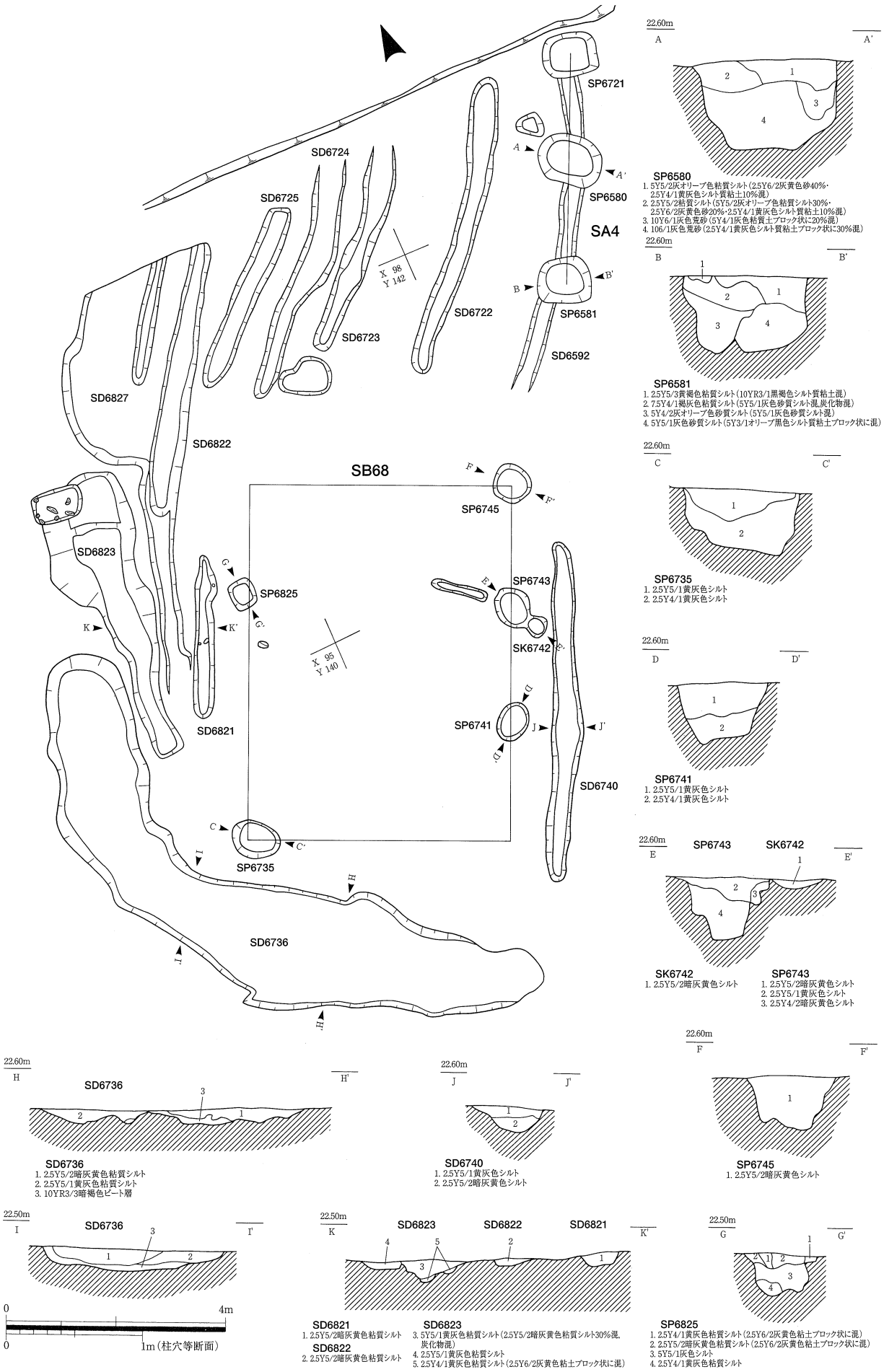
68号掘立柱建物（ＳＢ68，第57・59図）

ＳＢ66の東に隣接する３間×２間の規模と推定される南北棟側柱建物である。この建物もＳＢ66と同じく東・南・西方向に溝が配されるが，ＳＢ66とは逆に東西の溝の幅が狭い。10基の柱穴の内，５基の柱穴しか検出出来なかったが，その配置から桁行6.4m，梁行4.8m，平面積30.72m²と推定される。



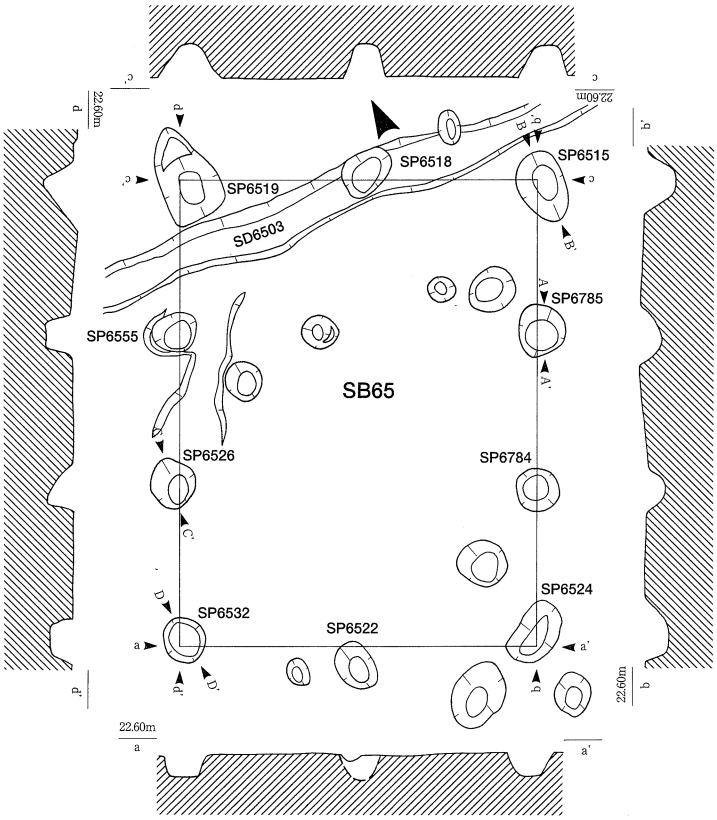
第56図　遺構実測図

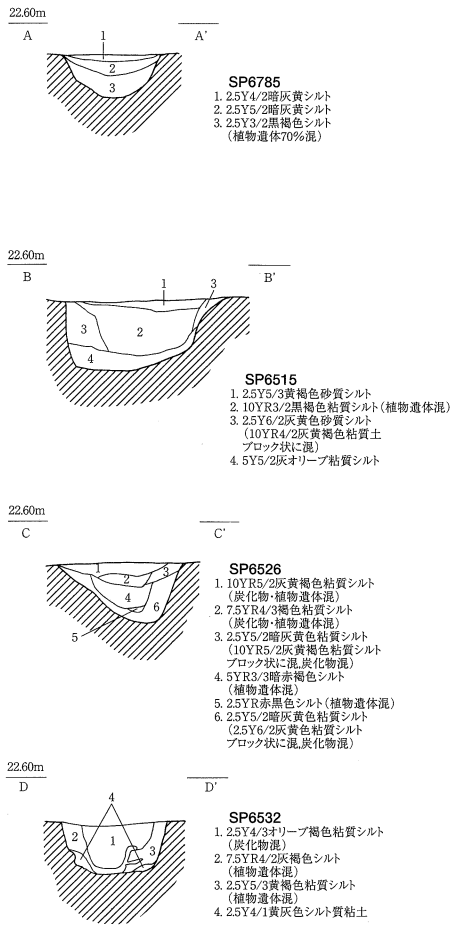
SB66・SB67



第57図　遺構実測図

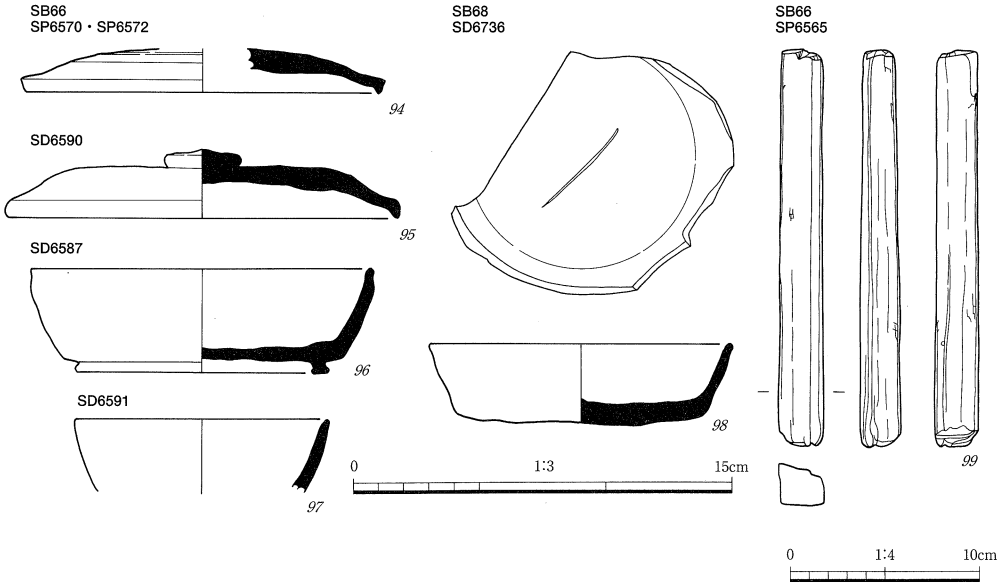
SB68・SA 4





第58図　遺構実測図

SB65



第59図　遺物実測図　（*94*～*98*　1/3，*99*　1/4）

SB66　SP6565（*99*）　SP6570・SP6572（*94*）　SD6587（*96*）　SD6590（*95*）　SD6591（*97*）

SB68　SD6736（*98*）

柱掘形は長径約70cm～90cm，短径約60cm程度の楕円形が多く，深さは40cm～50cmである。掘形埋土には黒褐色ピート層は見られず，暗灰黄色シルト・黄灰色シルトが堆積している。ＳＤ6736・ＳＤ6740・ＳＤ6821は深さが10cm～20cmで，ＳＤ6736の下層には黒褐色ピート層の堆積が見られる。遺物は須恵器・土師器・木製品が出土しており，98はＳＤ6736から出土したもので８世紀末の杯Ａである。内底面にはヘラ記号が残る。

４号柵（ＳＡ４，第57図）

Ｆ２地区で検出した南北方向の柵とした遺構。ＳＢ68の北において長辺１ｍ，短辺90cmの長方形の穴を３基検出した。穴の規模が揃っており，その規模がＳＢ66の柱穴と似ていたことから，掘立柱建物の可能性を考えて周辺を精査したが他の柱穴は検出できなかった。従ってここではとりあえず，柵として扱うが建物の可能性は否定できない。しかし，埋土は数種類の土がブロック状に混じり合う土で，ＳＢ66等の建物の埋土とは明らかに異なっていた。遺物は須恵器・土師器が出土している。

（島田美佐子）

Ｃ　溝

3003号溝（ＳＤ3003，第60図）

Ｃ地区中央を南北に分かつ谷部の東側を沿うように走る溝。Ｃ地区においては古代の建物群は大きく谷部で分かれるが，建物群と谷部との間にあり，建物群を区画する役割を果たしていたのではないかと推定される。埋土は暗オリーブ褐色の砂質土の単層で，出土遺物には土師器がある。

3540号溝（ＳＤ3540，第62図，図版45）

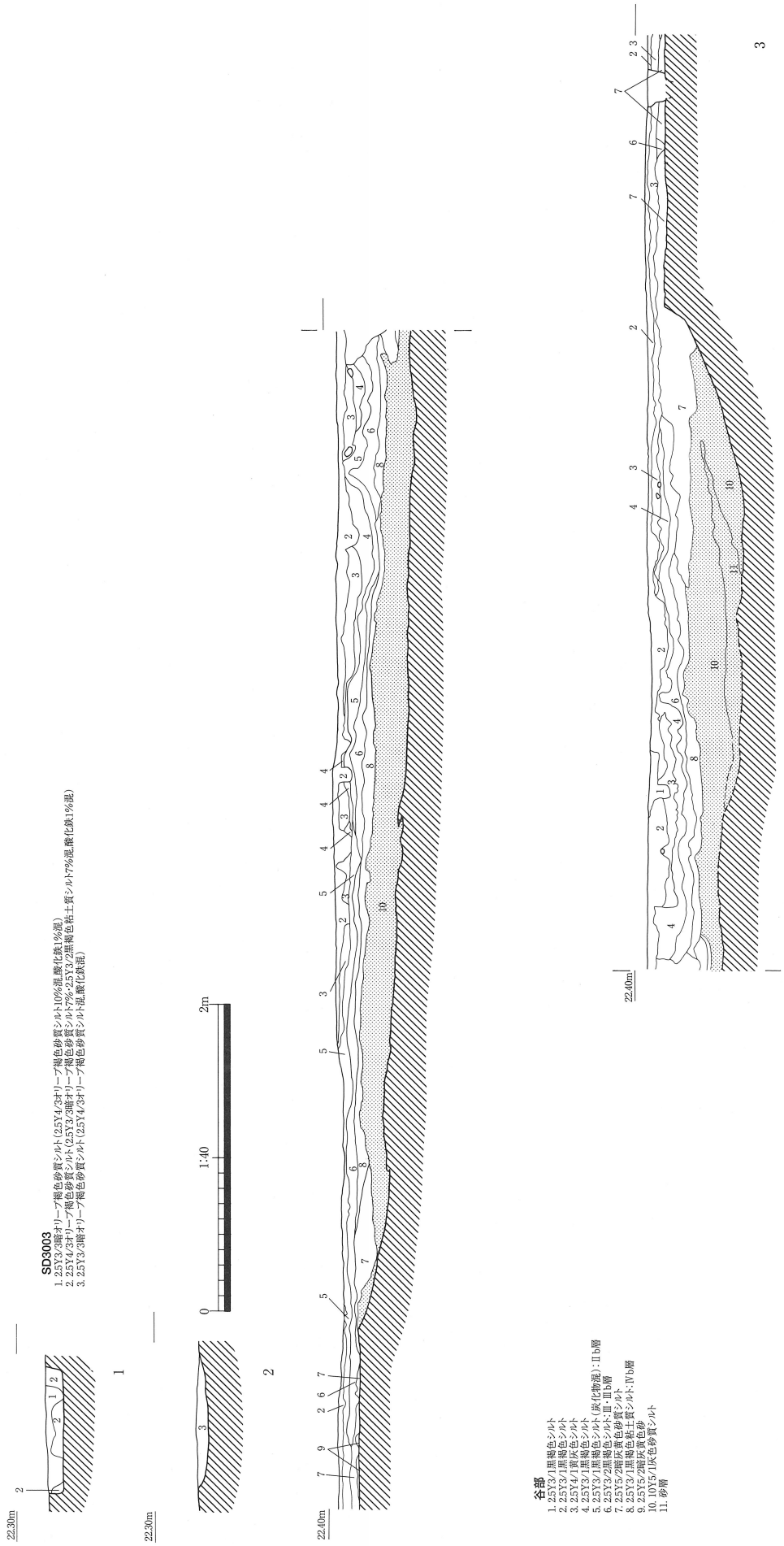
Ｃ地区中央の南側で部分的に検出した溝と考えられる遺構。北側の中央部分が深くなっており，２基の遺構が切り合っているようである。新しい溝は幅が約70cmで，覆土が炭化物混じりの黒味が強い暗灰黄色シルトが堆積し，深さは37cmである。古い溝は覆土の色がやや明るく暗灰黄色シルトで深さは15cmと浅い。遺物は須恵器・土師器が出土している。須恵器は８世紀後半から９世紀第１四半期の杯・壺蓋が出土している。

128は８世紀第１四半期の杯Ｂで，高台内側に「厨」の墨書がある。133は８世紀第３四半期の杯Ａで，底部外面に「Ｔ」字状の漆痕がある。

谷部（第60・61図，図版44）

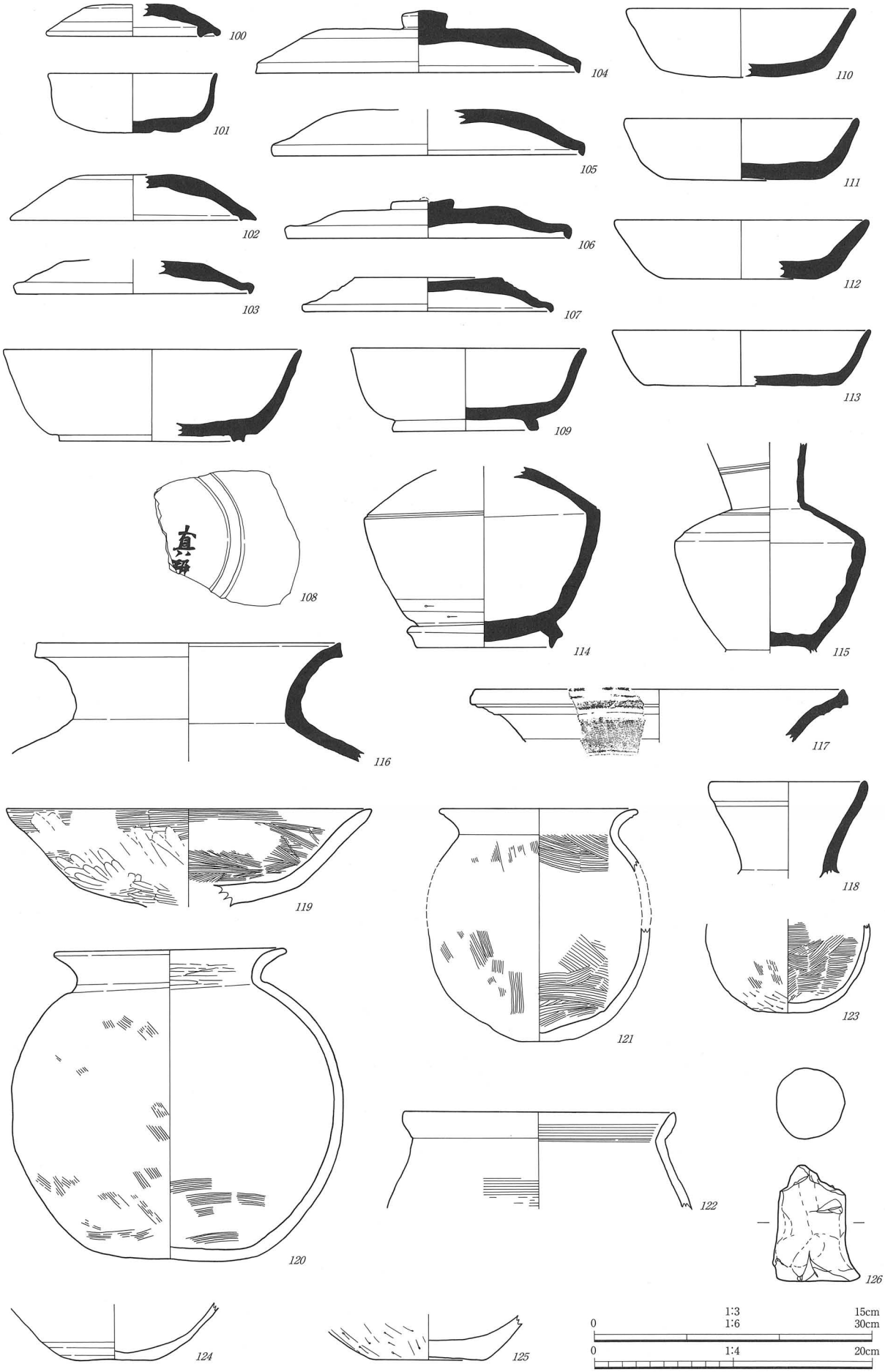
Ｃ地区中央を南北に走る幅約16ｍの谷である。この谷は深い所では1.2ｍを測るが，下層の砂層は古代以前に埋まったもので，この層からは６世紀の土師器の高杯（119）が出土している。砂層の上面には古代の谷の埋土のⅣｂ層，古代の包含層のⅢｂ層，近世遺物包含層のⅡｂ層，耕作土の順に堆積しており，古代においては既に深さ約60cmぐらいの谷というよりも浅い窪地状を呈していたようである。遺物は主にⅡｂ層～Ⅲ層から出土しているが，時期幅のある遺物が混在して出土しており，須恵器・土師器・珠洲・支脚・木製品などが出土している。珠洲は谷の最終段階の遺物である。須恵器は６世紀～10世紀の杯蓋・杯・皿・壺・甕・平瓶が出土している。

100～102・109はＳＩ１・ＳＩ２と同時期の遺物で７世紀第３四半期から第４四半期のものである。108は９世紀第１四半期の杯Ｂで，高台内側に「真□」の墨書がある。杯蓋の104の内側には重ね焼きの跡が残り，105は天井部外面に厚く自然釉がかかり，内面には薄く墨痕が残る。表面は摩耗しており，一部には漆が付着している。転用硯である。114・115は壺の体部で，114は体部下半にロクロ削りが施される。時期は８世紀前半である。117は６世紀の甕の口縁部，口径40cmで口頸部に細線の櫛描波状文が施される。118は平瓶の口縁部である。土師器は６世紀から９世紀の高杯・壺・甕がある。119は外



第60図　遺構実測図

1・2. SD3003　3. 谷部



第61図　遺物実測図　（*100～113・118・119・124～126*　1/3，*114～116・120～123*　1/4，*117*　1/6）
谷部

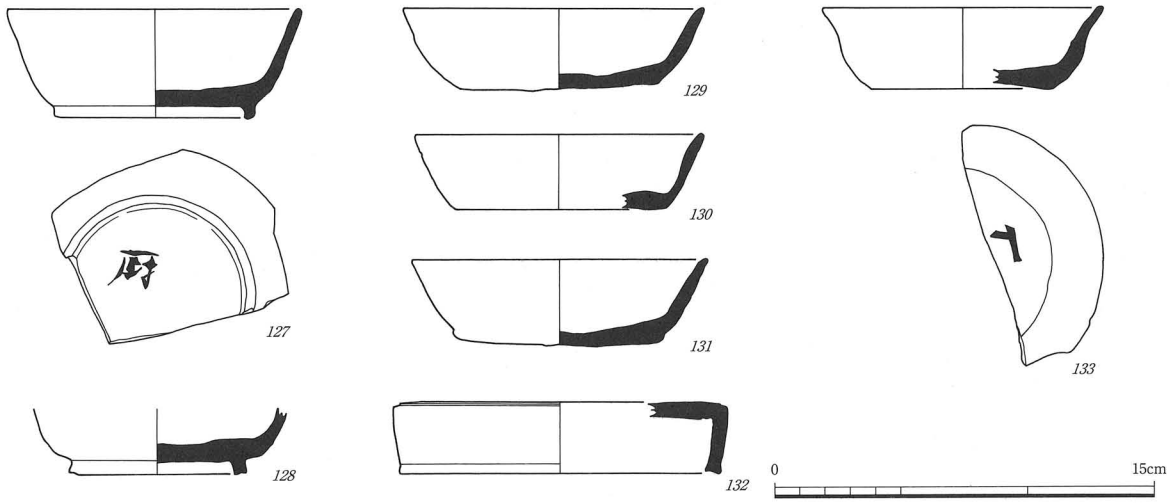
面ハケメ調整後ヘラミガキ，内面ハケメ調整の高杯杯部である。120は７世紀後半の壺で，ほぼ完形である。口縁部は外面ヨコナデで内面はヨコ方向のヘラミガキ，体部は外面がハケメ調整後ヘラミガキ，内面は下半がハケメ調整後ナデ，上半がナデ調整，底部は平底である。124・125は９世紀の小型甕の底部である。124は体部下半にロクロ削り，125には手持ち削りが施される。　　（島田美佐子）

4355号溝（ＳＤ4355，第63～66図，図版31・45～47）

調査区中央を南南西から北北東へ流れ，幅84cm，深さ32cmを測り，埋土は黒褐色砂質シルトが主体である。遺構の新旧関係ではＳＤ4362・ＳＤ4581より新しく，調査区南端に位置し東西に流れるＳＤ5378とはＬ字状につながる可能性が高い。東西には建物群があることから区画溝の可能性も考えられる。多量の遺物が集中して廃棄されており，ＳＤ4362の遺物と接合するものもある。出土遺物には須恵器（134～186）・土師器（189・220）・土錘（190～212）・底板（187・188）・加工木・鉄滓（213）がある。

134～143は須恵器杯Ｂ蓋。口径14.2cm～16.4cmを測り，口縁端部は断面三角形を呈するものや内端面に稜をもつものがみられる。頂部外面はロクロ削りされ，つまみは扁平な擬宝珠形である。134・135は内面にヘラ記号「×」があり，143は外面にヘラ状具による線描がみられる。144～158は杯Ｂ。口径12.4cm～16.2cmを測り，12cm台のものが多い。高台は低くやや外に踏ん張る形態である。159～184は杯Ａ。口径10cm～15.2cmを測り，体部の外傾度が弱いものと，浅く外傾度が強いもの（169・175～177・181）がある。172・173の底部外面，184の内面見込みには「サ」とみられる墨書があり，183の底部外面には漆書きの文字「十」がみられる。185は須恵器長頸壺。外反する口縁部を上方につまみ上げている。186は須恵器短頸壺。やや扁平な球胴形を呈する体部に直立する口縁部がつく。189は土師器鉢。外反する口縁部に小さい注口を作り，体部上部内外面をカキメ調整，下半部をハケメ調整する。220は土師器鍋。口縁部はくの字に屈曲し，端部は外傾し面取りする。８世紀～９世紀代のもの。190～212は管状土錘。211が直径3.2cmの太形である以外は，直径１cm～1.3cmを測る細形である。213は鉄滓。表面には気泡が多くみられる。

187・188は底板。188の側面には側板と結合するための木釘と釘穴が５箇所みられる。



第62図　遺物実測図　(1/3)
SD3540

4362号溝（ＳＤ4362，第63・66図，図版47・48）

南西から北東に流れ，Ｘ194Ｙ251付近でＳＤ4362と重複または分岐している。幅１ｍ，深さ24cmを測り，ＳＤ4355より古い。南に位置するＳＤ4581とは４ｍ～８ｍの間隔でほぼ並行している。埋土は上層が黒褐色砂質シルト，下層が黄灰色～にぶい黄色砂質シルトである。出土遺物には須恵器・土師器・土錘（214）・加工材がある。

214は太形の管状土錘。端部は平坦に面取りしている。

4359号溝（ＳＤ4359，第63図）

ＳＤ4355とＳＤ4362の北側に位置し，２条の溝に挟まれる。幅１ｍ，深さ15cmを測り，埋土は上層が炭化物が混じる黒褐色砂質シルト，下層が黄褐色砂質シルトで，土師器が出土している。

4383号溝（ＳＤ4383，第66図，図版47）

調査区東端ＳＸ4384に重複しており，幅34cm，深さ12cmを測る。出土遺物には土師器（215）がある。215は土師器甕。体部外面上部にカキメ調整，下部から底部にかけては手持ち削りで，体部外面には煤が付着している。

4643号溝（ＳＤ4643，第63図）

ＳＤ4581の東約２ｍに並行し，幅１ｍ，深さ11cmを測る。出土遺物には土師器がある。

4577号溝（ＳＤ4577，第63・82図）

ＳＤ4581の東に位置し，幅54cm，深さ10cmを測り，埋土は灰黄褐色砂質シルトである。新旧関係ではＳＤ4581より新しい。

4581号溝（ＳＤ4581，第63・66図，図版47）

調査区中央をＳＤ4355と並行して流れ，幅86cm，深さ17cmを測り，埋土は炭化物が混じる黒色砂質シルトである。出土遺物には須恵器（224）・土師器（216・217）がある。

216・217は土師器甕。216はロクロ成形で，口縁端部が内側に折れ曲がる。底部外面に回転糸切り痕があり，体部内面はカキメ調整，外面はロクロナデで，口縁部には煤が付着している。217は口縁端部を丸く収め，内外面ハケメ調整である。224は須恵器杯Ｂ。８世紀のもの。

4773号溝（ＳＤ4773，第66図，図版47）

Ｘ177Ｙ251に位置し，幅24cm，深さ６cmを測り，土師器（218）が出土している。

218はロクロ成形の土師器甕。口縁部が外反し，端部を上方に引き上げる。

5044号溝（ＳＤ5044，第63・66図，図版43・48）

Ｘ189Ｙ236，ＳＢ46の東に位置し，幅89cm，深さ15cmを測る。埋土は黒褐色砂質シルトで，須恵器・土師器（219）・土錘（221・222）が出土している。

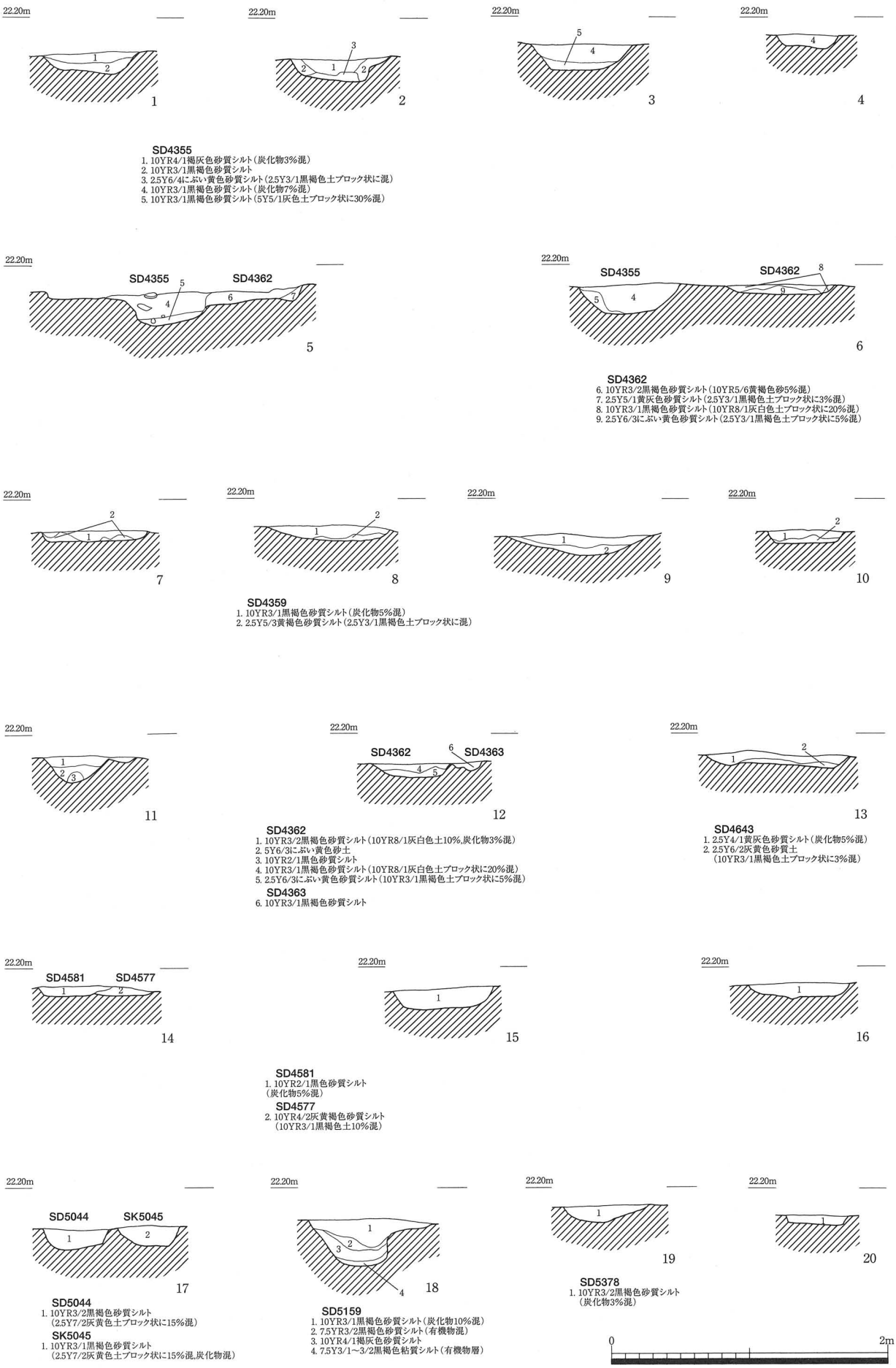
219は土師器鍋。口縁部はくの字に屈曲し，端部は外傾して面をとる。内面はカキメ調整，外面は手持ち削りとハケメ調整がみられる。

221・222は細形の管状土錘。端部は僅かに平坦な面をなす。

5159号溝（ＳＤ5159，第63・66図，図版47・48）

Ｘ184Ｙ235，ＳＢ51の東に位置し，幅１ｍ，深さ34cmを測る。埋土は上層が炭化物が多く混じる黒褐色砂質シルトで，中層の褐灰色砂質シルトとの間に有機物が多く混じる層を挟み，下層は有機物が多い黒褐色粘質シルトである。出土遺物には須恵器（226）・土師器（223・225）・土錘・加工材がある。

226は須恵器杯Ｂ蓋。口径12.2cmを測り，つまみは背がやや高い擬宝珠形を呈する。頂部はロクロナ



SD4355
1. 10YR4/1褐灰色砂質シルト（炭化物3%混）
2. 10YR3/1黒褐色砂質シルト
3. 2.5Y6/4にぶい黄色砂質シルト（2.5Y3/1黒褐色土ブロック状に混）
4. 10YR3/1黒褐色砂質シルト（炭化物7%混）
5. 10YR3/1黒褐色砂質シルト（5Y5/1灰色土ブロック状に30%混）

SD4362
6. 10YR3/2黒褐色砂質シルト（10YR5/6黄褐色砂5%混）
7. 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト（2.5Y3/1黒褐色土ブロック状に3%混）
8. 10YR3/1黒褐色砂質シルト（10YR8/1灰白色土ブロック状に20%混）
9. 2.5Y6/3にぶい黄色砂質シルト（2.5Y3/1黒褐色土ブロック状に5%混）

SD4359
1. 10YR3/1黒褐色砂質シルト（炭化物5%混）
2. 2.5Y5/3黄褐色砂質シルト（2.5Y3/1黒褐色土ブロック状に混）

SD4362
1. 10YR3/2黒褐色砂質シルト（10YR8/1灰白色土10%,炭化物3%混）
2. 5Y6/3にぶい黄色砂土
3. 10YR2/1黒色砂質シルト
4. 10YR3/1黒褐色砂質シルト（10YR8/1灰白色土ブロック状に20%混）
5. 2.5Y6/3にぶい黄色砂質シルト（10YR3/1黒褐色土ブロック状に5%混）

SD4363
6. 10YR3/1黒褐色砂質シルト

SD4643
1. 2.5Y4/1黄灰色砂質シルト（炭化物5%混）
2. 2.5Y6/2灰黄色砂質土
（10YR3/1黒褐色土ブロック状に3%混）

SD4581
1. 10YR2/1黒色砂質シルト
（炭化物5%混）

SD4577
2. 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト
（10YR3/1黒褐色土10%混）

SD5044
1. 10YR3/2黒褐色砂質シルト
（2.5Y7/2灰黄色土ブロック状に15%混）

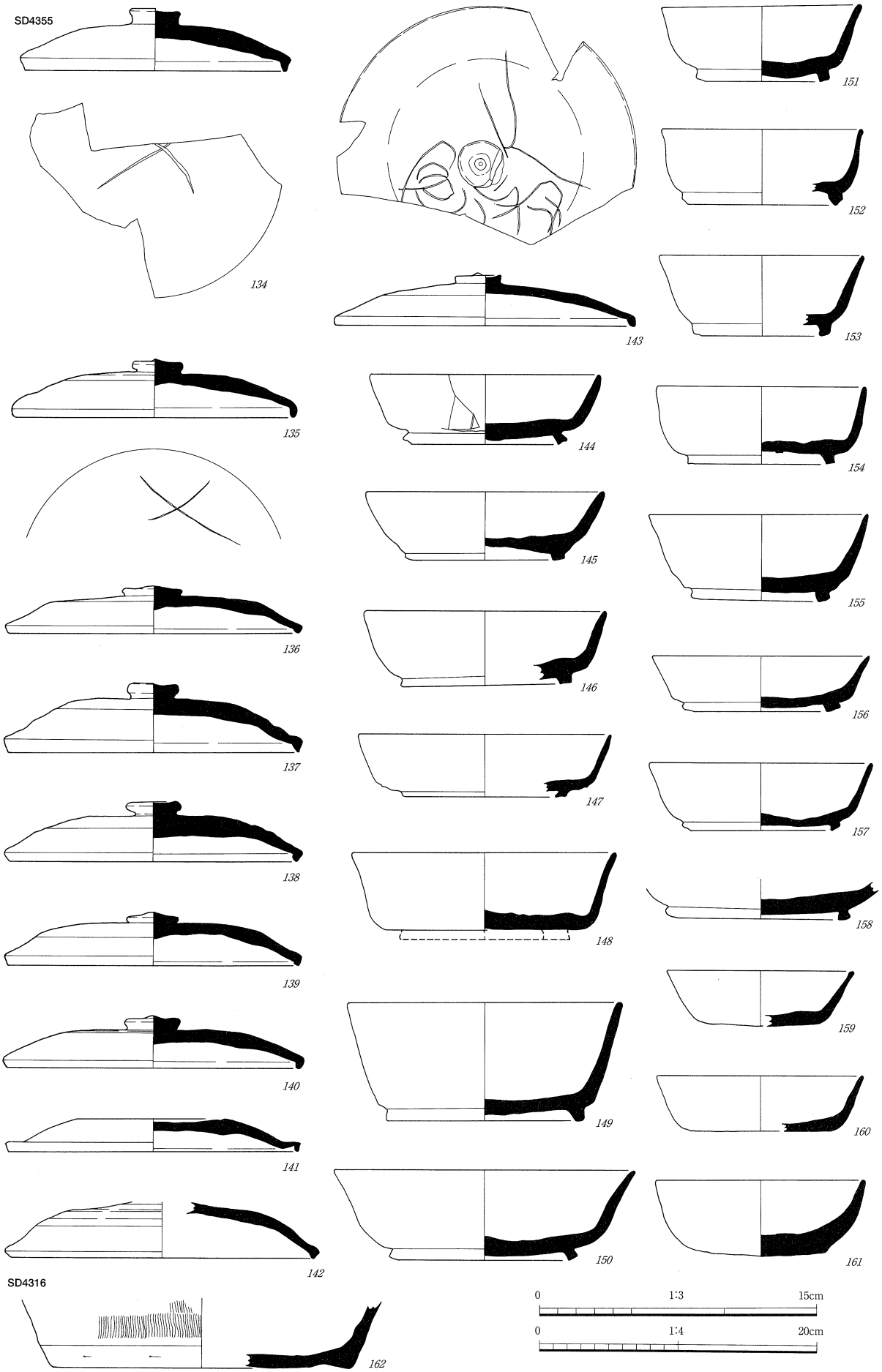
SK5045
1. 10YR3/1黒褐色砂質シルト
（2.5Y7/2灰黄色土ブロック状に15%混,炭化物混）

SD5159
1. 10YR3/1黒褐色砂質シルト（炭化物10%混）
2. 7.5YR3/2黒褐色砂質シルト（有機物混）
3. 10YR4/1褐灰色砂質シルト
4. 7.5Y3/1～3/2黒褐色粘質シルト（有機物層）

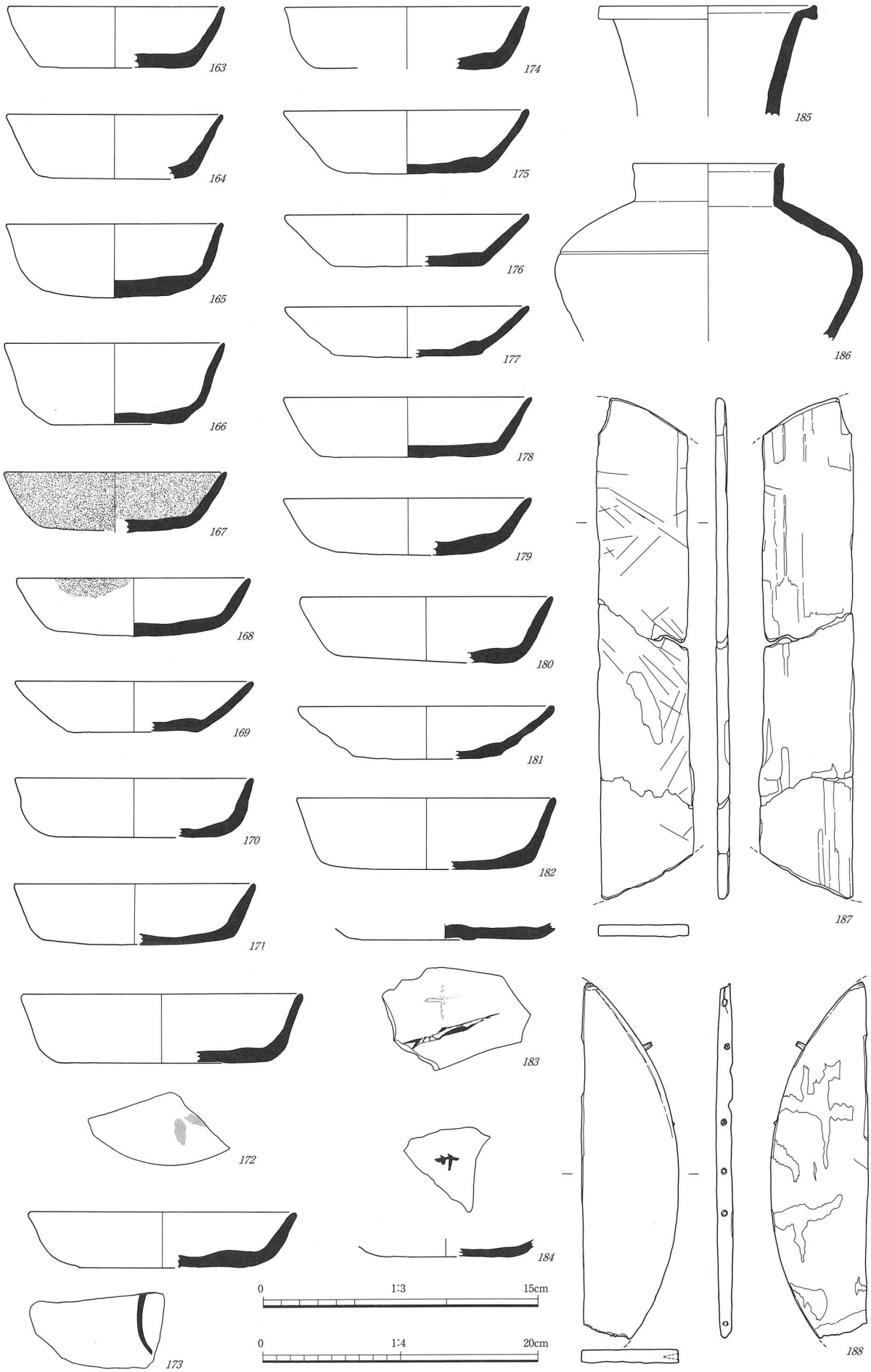
SD5378
1. 10YR3/2黒褐色砂質シルト
（炭化物3%混）

第63図　遺構実測図

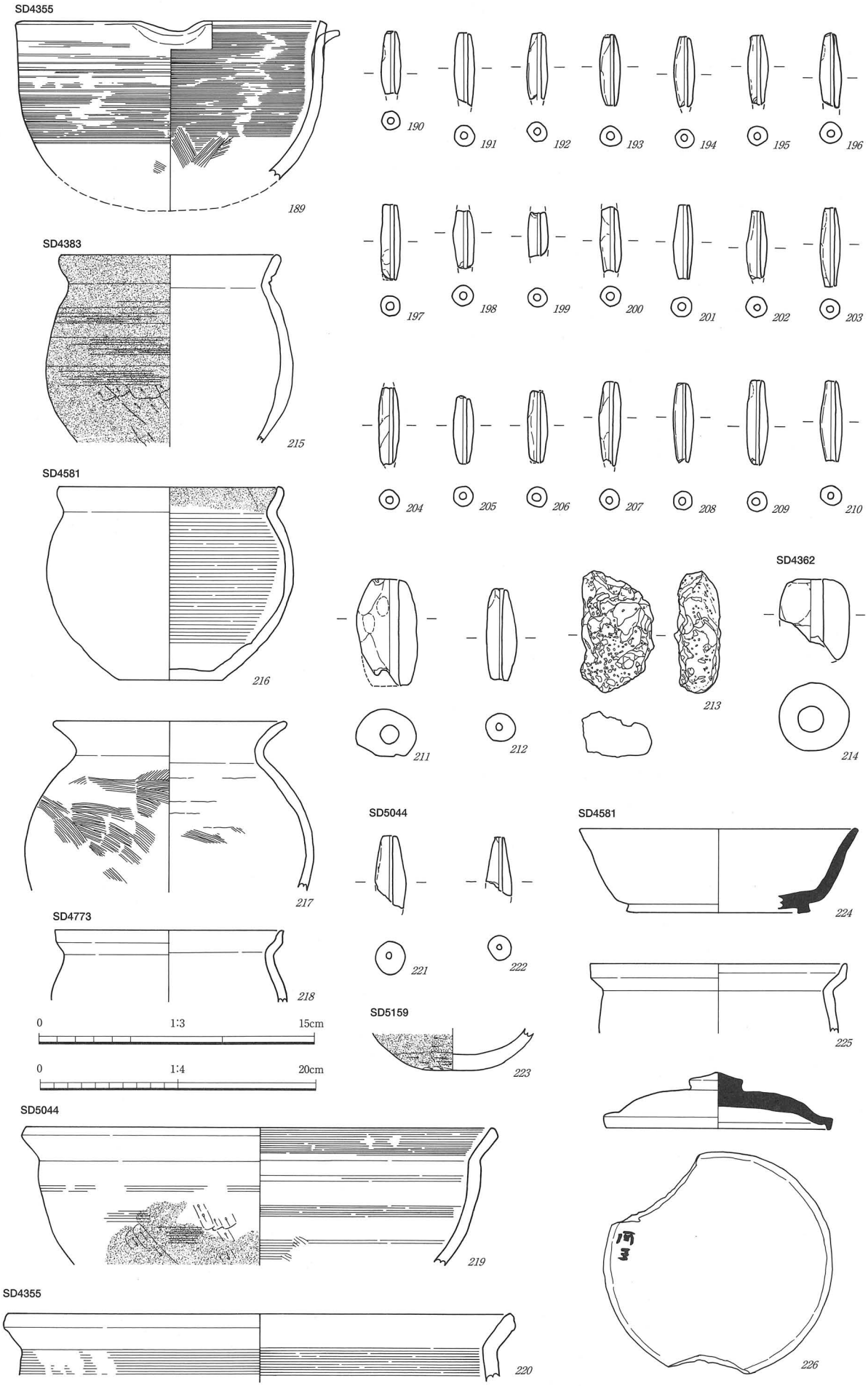
1～4. SD4355　5・6. SD4355・SD4362　7～10. SD4359　11. SD4362　12. SD4362・SD4363
13. SD4643　14. SD4577・SD4581　15・16. SD4581　17. SD5044・SK5045　18. SD5159　19・20. SD5378



第64図　遺物実測図　（*134*～*161*　1/3，*162*　1/4）
SD4316（*162*）　SD4355（*134*～*161*）



第65図　遺物実測図　（*163～185・187・188*　1/3，*186*　1/4）
SD4355



第66図　遺物実測図　（*189～216・218・221～226*　1/3，*217・219・220*　1/4）

SD4355（*189～213・220*）　SD4362（*214*）　SD4383（*215*）　SD4581（*216・217・224*）　SD4773（*218*）
SD5044（*219・221・222*）　SD5159（*223・225・226*）

デ調整で，口縁端部は垂下し，断面三角形を呈する。内面には「河王」と墨書がある。８世紀第４四半期のもの。

223は土師器甕。223の底部外面は手持ち削りで，全面に煤が付着している。

5378号溝（ＳＤ5378，第63図）

調査区南端を東西に流れ，ＳＤ4355とはＬ字状につながる可能性が高い。幅79㎝，深さ14㎝を測り，埋土は炭化物が混じる黒褐色砂質シルトである。出土遺物は多く，須恵器・土師器・加工板がある。

（中川道子）

5600号溝（ＳＤ5600，第68・69・71図，図版32・49）

Ｅ１・Ｅ２・Ｆ１～Ｆ３地区に跨る古墳時代の自然流路である。流路の幅はＥＩ・Ｅ２地区の検出状況から推定すると約70ｍで，両岸寄りの深度が一段深くなっており，中央部が浅く平坦面を呈している。Ｅ１地区の左岸では底を確認できたが，Ｅ２地区の右岸では湧水が激しく崩落の危険があったため最深部は確認できなかった。Ｅ１地区で確認した堆積埋土は比較的単純で，大きく３層に分かれる。上層が黄褐色粗砂と粘土の互層，中層が特徴となる植物遺体を多量に含む黒褐色粘土層，下層が灰色細砂層で，最下層は中央部で礫層となっている。遺物はＥ１地区の左岸から黒褐色粘土層に混じり出土しており，その下層からは出土しない。また，Ｅ１地区においてはこの流路の上面では古代の遺構は検出しておらず，当時は未だに安定した地盤とはなっておらず，低湿な場所であったと推定される。Ｆ１～Ｆ３地区の検出状況は上層から新しい流路が切り込んでいるためやや複雑となっているが，特徴となる植物遺体が多く混じる黒褐色粘質土がここでもレンズ状に堆積している。ここでは最終段階において灰白色粘質シルトが堆積し，この上面に古代の遺構が築かれていることから，Ｅ１地区に比べ安定した地盤であった様子が窺われる。

出土した遺物はすべてＥ１地区からで須恵器と土師器が出土している。遺物の時期は６世紀末から９世紀第２四半期のものがある。須恵器は杯蓋・杯・短頸壺・平瓶があり，平瓶以外は上層から出土しており，流路の最終段階の遺物と推定され，右岸の集落の遺物の時期と同じで，８世紀から９世紀のものである。平瓶（231）は７世紀後半の遺物で，口縁部と体部の一部を欠くがほぼ完形である。体部外面上半部はカキメ調整，下半部はロクロ削りが施されている。土師器は流路の中層から６世紀末の土師器の壺（233）と甕（234）が出土している。233は橙色を呈し，口縁部外面が縦方向のヘラミガキ，内面が横方向のヘラミガキ，体部は外面が横方向のヘラミガキ，内面がナデ仕上げで非常に丁寧な作りである。234は球形に近い体部で，外面ハケメ，一部削り調整，内面はハケメ調整である。

5601号溝（ＳＤ5601，第67・71図）

Ｅ１地区北西で検出した東西に走る溝。部分的検出で，北側は撹乱により削られている。遺物は８世紀の須恵器の甕（235）が出土している。

5602号溝（ＳＤ5602，第67図）

Ｆ１地区のＳＤ6329と同一の溝で北東から南西へＳＤ5600に流れる溝である。周辺の建物群との切り合いはすべて負けており，時期は若干古い。しかし，ＳＢ63周辺の浅い窪地に堆積していた黒褐色粘質土よりは時期は新しい。遺物は土師器が出土している。

5620号溝（ＳＤ5620，第67図）

Ｅ１地区中央を南北に走る溝。北端は撹乱に切られる。周囲は撹乱や削平の影響を受けており，遺構もほとんど検出できなかった。溝の西側に位置するＳＢ61は建物の主軸がほぼ北を向いており，同時期の遺構の可能性がある。出土遺物には土師器がある。

5622号溝（ＳＤ5622，第67・71図）

Ｅ１地区北端を逆「Ｌ」字形に曲がる溝。南端は調査区外へ，北端は町道を挟んだＤ地区方向に延びるがＤ地区では続きを検出できなかった。当初別遺構として掘削したが，屈曲部が撹乱を受けているだけで同一遺構と判断した。遺物は８世紀第３四半期の須恵器の杯Ａ（237）と土師器の鍋（236）が出土している。鍋は口径35cmで，体部外面には縦方向の手持ち削りが施される。

5630号溝（ＳＤ5630，第71図）

長さ1.3m，幅15cm，深さ５cmの小規模な溝であるが，須恵器が出土している。238は８世紀第３四半期の杯Ｂ，239は８世紀前半の杯Ａである。

5839号溝（ＳＤ5839，第71・87図）

Ｅ１地区北端で検出した南北に平行する溝群のうちの１条である。畠と推定される。240は８世紀第３四半期の杯Ｂである。（島田美佐子）

5928号溝（ＳＤ5928，第72・88・91・103図）

Ｅ２地区のさく状遺構である。土師器甕（241）がある。口縁部は直線的に開き，口縁端部は直立気味でやや窪んだ面をもち，先端をつまみ上げている。口縁部はロクロナデ，体部は内外面カキメ調整で，内面には炭化物が付着している。時期は８世紀である。

5947号溝（ＳＤ5947，第72・88・89・91図，図版49）

Ｅ２地区のさく状遺構である。出土遺物には須恵器杯Ｂ（242）がある。口径13.6cm，器高5.3cmを測り，高台は低いがやや外に開き，端部に面をもつ。時期は８世紀第４四半期である。（中川道子）

6210号溝（ＳＤ6210，第67図，図版32）

南北に走る断面逆台形の溝。埋土の下層には植物遺体が含まれる。ＳＤ6211・ＳＤ6212・ＳＤ6213・ＳＤ6215より新しい。しかし，出土遺物もなく詳細な時期は不明である。

6211号溝（ＳＤ6211，第67図，図版32）

ＳＤ6210と交差する溝。ＳＤ6212・ＳＤ6213よりは新しく，ＳＤ6214・ＳＤ6217には切られる。上層には浅黄色の砂が堆積する。遺物の出土はない。

6216号溝（ＳＤ6216，第67図）

東西に走る溝でＳＤ6258よりは新しいが，ＳＤ6219との切り合い関係は不明確である。西端の下層からはＳＫ6233が見つかっている。上層には植物遺体を含む暗灰黄色砂質土が堆積する。須恵器が出土している。

6219号溝（ＳＤ6219，第67・73図，図版77）

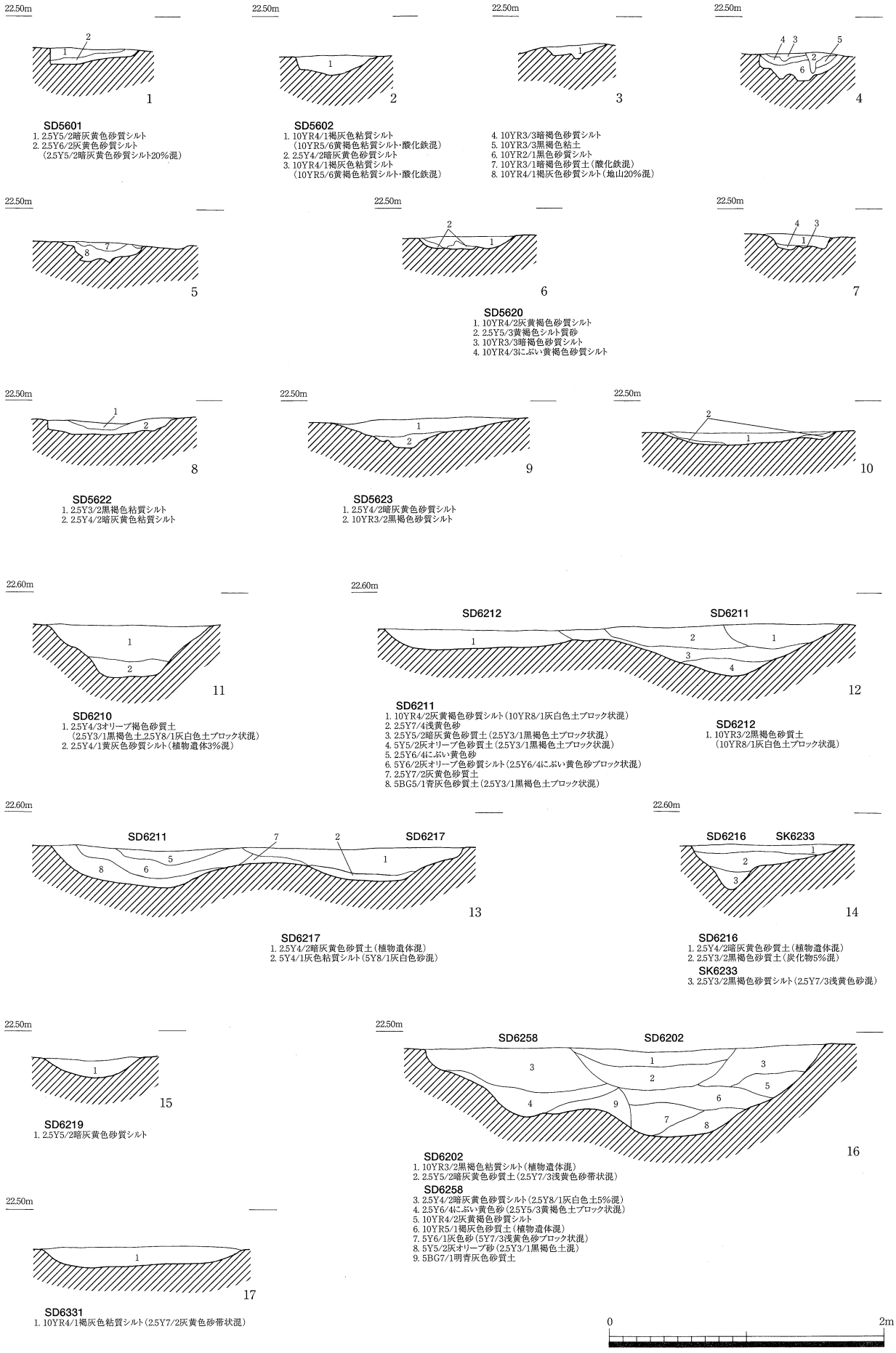
ＳＤ6216と交差する溝。ＳＤ6216との合流部で７世紀前半の提瓶（244）が出土している。また，古墳の周溝と推定するＳＤ6270やＳＤ6258より新しい。243は中央に長方形の穴が２箇所穿たれた板状の木製品である。提瓶は体部がやや歪んだ器形で，口縁端部が欠損する。体部はロクロナデ調整で肩部には形骸化したＣ字状の取っ手が付く。

6258号溝（ＳＤ6258，第67・73図，図版49）

古墳の周溝ＳＤ6270の南西側を切り南北に流れる溝で，幅約2.6m，深さは約50cmで，下層には砂が堆積する。須恵器と加工材が出土している。248は3.3cm×2.3cm角の棒状の木製品で，片方の先端が削られて尖っている。

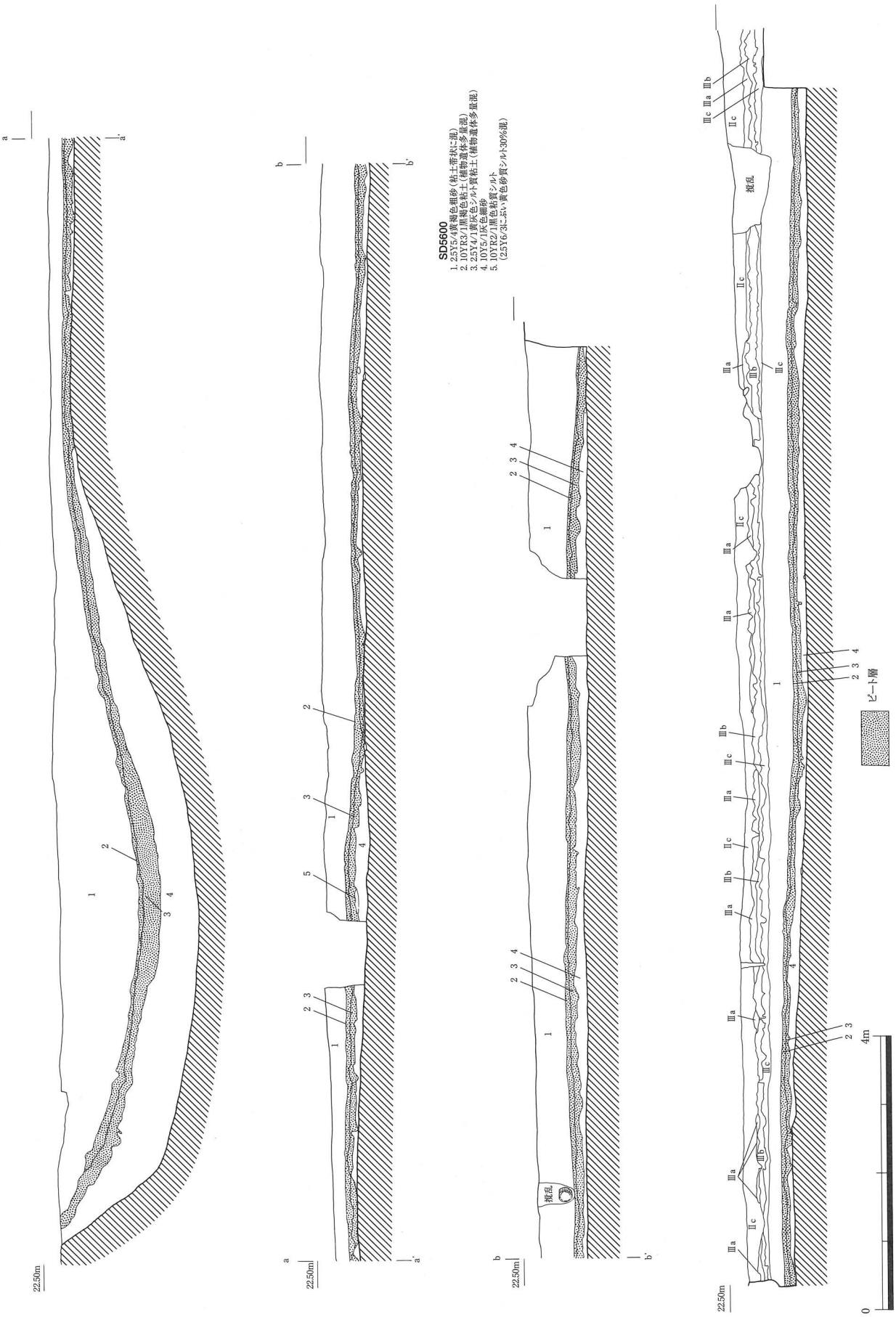
6259号溝（ＳＤ6259，第69・73図，図版49）

上層のＳＤ6203の下層で検出した溝で，ＳＤ5600を切っている。幅は6.4m，深さは約１mである。



第67図　遺構実測図

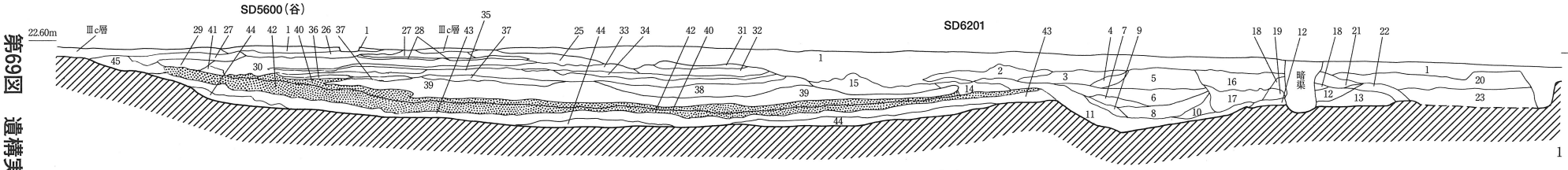
1. SD5601　2～5. SD5602　6・7. SD5620　8. SD5622　9・10. SD5623　11. SD6210　12. SD6211・SD6212
13. SD6211・SD6217　14. SD6216・SK6233　15. SD6219　16. SD6202・SD6258　17. SD6331



第68図　遺構実測図
SD5600

第69図　遺構実測図

1.SD5600・SD6201　2.SD5600　3.SD5600・SD6203・SD6259

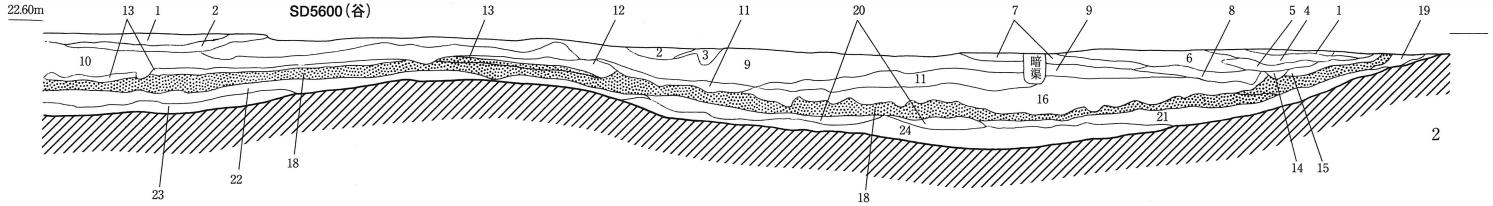


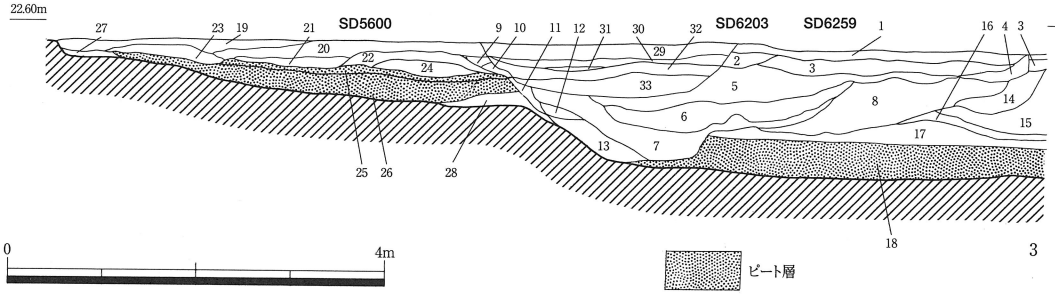
SD6201

1. 10YR3/2黒褐色シルト（植物遺体混）
2. 2.5Y6/6明黄褐色砂
3. 2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルト（植物遺体混）
4. 2.5Y3/1黒褐色砂質シルト
5. 10YR5/1褐灰色粘質シルト（10YR5/3にぶい黄褐色土ブロック状に混）
6. 10YR4/1褐灰色粘質シルト
7. 2.5Y5/4黄褐色砂（2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルトブロック状に混）
8. 10YR4/2灰黄褐色粘質土（5cm大の礫混）
9. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト
10. 10YR3/3暗褐色粘質シルト（5Y6/1灰色土ブロック状に混）
11. 5Y3/1オリーブ黒色粘質土（植物遺体多量混）
12. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
13. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質土（2.5Y6/4にぶい黄色砂帯状に混）
14. 2.5Y6/4にぶい黄色粘質土（5BG5/1青灰色土マーブル状に混）
15. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト（2.5Y7/3浅黄色砂帯状に混）
16. 2.5Y3/2黒褐色粘質シルト（2.5Y7/3浅黄色土ブロック状に混）
17. 2.5Y5/4黄褐色砂質土（2.5Y3/1黒褐色土ブロック状に混）
18. 2.5Y5/3黄褐色粘質土
19. 2.5Y4/6オリーブ褐色砂質シルト
20. 10YR6/2灰黄褐色シルト（10YR7/1灰白色土・10YR3/1黒褐色ブロック状に混）
21. 2.5Y4/1黄灰色粘質シルト（5BG4/1暗青灰色土ブロック状に混）
22. 10YR3/3暗褐色粘質土（炭化物混）
23. 10YR3/1黒褐色砂質シルト（10cm大の礫混）

SD5600（谷）

24. 2.5Y5/3黄褐色砂質シルト（Ⅲc層）
25. 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土（2.5Y7/3浅黄色土ブロック状に混）
26. 2.5Y5/4黄褐色砂質シルト（2.5Y7/3浅黄色土ブロック状に混）
27. 2.5Y6/4にぶい黄色砂
28. 2.5Y7/1灰白色砂質シルト
29. 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト（2.5Y7/2灰黄色土ブロック状に混）
30. 2.5Y7/4浅黄色砂（2.5Y6/1黄灰色砂ブロック状に混）
31. 2.5Y7/4浅黄色砂
32. 2.5Y6/1黄灰色砂（細砂）
33. 2.5Y7/2灰黄色砂質土
34. 2.5Y6/4にぶい黄色砂（粗砂）
35. 5Y6/1灰色砂質土（ピート帯状に混）
36. 5Y5/1色灰砂質土（細砂）
37. 5Y7/4浅黄色砂（5Y6/1灰色土ブロック状に混）
38. 5Y7/4浅黄色砂（5Y6/1灰色砂質土ピート帯状に混）
39. 5Y6/2灰オリーブ色砂（2.5Y5/2暗灰黄色シルト,互層混）
40. 2.5Y6/1黄灰色粘質土（植物遺体混）
41. 2.5Y5/1黄灰色粘質土（2.5Y7/2灰黄色土混）
42. 10YR3/1黒褐色粘質土（炭化物少量混）
43. 5Y5/1灰色砂質シルト
44. 5Y4/1灰色砂質土
45. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト（2.5Y3/1黒褐色土ブロック状に混）





SD6259

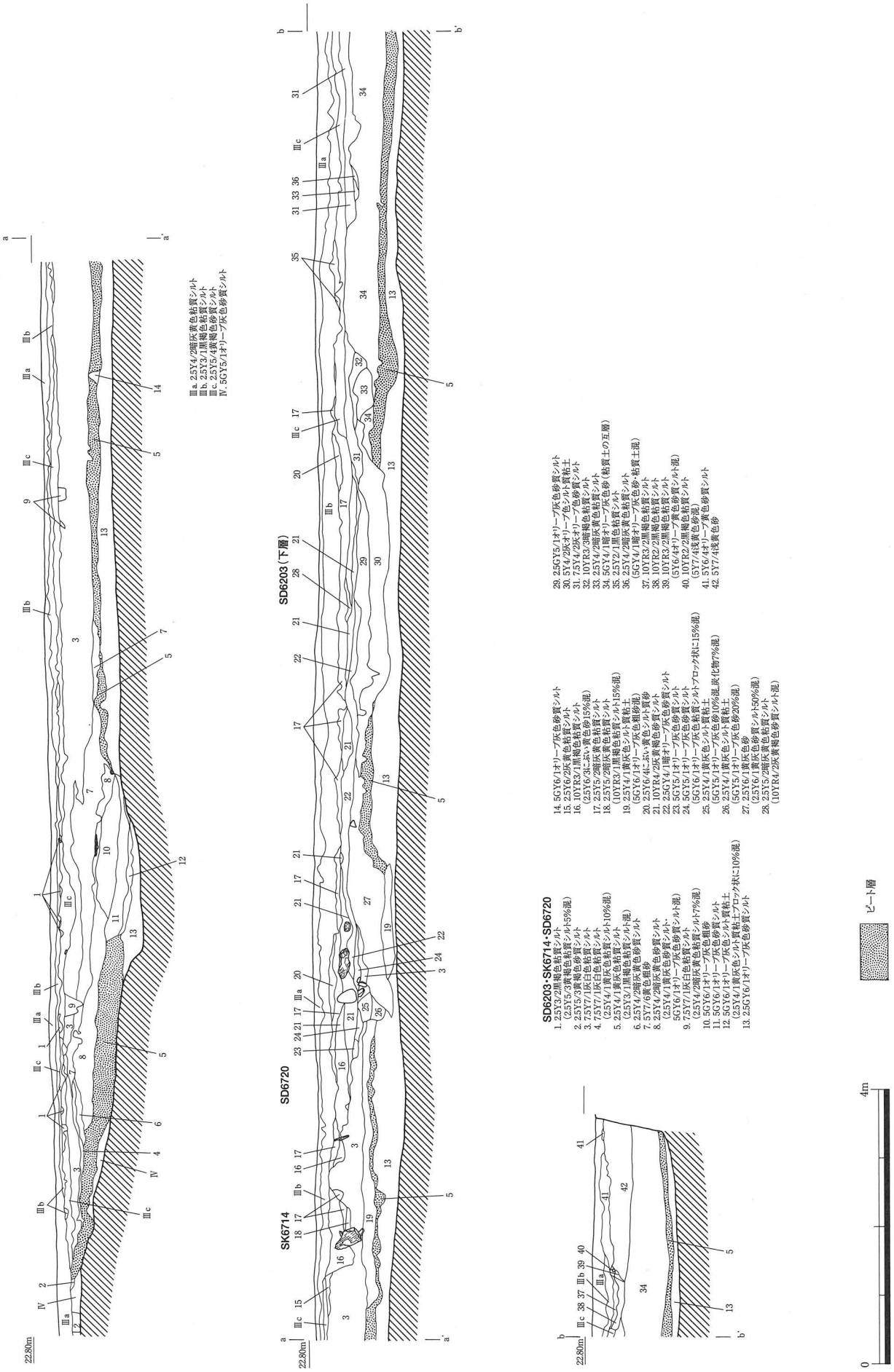
1. 2.5Y5/3黄褐色砂質シルト
2. 2.5Y6/3にぶい黄色砂質土（植物遺体混）
3. 10YR5/2灰黄褐色砂質シルト（植物遺体混）
4. 2.5Y6/1黄灰色砂質土
5. 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト（2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルト・2.5Y7/2灰黄色砂マーブル状に混,植物遺体混）
6. 2.5Y7/1灰白色砂（2.5Y6/1黄灰色粘質土,互層に混）
7. 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト（植物遺体混）
8. 2.5Y5/2暗灰黄色粘質シルト（2.5Y6/1黄灰色砂マーブル状に混,植物遺体多量混）
9. 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土（植物遺体混）
10. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質土
11. 2.5Y6/2灰黄色砂質シルト（2.5Y3/1黒褐色土ブロック状に混）
12. 2.5Y4/2暗灰黄色粘質シルト（5Y6/1灰色砂帯状に混）
13. 5Y5/1灰色砂
14. 2.5Y6/2灰黄色砂質土（2.5Y3/1黒褐色土ブロック状に混,植物遺体混）
15. 5Y5/2灰オリーブ砂質シルト
16. 2.5Y6/2灰黄色粘質土
17. 5Y6/3オリーブ黄色砂質シルト（植物遺体少量混）
18. 5Y5/1灰色粘質シルト（2.5Y3/1黒褐色土と互層混,植物遺体多量混）

SD5600

19. 2.5Y5/2暗灰黄色砂質土（2.5Y7/2灰黄色土ブロック状に混）
20. 2.5Y7/3浅黄色砂質シルト（2.5Y3/1黒褐色土混）
21. 5Y6/1灰色粘質シルト
22. 5Y5/2暗灰黄色砂質土（2.5Y3/1黒褐色土ブロック状に混）
23. 2.5Y5/3黄褐色粘質シルト（2.5Y7/1灰白色土ブロック状に混）
24. 5BG7/1明青灰色粘質土（2.5Y7/6明黄褐色砂帯状に混）
25. 5BG7/1明青灰色粘質土（2.5Y6/1黄灰色粘質土混,植物遺体混）
26. 10YR2/2黒褐色砂質土（10YR3/1黒褐色粘質土混,炭化物少量混）
27. 5Y5/2灰オリーブ砂質土
28. 5BG6/1青灰色砂（2.5Y3/1黒褐色土ブロック状に混）

SD6203

29. 10YR3/2～2/2黒褐色粘質シルト（植物遺体30%混）
30. 2.5Y6/2灰黄色砂
31. 2.5Y3/2黒褐色砂質シルト
32. 2.5Y4/1黄灰色砂質シルト（植物遺体10%混）
33. 2.5Y5/1黄灰色砂質土（1mm大の砂マーブル状に混,植物遺体10%混）



第70図　遺構実測図

SD6203・SK6714・SD6720

SD5600

227

229

230

228

233

231

234

232

SD5601

235

SD5622

236

SD5630

237

238

SD5839

239

240

0　1:3　15cm

0　1:4　20cm

第71図　遺物実測図　(*227～231・233・237～240*　1/3，*232・234～236*　1/4)

SD5600(*227～234*)　SD5601(*235*)　SD5622(*236・237*)　SD5630(*238・239*)　SD5839(*240*)

SD5928

SD5947

241

242

0　15cm

第72図　遺物実測図　(1/3)

SD5928(*241*)　SD5947(*242*)

遺物には内外面赤彩の８世紀後半の高杯（246）が出土している。

6328号溝（ＳＤ6328，第73図）

Ｆ１地区北側で検出した溝。ＳＤ6329より古い。８世紀第２四半期の須恵器杯Ｂ（249）が出土している。口縁部は外反し，見込みには仕上げナデが施されている。

6331号溝（ＳＤ6331，第67図）

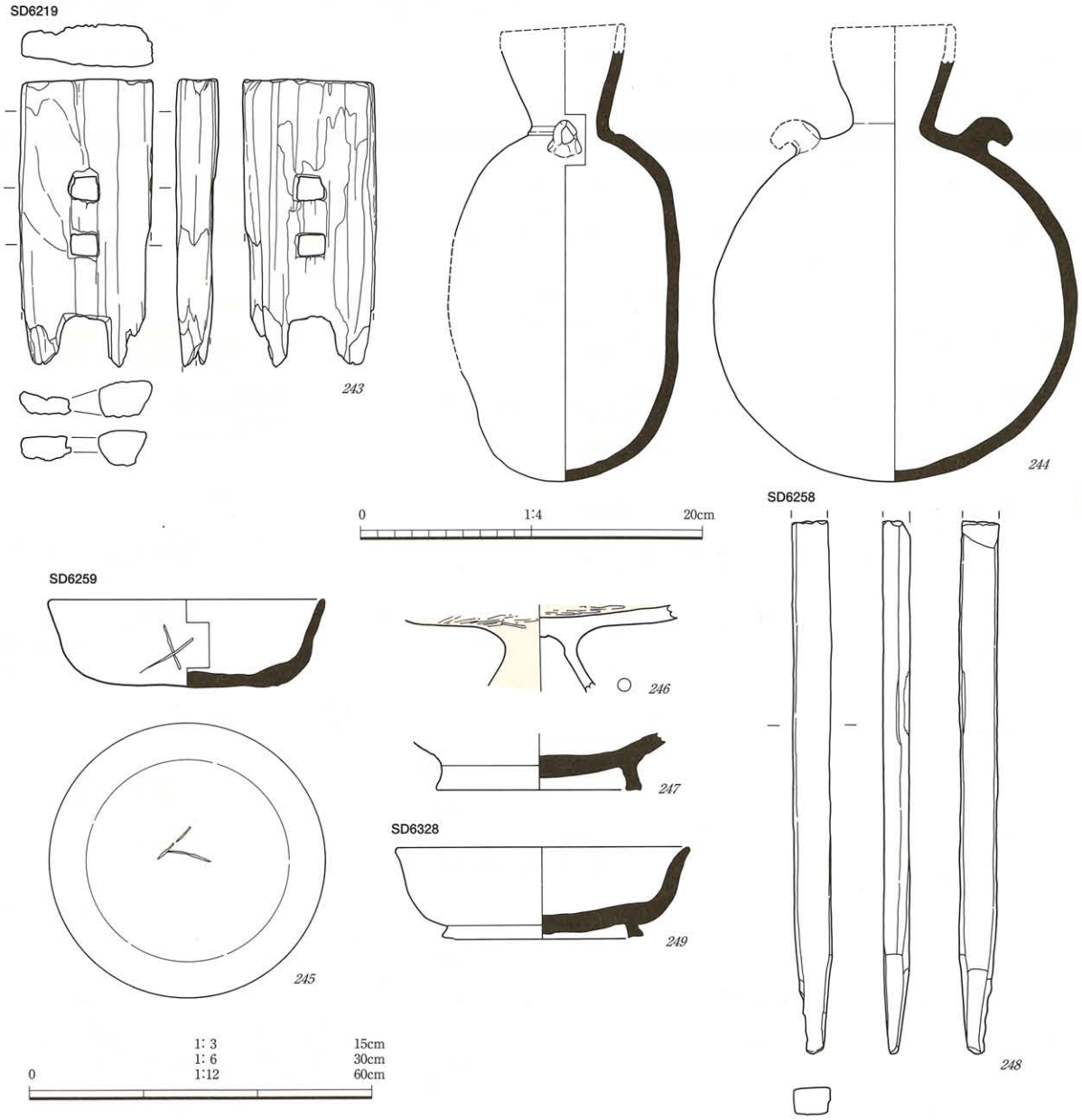
Ｆ１地区北端で検出した，溝で西へ調査区外へと延びる。畠と考えられるＳＤ6327に切られる。底面は平坦で埋土は褐灰色粘質シルトの単層である。内部には護岸状の杭列が認められ，何らかの水利施設の役割を担っていたものと考えられる。

6501号溝（ＳＤ6501，第74・76図）

調査区外から北東に延びる浅い溝。８世紀第１四半期の杯Ａ（250）が出土している。

6502号溝（ＳＤ6502，第74図）

ＳＤ6501の北約２ｍ，ＳＤ6501にほぼ平行する浅い溝。重複するＳＤ6503よりは新しい。土師器が出土している。



第73図　遺物実測図　（*245*～*247*・*249*　1/3，*244*　1/4，*248*　1/6，*243*　1/12）
SD6219（*243*・*244*）　SD6258（*248*）　SD6259（*245*～*247*）　SD6328（*249*）

6503号溝（ＳＤ6503，第74図）

ＳＤ6502と重複し，途中からＳＤ6504と合流し，西進する溝。ＳＢ65の柱穴の切り合いは，溝のほうが古い。遺物は土師器が出土している。

6504号溝（ＳＤ6504，第74図）

ＳＤ6502の約３ｍ北に位置し，ＳＤ6503と合流する。ＳＤ6505より古く，ＳＤ6506よりは新しい。これらの溝は人為的に掘削された溝というよりは，自然にオーバーフローして流れた跡のように蛇行したり分岐したりしている。須恵器と土師器が出土している。

6506号溝（ＳＤ6506，第74・76図）

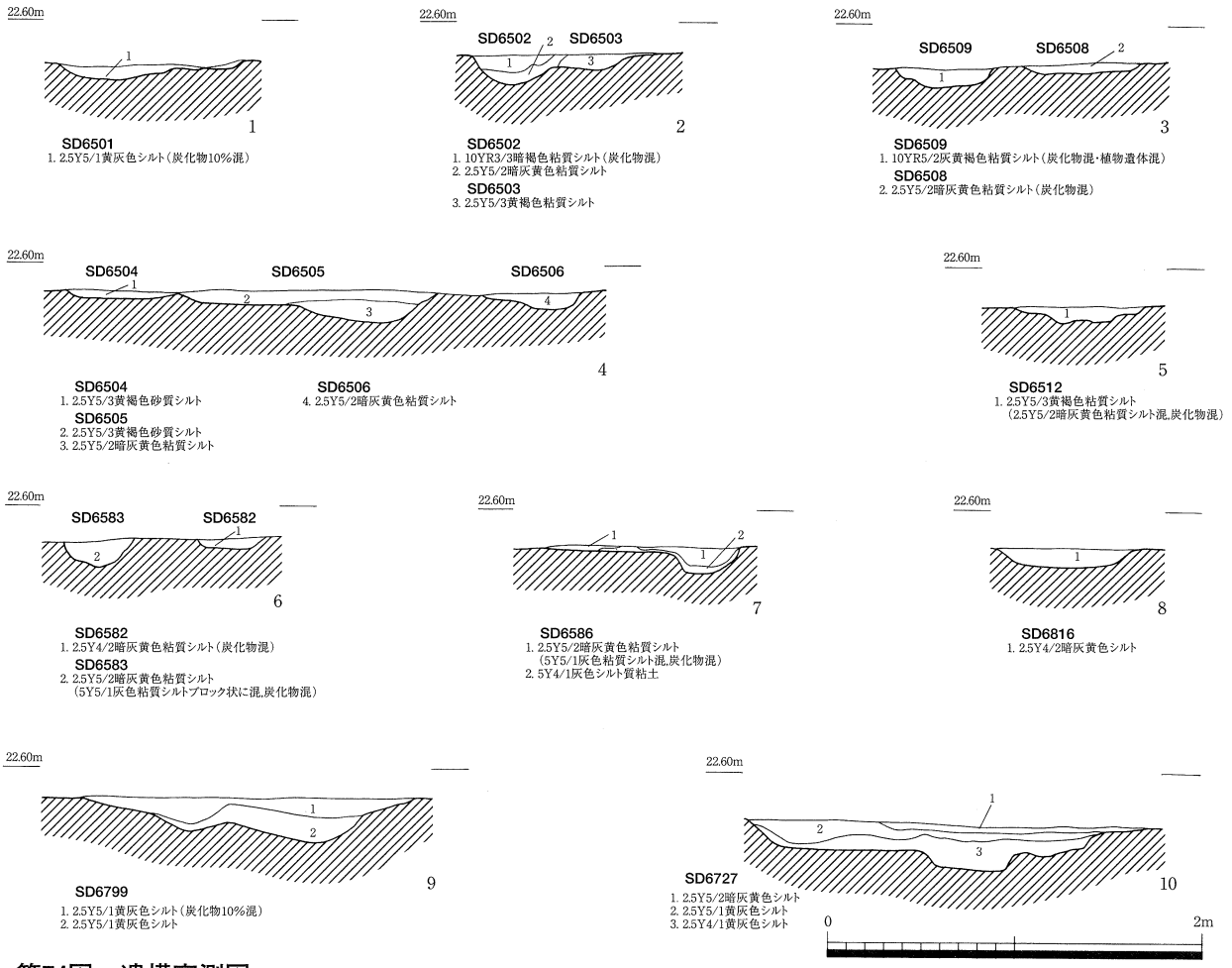
ＳＤ6504の北側で重複する溝。ＳＤ6504・ＳＤ6505より古い。途中で分岐し再び合流する。ＳＤ6504と同様の性格の自然流路である。遺物は須恵器と土師器が出土している。251は８世紀第３四半期の杯蓋で，天井部外面にはロクロ削り，内面には仕上げナデを施している。

6507号溝（ＳＤ6507，第76図）

ＳＤ6502の西に位置する小規模な溝。覆土の上面から焼土ブロックの混入が認められ，深くなっていた北側では焼土や炭化物が多く混じっており，下層には植物遺体が堆積していた。この溝の西にはこの遺構と良く似た性格のＳＫ6596がある。遺物は須恵器と土師器が出土している。252は８世紀のロクロ成形の土師器の甕である。

6508号溝（ＳＤ6508，第74図）

ＳＩ４の西側で検出した南北方向の溝。ＳＤ6509とほぼ平行し，ＳＩ４と関連するとも考えられるが，南で検出したＳＤ6592・ＳＤ6722などの柵状遺構の延長とも考えられる。須恵器と土師器が出土



第74図　遺構実測図

1．SD6501　2．SD6502・SD6503　3．SD6508・SD6509　4．SD6504～SD6506　5．SD6512
6．SD6582・SD6583　7．SD6586　8．SD6816　9．SD6799　10．SD6727

している。

6509号溝（ＳＤ6509，第74図）

ＳＤ6508に平行する溝。柵状遺構の可能性がある。埋土は炭化物と植物遺体が混じる灰黄褐色粘質シルトで，深さは11cmである。遺物は土師器が出土している。

6511号溝（ＳＤ6511，第76図）

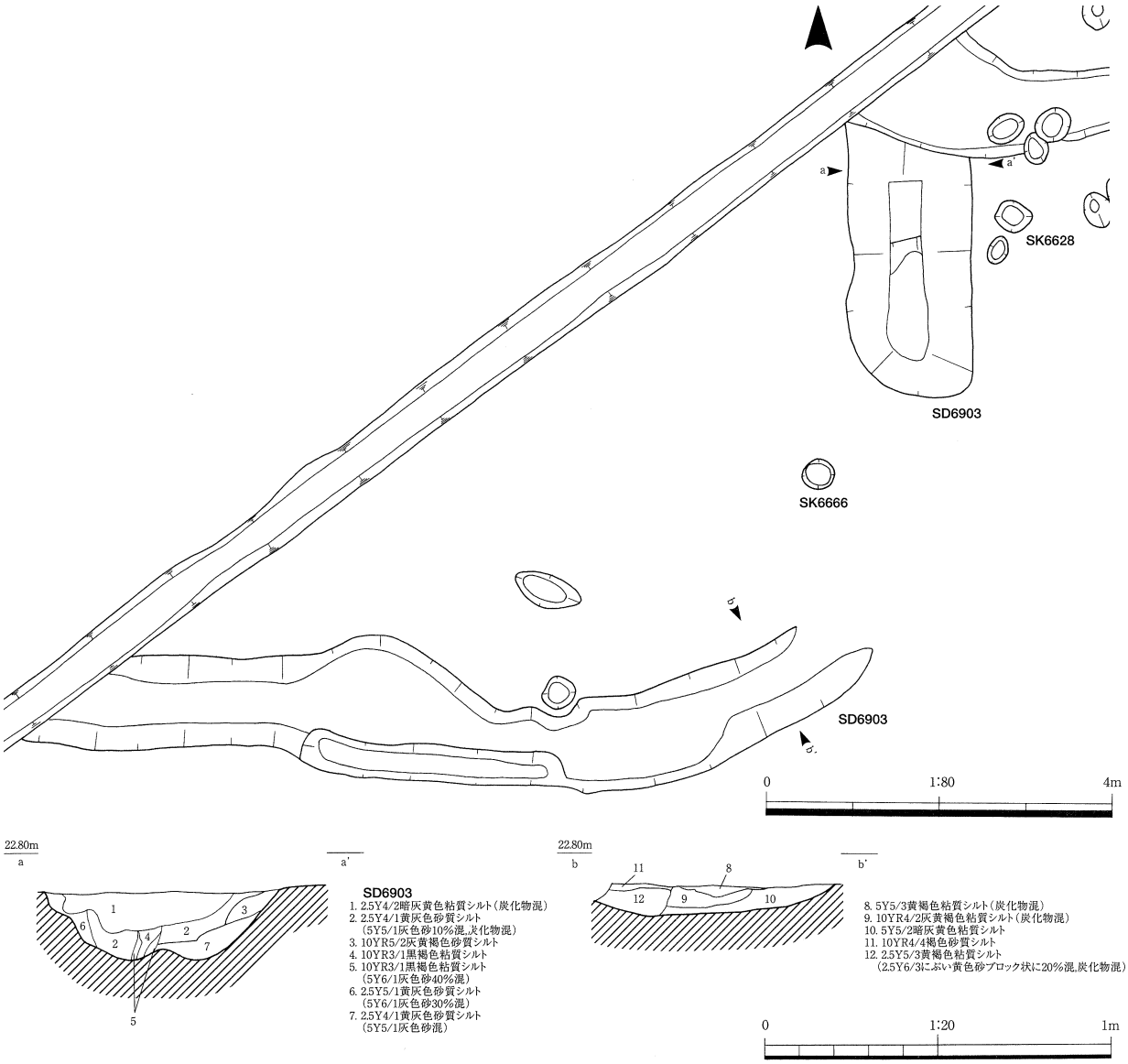
ＳＢ65と重複する南北方向の浅い溝。北はＳＤ6503に切られる。建物との切り合いは不明である。８世紀第３四半期の杯Ｂ（253）が出土している。

6512号溝（ＳＤ6512，第74図）

ＳＩ５の南西で検出した南北方向の溝。ＳＤ6759・ＳＤ6710と平行し，柵状遺構の可能性もある。土師器が出土している。

6559号溝（ＳＤ6559，第76図）

ＳＩ５の南に位置する不整形な溝で，深さも一様ではないが，土師器片がまとまった状態で出土している。254は口縁部を欠くが形が復元できた土師器の鍋である。体部外面はハケメと一部手持ち削り調整，内面はハケメ調整である。８世紀前半のものである。



第75図　遺構実測図
SD6903

6582号溝（ＳＤ6582，第74図）

ＳＤ6583・ＳＤ6797・ＳＤ6798と平行する溝。幅約45cm前後で規模もほぼ同じである。調査区中央の柵状遺構群の向きが北より東に振っているのに対し，これらの溝は北より西に振っているので時期の違う柵状遺構群と考える。須恵器・土師器が出土している。

6583号溝（ＳＤ6583，第74・76図，図版77）

ＳＤ6582の西側に位置し，これに平行する溝。柵状遺構である。遺物には須恵器・土師器・木製品があり，255は楔形状の木製品で，板状の長方形の材の片方を両側から削っている。

6586号溝（ＳＤ6586，第74・76図）

ＳＢ66を囲む北辺の溝ＳＤ6588の北側で検出した溝。北側に向かって幅広くなっているが，本来の溝幅は南側の一段深い溝の幅であったと考える。土錘（256）が出土している。

6720号溝（ＳＤ6720，第70・76図）

ＳＤ6461の下層の溝の西に広がる浅瀬状の自然流路。ＳＤ6461との切り合いはほとんどなく同時期と考えている。覆土には多くの自然木が混じり，特に北端で多く検出できた。その中には加工された板材（261）なども含まれた。遺物はその他に須恵器・土師器が出土している。257は８世紀第３四半期の杯蓋で，天井部にはロクロ削りが施される。260はロクロ成形の外面に赤彩が施された椀で，９世紀第４四半期のものである。この他にも図示しなかったが，口縁部内側に面を取る椀形の器形で，内面に放射状の文様をもつ暗文土器が出土している。

6727号溝（ＳＤ6727，第74図）

中央の柵状遺構の西端で検出した幅約２ｍの大型の溝。長さは8.5ｍと短く，北端は中央に向けて段掘り状になっている。長方形の規格化された溝のようだが，遺物は何も出土しなかった。

6799号溝（ＳＤ6799，第74・76図）

ＳＤ6797・ＳＤ6798の東側で検出した幅約1.8ｍの溝。埋土は炭化物の混じる黄灰色シルトである。深さは深い所では24cmあり幅も広いが，底が凸凹しておりＳＤ6582・ＳＤ6583らと平行していることから柵状遺構と同様の遺構と考えられる。須恵器と土師器が出土している。262は須恵器の杯蓋で，ＳＤ6583から出土の破片と接合できた。263とともに８世紀第１四半期である。

6801号溝（ＳＤ6801，第76図）

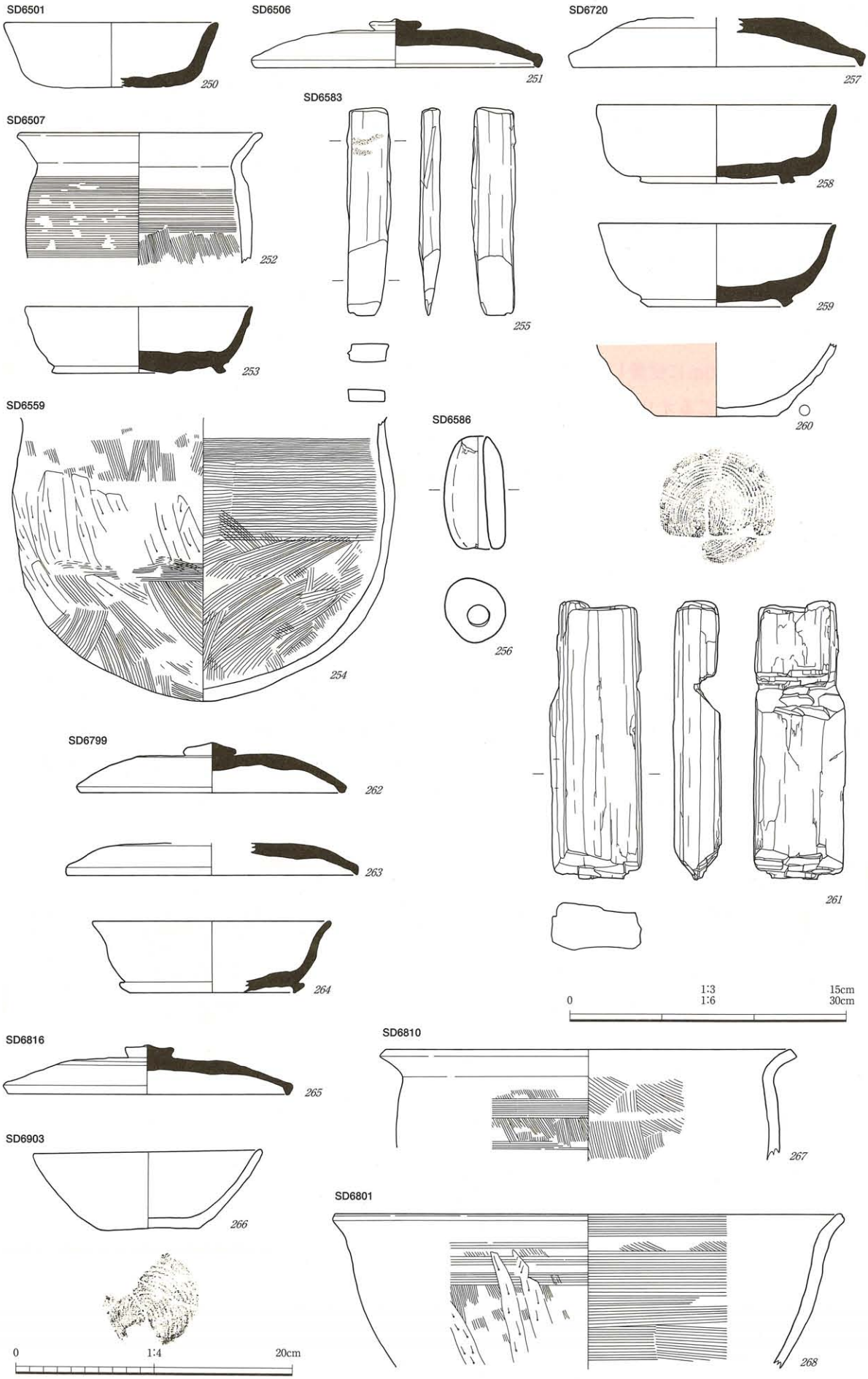
ＳＫ6802とＳＫ6804の大型の土坑の間で検出した溝。ＳＫ6802より古い。底面の状態と断面観察から２条の溝があったと推定される。東側のＳＤ6805・ＳＤ6807・ＳＤ6809と平行関係にあるので，関連のある溝群として捉えられる。268は土師器の鍋で，口縁部と体部とのくびれはほとんどない。口径は36.2cm，外面ハケメ後カキメ調整，一部手持ち削り調整，内面はハケメ後カキメ調整である。

6810号溝（ＳＤ6810，第76図）

ＳＤ6512の西側に位置し，これに平行するように検出した溝。当初この一帯はＳＫ6811を含めて竪穴建物の可能性を考えていたが，掘削を進めるうちに，浅く窪んだ落ち込みの中に土坑と溝を検出した。267は胴の張らないタイプの鍋で，やや外反気味の口縁部に外傾する端部をもつ。体部外面はハケメ後カキメ調整，内面はハケメ調整である。時期は８世紀後半である。

6816号溝（ＳＤ6816，第74・76図，図版49）

Ｆ２地区の北側，古代の建物群のはずれで検出した南北方向の溝。南端は下層確認トレンチに切られている。埋土は暗灰黄色シルトの単層で，須恵器と土師器が出土している。265は口径15.3cm，高さ2.7cmの須恵器の杯蓋。時期は８世紀第２四半期。　　（島田美佐子）



第76図　遺物実測図　（*250・251・253・255～260・262～266*　1/3，*252・254・267・268*　1/4，*261*　1/6）
SD6501（*250*）　SD6506（*251*）　SD6507（*252*）　SD6511（*253*）　SD6559（*254*）　SD6583（*255*）　SD6586（*256*）
SD6720（*257～261*）　SD6799（*262～264*）　SD6801（*268*）　SD6810（*267*）　SD6816（*265*）　SD6903（*266*）

6903号溝（ＳＤ6903，第75・76図，図版49）

古墳の周溝ＳＤ6902の南西で検出した環状に巡ると推定される溝。途中途切れるが，当初ＳＤ6902らと同様古墳の周溝と考えていた。しかし，出土遺物を検討した結果９世紀の土師器が出土しており，性格の違う遺構と判明した。しかし，半分以上が調査区外へと延びており，溝の内部では他の遺構がほとんど検出できなかったことから性格は不明である。出土した土師器（266）はロクロ成形の椀で，底部に回転糸切り痕を有し，９世紀第４四半期のものである。

9043号溝（ＳＤ9043，第77図）

５号古墳の周溝であるＳＤ9032の内側に位置し，幅88cm，深さ８cmを測る。3.5m南に位置するＳＤ9044と並行しており，繋がって方形に巡る可能性がある。埋土は黄褐色砂質シルトである。

9044号溝（ＳＤ9044，第77図）

ＳＤ9043の南3.5mに位置し，東端で北に向かってほぼ直角に屈曲している。幅86cm，深さ６cmを測り，埋土は礫が混じるオリーブ褐色砂である。

9132号溝（ＳＤ9132，第77図）

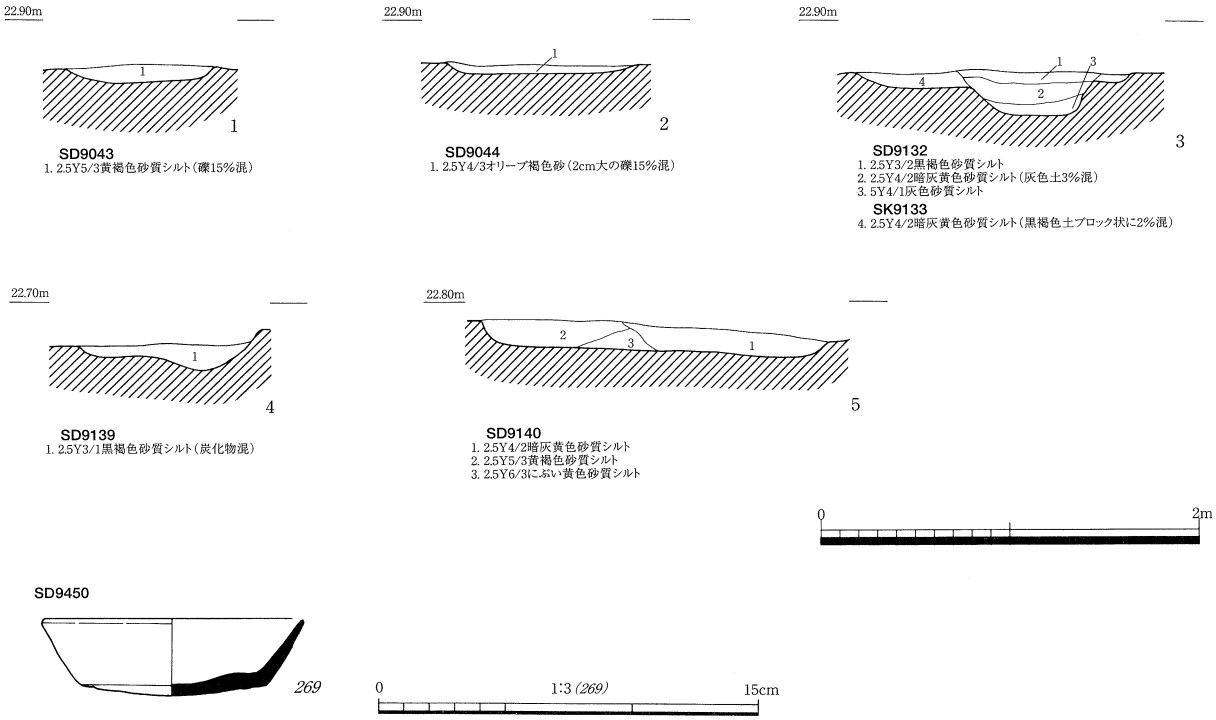
ＳＤ9075南端西側に位置し，ＳＫ9133より新しく，幅50cm，深さ25cmを測る。埋土は上層が黒褐色砂質シルト，中層が暗灰黄色砂質シルト，最下層は灰色砂質シルトである。

9139号溝（ＳＤ9139，第77図）

ＳＫ9001の底面で確認され，ＳＤ9140と並行している。幅58cm，深さ13cmを測り，埋土は炭化物が混じる黒褐色砂質シルトである。

9140号溝（ＳＤ9140，第77図）

ＳＤ9139と並行しており，間隔は南側で20cm，北に向かって広がり約60cmを測る。幅38cm，深さ20cmで，北端でＳＤ9139と合流して水溜まり状になる。埋土は暗灰黄色砂質シルト，黄褐色砂質シルト，にぶい黄色砂質シルトである。出土遺物には土師器がある。　　（中川道子）



第77図　遺構・遺物実測図

1. SD9043　2. SD9044　3. SD9132・SK9133　4. SD9139　5. SD9140
SD9450（*269*）

9450号溝（ＳＤ9450，第77図）

Ｆ４地区南端は東に向かって緩やかに傾斜し，調査区境でさらに一段深くなっており，この地形から調査区東側には浅い谷地形，または自然流路が存在すると予想され，この傾斜地をＳＤ9450と呼称することにした。269は口径10.2cm，器高３cmの杯Ｇで，底部外面には墨痕が残る。時期は７世紀第４四半期。（島田美佐子）

Ｄ　畠

平行する溝が数本並ぶ遺構をさく状遺構と呼び，畠と推定される遺構である。Ｃ・Ｄ・Ｅ１・Ｅ２・Ｆ１・Ｆ２・Ｆ４で検出された。Ｃ・Ｄ・Ｅ１地区のように建物周辺で検出したものと，Ｅ２・Ｆ１・Ｆ４のように建物を伴わなかった地区もある。遺構の時期は建物の棟方向との関係や他の溝との切り合い関係から推定しているが，ほとんどが８・９世紀のものである。

Ｃ地区畠（第78・79図，図版33）

Ｃ地区では３箇所でさくが検出されている。谷部西側で検出したＳＤ3166～ＳＤ3176・ＳＤ3187は北東南西方向のさくで，周辺には古代の建物は検出されない。幅平均約30cm，さく間隔は30cm～80cmで，埋土は暗灰黄色砂質土が主体的に堆積する。遺物は土師器が出土している。

ＳＢ15・ＳＢ16の６ｍ南で検出したＳＤ3463～ＳＤ3475はＳＢ15・ＳＢ16の主軸と平行しており，ほぼ同時期と推定される。北西南東方向のさくで，ＳＤ3466とＳＤ3470の２条が他のものよりやや北に振れ，切り合いも新しい。また，南端のＳＤ3474はＳＢ20の柱穴との切り合いでこれより古い。幅は約30cm～50cmで，切り合いの新しいものは幅約60cmとやや広めである。さく間隔は平均約50cmで，埋土は黒褐色シルトが主体である。遺物は新しいＳＤ3466とＳＤ3470から須恵器・土師器が出土している。この他に部分的な検出ではあるが，調査区西南端で，ＳＢ20と主軸方向が同じの北東南西方向のさくを検出している。（島田美佐子）

Ｄ地区畠（第80～86図，図版31～34・38・47・48・50）

Ｄ地区のＸ205以北，Ｘ185付近，Ｘ172付近で検出され，さくの方向には大きく東西方向と南北方向がある。北から便宜的にＡ～Ｈ群とし，建物群との重複が少ない部分のみ図示した。

Ａ群（第80図）

ＳＢ24の南，Ｘ215付近を中心に広がる東西方向のさくで，約30°北に振れている。幅30cm～50cm，深さ10cm～18cmを測り，埋土は暗灰黄色粘質シルトや灰黄褐色粘質シルトが主である。さくの間隔は30cm～60cmを測る。出土遺物にはＳＤ4205から土師器，ＳＤ4210から須恵器，ＳＤ4218から須恵器，ＳＤ4222から土師器，ＳＤ4276から須恵器，ＳＤ4279から土師器・須恵器がある。

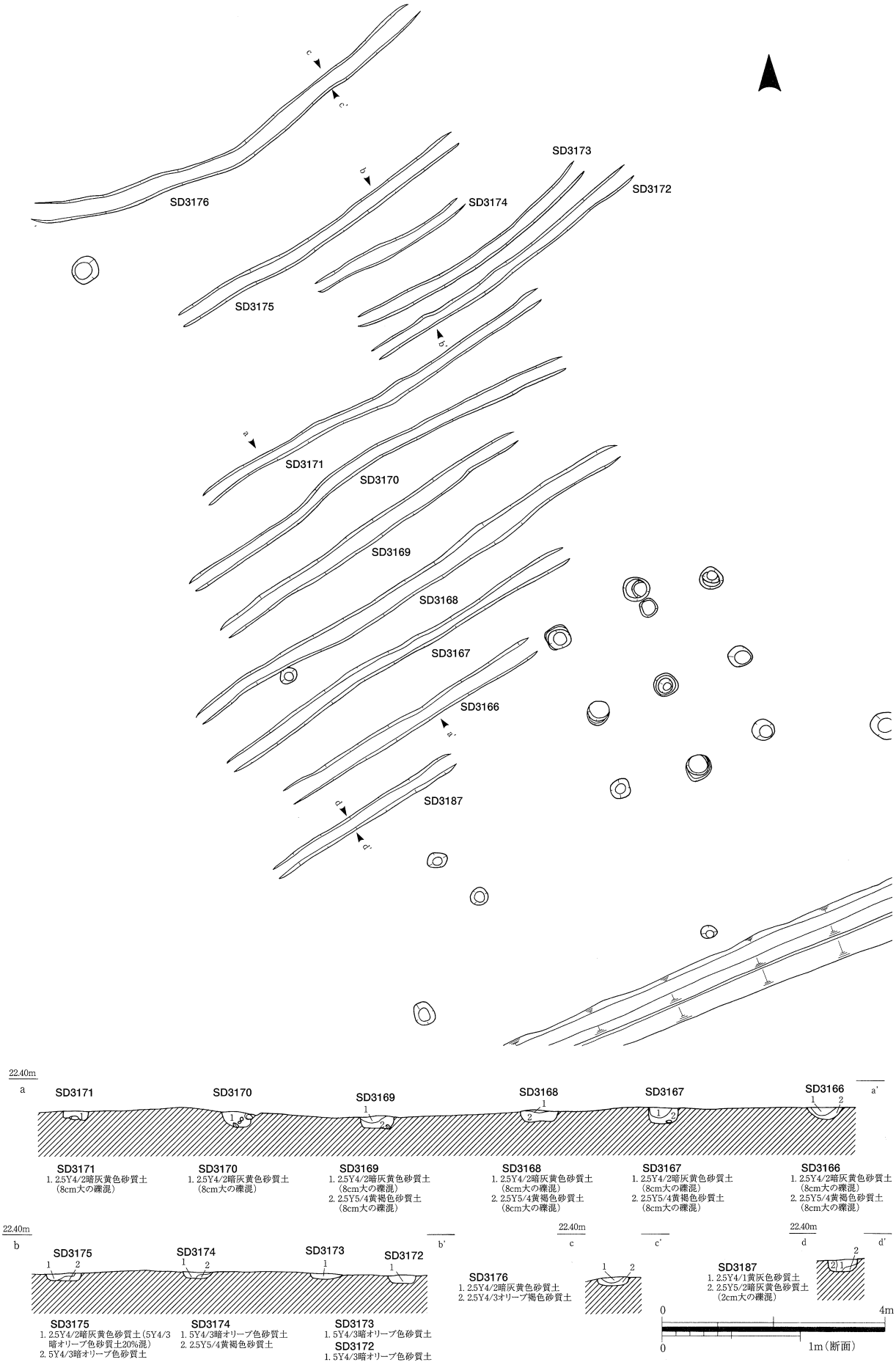
Ｂ群（第81図）

Ｘ205以北，Ａ群の南に位置し，ＳＤ4316・ＳＤ4317と並行している。幅30cm～40cm，深さ10cm～16cmを測り，埋土は黒褐色粘質シルトである。さくの間隔は30cm～70cmを測る。

Ｃ群（第85・86図，図版47）

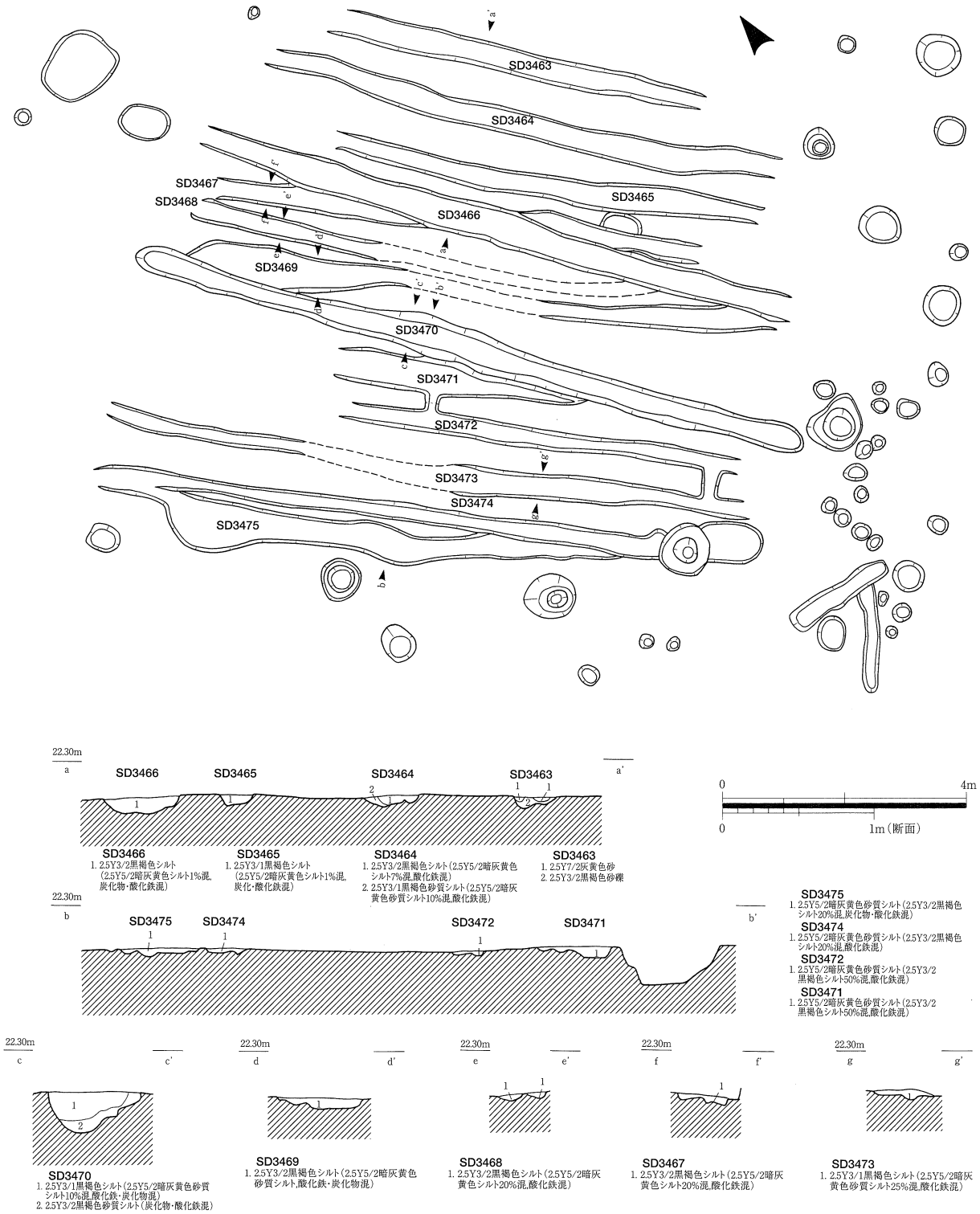
Ｘ195付近を中心に広がる南北方向のさくで，ほぼ真北を向くものと東へやや振れるものがあり，新旧関係では前者が新しい。ＳＢ25～ＳＢ32と重複しており，幅30cm～50cm，深さ10cm～20cmを測る。出土遺物にはＳＤ4343から須恵器（275），ＳＤ4366から須恵器（276），ＳＤ4368から土師器，ＳＤ4377から須恵器（271）・土師器・土錘（277），ＳＤ4380・ＳＤ4385・ＳＤ4388から土師器がある。

271は須恵器杯。275は須恵器杯Ａ。口径10.2cmを測り，口縁部がやや内湾気味に屈曲するもので，８世紀第１四半期のものか。276は須恵器杯Ｂ。口径11.5cmを測り，やや踏ん張り気味の高台は体



第78図　遺構実測図

SD3166～SD3176・SD3187



第79図　遺構実測図

SD3463～SD3475

部と底部の境より底部に入った位置に付く。8世紀第3四半期のもの。277は太形の管状土錘。一端は端面を水平に面取りするが，他端は尖る。

D群（第82・86図，図版50）

X185Y252付近に広がる南北方向のさくで，北端はSB33，東端はSB57と重複しており，C群の東へやや振れるものと方向を同じくする。幅30cm～40cm，深さ8cm～15cmを測り，埋土は灰黄褐色砂質シルトや黒褐色砂質シルトで，さくの間隔は30cm～70cmである。出土遺物にはSD4556から土師器，SD4562から土師器・須恵器，SD4564・SD4570・SD4580・SD4604から土師器，SD4615から土師器・須恵器，SD4617・SD4628・SD4668から土師器，SD4673から須恵器，SD4679から土師器，SD4923から須恵器（282・283）・土師器（291）がある。

282は口径11cmを測る須恵器杯Gで，7世紀第4四半期のもの。283は杯B。底径8cmを測り，高台は低く断面四角形を呈する。8世紀第4四半期のものか。291は土師器甕。底径は6.4cmを測り，内外面ロクロナデ調整である。8世紀代のもの。

E群（第83・85・86図，図版31・48・50）

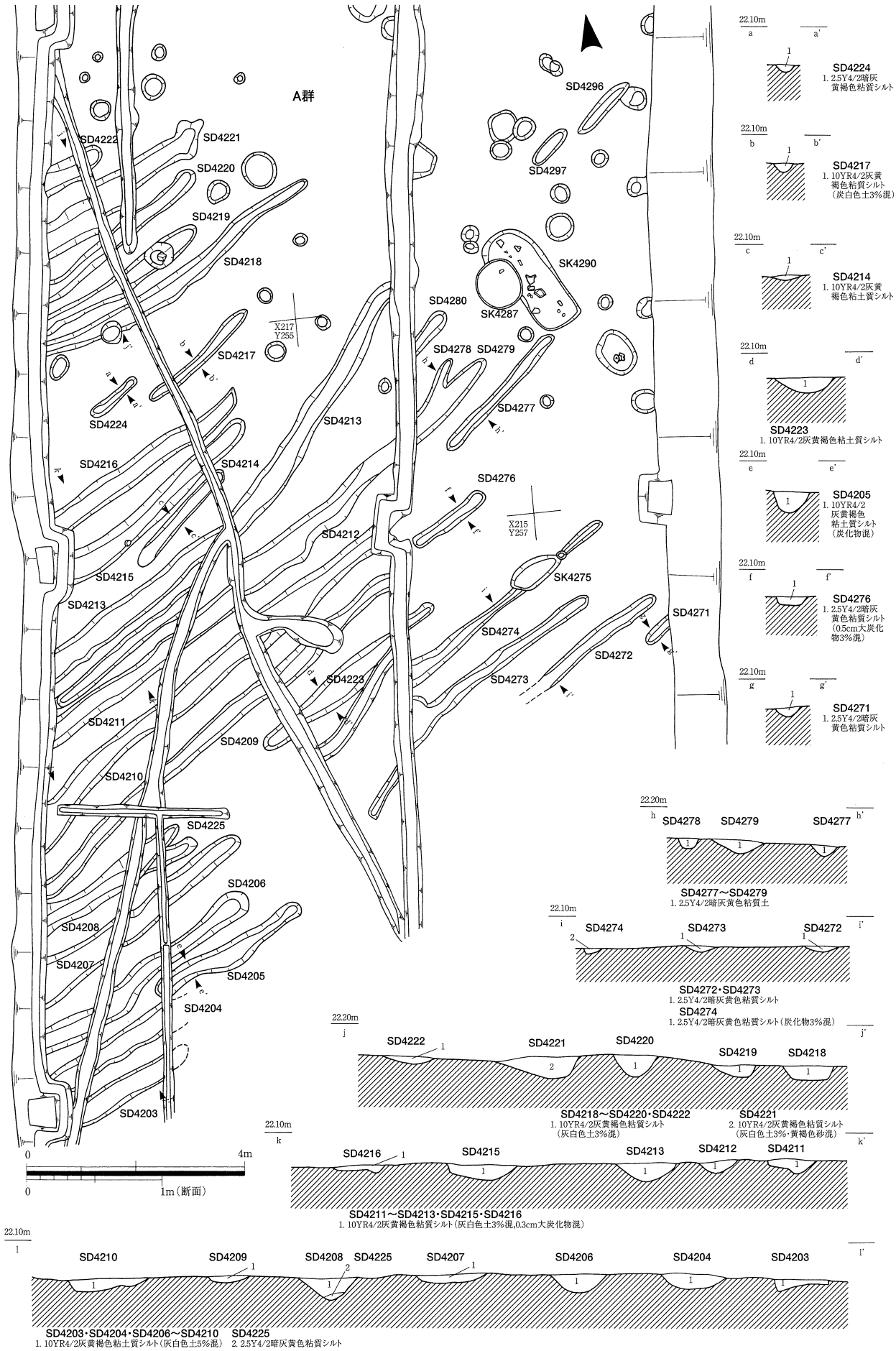
X185Y230付近に広がる。ほぼ真北を向く南北方向のさくと東西方向のものが重複しており，新旧関係では後者が新しい。南北方向のさくの東端はSB58に重複している。幅20cm～40cm，深さ5cm～12cm，埋土は灰黄褐色砂質シルトで，さくの間隔は30cm～70cmである。東西方向のさくSD5125から須恵器・土師器・土錘（273）・加工板，SD5160から須恵器・土師器（270・274）が出土し，南北方向のさくSD5126・SD5173から須恵器，SD5127・SD5163・SD5177から土師器，SD5164から土師器(289)，SD5166・SD5167から土師器，SD5128・SD5161・SD5174から土師器・須恵器，SD5165から須恵器（286）・土師器（290），SD5172から須恵器・土師器・加工材が出土している。

270・274は土師器甕。270は内面ナデ，外面ハケメ調整である。274は口縁部が屈曲し端部を上方に引き上げ面をとり，内面カキメ調整，外面は上部が縦方向のハケメ後カキメ調整，下部が横方向のハケメ調整である。8世紀代のもの。273は管状土錘。一端は欠損しているが，残存する端部は僅かに面をとっている。289は土師器小甕で，口径9.9cmを測る。体部はロクロナデ調整され，底部は静止糸切り痕がみられる。口縁部内面と体部下部から底部にかけて煤が付着している。8世紀後半のもの。286は須恵器杯B。口径11.1cmを測り，高台は断面四角形を呈する。底部外面にはヘラ記号「×」がある。8世紀第3四半期のもの。290は土師器甕。体部はロクロナデ調整で，体部内面中位に帯状に煤が付着している。9世紀代のものか。

F群（第84・86図，図版31・48・50）

SD4355・SD4362の西側，遺構の分布が粗なX185Y237付近に広がる南北方向のさくで，東に約30°振れている。幅20cm～30cm，深さ8cm～20cmを測り，埋土は炭化物が混じる褐灰色砂質シルトである。さくの間隔は30cm～60cmである。出土遺物にはSD4939・SD4950・SD4953・SD4963から土師器・須恵器，SD4941・SD4954・SD4956・SD4958から土師器，SD4957から土師器・土錘，SD4960から須恵器，SD4944から須恵器・土錘（284），SD4964から土師器・須恵器（285）・加工板，SD4955から土師器・須恵器（287），SD4962から土師器（292・293）がある。

284は管状土錘。残存する端部は尖る。285は須恵器杯B。口径11.2cmを測り，細く低い高台が付き，底部外面にはヘラ記号がある。8世紀第3四半期のもの。287は須恵器杯B。底径9.6cmを測る大型品。底部内面はロクロナデ後木口状のものでナデている。8世紀第3四半期のものか。292・293は土師器甕。292は長胴の甕体部で，外面は粗いタタキ後上部を横方向のハケメ調整，内面は上部にカキメ調整

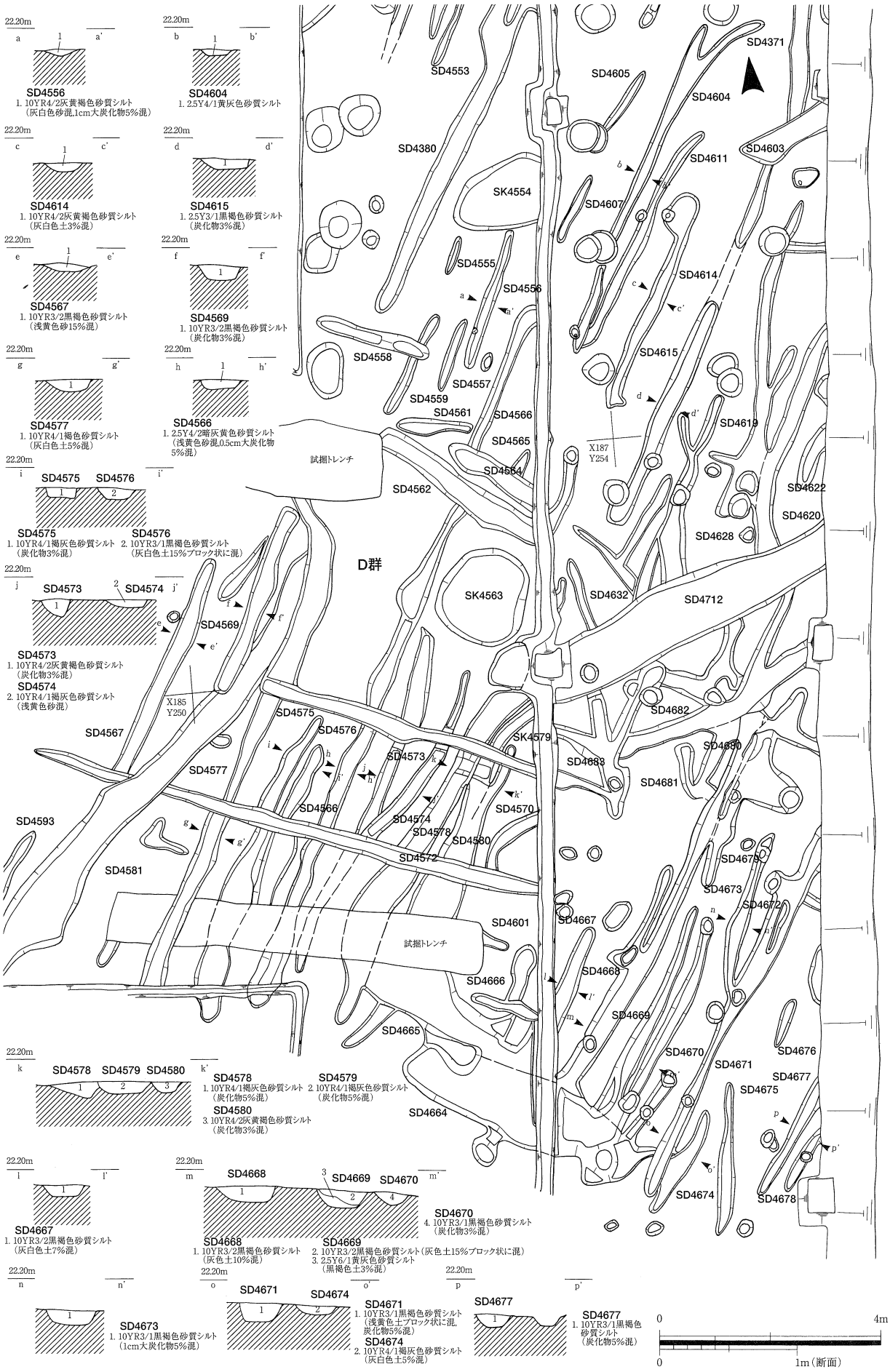


第80図　遺構実測図

SD4203～SD4225・SD4271～SD4274・SD4276～SD4279

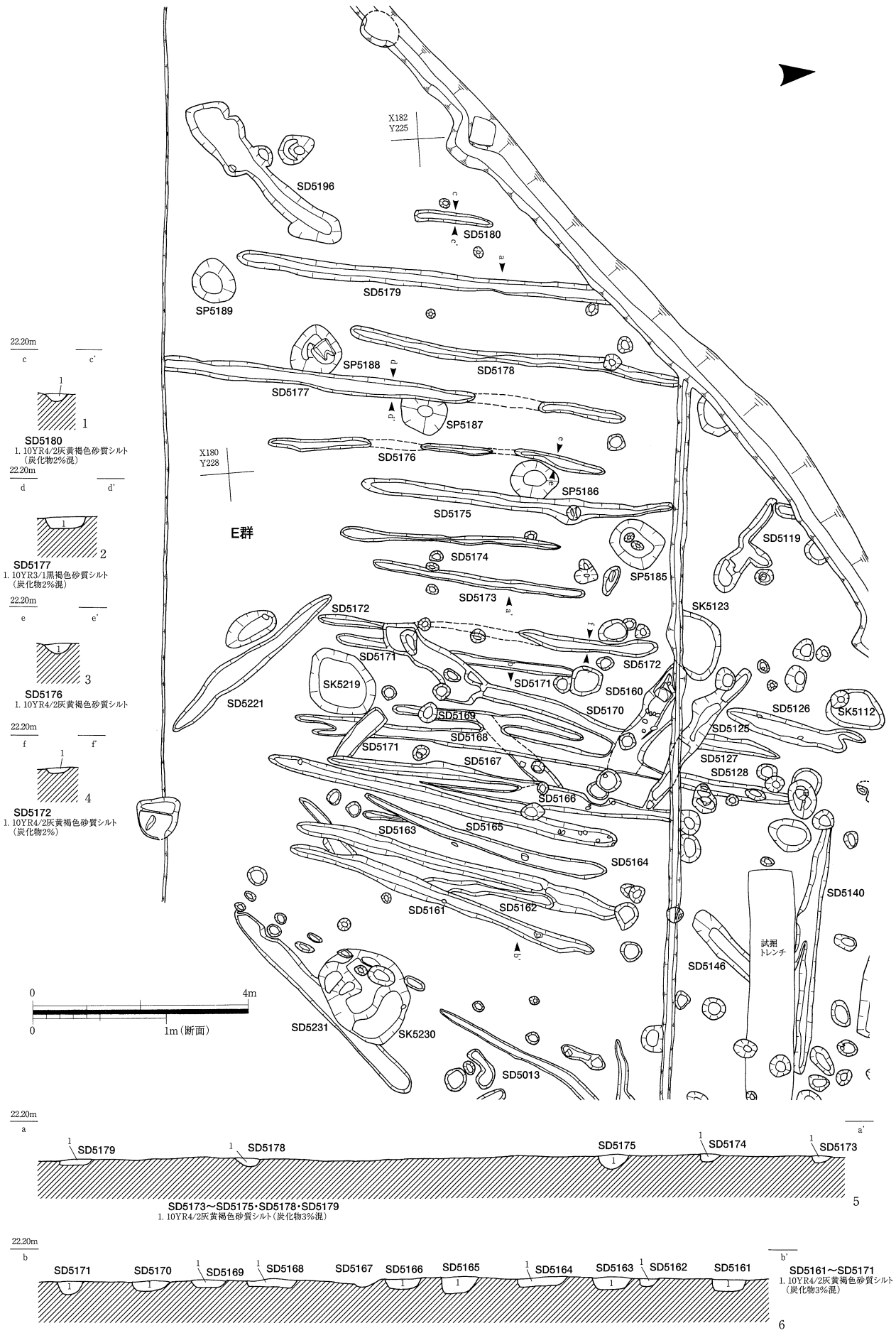
第81図　遺構実測図

SD4248～SD4270・SD4316・SD4317



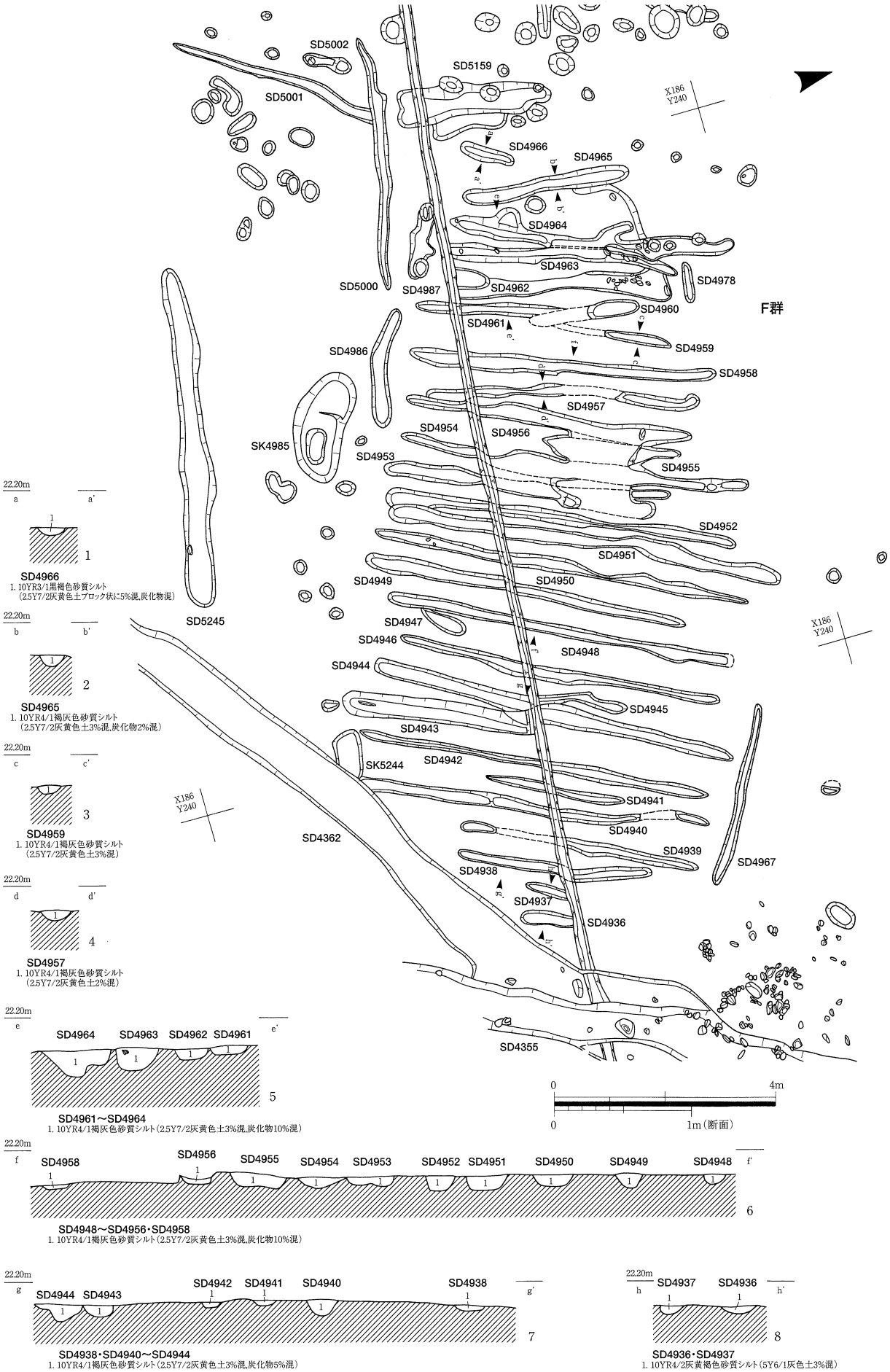
第82図　遺構実測図

SD4556・SD4566・SD4567・SD4569・SD4573～SD4580・SD4604・SD4614・SD4615・SD4667～SD4671・SD4673・SD4674・SD4677



第83図　遺構実測図

1. SD5180　2. SD5177　3. SD5176　4. SD5172　5. SD5173～SD5175・SD5178・SD5179　6. SD5161～SD5171



第84図　遺構実測図

1. SD4966　2. SD4965　3. SD4959　4. SD4957　5. SD4961～SD4964　6. SD4948～SD4956・SD4958
7. SD4938・SD4940～SD4944　8. SD4936・SD4937

を施す。293は口縁端部を欠損しているが，体部外面は上部に僅かに横方向のハケメを残し，ほぼ全面を縦方向にヘラ削りし，内面はハケメ調整である。８世紀～９世紀代のもの。

Ｇ群（第86図，図版47）

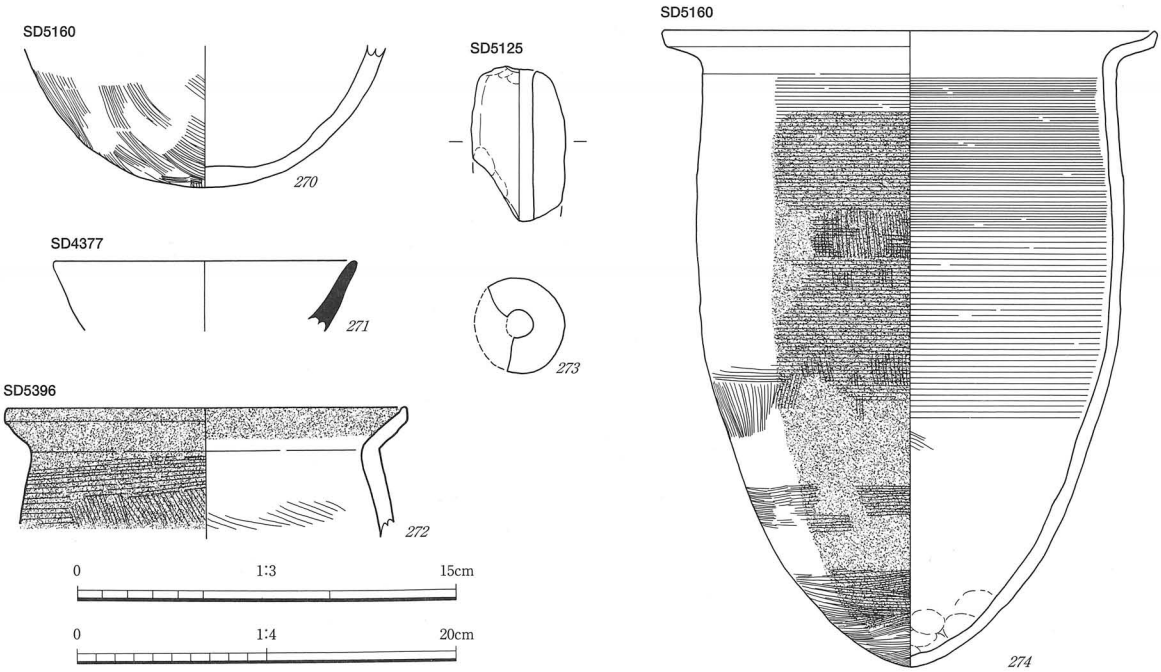
Ｘ177Ｙ250付近を中心に広がり，南北方向のさくと東西方向のものが重複しており，新旧関係では後者が新しい。ＳＢ34～ＳＢ45と重複し，さくの幅は30cm前後で，南北方向のものはＤ群と同方向である。出土遺物にはＳＤ4649から土錘（278・279）・鉄滓（280），ＳＤ4650から須恵器，ＳＤ4653・ＳＤ4660から土師器・須恵器，ＳＤ4688から土師器，ＳＤ4689から土師器・須恵器(281)，ＳＤ4702から土師器・加工棒がある。

278・279は太形の管状土錘。端部は水平に面取りしている。281は須恵器杯Ａ。口径11.6cm，器高3.8cmを測り，底部外面はヘラ切り後ナデ調整する。８世紀第１四半期のもの。

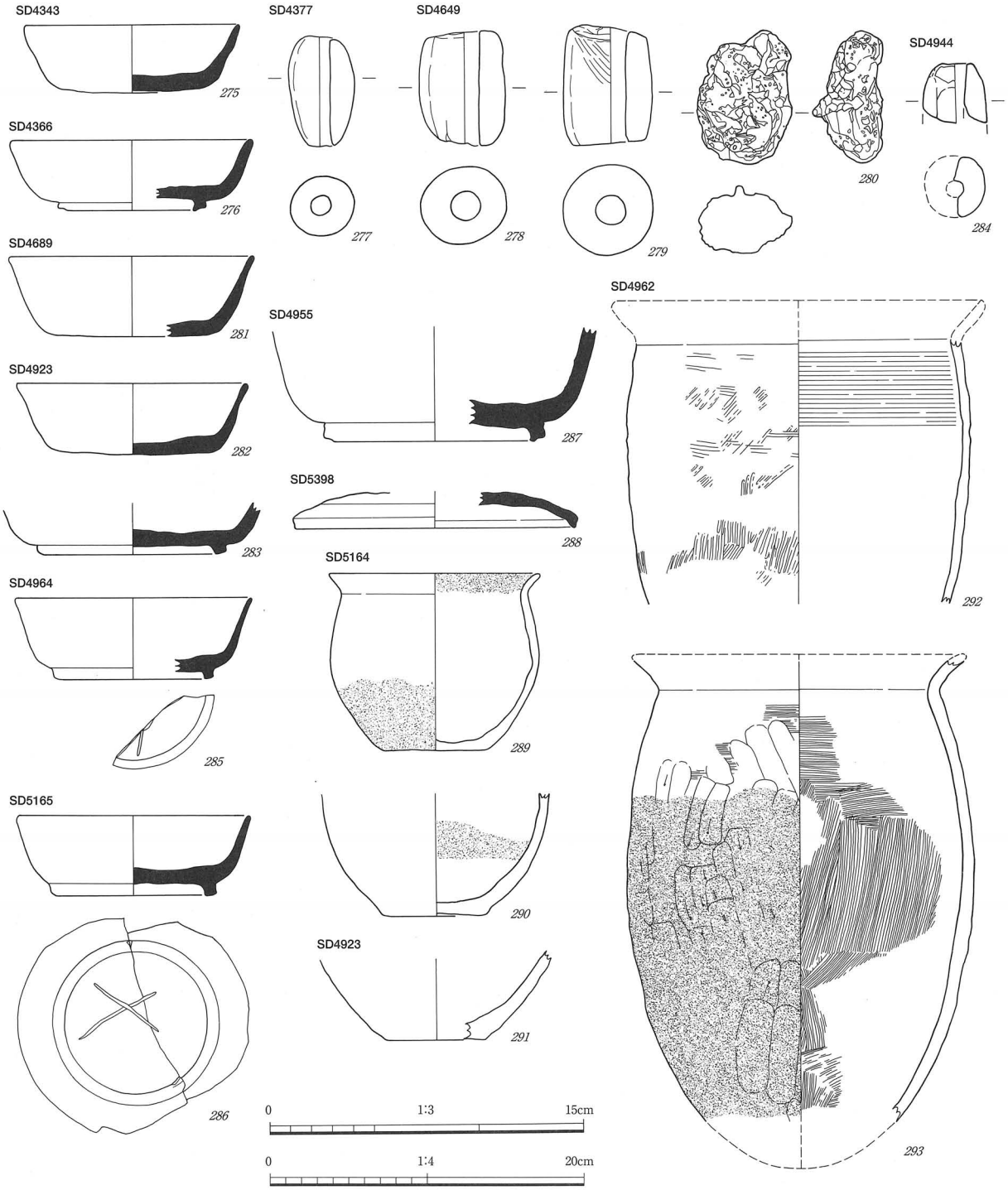
Ｈ群（第85・86図，図版47・50）

ＳＤ5378以北，Ｘ172Ｙ220付近の遺構が粗な地点に広がる南北方向のさくで，北西にはＳＢ54，南にはＳＢ55がある。さくの幅30cm～60cm，さくの間隔1.5m～２mを測る。出土遺物にはＳＤ5306・ＳＤ5373・ＳＤ5374から土師器，ＳＤ5396から土師器（272），ＳＤ5398から土師器・須恵器（288）がある。

272は土師器甕。口縁部は外傾し，口縁端部を上方に引き上げ内端部に僅かな段ができる。外端面は面取りする。体部は内外面ともハケメ調整で，８世紀後半のもの。288は須恵器杯Ｂ蓋。口径13.2cmを測り，頂部はロクロ削りされ，口縁端部は丸みをもった断面三角形を呈し，内端面にわずかな稜がある。内面は硯に転用されており墨痕がみられる。８世紀第３四半期のもの。　　（中川道子）



第85図　遺物実測図　（*270～273*　1/3，*274*　1/4）
SD4377（*271*）　SD5125（*273*）　SD5160（*270・274*）　SD5396（*272*）



第86図　遺物実測図　（*275～290*　1/3，*291～293*　1/4）

SD4343（*275*）　SD4366（*276*）　SD4377（*277*）　SD4649（*278～280*）　SD4689（*281*）　SD4923（*282・283・291*）
SD4144（*284*）　SD4955（*287*）　SD4962（*292・293*）　SD4964（*285*）　SD5164（*289*）　SD5165（*286・290*）
SD5398（*288*）

Ｅ１地区畠（第71・87図，図版34）

Ｅ１地区北側端で検出した南北方向のさく。ＳＤ5820～ＳＤ5826，ＳＤ5828～ＳＤ5830，ＳＤ5831・ＳＤ5832・ＳＤ5834～ＳＤ5841からなり，幅25cm～30cm，さく間隔は東側の狭い所で約30cm，東側の広い所で約80cm～１ｍである。埋土には炭化物が混じる暗灰黄色砂質シルトが主に堆積していた。遺物は須恵器・土師器が出土している。ＳＤ5839からは８世紀第３四半期の杯Ｂ（240）が出土している。

（島田美佐子）

Ｅ２地区畠（第72・88～92・103図，図版32・35・36・49）

Ｅ２地区西端（Ｘ110～115Ｙ190～205）で検出した川以東に広がる。検出したさくは間隔とその方向等からＡ群～Ｉ群の９群に分ける。さく埋土からの出土遺物には，僅かではあるが８世紀～９世紀の須恵器・土師器・木製品がある。また，（株）古環境研究所によるプラントオパール分析の結果，Ａ・Ｈ群のさく埋土からイネ，Ｂ群からキビ族が検出された。Ａ群の数値が比較的高かった以外は低い値であることから[注1]，栽培していた可能性より，敷き藁等の使用方法によるものと考えられる。

Ａ群（第88・91図）

ＳＤ5912～ＳＤ5918・ＳＤ5921～ＳＤ5923・ＳＤ5925～ＳＤ5927の13条で構成され，さくの幅40cm～50cm，深さは平均20cm，さくの間隔約1.4ｍで，方位は北から東に約８°振れている。確認した長さは最長10ｍで，約50cmの間隔をとって南北の２ブロックに分かれている。埋土は暗灰黄色砂質シルトで植物遺体が混じる。

Ｂ群（第72・88・91・103図）

ＳＤ5928・ＳＤ5930～ＳＤ5932・ＳＤ5934～ＳＤ5939の10条で構成され，さくの幅30cm～40cm，深さは平均10cm，さくの間隔30cm～50cm，長さ12.5ｍ前後である。方位は北から東に約３°振れている。埋土は浅黄色砂質シルトが混じる暗灰黄色砂質シルトである。

Ｃ群（第72・88・89・91図，図版32・49）

ＳＤ5946～ＳＤ5949・ＳＤ5970～ＳＤ5972の７条で構成され，Ｂ・Ｄ群より古い。さくの幅は約30cm，深さ平均10cm，さくの間隔50cm～１ｍ，長さは最長11ｍ，方位は北から西に約70°振れている。埋土は浅黄色砂質シルトが多く混じる暗灰黄色砂質シルトである。

Ｄ群（第89～92図）

ＳＤ5967・ＳＤ5979～ＳＤ5981・ＳＤ5986の５条で構成され，Ｅ群より古く，Ｃ群より新しいと考える。さくの幅約40cm，深さ平均15cm，さくの間隔１ｍ～1.7ｍ，長さは最長12ｍ，方位は北から東へ約25°振れている。埋土は暗灰黄色砂質シルトである。

Ｅ群（第89～92図）

ＳＤ5982・ＳＤ5984・ＳＤ5985・ＳＤ5987・ＳＤ5990・ＳＤ5995・ＳＤ5996・ＳＤ5998の８条で構成され，Ｄ群より新しい。また，ＳＤ6000との切り合いからＦ群より新しい。さくの幅は約30cm，深さ約10cmを測る。さくの間隔はＳＤ5990の東西が広く，東へ約250cmで４条のさくが約60cm間隔で，西は３ｍ離れて３条のさくが１ｍ間隔で並ぶ。さくの長さは最長14ｍで，方位は北から東に約３°振れている。埋土は黄灰色砂質シルトが主で暗灰黄色砂質シルトがブロック状に混じる。

Ｆ群（第89・90・92図）

ＳＤ5988・ＳＤ5989・ＳＤ5991・ＳＤ5993・ＳＤ5994・ＳＤ6004の６条で構成されるが，ＳＤ5989はＳＤ6004とつながる可能性がある。ＳＤ6000との切り合いからＤ・Ｅ群より古い。さくの幅約25cm，深さ平均６cm，さくの間隔約60cm，長さ10ｍ前後，方位は北から東に５°振れている。埋土は暗灰黄

色砂質シルトである。

G群（第89・90・92図）

ＳＤ6007・ＳＤ6010・ＳＤ6023・ＳＤ6027・ＳＤ6028・ＳＤ6055・ＳＤ6057・ＳＤ6059・ＳＤ6077の９条で構成され，Ｅ・Ｈ・Ｉ群より古い。さくの幅約50㎝，深さ平均10㎝を測る。ＳＤ6010とＳＤ6055との間隔は3.5mと大きいが，その他のさくの間隔は１m～1.5mである。長さは最長9.5m，方位は北から東に約30°振れている。埋土は暗灰黄色砂質シルトである。

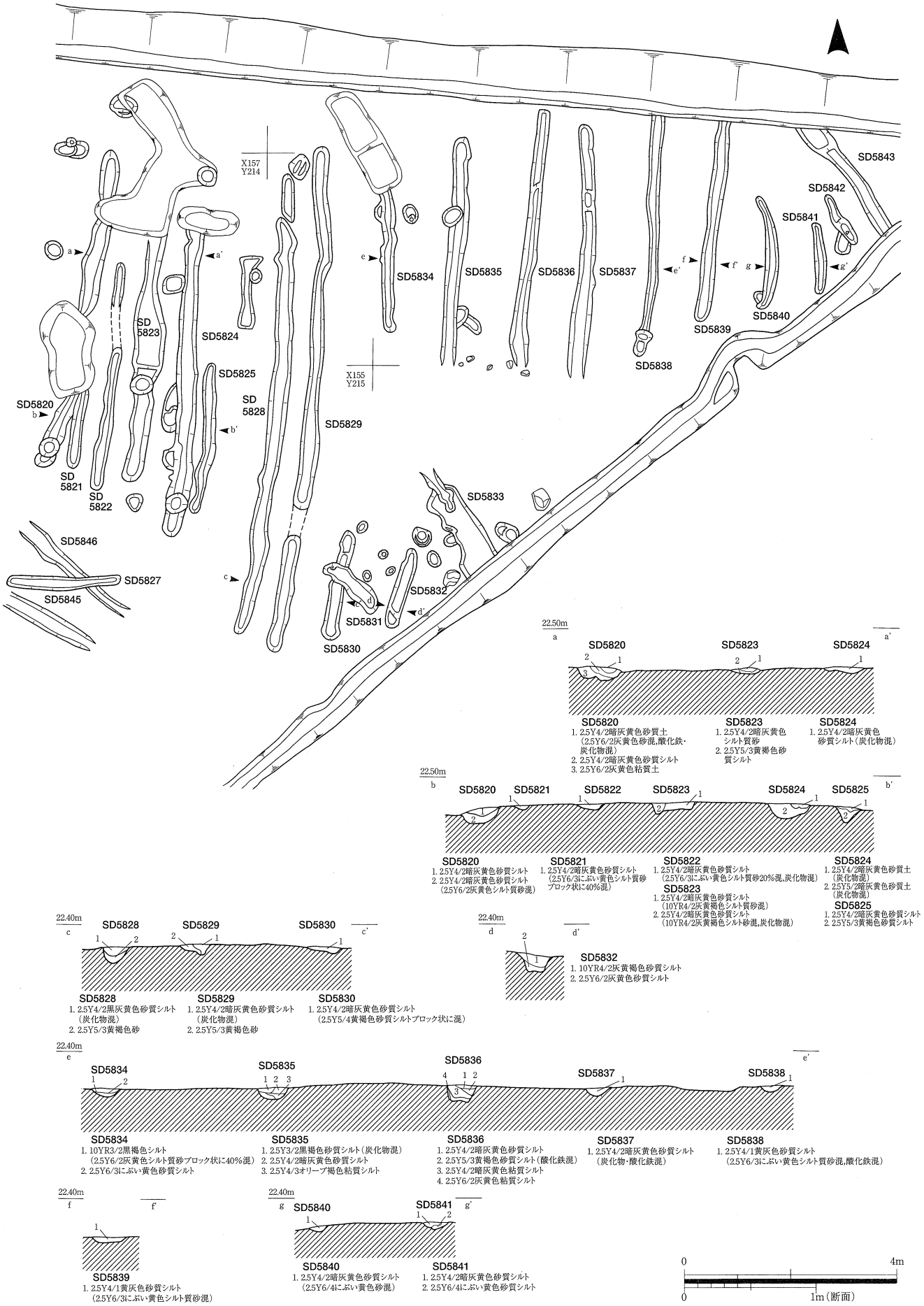
H群（第90・92図）

ＳＤ6017・ＳＤ6039～ＳＤ6041・ＳＤ6101の５条で構成され，ＳＤ6081との切り合いからＧ群より新しく，Ｉ群より古い。さくの幅30㎝～50㎝，深さ約10㎝，さくの間隔は狭いところで20㎝，広いところで１mを測る。さくの長さは約６m，方位は北から西へ約40°振れている。埋土は暗灰黄色砂質シルトである。

Ｉ群（第90・92図）

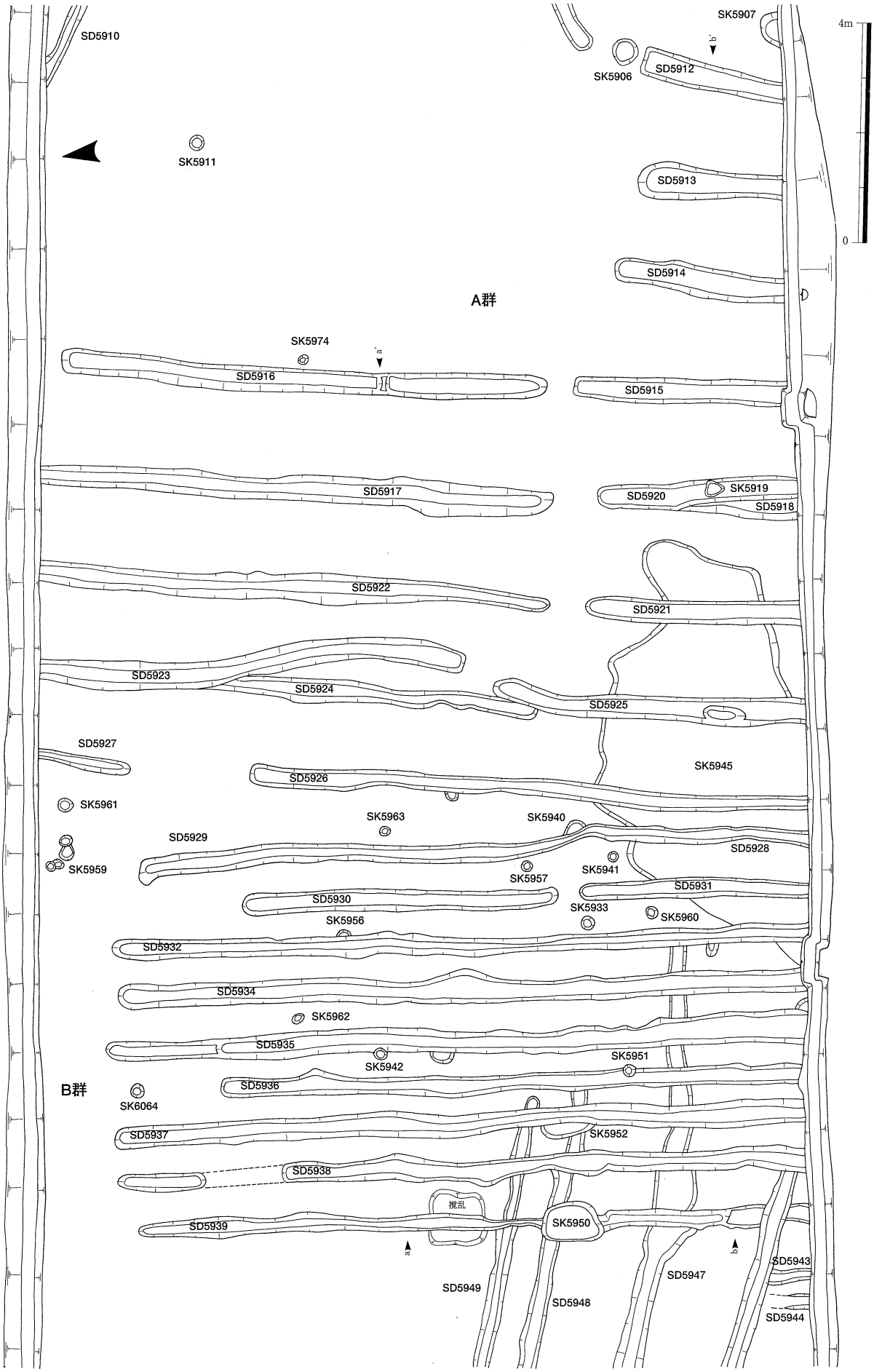
ＳＤ6042～ＳＤ6046・ＳＤ6049～ＳＤ6052の９条で構成され，Ｇ・Ｈ群より新しい。さくの幅40㎝前後，深さは平均10㎝，さくの間隔約50㎝，長さは最長11m，方位は北から西へ約40°振れている。埋土は暗灰黄色砂質シルトである。　（中川道子）

注１　第三分冊　古環境研究所　「Ⅴ富山県、石名田木舟遺跡における自然科学分析」を参照。



第87図　遺構実測図

SD5820～SD5825・SD5828～SD5830・SD5832・SD5834～SD5841



第88図　遺構実測図

SD5910・SD5912～SD5918・SD5920～SD5932・SD5934～SD5939・SD5943・SD5944・SD5947～SD5949